GOKUKOWA？

晴[ヒトミ]

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＫＵＫＯＷＡ　？

【Ｎコード】
Ｎ７８２１Ｏ

【作者名】
晴［ヒトミ］

【あらすじ】
ＧｏＫｕＫｏＷａ．
とにかく天然タラシの主人公が美形とヤクザに愛されまくるってお話です。

「お前が欲しい」

相模に抱かれた夜から

オレらの関係は

引き返せない所まで行っちまったんだ。

「藤堂、タツの物にならないで…」

後ろめたさから

矢田の顔がまっすぐ見れない。

どちらを選んでも

誰かが傷つく。

ゴク怖！　波乱の第二部

秘密　1（前書き）

ゴク怖　？の番外編を公開しています。
完全１８禁ですが、宜しければ御覧下さいませm（＿　＿）m
詳しくは、活動報告にて記載させて頂いています。

秘密　1

標的
秘密

ールイ…ー

覆いかぶさって、
切なそうに溜息を漏らす相模。

何度も名前を呼ばれて
キツく抱きしめられたーーー。

ヤバイ…。

あんたの顔を見てると
オレの感情まで
流されそうだ…。

好きか嫌いか

どちらかで言うと、

好き…、
なんだと思う。

でも、
コレ以上足を踏み入れたら
絶対昔の自分には戻れねえ。

一歩でも近付こうものなら、
きっと相模はその手を握って

ズルズルと後戻り出来ねえ奥地まで
連れて行かれると思ったから。

なのに、アイツの策略とも思える謎の行為に、オレの心はめちゃくちゃに掻き乱されたんだ。

相模に抱かれるレイナ。

オレを呼びに来たゲンじいに、
それを無理矢理見せられた。

『逃がすな』

オレを見た相模は
はっきりとそう言ったんだ…。

隣の部屋から聞こえるレイナの喘ぎ声。

何度も相模を呼ぶ、声。

オレだけに向けられてると思ってた甘いキス。

アイツの腕。

男らしい胸板。

オレを呼ぶ声。

全部がその時
崩れてく気がした。

隣の部屋に閉じ込められて…、
乱れた息遣いが聞こえる。

きっとあの時から
オレの心の何処かから

抑えてた感情が漏れ始めてたんだ…。

思ってしまった。

“アイツの腕は、オレの物なのに”
って…。

秘密　2

いつからか、
冷たい床が
オレらの体温で温められる。

初めての男に抱かれる体験は
めちゃくちゃ恥ずかしくて
死ぬほど痛くて
でも、最後はめちゃくちゃ気持ち良かった。

『俺の、女になる覚悟はあるか』

結局
あの返事も出来ねえまま、

矢田も相模も
どっちも選べねえまま、

溢れ出した感情に負けて
そのまま相模に抱かれた。

自分から

帰れない道を選んじまったんだ。

あれから、

どうなって行為が終わって
いつ寝たのかもよく憶えてねえ。

ただ、
意識が飛ぶ様に眠りについた。
素っ裸のまんまで。

6月半ばの気温は、
まだ朝方は冷えこむ。

その寒気から目が覚めた。

「よお、寝坊スケ」

まだ少し重い目を擦るオレの耳に
聴きなれたセリフが入って来る。

手グシで髪を掬われる。

ほんの少し頭を掠める指先が気持ちいい。

「相模……」

まだ額に髪が掛かってる。

以外と柔らかい黒髪の奥から
目を細めて微笑む相模の顔が覗いた。

「お前、どこでも寝るな」

「うるせえ…」

これは間違いなく、

疲れだぜ。

「もっとこっちに来な。　風邪引くぞ」

そういう奴も裸のくせに、

体を密着させる様に抱き締められた。

「ーーーおい、相模…」

モロにアイツの感触が蘇る。

がっしりした胸板に

血管の浮き出た、筋肉質な腕。

そして、アイツの滾る様な……

「何エロい事考えてんだ、お前」

「ちっ、違わい！」

相模は、何故かそういう所には

天才的に鋭い。

「お前…、まさか朝っぱらから…」

「あ、アホか！！」

だからなのかもしんねえけど、
全部を見透かした様な愛撫は凄え気持ち良くて…。

「ーーーそんなに欲しいか…」

「違あああう！！」

こうやってボヤきながらも

昨日の事を思い出して
ドキドキしてたりする。

秘密　3

「冗談だろ、バカ」
そう言って額に口づけた。

相模の体温はやっぱり熱い。
素っ裸でも何でも
常に2度位　オレよりも体温が高いんだ。

だから、

アイツの唇がおでこに触れるだけで
そこからじんわりと暖められる。

きっと冬には強そうだ。

相模のキスは
オレのおでこを暖めた後
唇に移動する。

少し斜めに、
まるで食べられちまうんじゃ無いかと思う

深いキスを落とす。

付いては離れて、
どんどん深く合わさる。

そのうち、顔全体を
アイツの手が包み込んでくる。

そこから
段々と熱を持ってくるんだ…。

「大人しいな…」

ペロリとオレの唇を舐める。

本当に食べられた気分になった。

そこから、頬に手をあてて
じっと顔を覗き込む。

「俺に抱かれた気分はどうだ?」

「言うなよ、そういう事…」

こうやって話してると、つい数時間前の出来事が　まるで夢の中の出来事みてえに思えてしまう。

「凄え感じたって　顔に書いてるぜ…？」

艶かしく掠れた、ハスキーな声。

「うるせえ」

自分でも思う。

昨日のオレは、別の人間みてえだった。

ソレ位、
解放されたんだ。

相模に開発された。
オレの中に眠ってた女の部分を…。

恥ずかしいのも

我慢するのも通り越して、

与えられた快感を
“気持ちイイ”って、
素直に感じる事を教えられた。

「ルイ」

名前を呼ぶと同時に
体ごとギュウっと抱き締められる。

「お前が欲しい…」

そう言って首筋にキスされる。

昨日の余韻が残ってるのか、
オレの身体は途端にビクンと飛び跳ねた。

「やめろ…、マジでもう一回は無理…」

「バカか」

耳の後ろで掠れた声がするーーー。

アイツは時間をかけて首筋を甘噛みして、
そのまま耳たぶを舐めた。

「俺の欲しいのは…、お前の心だよ」

「……相模」

ヤバイ。

変な気分にさせられる…。

「早く俺だけの女になってくれ…」

アイツが顔を上げて覗き込む。

相模の言葉とキスに翻弄されてるのが恥ずかしくて、思わず顔を背けた。

「ーーーその顔…」

でも、アイツの両手に包まれて、

無理やり目を合わされる。

「その顔だけは、他の男に見せんなよ」

いいな、って呟いて

返事も聞かずに口を塞がれる。

アンタの女なのかどうかも分かんねえ、微妙な関係。

相模と矢田の間で行ったり来たりしてる
オレの気持ち…。

「惚れさせてやる」

一度溢れた心に
また　アイツの言葉が溜まってく。

秘密　4

甘い
甘い
時間だった。

アイツに抱き締められて
昨日の余韻に浸った。

最後に言ったアイツの一言は、
空っぽになりかけたオレの心を
また満たそうとしてくる。

もう
溢れ出した筈なのに

それがまた
一杯になるまで溜まりそうだった。

アンタのそういう仕草や言葉にドキドキさせられる。

それは認めるよ、相模。

でも、
事態は解決するどころか
泥沼にハマって行ってる。

この空間の中だけで生きてたら、何の問題も無いかもしんねえけど、
そんな訳にいかない。

オレ、

眠ってる矢田を放って
相模に呼び出されたんだ。

離れて行かないでって
甘える様に絡み付いた腕を
ゲンじいに解かれた。

矢田は、オレを独り占めできるって喜んでた。

あんな可愛い笑顔で…。

ほんの一時の閉ざされた時間は、

相模を呼びに戻って来たゲンじいの声によって終わりを告げたんだ。

「出歩くなよ」

そう一言残し、何度か身体にキスをして、
アイツは若頭として再び出て行った。

妙に寒気がした。

ガラス張りの廊下から陽が差し込む。

なんだか太陽の光を浴びるのが久し振りな気がする。

それは、昨日あまりにも色んな事がありすぎたせいで、夜の時間が凄く長く感じてたからだと思う。

本当に
色んな事がありすぎた。

でも、日が開けても

オレと矢田の時間は
昨日から止まったまんまだ…。

やっぱり見渡す限りの障子の列は、
何処がどうだか全く分からなくて、

ここら辺と思う辺りから
そっと戸を開けて行った。

何回めかの戸を開けた時、
やっと昨日連れ込まれたベットルームに出会う事が出来た。

ほんの一時、
矢田と過ごした場所。

ベットの上に
うずくまって眠る美少年が見えた。

矢田、まだ眠ってたんだ…。

なんだか凄くホッとした。

何回か寝返りを打ったのか、
服が乱れてる。

ジャージの裾が捲り上がって、
チラリと腰のラインが見えてた。

秘密　5

白い素肌に
少し骨ばった腰。
少年っぽい体格は残しつつも
しなやかで綺麗な体。

ーーーゴクリ。
無意識に生唾を飲み込んだ。

変態か…、
オレはーーー。

足音を立てない様に
静かに歩み寄る。

スースー眠る天使の前にゆっくり座った。

矢田は気付かない。

オレがじっと見つめてる事に。

固く閉じられた瞼に
長い睫毛が影を落とす。

形のはっきりした赤い唇。

赤ちゃんみてえに一生懸命眠る　美少年。

やっぱり最近
矢田が可愛く思える。

コイツが起きるまでココで見てようとも思ったけど、寒気がして来たせいで、そのまま隣に横になった。

寄せてあった布団を被せて一緒に眠った。

ーーー何だろう、

今度は凄え熱い…。

寒い次に

熱いのがやって来た。

じんわり体が暖まるのとは違う。

何か、カッカする感じ。

「藤堂……？」

いや、やっぱ背中が寒いや。
寒くて熱い。

「藤堂、お前　体が熱いよ？」

「……ん」

おでこにほんのり冷たい感触。

「熱あるじゃん、藤堂…」

「ーーーうう」

気が付いたら矢田が目を覚ましてて
オレのおでこに手を充ててる。

さっきまで眠ってた美少年が
心配そうな顔してオレの顔を覗き込んでた。

「…矢田、はよ…」

やっぱゾクゾクする。

「藤堂？気すぎ。　お前、凄く顔熱いよ？」

「ーーー」

間違いねえ。

これは…

風邪だ。

矢田に黙って抜け出して、すっぽんぽんで寝ちまった罰があたった…。

秘密　6

「ゴメン、俺　布団取ってた？」

「いや…、違う」

言えねえ、

絶対。

矢田が寝てる間に相模と会ってたなんて…。

それどころか

相模に抱かれて素っ裸だったせいで風邪引いたなんて、絶対言えない…。

絶対、

傷付ける。

「藤堂、汗…凄いよ？」

コイツ、ただでさえ
捨て猫みてえな目でオレに抱きついて来るのに…。

「大丈夫…」

昨日の事知ったら多分、
いや…、絶対泣く。

“大丈夫”って言いかけた矢田の声が途中で止まった。

「ーーー矢田…？」

オレの首元に手が触れるか触れないか位の所で動きを止めたまんま、
矢田は何故かオレの方をじっと見てた。

「なん、だよ…？」

それも、捨て猫みてえな目をして。

「藤堂……」

矢田は突然シャツのボタンを外し始めたんだ。

「なに…？」

何にも答えない。

素肌を晒されて、
余計に寒気がした。

矢田は無言でシャツの胸元を開いて、

「……」

暫くオレを見つめた後ーーー

何にも言わずに

ボタンを止め直した。

ボタンを止め直す手が
微かに震えてる気がした。

矢田は服を元に戻して、

熱を持ったオレの胸元に顔を埋めて来た。

「ねえ、藤堂」

「……なに」

少しひんやりとした
手の感触。

顔を埋めたまま、手を握って来る。

ゾクゾクする肌に触れられて、
皮膚が痛い。

「藤堂…、昨日　俺と一緒に寝てた?」

「ーーーえ…」

その言葉に
心臓が止まりそうになった。

「昨日、ずっとここで寝てた?」

何で矢田がそんな事を聞いて来るのか分からなかった。

「ーーー答えて…」

矢田の声が掠れてる。

どうしよう…。

何で急にそんな事
聞いて来んだよ、矢田…？

どうしよう……。

本当の事、

言える訳無いのに…。

「ーーー居たよ」

嘘を付いた。

バカ正直なオレは、
言ってる途中　声が上ずった。

めちゃくちゃ後ろめたかった。

「……そう」

矢田は胸元に顔を埋めたまんま
一言だけ呟いた。

そう、って呟いて上げた顔は涙目になってた。

「矢田？」

「……グスッ」

ーーーな、泣いてる…。

何で？

矢田は暫く涙でシャツを濡らした後、
急に立ち上がって…、

「藤堂のバカ！！　アホ！！　ナスビ！！　藤堂なんてこれからバカ藤堂って呼んでやる！！　バカバカバカ…！！！」

「な、何なんだよ？」

一方的に叫んで、
矢田はズンズン戸口に向かった。
戸を開ける前にまた振り返って、
「バカナスビ藤堂!!」
また叫んで出て行った。
「…なんだよ」
出て行ったと思ったら
また戸が開いて、
「ナメクジ!!!」
意味の全く分からん言葉を叫んで戸が閉まった。
「なんなんだよ…?」
矢田のせいで頭がガンガンし出した。

オレの胸が
一体どうしたって言うんだよ？

サラシ、ちゃんと巻いてるし…。

バカってあそこまで連呼される理由が分かんねー…。

てか　ナメクジって……何。

うわ…。

マジで頭ガンガンしてきた。

寒くて痛くて、

ガンガン…。

オマケにナメクジ。

最悪だーーー。

最悪すぎて言葉が出ない。

きっと何かの忠告だ。

もう、あんな事しちゃいけないんだって遠回しに言われてるみてえだった。

熱い瞼を閉じた…。

秘密　8

どれ位、経ったんだろう。

「ーーーん」

何か、カチャカチャと食器の音がする。

……あ、

しかも

いい匂い…。

額に充てられる、

少しひんやりした感触。

「……矢田？」

「……」

矢田が戻って来た。

「食べれる？」

まだちょっとムッとした顔で
白い食器を持ち上げた。

まさかーーー

「……毒」

「シバくよ」

「……」

いい匂いの漂う、
白い器に入った何かを
スプーンで掬って
口元に持って来る。

素直に口を開けて、それを食べた。

「うま…」

色んなダシの混ざった奥深い味。

野菜とか、肉とか入ってて

弱った体にスっと馴染む様な感じ。

「コレ何？」

「ん、中華粥」

また掬って食べさしてくれる。

人肌より少し暖かめ。

熱すぎなくて、丁度いい。

「どうしたん、コレ？」

「作った」

「は……、あむっ」

驚いて開けた口に
中華粥が入って来た。

「作った!?　お前、料理できんの!?」

「ウン。　俺、料理好きだよ」

いや、

確かに美味いけど。

このお粥、メチャメチャおいしいけど…。

「お、お前…、じゃあ　あの時何で自分で作らなかったんだよ?
フンむ」

また口に流し込まれて語尾が変になった。

「…あの頃は藤堂が大っ嫌いだったから、こき使ってやりたかったんだよ」

「……」

「お前の方が断然上手いじゃねえか」

「ウン。　だから、藤堂よりか美味いもん食ってるって言ったじゃん」

「……何か、毒舌だよな、今日のお前」

やっぱり矢田は
ちょっと怒った様な顔でオレを見る。

「このお粥さ」

「うん？」

またスプーンが口に入って来る。

「睡眠薬混ぜた」

「ゲホッ！！？」

「ウソ」

何なんだよ、お前はーーー！？

「藤堂汚い」

「お前なあ…」

口元を拭った後、「飲む？」ってコップに入った水を渡された。

零れないように
顔だけ起こして飲む。

「藤堂、昨日タツに抱かれたよね？」

「ぶわっは！！！」

「ーーー汚いよ」

飲みかけてた水は
勢い良く口から吹きだされた！

「…な、なな…何で」

ヤバイ…。

怪しい。

明らかに今のオレは、
怪しくて挙動不審だ！

矢田、やっぱ気付いてたんだ！？

だから怒ってんのか！？

でも、何で
バレたんだろう……

「何でバレたんだって思ってるでしょ、今」

「ぎく…」

心の声が口を突いて出て来た。

オレをじっと見た後、
矢田が深い溜息を吐いた。

秘密　9

「藤堂さあ…」

首筋に手を這わせて、
矢田は何かを言い掛けたけど…

「やっぱ辞めた」

すぐに手を引っ込めてプイとそっぽを向いた。

「何だよ、言えよ…」

何でバレたんだーーー？

気になるじゃねえか。

「教えたら藤堂隠すから、教えない」

「はあ？」

とりあえず、食べて…。

またお粥が口の中に運ばれる。

矢田は介抱してくれながら、終始怒った様な顔をしてた。

さっき
嘘をついた時よりも
余計に気まずい。

何で　バレたんだろう……。

「風邪薬　飲んで」

錠剤と水を口に含ませ、
矢田は口移しで薬を飲ませてくれた。

ひんやり、冷たくも柔らかい感触。

口移しは、そのまま熱いキスに繋がった。

吐き出す熱の篭った吐息を飲み込む様に
何度か舌を差し入れて絡められる。

「…矢田、風邪うつる」

クラクラすんのは
熱だけのせいじゃない。

綺麗な、

天使みてえなコイツが

オレの唇を塞いでるって考えるだけで

何か悪い事をしてる様な

ドキドキ感に体が包まれるんだ。

「藤堂、タツに好きって言ったの？」

オレの忠告も無視して
愛撫の様なキスを続ける。

そんな中、
突然相模の名前を出されて
更に心が震えた。

「バカ言うなよ…」

矢田のキスって　優しい。

コイツって
何もかもがマジで天使みてえだ。

「だって　タツの事好きじゃん」

いい匂いがする。

ふんわりした、柔らかいキスを繰り返して
甘いシュガーみてえな味わいを与える。

「……っ」

矢田は何もかもが
綿菓子みてえに甘い。

「でも、藤堂…、俺の事も好きだよね？」

お前の声も甘いよ。

秘密　10

寂しがりやで

甘えたがる

子供のまんま育った少年。

そうかと思えば、

急に美味い料理作ってくれたり

ドキドキする様なキスをしたりする。

矢田はオレに心を開いてから、

どんどんオレに懐いて来る。

「俺、分かってるよ？」

嫌いな時は
とことん牙を向けるクセに、

一度好意を持てば
まるで見た事の無い表情を見せ始める。

「俺と藤堂って、両思いだよね」

その両方を見てるから分かる。

コイツの甘い部分を知ってしまったら

その表情を自分だけに向けさせたくて

矢田を独占欲で独り占めしたくなる。

「藤堂は、俺ともタツとも両思いなんだよ」

風邪を引いてて良かったと思う。

もし元気な時にこんな事されれば
いつか頭がプツンて切れて
矢田を押し倒しちまいそうだ。

本当に、それ位甘い。
誘惑するような、
砂糖みてえに甘い少年だ。

「藤堂、俺怒ってないよ？」
「……え」
キスが終わった。
甘い余韻を残して
綿菓子みてえな唇がオレから離れた。

「ただ、嘘吐かれてムカついたけど」

「ーーーごめん」

「俺とずっと一緒に寝てると思ってたから、凄いショックだったけど」

「う……、ご、ごめん」

さっきまでキスを落としてた唇が
甘い声を作り出す。

矢田はベットの上に両膝を付いて、
オレの方をじっと覗き込む。

少し顔を傾けて。

「でも、藤堂がした事は　悪い事じゃないよ」

いつだってコイツは、オレの中で天使だ。

「好き合ってるなら　当たり前のコト」

よく矢田が話してると
声が出なくなる。

オレは未だにコイツに見とれてしまうんだ。

「だからね、俺ともするんだよ　エッチ」

……。

「ーーーえ、何？　えっち？」

「ウン。　藤堂がタツとした事。　エッチっていうんだよ」

オレが矢田に見惚れてる間に、

話が変な方向に進んでた。

「俺と藤堂も好き合ってるからするよ？」

「……」

矢田と

ああいう事…。

して、いいんかよ？

「だからね、これからココで密会しよ？」

…矢田が

大変な事を言い出した。

しかも　表情を見るからに、
冗談を言ってる様には見えない。

「藤堂が居る間、俺もココで寝る」

しかも、矢田まで組で過ごすと言い出した。

「これで、昼間は藤堂に会えるね」

「冗談……」

矢田の冗談であって欲しい。

「タツには秘密」

タツ、怒るからーーー。

また新しい傷口を作ろうとしてる。

独占　1

標的
独占

「何なら　今からでもする？」

「矢田…」

お前はどうしていつも
嵐を起こさせようとすんだよ…。

「藤堂薬飲んでるし、以外と麻痺して　気持ちイイかもしんないよ？」

「冗談やめてくれ」

「俺と寝たら、絶対虜になるよ…」

まるで気持ちを知り尽くしてるみてえに、
わざと　じっと見つめて来る。

オレが
お前の容姿に弱いのを知ってて
挑発する様に視線を送る。

「藤堂　顔赤い」

「…風邪だから」

「ううん」

計算してる様に顔を傾ける。

こうする事で
より魅惑的に見える事を
分かってるみてえに。

「藤堂が俺を意識してるから…、だよね？」

コイツって何故か鋭い。

矢田に対してだけじゃ無く、
オレが感じる事全て
見透かしてんじゃないかとも思ってしまう。

「分かる。　俺と寝たら、藤堂は絶対虜になる」

だから　そんな発言も
矢田が言うと
マジでそうなりそうで怖い。

ーーー怖い。

「やめろよな、絶対」

コレ以上変わって行くのも、
また相模と距離が出来るのも

マジで矢田と
そんな関係になっちまったらって思うのも…。

結局未来を考えると怖くなる。

きっと

どっちにも惹かれてるっていう
オレの甘い考えがどツボに陥らせてる。

普通は
オレの親父や母ちゃんみてえに
1対1なのが当たり前な筈。

だって、見た事無えもん。
妻が1人に旦那が2人の家族とか…。
いや　絶対無い。

「やっちゃう？」

「ーーーは」

考え事してたせいで
不意打ちでキスされる。

「オレとエッチ。　しよ？」

エッチ…。

矢田が言うと
めちゃくちゃエロい。

「断る…」

やめてくれ。

とりあえず、今は。

次からどうやって交わすか考えるから。

今は風邪と薬のせいで
思う様に動けない。

「タツは良くて俺はダメ？」

「違う…」

あれはーーー

完全に、自分の心に負けた。

「相模とも、もうしない」

オレら二人の心が燃え上がった、
一回キリの思い出だ。

「無理だよ、もうしないなんて」

矢田はその事にも水をさす。

「何で。　オレがもうしないっていうんだから…」

「藤堂、知らなさすぎ」

珍しく言葉を遮られた。

しかも溜息混じりに。

「タツはこれから、毎晩藤堂を抱くよ？」

「ーーーは、あ！？」

う、嘘だ…。

あんな事　簡単にするもんじゃない…！

「そ、そんな訳ねえ！」

「あるよ」

相模に

あんな事…

毎晩ーーー。

「エッチってそういうもんだよ」

今、分かった。

オレはマジで、大変な事をしてしまったんだって。

堰き止めてた堤防を決壊させたんだ、自分で！

独占　2

「う、嘘だ…」

「ん、本当」

ゴゾゴゾ…

「あ、あんな事…、毎日なんて…」

「あんな事って、どんな事されたの？」

モゾモゾ…

「あ、脚持ち上げられて…」

「ウンウン？」

サワサワ…

「……って！！！　さっきから何してんだよ！？」

「エッチの準備」

「は…、はあーー！？」

「ホラ、藤堂　熱上がるからじっとしてて」

「ま、待て待て待て待て待て待て！！！」

うわっ！！

いつの間に脱がせてんだよ！？

何かゴソゴソしてると思ったら…、

華麗な手捌きで服が脱がされ掛かってた！

「や、やめろおお～！」

両腕を頭の上で束ねられる。

華奢な体格からは想像も出来ねえ様な力だった。

「藤堂…、俺　めちゃくちゃエッチ上手いよ？」

怪しく微笑む天使。

その言葉でもう卒倒しそうだった。

「俺の背中、見たよね？」

「…え」

矢田が頬を撫で始める。

こんな時でも優しく柔い感覚を与えて来る矢田は、
もう魅惑の小悪魔だ。

「俺、１０歳の頃　誘拐されたんだ。　コレはその時の傷」

一瞬

矢田が何を言ってるのか分かんなかった。

「俺の事を女みたいに…。　タツが助けてくれるまで、ソイツに凄い仕込まれた」

「……」

嘘、だろーーー？

そんな…

体験。

僅か１０歳の少年が

背負えるもんじゃ無えよ…？

「俺がイイんだって…、ソイツ。　俺が、女みたいに可愛いから…」

もしかして

矢田の男嫌いってーーーー

もしかして……

矢田、

お前　もしかして…

「だから、無闇に触られんのって凄え嫌い。　特に男は、触られるだけで虫酸が走る」

「矢田…」

オレの表情を見て察したのか、
矢田は微かに微笑んだ。

「でも藤堂は違うよ？」

矢田、ごめん。

「藤堂は、俺に色んな物を教えてくれるよ。　アイツらと違う。あったかいよ」

オレ、最初の頃
お前にひどい事を言ったよな…？

「矢田…ごめん」

「何が？」

「…オレ　車の中で、お前に酷い事言った」

「お互い様じゃん」

優しく微笑んで口付ける。

矢田は、服を全部脱がそうとしなかった。

多分、身体が冷えねえ様に。

ただ、身体の至る所に
指を滑らせていく。

「こうして藤堂を感じさせられる事だけは、良かったと思う」

「良くねえよ」

矢田の体験した事は
知らなくて良い事だ。

背中にこんな傷まで付けられて…、

お前、どんな思いで耐えてたんだよ…？

「藤堂、泣きそうな顔してるよ？」

独占　3

自分の親も
産まれも分からなくてーーー
しかも
生まれ持った容姿のせいで
こんな目にあって……

「藤堂？」

その上、
こんなに慕って来る矢田を
オレは突き放す事なんか出来ない。

「…藤堂、そんなに抱き締められたら動けない」

お前の事、
守ってあげたいよ。

もう絶対に傷つかない様に…。

「藤堂…」

目一杯頭を撫でた。

腕を背中に回して
何度も何度も
優しく頭を撫でた。

オレだけは

お前に愛情を与えられる存在でありたい。

コイツが最初

やたらと牙を向けてた理由が分かった。

あの頃、
矢田には相模しか居なかったんだ。
心を許せる相手が。

そして今は、

矢田を癒せるのは

オレしか居ない……。

「藤堂、動けない」

「…動かなくていい」

「ねえ、これもまた作戦？　俺を　かわす為のさ」

「…違う」

そんなんじゃ無えよ。

「藤堂？」

「オレには　分からない」

「ウン」

お前を放っとけない。

「…ごめん。　オレ　上手く言えねえ」

「ウン」

ただ、もう傷つかないで欲しい。

「いいよ。　ありがとう」

何て言えばいいんだよ。

「俺は藤堂が受け入れてくれればそれで良い」

「矢田…」

お前のキス、

お前の手、

お前の身体…。

オレがそれを受け止めてやれればーーー

お前は満たされるのか？

独占　4

いつの間にか解かれたサラシ。

その腕を
止める事は出来なかった。

どうしても…

振り払う事が出来ない。

「ごめんね？」

だからって
このまま、矢田に抱かれていいんかな。

「俺がこんな事言ったから、藤堂　拒否出来ないね？」

これじゃあ　まるで……

「同情でもいいよ、俺」

「……」

そう。

まるで　矢田が可哀想だからって

同情して身体を許してるみてえで…

「藤堂が俺を見てくれるなら何でもいい」

それは、『好き』とは違う。

行為の後で

何も残らない気がするよ、矢田…。

「藤堂が奪えるなら、俺はそれで充分」

「ーーーそれで、いいんかよ、お前？」

「ウン」

矢田を抱き締めたままのオレ。
その腕の中で　矢田は器用に動く。

背中に絡めた両腕を解いて、
片手一つでまとめ上げられる。

いつもと違う顔がそこにある。

天使…っていうよりか

オレに欲情する男の顔。

相模と同じ、男の顔……。

「抱くよ？　マジで…」

舌先を使って
鎖骨から首筋まで舐め上げるーーー。

「……っ」

柔らかい、熱い感触が
舐る様に刺激を与える。

付いては離れ、
また舌を這わす。

じれったい愛撫に、
次第に疼いて来る本能……。

与えては消える。

そして、柔い愛撫が戻り、
感じ始めたら消えて行くーーー。

一つに束ねられた両腕。

そして、また疼きが始まる……。

まるで、オレがどれ位のタイミングで感じて、いつ突き放せば一番焦らされるかが手に取る様に分かってるみてえだ。

矢田の指と舌先に良いように翻弄され、それでも素直な身体はすぐに反応する。

相模に時間を掛けて高められた分、
肌に与えられる刺激が快楽に変わるって
体が覚えてる…。

矢田は、それが手に取る様に分かるみたいで、高められたと同時に愛撫をやめる。

それが、
どうしようもなく焦れったい。

体が　この先を知ってるから…。

また、続く事の無い愛撫が始まる。

「もっとして欲しい？」

「……っ」

声を押し殺した。

もし一度でも声を出してしまえば、そこからもう　喘ぎが止まらなくなりそうだった。

嫌だ…、

感じたく無いーーー。

この疼きを与えるだけ与えて、
またすぐ離されるんだから。

「俺を欲しいって言ってくれたら、してあげる」

何にもされて無いのに、背中がゾクゾク感じる。

体が無言で、矢田に従えって言って来る。
お前が欲しいって言って、早く愛撫の続きをして欲しいって。
折角高められた疼きを消さないでって。

「言ってよ。　じゃないと、マジでしてあげないよ?」

また…、
背中がゾクゾクする。

独占　5

一つに纏め上げられた腕さえも、ジンジンと熱を持って来る。
焦らされ続けた体は、矢田がほんの少し触れただけでも　早く刺激が欲しくて敏感に反応してしまう。
矢田の触れてる部分が熱い。
指を閉じたり開いたりしながら、くすぐる様に肌に乗せられる。

「う……っ」

思わず声が漏れた。
何て柔い感触なんだろう。

サワサワと触れる程に、くすぐったい感覚が体中に広がる。
こんな歯痒い刺激でさえも　消えて欲しくなくて、
今与えられてる快感を味わおうと
本能がその刺激に貪り付いてるみたいだった。

閉じた指をゆっくり開きながら
その手が胸を這い回る。

「…んん……っ！？」

抑えてた声が
喉を付いて出始める。

この愛撫でさえ、すぐに終わりが来るーーー。
こんなにジワジワと身体を蝕み続けているのに…。
この感情も長続きしないなんて…。

「ホラ、言って？」

耳元で囁かれて、触られてもいない首筋が鳥肌が立つ様に痙攣を起こした。

「…やめちゃうよ？」

指の動きが止まった。

与えられていた疼きが、また喪失感と一緒に消えて行ってしまった。

もう限界ーーーーー。

「……欲しいーーー」

お願いだから、
もう愛撫をやめないで……。

ニッコリ微笑みながら
矢田は再び耳元に顔を寄せる。

軽く吐息を吹きかけながら、
耳を甘噛みされた。

「聞こえない」

「……っ」

掠れた声が鼓膜を震わす。

オレは恥ずかしさも偲んでやっとの事で口にしたのに、矢田はそれをイジワルに突き放す。

「もっと大きな声で言ってよ」

舌を使って耳を舐められる。

耳にもツボがあるのか、時々身の気がよだつ位体が震えたーーー。

「ホラ、やめるよ？　大きな声で…、俺が欲しいって言いなよ…」

まるで虐められてるみたいだった。

言葉と愛撫とで
感度を上げては離される。

何度も　何度もーーー。

これ以上身体が昂る事を許されない。
その拷問みたいな愛撫は
きっとオレが矢田に従うまで続く…。

「…矢田」

「可愛い声出してもダメ。　それとも、もっといたぶって抱いて欲しい？」

男の表情（カオ）した矢田が
怪しく笑った。

言葉攻めにされてこんなに苦しいのに　それと同じ位興奮するのは何でだろう。

「お前が…、矢田が欲しいーーー！」

恥ずかしい…。

コレ、めちゃくちゃ恥ずかしいよ、矢田。

独占　6

僅かに天使の面影を残した矢田。

矢田の口からそんな事を言われてるって思うだけで、もう、凄く興奮する。

「藤堂可愛い。　ホント素直」

抑えてた両腕を解放された。

今度は音を立てて体中にキスし始める。

柔い手つきで身体を撫で回し、

解放されたかの様に途切れる事なく唇が降ってくる。

「……ああ…っ！　矢田…」

関を切った様に与えられる愛撫は　もう止まらないんだ。

抑えられてた感度がどんどん昂って行く。

指と舌が、今度こそ身体を高みに押し上げる。

苦しい位感じる。

めちゃくちゃ感じる……！

もう声も抑えられないーーー。

またこの愛撫が止まったらどうしようという思いと、

心配とは裏腹に

首に、胸に、腕に、脇腹に与えられるどうしようもない快感。

感じすぎて苦しい。

涙がジワリと滲む。

気持ち良すぎて苦しい…。

「いいでしょ、こういうプレイも」

背中がのけ反る。

汗がどっと吹き出して、

何かにしがみついてないと

この愛撫に耐え切れそうに無かった。

矢田は知りすぎてるーーー。

人間の身体を。

胸を上下させながら
未だに震える体を落ち着かせ振り返る。

この世には
目には見えないけど
確かに運命ってもんが存在するって事を。

相模とオレ
そして

矢田とオレの場合も然り。

運命は時に想像もできない様な結末を連れて来る事がある。

それは、自分達では抗う事の出来ない、
目に見えないレールの先に
あらかじめ用意されたゴールの様な物。

ほんの一分、一秒先であっても
未来を予測する事は
不可能だって事だ。

独占　7

矢田に攻められて乱れた服。

結局その殆どを脱がされた。

体中を官能で洗脳されてる。

何度も被りを振って、
苦しい程の愛撫に堪えた。

声を抑える事も出来なくて、
目尻に涙を溜めて喘ぎまくった。

ようやく解放された時は、
火照った身体をどうする事もできなくて　ただベットに横たわるだけだった。

これで、
“前戯”というのが終わったと思ってた。

荒く呼吸を繰り返すオレの体を見ながら矢田が動いた。

「中世の貴族は、どうやってセックスレスを克服してたと思う？」

「ーーーな、に？」

一瞬、何の話をしてるのか分からなかった。

荒く息を吐く体に再び矢田の手が伸びる。

「…専門のツボがある。　女の本能を開花させる…。　今でも一部の整体師なら心得てるんだよ？」

「…矢田ーーー？」

矢田の手が体を真探り出した。

それも、さっきとは違う…。

手のひら全体を使って、マッサージするみたいに身体を滑り動く。

その手は太ももの方まで降りて来て、
太ももの内側から足先までスルスルと動き始める…。

体の中心をワザと避ける様に、
その周辺だけを入念に刺激してくる。

「このツボ、ある意味危険なんだよ。　身体だけがめちゃくちゃ淫乱になるから…」

核心部分には決して触れない、
余りにも焦れったい動き。

矢田の言葉に誘われる様に
体に異変が現れる…。

ジワジワと内側から熱を持ち始める。

身体を刺激される度に
だんだん息が上がってくる様な…、

「これは媚薬と同じ効果がある。　官能マッサージって言うんだよ」

ムズムズする様な……。

いや…

なんか違う…。

「体が欲しくて溜まらなくなる」

オレの体にイタズラでもするみたいな
不思議な手の動き。

「……うっ…！？」

次第に

身体をくねらせたくなってきた。

何だろうーーー、

いやにムラムラする。

体が熱いよ、矢田……。

「ーーーうわ…っ」

感じてるのとは違う、変な感覚。

まるで何かに飢えてる様な…、
体が何故か物足りなさを訴えてるんだ。

「一度、性欲を開放してごらんよ？　そしたらエッチがしたくてたまらなくなるよ」

息が上がる。

内側から波打つ様に広がる満たされない想い。

「はあ…っ」

矢田に刺激される度、
何かが中から露わになる。

じっとり汗が滲んで来た…。

何か、矢田に今　めちゃくちゃ触りたい…。

独占　8

「藤堂…、エロい顔」

顔を傾けて見下ろす矢田と目が合った。

ヤケに冷静な顔。

オレとは正反対だった。

ハア…、ハア……

矢田を見る程、
体が燃え上がる。

さっきと逆転してる。

今オレはーーー

矢田に欲情してる……。

舌舐めずりしながら
矢田が服を脱ぎ出した。

オレの前に
上半身が曝け出される。

「…う、あ……」

たまらない…。

体の中心部が
矢田の身体に熱く疼き始めた。

「藤堂、今何したい？」

オレの上に馬乗りになって、
ワザと理性を飛ばそうとされる。

矢田の視線も
目の前に晒された肉体も
全てが艶かしく卑猥に映るんだ。

「ーーー触りたい…」

理性では止められない。
身体の中に眠る第二の自分が
オレの口を動かしてるみたいだった。

「いいよ。　触って？」

矢田はオレの腕を掴んで
自分の胸に充てがう。
吸い付く様な感触…。

そのまま胸の真ん中に手を這わせると、
ドクン、ドクンと
心臓の鼓動が伝わって来た。

滑らかで
程よく引き締まった
しなやかな手触り…。

たまらなくなって
身体を真探り始めた。

「ーーーはあ…っ」

掠れた、甘い吐息が聞こえる。

少し骨ばった
少年の、淡い身体。
矢田の肌は
あったかくて

艶やかで
触ってる方が気持ち良く感じた。

矢田が吐息を漏らす度、
体の中心部がどんどん疼いて来る。

「ーーー矢田…」

たまらない。

矢田から異性を感じる。

認めたく無いけど

自分の視線が自然と下半身に移動してる。

お前が欲しい…。

お前の体がーーー。

「矢田…」

馬乗りになる矢田の身体を
思い切り引き寄せた。

ハダカの背中に手を回すと、
ざらついた火傷の跡に触れる。

オレの両脇に肘をついて、
矢田はそのまま唇を重ねて来た。

「ソコ…、もっと触って」

「ん…っ」

ざらついた皮膚を何度も撫でた。

口の中に
甘い溜息が漏れる。

もう、体が疼いてどうしようもない。

「俺が欲しい？」

その質問に答える代わりに思い切り抱き締めた。

「挿れちゃっていい？」

両足を持ち上げて動き始める。

人生２度目ーーー。

信じられない位興奮させられて

高められた

人生2度目のーーーーー

独占　9

ピルルルルル…

ーーーーー。

人生…、

二度目の……

ピルルルルル…

「わっ！？　クソ、こんな時に！」

「……」

「……」

オレと矢田の動きが止まった…。

ピルルルルル…

「クソ、レイナのアホんだら！　こんな時に…」

障子の向こう側から聞こえる、
携帯の着信音と、聞き覚えのある声…。

「……」

矢田が無言で立ち上がった。

ツカツカと、
音のする方へ歩み寄る。

ガンっ！！！

「…あっ」

勢い良く開けた戸の目の前に、
顔面蒼白の

ゲンじい……。

「ーーーあ」

ピルルルルル…

シンとなった部屋に
間抜けにこだまする着信音。

「ーーーオイ」

「すっ、すんません！！！」

冷や汗ダラダラ流しながら

ゲンじいが土下座した。

……げ、

ゲンじいーーーー！！！

「何やっとんじゃゴルぁぁぁ！！」

めちゃくちゃ怖い剣幕で矢田が叫んだーーー。

欲情　1

標的
欲情
「本当に、本っっ当にすんません!!!」
床に頭を擦り付けて
這いつくばる様に土下座するゲンじい…。

ついさっきまで
あんなに高められてた筈のオレ達は、
今目の前に居る男のせいで
一気に奈落の底へ突き落とされていた。

土下座するゲンじいを足蹴にする矢田。

「ええ度胸やな、おどれ…」

怖いーーー。

「す、すんません！！」

ゲンじいが何故、こんな覗きみてえな事をしてたか。

何となく察しは付いたけど…。

「若の命令には…、絶対服従なんで」

矢田にゲシゲシ
ど突かれながら

ゲンじいが声を振り絞る。

「若になんて報告すりゃあいいか…、もう勘弁して下さい！」

やっぱり

相模が……。

「消えろ」

別人みてえな矢田が
ドスの効いた声で脅し唸る。

オレはあれから、
ゲンじいのつむじしか見てねえ。

ずっと土下座したまんまだ。

ゲンじいっていつも誰かのせいで謝ってる気がする。

何となく不敏に思う。

「……それは、無理です」

「はあ!?」

その顔が

初めて上を向いたんだ。

「も、もう若がこちらへ向かってます。…お嬢が風邪だって伝えたら…」

「……」

「……」

「すんません、こればっかりは…」

ゲンじいはやっぱりまた頭を下げた。

「い、いや、本当にすんません…」

めちゃくちゃだ…。

本当にもう…。

めちゃくちゃな中、

相模が帰って来る。

こんな…、

こんな決末って…。

折角矢田を受け止めるって覚悟したのに。

運命のイタズラって

やっぱあるんだと思う。

見計らった様なタイミングとこの状況…。

「ーーー風呂場で処理してくる…」

ゲンじいをボコボコにした後、
矢田はそう言い残し、部屋を後にした。

残されたオレはというとーーー

信じられねえかも知んないけど……

まだ、めちゃくちゃ体が疼いたままなんだ。

しかも、変な所で打ち切られ、
発散されない想いは溜まりに溜まる。

あれからずっと
体が火照ったまま。

息も荒いし

何より

中心部が疼いて疼いて、本当苦しい。

愛撫も終わったのに

全然昂りが消えて行かない。

どうしようもなく苦しい…。

欲情　2

「悪いな、イイ所の邪魔して」

口元にアザを付けた厳つい顔の男がくしゃっとオレの頭を撫でた。

「……う」

その手の感触にも反応してしまう。

げ…

ゲンじいの…、

肉体ーーー。

浅黒い、大人の男の……

「とりあえず、服着ろや。　大人しく寝とけ」

「うん…」

ムラムラする。

ゲンじいでさえも　そういう目で見てしまう。

シャツの間から覗く、
筋肉質な胸……。

そして、
一度目にした事のある
ゲンじいの、男の部分……

自然と目が　移動するーーー

「動けるか、オイ？」

「ーーーわっ！？」

突然顔を覗き込まれて、
ハッと我に帰る。

「マジで大丈夫か、お前？」

オレーーー

今、ゲンじいに…。

「うん、大丈夫」

ゲンじいに、
欲情…してた。

「大丈夫…」

「そうか」

全然大丈夫じゃない。

本当は…、

かなりヤバイ。

体がーーー。

ゲンじいに言われるまま
服を着た。

「寝ろ、とりあえず」

さっきの情事の名残のあるベットに寝かされた。

ヤバイーーー、

ヤバイ…！！

こんな状態で相模に会っちまったら…

「若、お帰りなせえ」

オレ、どうなっちまうか分からない。

「ルイは何処だ!?」

「相模……」

どうしようーーー。

廊下を歩む足音が聞こえる。

どんどん近づいて来る。

「若…」

ゲンじいが動いた。

入り口に向いて正座し、
また武道の“構え”の様な姿勢で戸を開ける。

足音が近づいて来る…。

時折、体重をかけた床が
音を立てて唸る。

ゆっくりとした足取りなのに、短時間で音が迫って来るその足音は
おそらく相模に間違いないと思った。

「お帰りなせえ、若」

ゲンじいが深々と頭を下げた。

足音が　その前で立ち止まる。

「ーーールイ」

男のハスキーな声に、
瞬時に身体が反応した。

開けられた戸の奥から
心配そうに顔を曇らせる男の姿が見えた。

いつも通り、
真っ黒なスーツを纏った男。

「相模……っ」

身体が喜ぶみたいに中から震えた。

相模が部屋の中に入って来る。

「悪いな、気付いてやれなくて」

そう言ってベットの隣に腰を下ろし、
横から口付ける。

ほんのりと煙草の残り香が鼻につく。

相模の匂いがヤケにはっきりと感じる。

「大丈夫かよ？」

アイツの熱い手が額を撫で始めた時、
オレの中で　これまで張り詰めていた箍（たが）がガラガラと崩れて行くのを感じた。

欲情　3

相模が自分に触れる度、その腕に抱きつきたくなる。

黒いスーツの中に隠された男の身体を想像する。

「ーーーうう…」

「オイ、どうした？」

相模は気付かない。

オレが相模に欲情してる事に。

熱く、波打つ様に内側から湧き上がる欲望。

自分の身が獣と化したみたいだった。

目の前に艶かしい程の獲物を見せられて、酷く興奮する。

狂った身体が求めている物が
手を伸ばせばすぐ届く所にある。

相模の体ーーー。

自然と息が上がる。

「相模……」

「しんどいか？」

ハアハアと息を切らすオレを心配そうに見つめる。

相模がベットの中に入って来た…。

熱く滾（たぎ）るオレの身体を引き寄せて、

ギュッと抱き締める。

「……うう…っ」

ーーー溜まらない。

「頑張れ…。　側に居てやるから」

アイツの胸の中に顔を埋める。

熱い手が頭を優しく撫でる。

相模は気付かないーーー。

「薬、飲んだか？」

「……ん」

「そうか…」

密着する身体。

ムラムラする。

どうしよう……。

「相模、助けて」

これは、生き地獄だ。

「助けて…」

ずっと“待て”を命令されてる犬の気分だ。

「ーーールイ？」

ああ…

その声……。

色っぽすぎる。

「何があった？」

抱き締めていた身体を離される。

困惑した表情で相模がオレを覗き込む。

目が合った。

プツン、て糸の切れる音が確かに聞こえた。

「欲しい…！」

離された体に腕を絡めて奪う様に口付けた。

「はあ！？」

そのまま相模を押し倒して貪る様に唇を合わせる。

「ルイ、一体どうしたんだよ！？」

相模はオレの豹変に相当困惑してる様で、
貪り付くオレの顔を両手で引き離した。

「ハア……ハア…」

「おい？」

至近距離に映る男の顔は、
ただ　更にオレを興奮させるだけだ。

「お前…、一体何があった？」

その質問は無視して
息を切らしながら手を這わした。

相模の体を隠すシャツのボタンを夢中で外した。

「ルイ！」

直ぐに両手を掴まれ　動きを封じられる。
隙の出来た唇に貪り付いた。

「……っ」

でもそれも
直ぐに引き離されるーーー。

「待て…、何　盛ってんだよお前！？」

「助けて…相模！」

目の前に獲物がある。

息が上がる。

「はあ！？」

「相模の体が欲しい…！」

「ああ！？」

「早く、オレを抱いてくれ…！」

外しかけたボタンに再び手をかけた。

欲情　4

「ふざけんなよ、お前！？」

でもアイツはまた両腕を掴んで動きを封じるんだ。

「何でも良いから、抱いて…！」

その手を思い切り振り解いて
今度は自分の服を脱ぎ始めた。

「…リョウか」

奴が呟く。

でも、その質問に答えてる余裕は無い。

服を乱暴に脱ぎ捨てた時、
それまで困惑してた相模の表情が変わった。

「テメエ、何でキスマークが増えてんだよ！？」

「…ハア……ハア…」

アイツの声は
今や脳裏の奥でしか聞こえない。

「お前、リョウと何してたんだよ!?」

相模が怒ってるのは分かってる。

アイツは急に起き上がって、脱ぎかけだったオレの服を乱暴に引き剥がした。

その行為にも興奮してしまう。

「ああ……っ」

両足を思い切り広げられた。

「何でこんなに濡れてんだよ、ああ!?」

相模が怒ってるーーー。

「矢田が最後までしてくんなかった…」

それも興奮する材料になってる。

挑発する様に、
ワザと怒らせる様な言い方をした。

「お前…、風邪なんじゃねえのかよ!?」

「ごめん、相模…。　とにかく、欲しいんだ…」

「ふざけんな!!」

離れて行こうとする相模の身体に両手でしがみつく。

「イヤだ。　相模の体が欲しい…!」

「マジでふざけんな。　コレ以上俺を怒らせんな!!」

これで引き下がる訳にはいかない。

オレの身体は、
男に抱かれるまでは
きっとずっと疼き続ける。

「何でもするから…」

縋り付いて唇を奪った。

相模は「クソッ!!」って呟いて
直ぐに突き放す。

「頼むからーーー」

「ふざけんな!!」

絡めた両腕を振り払われた。

「抱いてくれないなら、嫌いになる…!」

そう言って負けじと抱きついた。

「な、んだと」

相模の動きが止まった。

すかさず身体ごと体重を掛けて押し倒す。

「抱いてくれないならお前なんか嫌ってやる！」

アイツの唇を奪った。

「お前…、脅す気か　この俺を」

「オレに嫌われたくないなら、抱いてくれ」

相模がキスに答え始めた。

オレのアタマを掴んで
深く重ね合わせて来る。

「……んんっ」

男の熱い攻めに
更に身体が濡れて行くーーー。

「上等じゃねえか！」

そう言って叫んだと同時に
覆いかぶさるオレの体を掴んで押し倒す。

「……ああ…」

乱暴な行為にも歓びを感じるんだ。

「取引きだ」

オレの足を腹に付く位広げて、
ソコに手を這わせる。

「あああーー！？」

言い知れぬ快感が身を襲った。

「これから毎日俺に抱かれると誓え」

「ああ…っ！　分かった…、分かった…」

「それから、金輪際　お前を一人にさせねえ！　常に一緒だ。いいな！」

「ウン…、ウン…！」

「分かってんだろうなーーー！？」

相模の手が

オレの中を乱暴に掻き回し始める。

悲鳴にも似た声を上げて歓んだ。

「やってやるぜ…、望み通りにな！」

欲情　5

人生2度目のそれはーーー

まるで獣にでもなった気分だった。

矢田に高められた身体は、
いつまでも疼きが終わる事は無くてーーー。

相模に欲情した末
半ば脅しにも似た発言をして
無理矢理抱いて貰ったんだ。

「あああーーー！！！」

狂った様に上がる声。

乱暴に中を突き上げられる。

ずっと絶頂を迎え続けた。

アイツに攻められる度泣いた。

気持ち良すぎて、意識が飛びそうだった。

オレの感度の中に、
もう絶頂以外は何もない。

声を震わせて叫び続けた。

「クソ…！　お前、昨日より感じてんじゃねえよ！！」

荒い溜息を吐き出し相模が唸る。

激しい…。

めちゃくちゃ激しい！！

ベットが幾度となく軋んだ。

涙をポロポロ流して待ち侘びた快感に浸る。

「お前、マジでふざけんなよ…！」

いっそうガンガン突かれる。

何度も気持ちイイ！！って叫んで、
ずっと絶頂の中で浸ってたんだ。

この時間がどれ位続いていたかは分からない。

ただ　動物の様に声を上げて

快感に貪り付いて

相模が果てると同時に
全ての力が抜けて行って、
プツンと目の前が真っ暗になる。

そのまま気絶したーーー。

本当に

運命ってのはどうなるか分からない。

一分、一秒先であっても
未来は自分達では予測がつかない。

唯一分かるのは、
オレ達が生きる“現在”だけだ。

予兆　1

標的
予兆
吸い込まれる様に消えて行った意識。

今　オレは暗い闇の中に居る。

あれから、悪い魔法が解けたみてえに体中の力が抜けた。

それからの事は覚えて無い。

多分、オレは気を失ったまま、
またしても素っ裸で寝てるんだとは思う。

少し意識が戻りかけて来た頃、

誰かの手が　オレの身体に触れるのを感じた。

そいつは、手を回してオレの身体を持ち上げる。

腕に抱えられて、
フワッと宙に浮く。

赤ちゃんみてえに持ち上げられてる。

暗い意識の中で、その感覚が僅かに伝わる。

揺り籠に揺られてるみたいな心地良い振動。

誰かがオレを抱えて歩いてるーーー。

滝の流れる様な音がエコーみてえに響いてくる。

サワサワと流れる音と甘い香りに誘われる様に、ようやく重い瞼を
ゆっくり開けた。

目の前に、オレを見下ろす切れ長の眼をした男。

「よう、エロ娘」

「……」

素っ裸のまんまで相模に抱っこされてる。

揺り籠みてえな心地良い振動は
相模のもたらした物だったんだ。

凄く頭がスッキリしてる。

意識がはっきりするに連れ、
相模もオレと同じくハダカだって事に気付いた。

「相模…」

今更ながら
ついさっきの自分の暴走を思い出して
恥ずかしくなってくる。

「何　今更恥じらってやがる、エロ娘」

心なしか相模は呆れ顔だ。

「その名前、やめろよ…」

「フン」

ワザとらしく溜息を吐かれた。

抱き抱える肌にうっすらと滲む玉の汗。

石鹸の甘い、いい香り。

サワサワと流れる音の正体は

浴槽に付けられた流れる湯の滝だ。

ここ、風呂場か…。

「ルイ…」

ハスキーボイスが響く。

少しドキっとした。

「…何」

相模はオレを見つめた後、

「臭い」

一言、そう呟いた。

「……」

「お前、風呂に入って無いだろ」

「……」

入らなかったんじゃ無くて
入れなかったんだよ。

「風呂は入れ」

「分かった」

言い返すのはとりあえず辞めといた。

予兆　2

石鹸の香りに混ざって
檜の柔らかい匂いが漂う。

木の浴槽って初めてだ。

相模の家の風呂は
何処かの温泉施設みてえに凄く綺麗だ。

しかも　良い香りに癒される。

「お前の匂いが台無しだ」

木造のタイルに下ろされた後、
イキナリ頭からシャワーをぶっ掛けられた。

「ぶわぁっ！？」

「ガキみてえな声出してんじゃねえよ」

凄え勢いでシャワーを注がれ、そのままワシャワシャと髪を洗われた。

「い、痛い！　相模、痛い！」

「あ？　我慢しろよコレ位」

間違ってる。

アンタ、絶対洗い方を間違ってるよ！

皮膚が…、皮膚が禿げそうだ！

「クソ…、世話の焼ける。　浮気娘が」

もしかして…、

もしかしなくても…、

お…、怒ってる！！

相模、怒ってる！！

「あークソ！　何でこんな奴　好きになったんだか…」

溜息を吐いた後、また頭っからシャワーを浴びせ掛けられた。

「ぶわあぁ！」

「うるせえ！」

頭から体までこんな事を繰り返された。

柔らかいスポンジでガッシャガッシャ洗って来るから
スポンジは柔らかいのに、肌がめちゃくちゃ痛かった。

あれじゃあ　スポンジの存在する意味が無い。

「もう二度と　あんな事するな」

一連の洗浄が終わって
今は相模に抱えられて湯船に浸かってる。

「相模…、ごめん」

今回もオレが悪い。

素直に謝った。

音を立てて湯が揺れる。

柔らかい感触が首元に広がった。

風呂場に入って初めて、相模がオレに口付けた。

「こっち…、向けよ」

ハスキーボイスが浴室に響く。

また湯の揺れる音が響く。

「相模…」

向かい合った途端に
アイツは唇を重ねて来た。

密着する体……。

湯船で　いっそう高まった相模の体温。

さっきとは違ってムラムラはしない。

その代わり

優しい口付けと浴槽に響く水音、柔らかい檜の香りが　オレを凄く
翻弄させる。

「その顔が好きだ」

そのままキスが降りて来るーーー。

「相模……」

音を立てて、
味わう様に。

柔い愛撫を繰り返す。

「ルイは純粋なままで居てくれ…。　余計な事は覚えんな」

体が温まってるせいで、すぐに息が上がる。

オレを愛撫する相模の髪を何度か撫でた。

濡れて重くなった、艶やかな黒髪。

相模と目が合う。

「そうだ…。　俺のキスにすぐ惑わされる、純なルイが好きだ」

「相模ーーー」

相模は祈る様に何度も呟いた。

「そのままのお前が一番いい…」

唇が深く合わさった。

予兆　3

相模の上に跨って
アイツがするみたいに両手で顔を包み込んだ。

舌を使った口付けを受け止める。

相模の顔から汗が滴り落ちる。

より強く抱き締められた。

オレも
汗を滲ませてキスを繰り返した。

次第に下半身から
ムクムクと硬い何かが当たって来る。

「ーーー？」

「本能だ」

アイツの顔を包んでた腕を掴まれ、
徐ろに　その硬い感触の方へ持って行く。

「…わ？」

硬い、太い棒みたいな…何かがドクドクと動いてた。

って、

「こ、これって……」

「男は興奮するとこうなる。　今はお前に欲情してる」

ハスキーボイスが呟く。

手に触れたソレをマジマジと見つめた。

「……」

こんなモノが

オレの中に…。

不思議。

コレって凄い不思議だ。

コレがーーー

「今晩、楽しみにしとけよ」

「……え」

え、じゃねえ。
そう言って小突かれた。

「まさか忘れたとは言わせねえぜ、俺との取引を」

「い、いや…、あれは…」

顎をクイと掴まれた。

「好きな女が他の男に乱されて、しかも代わりに抱けと言ったんだ

ぜ、お前は」

「ーーーうっ」

「俺の身体を使ってあれだけイッといて、今更無しは認めねえからな」

鋭い眼光がギラリとこっちを見やる。

「取引き成立だ」

今朝、矢田の言葉に驚いたばっかりなのに…。

マジマジとソレを見つめる。

いや…、

確かに二度もしちゃったけど…。

マジでこんなモノがオレの中にーーー。

「クソ…、よりによって何でリョウなんだ!?　他の男ならすぐに潰せるものを…!」

下のブツばかり気にしてる間に
相模がイライラし始めてた。

「矢田は、オレが両方と両思いだから、両方とエッチするって言ってた」

「ああ!?　何だその屁理屈は!?」

悪魔降臨ーーー。

「ふざけんなよ、マジで!　絶対にリョウに会うな!」

「無理だと思う」

だって、アンタと同じ　組のトップなんだろ?
イマイチ矢田について　よく分かんねーけど。

しかも京王じゃあ副頭取じゃん。

お前と居ると、絶対会うよ。

「いや、会わせねえ！」

「無理だって」

「バカか！」

突然身体を持ち上げられて
勢い良く浴槽から上がった。

引っ張り出してきたバスタオルで
また勢い良く拭かれた。

「相模、痛い！」

「我慢しろ！」

その…、間違った作法だけは辞めてほしい。

風呂から上がると、一体誰が用意してくれたのか、新品の下着と着がえが用意されてた。

相模みたいな、上下真っ黒の服。

「…何で？　誰が…？」

「普通だろ」

アイツが「俺に着せて欲しいか」って言うから、無言で新しい服に袖を通した。

寸法を測ったみてえにピッタリだった。

「相変わらず男らしいぜ」

「うるせー」

半乾きの髪をくしゃっと撫でられた。

「昼飯食ったら出かける。　来い」

「は？　ど、何処に？」

「仕事だろ」

「な、何でオレまで…」

「テメエ　忘れたとは言わせねえぜ…」

再びギラリと光る相模の眼。

予兆　4

「お前、誓っただろ。　これから俺と常に一緒だと」

「ーーーは」

そういえば…

何となく…

あの時どさくさに紛れてーーー

そんな事を
言ってたような……

「約束通り連れ回してやる」

「……」

「覚悟しとけ」

後悔、先に立たずーーー。

昼飯だと連れて来られた場所は、
風呂場から更に奥の廊下を渡った先にある、いくつもの襖で仕切られた大広間だった。

だだっ広い和室を埋め尽くす様に長い食台が繋がる様に一列に並んでる。

食台だけじゃ無く、厳つい兄ちゃん達もズラリと並んでた。

やっぱり、その迫力に圧倒される…。

なんつー厳かな…

張り詰めた場所なんだろう。

そこに、どうも馴染みの無い不思議な頭が見えた。

周りの兄ちゃん達よりひと回り小さい。

なのに、真っ白いぴょこんと飛び出た物体がどうしても存在感を主張してくる。

オレはソレを二度見した。

動く度、頭の上でグラグラ揺れてる。

不振な白い物体…。

一人だけソワソワ動き回る仙人みてえなジーサン。

仙人様はオレの視線に気付いたようだった。

ひときわ頭頂部のモノをグラつかせ、
杖をブンブン振り回し始めた。

「お嬢や。　ヤレ　見かけんと思うたら、ホームステイ中じゃったか。　オッホッホッホ…」

皆が一斉にオレを見た。

マジで、ザッと　一斉に。

「こ、校長…、何で…、何でココに居るんすか!?」

紛れも無く、
このじーちゃんは
京王の校長だ。

あの、風変わりな、仙人みてえな校長が　何故か相模の組員に混じって座ってる……。

「いや、ワシもたまにゃあ“家”　に帰るのも良いかと思うてな」

「……は」

ニコニコ話す校長。

「お前　知らなかったのか?」

相模が横やりを入れた。

「な、何を?」

「ジーサンはウチの一番の古株だぜ」

「は…はあ!?」

校長が…、ヤクザーーー。

いや…。　京王ならあり得る…

「ジーサンはリョウの親父だぜ？」

「ああ！！？」

予兆　5

相模の信じられねえカミングアウトにオレは思わず校長を凝視した！

「に、似てねえだろ、どう見ても！！」

「ホッホッホッ、リョウはワシが６８歳の時にな…」

「はああー！？」

ろくじゅうはち…

充分ジーサンじゃねえか！？

ーーーいや、待てよ…。

確か矢田は家族は居ないって……

「飼い犬が拾って来てのう」

……。

「ーーーはい？」

ニコニコ話す校長をまたまた凝視するオレ。

なに？

今、何てーーー。

「当時飼っとった犬が拾って来たんじゃ。　いやはや、まさか子供をコウノトリではなく犬が連れて来るもんじゃとは思わんかったわい」

ーーーーー絶句。

そんな、

嘘みてえな話が…、
あるのかよ！？

「相模！？」

咄嗟に相模に回答を求めた！

「マジだぜ？」

「……」

ーーーう、嘘だ…。

ありえん。

絶対ありえん、そんな事…。

「校長……、名前…、名前は？」

「フム、ワシか？　ワシャ矢田十吉じゃ」

ーーー矢田。

「信じられねえ…」

似てねえ、全然。

当たり前だけどーーー。

まさか……、

まさか、矢田の…と、父ちゃん？
が校長なんて…。

父ちゃん……。

どう見てもじーちゃんだろ。

そういえば、
矢田がよく校長の事を「クソジジイ」って言ってたのを思い出した。

校長がココの古株で、その子供（？）の矢田が組のツートップ。

相模は跡取りだから分かるけど。

じゃあ、矢田は何で？

血の繋がりも無いのに、
しかも犬に拾われた子供が
何で相模と肩を並べているんだろう？

ーーー何で？

謎は深まるばかりだ。

「オヤ、噂をすればじゃな」

ニコニコ顔の校長が
ふと視線を逸らす。

「ジジイ、何しに来てんだよ？」

その視線の先から
聞き覚えのある声がする。

声のする方を振り向いた。

「矢田……」

渦中の矢田だ。

矢田までやって来た。

矢田は真っ赤なスウェットを着てる。

金髪に真っ赤。

やっぱ美形のヤンキーだ。

真っ赤な美形ヤンキーと目が合った。

「藤堂…」

ついさっきまでの行為を思い出した。

ゲンじいが邪魔に入らなかったら
オレらは今頃ーーー、

「何　見つめ合ってんだよ、テメエら…！」

「タツ…」

オレを胸元に引き寄せて、
相模は矢田と睨み合う。

「よお」

地を這う様な声。

真っ黒な悪魔と真っ赤な天使。

組員達が無言で見守る中、
目に見えない火花が散る。

「リョウ…、お前　俺の居ない間に随分とルイを可愛がってくれたなあ」

この凄みは、常人ならすぐさま逃げ出す事だろう。

「ウン。　藤堂…、俺が欲しいって、めちゃくちゃ可愛い声で言ってくれたよ?」

「ああ!?」

ヤバイ…。

相模がめっちゃ怒ってる…。

予兆　6

矢田は相模を挑発する様に
顔を傾けて話を続ける。

「言ったよね？　俺も藤堂が好きだって。　俺だって藤堂が欲しいって思うよ」

体を抱き寄せる力が強まった。

「ルイに手を出すんじゃねえ…！」

「嫌だ」

「リョウ…、痛い目遭いてえか！？」

相模の顔が変化する。

それは久々に見る、悪魔の表情（カオ）。

誰だってコイツの逆鱗に触れた事を死ぬほど後悔するだろうと思う。

「欲しい物は欲しい」

矢田以外は……。

「俺、欲しい物は全部手に入れたいよ」

「テメエなあ！」

怒る相模に矢田は動じる事なく歩み寄る。

「矢田…？」

まさか…、

前みてえな乱闘になるんじゃ…！？

「良い度胸じゃねえか！」

近寄る矢田の胸ぐらを掴み上げる悪魔。

引き寄せられる様に矢田の手が伸びた！

「ーーーおい…！」

相模の胸元に引き寄せられたまんま

その光景を目の当たりにした。

矢田は少し背伸びをして

相模の首を引き寄せて

有無を言わさず口付けたんだ…！

「……」

口をあんぐり開けたまま
目の前の光景に魅入った。

この状況で

ど修羅場の中で

何故か相模の唇を奪う矢田ーーー。

天使と悪魔、

魅惑的な男達のキス……。

相模は完全に固まってた。

いや、その場に居る全員が。

どういう目を向けりゃ良いものかと、皆視線を泳がせてた。

食い入る様に見つめてんのは

オレ位だぜ。

矢田と相模……。

美形と男前。

そんな二人がこんな事すりゃあ、
偉く絵になるもんだ。

何となく冷静にその場を見てる自分がいる。

どれ位時間が経っただろうか。

ようやく相模が動き出した。
アイツは　矢田の胸元を掴んだ手を伸ばして
乱暴に引き剥がした。

「リョウ…、何のつもりだ!?」

「……お返し」

舌舐めずりしながら天使が呟く。

「ああ!?」

魅惑の小悪魔が上目遣いで相模を見上げて言う。

「俺の事殴った分と、藤堂のキス…、タツに返してあげたよ」

ペロリと舌舐めずりする仕草。

矢田がするとめちゃくちゃエロい。

「欲しい物は貰うよ。　俺、タツも藤堂も、両方好きだし両方欲しい」

ーーーーー絶句。

何となく…、

矢田の愛情表現が捻じ曲がってると思うのは、オレだけだろうか…。

予兆　7

…というか、
矢田の場合、どこまでが本気か分からねえ。
コイツって走り出すと一直線だからな。
確かに始めっから相模にベッタリだったし……。

「だから、タツとライバルになる気無いよ」

矢田って中性的だし。

ホラ、
今だって
何してても可愛く見える。

「元々タツは俺の物。　今度は藤堂を奪うだけ」

「ふざけた事抜かしてんじゃねえ…！」

やっぱり捻じ曲がってる。

矢田って独特すぎる。

まるで世界が矢田を中心に回ってるかの様な発言。

欲しい物は全部自分の物って…、

良く言えば、自己表現が素直。

悪く言えば、…ワガママ。

「俺、本気だよ？　タツが鈍いだけ。　俺　何回か寝てるタツにキスした事あるよ？」

……。

「……」

「……」

ーーーーーーーーー。

重苦しい沈黙。

「はあ！？　お前…、何してんだ！？」

それを破ったのは
発狂する相模の声。

「だって俺の物だもん」

「マジでふざけんなよ…、リョウ！　お前なあ…」

「き…、禁断の花園だ…」

「ああ！？　バカな事言ってんなよ！」

「タツが悪いよ。　俺と居る時に熟睡するから」

「バカか！　誰がそんな事考える…」

相模がハッとした顔でオレの方を向き直った。

「な、何だよ突然？」

何故かジッと見つめて来る。

「という事は　お前も、俺が寝てる時に…」

「あ、アホか！　何もしてねえよ！」

「…チッ」

チッじゃねえだろうが。

何だよ、その『つまらん』的な舌打ちはよおーー！？

「それよりも…」

「おうおう、ウチは毎度賑やかでええのう！」

オレが言いかけたと同時に
野太いガラガラ声が後ろから聞こえた。

まるで恫喝するような
偉い迫力の声が、

一瞬にして周りの空気を変えた。

鮮やかな白いツツジの装飾の入った、黒い着物。

組員達は一同に深めの会釈で、その男に礼儀を見せる。

貫禄ある強面の男は、
矢田の頭をポンポンと撫でながら高笑いで入って来た。

「ィよお、リョウや。　お前　朝から元気やのう」

「おっちゃん、もう昼だよ？」

矢田がそう言い返すと
強面の男は「お前、早起きやのう！」と更に高笑いしながら矢田の
肩を数回叩いて離れた。

向かい合うオレと相模も目が合う。

その人はオレの顔を見て、

やっぱりニイ、と顔をくしゃくしゃにして笑った。

「居心地はどないですか？」

強面とガラガラ声に雰囲気が合ってねえ…。

これじゃあまるで、

近所の気前のいいオイチャンだ。

「いや、普通っす」

めちゃくちゃな体験をした割に、普通と答えた。

「両手に色男ですなあ」

他人事みてえに笑いながら

空けられた上座に腰を下ろした。

予兆　8

？それから後は、
まるで宴会みてえだった。

『飯は楽しく行こうや！』

組長さんの合図で
割烹着を着た数人の男達が両手に余る程の料理を持って来る。

『飯には酒や！』

真っ昼間にも拘わらず、
酒を組み交わし
豪勢な料理をつつきながら

誰の声かも分からねえ様な笑い声が飛び交う。

ココの兄ちゃんらは、
何をしても威勢が良い。

そう思った。

「なあ…、お前ん所　いっつもこんなに賑やかなんか？」

隣の仏頂面の相模に耳打ちする。

組長さんの登場で、
あれからオレらはうやむやのまんま席に着く事になった。

「まあな」

ボソリと呟いて、
レバ刺しをオレの皿に入れる。

「食え。　精が出るぜ」

「……」

「はい、藤堂」

隣から矢田の手が伸びる。

見た事の無い形のブツ。

「ーーー何だコレ？」

「赤マムシの姿焼き」

「……」

これをどうしろと……。

「リョウ、コイツに変なもん与えるんじゃねえ！」

「変じゃないよ。　精が付くならコレが一番」

「あのな…」

「すんません、遅くなりました…！」

「おう、源二。　？先にやっとるぜ」

ゲンじいが頭を下げながら入って来た。

「……ム」

矢田が何か呟いた。

「ホッホッホッ…、源二や最近よく会うのう…」

「ジーサマ…、いらしてたんで？」

ゲンじいは入って直ぐに組長にお酌する。

ゲンじいは間違いなく世話好きだと思う。

「何やお前、偉い遅かったのう」

「ウス、すんません…、実は庭影に妙な気配を感じたもんで」

「ホウ。　妙な気配とな。　珍しく“客人”？かの」

「それが何処を探しても人影が見当たらねえんで…」

ゲンじいの言葉に組長が盃を置いた。

「イタチやもしれん」

「いえ…、違うと思います」

「そうかい」

「念には念を入れるに越した事は無いわい。　どれ、暫く警戒しとくかの」

たくあんをボリボリ食べながら、校長が呟いた。

「小さい事を気にしよったら男じゃねえぜ、爺さん」

「フム、龍之介よ。“源二が”　言うとるんでな。　もしや　事が起こるやもしれんぞな？」

組長さんは
置いていた盃を持ち直して
一気に飲み干すと、

ガハハと一層大声で笑った。

すかさずゲンじいが酒を注ぎ足した。

「そうじゃ！　源二の勘は侮れんわな！！　そうか、源二が言うとるんかい！！」

威勢の良い、ガラガラの笑い声。

組長さんはそこまで言うと、
突然ピタリと笑うのを止めた。

「そいじゃあ、気ィつけなあかんわなァ…」

「フム」

何かを思い出す様に呟いた後、
またグイと酒を飲み干した。

「もう懲り懲りやからなあ」

「ワシもじゃ」

組長さんは矢田の方をチラリと見た後、

校長に返事を求める様に呟いた。
校長も珍しく神妙な面持ちだった。

オレは何の事だか
サッパリだったけど、

その後は、組長さんも校長も何事も無かった様に陽気に飲んだり食べたりしてる。

相模も矢田も
その事には一切触れて来なかった。

だから、とりあえず気にしないでおこうと思った。

ほんの一時の時間。

両隣りには相模と矢田。

豪快に笑い飛ばす組長さんに、漬け物を突つく校長。

ゲンじいに威勢の良い兄ちゃん達。

それは、初めて見た、
相模ファミリー大集結の光景。

更に賑やかになる会場で
オレは何となく道場で親父や生徒の兄ちゃんらに囲まれてた事を思い出してた。

こういう賑やかなのって嫌いじゃない。

大勢の人間に囲まれて育ったオレとしては、
懐かしいというか、
結構居心地の良い空間だったんだ。

予兆　9

「太るぞお前」

オレの手を引きながら
相模が言った。

長い長い廊下。

ガラス張りの窓からは
綺麗に手入れされた庭園が覗く。

オレからしたら
珍しい料理ばかりだったから
とりあえず一通り食べて行った。

腹がかなり満腹になった頃、

相模に手を引かれて
まだ湧き立つ会場を後にしたんだ。

「うるせえ」

そう言いながらも
実は結構腹がパンパンになってる。

これは…
食べすぎだぜ。

「そのうち饅頭みてえになるぜ」

「ならねえよ」

相模にギュウッと
鼻を摘まれた。

「ひてえよ！」

「…とんだ小娘だな」

何故か目を細めて
僅かに微笑んでから
そんな悪態をつく。

「離せ、バカ！」

顔をブンブン振ってやった。

相模の手は
呆気なく離れた代わりに、
肩をガシッと掴まれる。

そのままオレを強引に引き寄せて
額に口付けられた。

「お前はいつでも自然体だな」

熱く柔らかい唇。

すぐ前で相模の声がする。

「悪いかよ」

目の前に形の良い唇が見える。

なんかドキドキした。

「いや…」

いつもオレを惑わす唇が
艶かしく動いた。

「ルイらしくて良い」

廊下を歩く足が止まる。

アイツの手は
オレの顎を持ち上げて

頭一つ分デカい男と
視線がぶつかる。

ソレ以上何も言わず

相模の顔が近づいて来るーーー。

自然と目を閉じた。

「……」

いつもの相模の……

「……」

相模の……

……。

「ーーーーん？」

な、何だ？

一向にアイツのキスが
振って来ない。

いつも直ぐに塞いで来るのに。

何にも来ない。

「……相模？」

不思議に思って目を開けた。

目の前にアイツの黒いシャツ。

「相模？」

アイツは何故か
息を潜めて、

オレに覆いかぶさる様にして立ってる。

まるでオレの体を隠すみてえに、
目の前に立ち塞がってる
相模の視線が…

ゆっくりと
端に移動した。

ーーー何だ？

まるで何かを確認するみてえな
相模の謎の行動。

あさっての方向を見たまま
相模が呟いた。

「……アイツの勘は最高にーーー」

「え？」

抱き寄せる手に
力が篭る。

「ルイ」

「何だよ？」

「逃げろ…」

「ーーーは」

突然。

マジで突然だった。

アイツが

オレの体を突き飛ばすと同時に

聞いた事の無い爆発音が鳴り響くーーー

「相模…！？」

視界が

真っ白な破片で覆われるーーー。

まるで

スローモーションみてえに写る。

「相模！！」

これは何だーーー？

予兆　１０

一体

何が起こったんだ。

『…逃げろ』

アイツは
そう呟くと同時に、
オレを突き飛ばした。

後ろ向きに
流れる様に倒れ込んだ。

ーーー突き飛ばされながら、

まるで
スローモーションの様に
目に写る映像。

体を貫く様な轟音。

それと同時に
一面の窓ガラスが

凄い勢いで
音を立てて砕け散る。

廊下に突き刺さる破片。

視界が割れたガラスで真っ白に染まる。

真正面で
その衝撃を受けながら、

相模が懐から
何かを抜き出したのが見えた。

「相模！！」

叫び声を掻き消す様に
銃声が響く。

頭が割れるかと思った。

爆発音にも似た銃声が何発か聞こえた後、

「クソが！！」

アイツが吠えた。

手には拳銃。

相模の発砲した銃弾は

割れかかってた窓ガラスをも
完全に破壊した。

その場に呆然と座り込む。

遠くからバタバタと足音が聞こえた。

頭が追いつかない……。

相模が発砲したーーー、

いや

その前に

何者かが

オレ達に向かって発砲したんだ…。

「チイッ！！」

相模はめちゃくちゃになった窓を蹴り飛ばす。

金属のぶつかる音と同時に
窓枠が外れてドスンと庭に落ちる。

一体誰が……？

今になって体が震え出す。

相模が壊れた窓から身を乗り出す。

「さが……っ！？」

相模を呼ぼうとした時、
誰かに口を塞がれたーーー！

予兆　11

口を手で塞がれて
肩を抑えられる。

「……っ！！」

声にならない声を上げた。

そのまま
ズルズルと引き摺られる。

渾身の力を込めて暴れた。

口元を抑えてた手が離され、
体に回される。

ヒュッと息を吸った。

「シッ…。　俺だよ？」

「ーーー！？」

耳の後ろから声が聞こえた。
聞き覚えのある…、

「危ないからこっちに居なよ？」

頭を撫でられる。

「矢田…？」

震える声を振り絞って
ゆっくり振り向いた。

矢田だ。

優しい目をして
オレを見つめる。

「矢田…」

その目を見るうち
少しずつ落ち付いて来た。

矢田は？
よしよし、って
震える体を暫く抱き締めて

オレを現場から離してから
相模の元へ向かった。

ガラスを踏みしめる
ジャリっという音がする。

拳銃を構えて前を向いたまま
相模が呟いた。

「ど素人が…」

まるで
姿無き犯人が見えてるみてえに
ある一点を見つめる。

「追うぜ」

「ウン」

軽く言葉を交わし
その場を後に…

「タツ、リョウ！　？追うてはならん！！」

バタバタと組員の駆け寄る足音。

聞いた事の無い怒号で
校長が二人を呼んだ。

「コレはーーー、おそらく罠じゃ！！」

「何…」

アイツの動きが止まる。

まるで弾かれた様に
アイツが振り返る。

少し離れた所から相模と目が合う。

「チイッ！！」

舌打ちの後、

アイツは突然
オレの方に銃口を向けた。

「お嬢！！」

校長の叫び声。

横目に映る黒い影。

目の前の窓ガラスが
何かによって
突き破られる！

オレの目の前で窓ガラスが割れる。

銃口を向けたまま
相模が発砲する！

ガラスを突き破る物体。

アイツの放った弾丸がソレを射止めた。

ドゴオォッ！！！

音を立てて何かが弾け飛ぶ。

それは
床に飛び散ったガラスに当たり

カシャンと音を立てて落ちた。

「ルイ！！」

遠くで相模の呼ぶ声がする。

呆然とした。

突然の銃声。

突然の発砲。

そして、

床に散らばる

コンクリートの塊に括り付けられた、鋭利な刃物…。

それが

オレの方へ飛んで来た…。

間違いなく
オレの方へーーー。

「似すぎとる…」

静まり返った室内に
校長の声が響く。

いつの間にか
相模がオレを抱き締めてる。

それにも気付かなかった。

校長の表情が青い。

「これはまるで…、１６年前の悪夢と同じじゃあ」

いや、

その場に駆けつけた全員が
一様に同じ顔をしてるんだ。

「あやつら…、今更何を考えとる」

オレら以外、皆ーーー。

「どういう事だ…」

相模が呟いた。

予兆　12

校長は徐ろに、
巻き付けられたナイフを取り上げた。

グググ…っ、と柄を引っ張って抜き取り、ソレを視線の高さまで持ち上げる。

ナイフの刃に
黒い模様が見える。

「間違い無さそうじゃな…」

燃えたぎる
炎の様な形…。
まるで黒い炎。

「堂善寺の紋章じゃ…」

ソレを目の前に掲げ、校長は哀しげに呟いた。

深い、深い溜息が口から漏れる…。

堂善寺ーーー？

何となく　何処かでーーー

「もう見とう無かった」

聞いた事のある様な……。

？

「此奴は……、タツと母親を貶めた…、諸悪の根原じゃよ」

「…相模のーーー？」

ゆっくり
上を見上げた。

「１６年前…、この場でな、同じく突然の襲撃を受けた。　ワシらが犯人探しに奔走する間に、襲われたんじゃよ」

？

ーーー相模は…

「この襲撃は…、当時の場所といい、手口といい、余りにも酷似し過ぎとる」

明らかに動揺してた。

「何故、ルイを狙う…」

「……それはワシも分からん」

目の焦点が合ってない。

いつものアイツらしく無い…。

まるで考えてる事が
無意識に口を突いて
出てる様だった。

「龍之介が言うとったが、“凶器の灰”と　何ぞ関係があるか…」

“凶器の灰”……。

「それとも、予期せぬ悪夢の予兆か…」

痛い位に抱き締められる。

「クソが…！！」

今、
相模に腕を離されたら

「とにかく、招かざる客が再びやって来たのは確かな様じゃ」

間違いなく、
倒れちまうと思う。

「よう分からんが…、今回の客人の狙いは…、お嬢のようじゃな」

どうして
オレなんだ…。

別れ　1

標的
別れ
目の前で

まるで人形を投げる様に
次々と掛かって来る輩を投げ飛ばす相模を見つめる。

それは
映画のワンシーンの様に

まるで綿密に作り上げられた殺陣（タテ）
を見てるみてえだった。

周りのチンピラ共が
鉄パイプを振り回そうと
金属バットで襲いかかろうとも

アイツの二本の腕には適わない。

目では無く
気配で読み取る。

後ろに回り込もうとも
束になって掛かろうとも
所詮　才能の二文字には勝てない。

『タツ程　最高のヤクザは居ねえよ』

あの日呟いた
矢田の言葉が頭をよぎる。

敵をなぎ倒す男を見つめた。

それは一本の電話から始まったんだ。

組で起きた事件は
あっという間に
傷口を広げられる。

得体の知れない何者かによる、確かな悪意の篭った陰謀だと思った。

でも、

天下の相模組は

アイツが居る限り
どう足掻いても潰す事は出来ねえ。

『面白え事しやがるぜ…』

ニヤリと微笑む横顔を見て
本気でそう思った。

『最後に、最高にイイ思いをさせてやる…』

そう言って見つめる相模の眼。

今日限り、一晩だけーーー。

明日には
アイツとの別れが来る。

全ては一本の電話から始まったんだ…。

別れ　2

「何でオレなんだよ…？」

相模の腕の中で
自然と声が漏れる。

「…ど素人が」

オレをギュウっと抱き締めて
アイツが呟いた。

「何もかも、ツメが甘すぎる。　これは、組織じゃねえ…」

「それは分からん…。　このナイフがある以上は、ワシには何とも言えん」

校長の手に持つ
ナイフを見た。

タトゥーみてえな
黒い炎の模様。

「何より、１６年前の事件を知っとらんと出来ん犯行じゃよ、これは」

相模の母親の事件。

それを知ったのも
ついこの間の話。

当時　オレは産まれてるかどうかも分かんねえ様な昔の事件。

「おうおう…、派手にやってくれたもんよのう…」

校長の隣にしゃがみこむのは
相模の親父さん。

ジイ、とコンクリート片を見つめる。

「弾ァ調べろや」

スウッと上げた顔を見て
背筋が凍る。

組長の顔に
黒い影が落ちる。

裏のカオが出てくる様だった。

「龍の言う様に、何処ぞの“素人”の犯行やもしれん。こないな置き土産、分かり易すぎるわ」

それは
オレも思った。

わざわざ紋章入りのナイフを使うのは、まるで存在を認知させたいっていう犯人の願望じゃねえかって。

「そうは言うても、あの事件を引っ張り出して　何をしたいのやら…。　さっぱり分からんわ」

「只の脅しなら　良いがのう…」

「…まあええ。　弾ァ調べりゃちいとは…」

「大変です！！」

切羽詰った声と共に、
ゲンじいが
携帯片手に走って来る。

額に油汗が滲んでた。

「今度は何や」

「店のモンから…、突然堂善寺が襲撃して来たと…！」

「ーーーああ？」

相模も声を上げる。

「片っ端から　潰して行ってるみてえです…」

ゲンじいは
油汗を滲ませ、
電話越しの誰かと話をしてる。

「アホンダラ…！　もう店の事はええから、逃げろ、そこから早く！」

一体

オレらの回りで

何が起こってるんだ。

「車を出せ」

そう言うと、

オレを掴んだまま

相模が歩き出した。

「相模？」

物凄いスピードで。

長い廊下を後にする。

「お、おい！？」

背丈も脚の長さも全然違う。

小走りに駆けて
何とか付いて行く。

外に出ると
早くも黒塗りの高級車が
目の前に停まってる。

相模に手を引かれるままに
後部座席に就く。

乗り込むと共に
車は直ぐに発進した。

相模は一言も喋らない…。

オレも黙って隣に座ってた。

ただ、握られた手の温もりを静かに感じてた。

暫くして

アイツはふとオレの方をチラリと見た後、

前を向き直って

「ああ!?」

何故か発狂しながら

オレを二度見した。

「…何だよ?」

そして

何故か相模に怒られた。

「お前…！　何付いて来てんだよ!?　危ねえだろうが！」

「……は」

「お前に何かあったらどうすんだ!?」

「……」

「バカ、ここまで付いて来なくていいんだよ！」

「おい…」

何も言わねえ代わりに
黙って繋がれた手を差し出してみた。

「ああ？」

相模の目の前まで持ち上げる。

「あんたが引っ掴んで連れて来たんだよ」

「はあ！？」

アイツは繋がれた手を暫く見つめて、
「しまった」と呟いた。

「体が無意識に…！　クソ、悪いな」

「……」

それだけ余裕が無かったんだ。

この　相模でさえもーーー。

「いいか、絶対に外に出るんじゃねえぞ」

現場に着くと同時にそう言い残して車を降りる。

毎夜輝く街は、
白昼堂々、黒山の人だかりで埋め尽くされていた。

別れ　3

車内でスモーク張りの窓を下ろして相模を見る。

窓を下ろすと、
騒然とした現場の生々しい音が聞こえてくる。

女達の悲鳴。

ガラスが割れる音。

がなり立てる様な怒声。

耳を塞ぎたくなる様な破壊音。

更に野次馬で騒然となった場所へ、アイツはゆったりと歩いて行く。

「若！！」

聞き覚えのある声がした。

一人の男が駆け寄る。

浅黒い肌に短く立った前髪。

恐ろしい程の野生の勘が冴える男。

ゲンじいの後に付いて
次々と黒塗りの車がタイヤを唸らせ横付けされる。

毎晩煌びやかなネオンを灯らせるその場所は

一瞬にして
男達の戦場と化していく。

有り余るエネルギーを罵声に変えて、相模の兄ちゃん達が姿を現した。

「クソが！」

悪魔の降臨した相模は
何故か毒を吐いた。

現場へ向かう歩みを止め、
ゆっくり振り返る。

「誰が来いっつったよ」

「すんませんが黙って見過ごせません。　組の仇、撃たせて貰います」

そう言って懐から短刀を抜き出す。

ゲンじいの後について
殺気立った男達が群がって行く。

相模は突然歩み寄ると
ゲンじいの胸ぐらを掴んで殴り跳ばした！

「ーーガ…ハッ！！」

衝撃で短刀が地面に叩きつけられる。

「上等やな　ゴルぁ…！」

ドゴオッ！！

「ぐ…っ！！」

躊躇なく腹に蹴りを入れる。

そのまま地面に沈む。

「お前らが動いたらどうなるか、考えろや」

息を切らして這いつくばる。

口から血が覗く。

「また　戦争起こさせたいんか！？」

地面でのたうつ男を
アイツは片手で持ち上げた。

「若……！」

ピシャリと平手で頬を打った後
後ろに控える兄ちゃん達に促す。

「冷静になれ、お前らしくねえ…！　？手ェ出した奴は全員破門する。　覚えとけ」

それだけ言うと
アイツは一人で
人だかりの方へ消えて行った。

アイツはいつもみてえに
道のど真ん中をゆったりと歩く。

人垣の出来た騒然とした状況であっても、やっぱり誰からともなく
道を作って行く。

車の中から
自然と作られた人垣の道を歩く相模を見る。

そして、
人間の壁が
取り払われた事で

あの街の状況が
こちらからも見える。

数十人…、

いや、それ以上いるかもしれねえ。

あの煌びやかな街は
今や廃虚みてえに見える。

鉄パイプに金属バット、
鉈を振り回す男も居た。

躊躇なく
窓ガラスを叩き破る。

看板を蹴り飛ばし、
店員を引き摺り出す。

活気溢れるあのネオン街が
悲鳴と狂気に飲み込まれる。

相模は、
窓を叩き破ろうと
振りかざした男のバットを
後ろから掴みとる。

男が気付く間もなく
腕を首に巻き付けると、

呆気なく両腕がダランと垂れ下がった。

周りのチンピラが
何かを叫んでる。

奴らは一斉に
相模に襲い掛かった！

「ーーー相模…！」

思わず両手を祈る様に握る。

怖かった。

奴らにじゃなく

相模にもしもの事があったらって思うと、

不安で
めちゃくちゃ怖い。

別れ　4

掌に汗が滲む。
不安でドキドキした。

一斉に取り巻く男達。
男達の影で
アイツの体が
見えなくなる。

思わず身を乗り出した。

「相模…！」

心臓の鼓動が
早くなる。

じっとアイツの影を追った。
どうか…

無事でいてくれ…！

人影が動き出す。

相模を囲んでた男達が
まるで人形みてえに
投げられては地面に沈んで行くのが見えた。

次第に

隠れていた男が
姿を現す。

前から、
後ろから、
次々に向かい来る敵を

まるで全身に目があるかの様に
躱(かわ)しては　なぎ倒す悪魔。

振りかざした鉄パイプを
素手で受け止め、

相手の首を片手で掴み
持ち上げる。

苦しそうにバタつく男を
アイツは思いきり壁に叩きつけた。

ナイフをギラつかせる男が
アイツに駆け寄る。

凶器の持つ手をヒラリと避け、
思いきり顔面を殴りつける。

男は吹っ飛ぶ様に
倒れ込んだ。

思わず
ポカンと口が開いちまう。

更に身を乗り出して
遠くに見える
鮮やかな男を見つめた。

敵が何人いようと
アイツにとっては梅と同じなんだ。

凶器も適わない。

束になって掛かろうと

持ってる物が
元々違う。

奴らの動きは
完全に読み切ってる。

圧倒的な強さに
次第に理性が失われていく。

判断力に欠けた
浅はかな行動は

次第に仲間にも伝染して行くんだ。

もう、見なくても分かる。

全員　相模のペースに呑まれてる。

いや、
それすらも
おそらく気付いて無い。

目の前で仲間を潰される光景に
男達は次第に後ずさりし始めた。

誰が見ても明らかだった。

奴らに
決して勝ち目は無い。

後は、ただ
人形の様になぎ倒されるだけだ。

鮮やかなまでに美しい
闘う男の姿を見て

無意識に胸が高鳴った。

相模龍は、

オレが求める

理想の男　そのものだ……。

別れ　5

仲間を見捨て、
ちりじりに逃げ去っていく男達。

余りにも鮮やかな、
いや…、

鮮やか過ぎる程の
相模の一人勝ちだった。

ほんの数分前まで
この街を占領していた男達は

たった一人の男によって
完膚なきまでに叩きのめされたんだ。

アイツは逃げ惑う男の一人の首根っこを掴むと、有無を言わさずズルズルと引きずっていく。

男は

声にならない声を上げて
必死に逃れようとしていた。

手足をバタつかせ
思い切り暴れる。

その首根っこを掴んだまま
男の顔を思い切り
壁に叩きつけた。

グシャリ…と、

遠くから見てるオレでさえ
顔面の潰れるような鈍い音が聞こえた気がした。

抵抗を止めた男を
そのまま引きずって行くと、

相模はソイツを
ゲンじい達の前に
投げ捨てた。

「ひっ…ヒィ！」

かろうじて意識はある。
鼻が変な方向に曲がってた。

顔面を血で真っ赤に染め、
完全に怯えきった目で命乞いをする男。

オレの目から見ても、
明らかに弱い(じゃく)。

地べたに尻餅を付き
逃げ場を探して這い回る。

ゲンじいは
そいつを思い切り蹴り飛ばした。

「がふ…っ!!?」

肉を貫く様な
鈍い音がして、

男が地面に吐血する。

「た…助けて…グホァ！」

更に強引に掴み上げると
真正面から拳で強打する。

男は体を痙攣させながら
ゲンじいに縋るように蹲った。

ボタボタと赤黒い体液が地面を汚す。

その体を蹴り上げると
男はあっけなく
仰向けに倒れた。

弱い…。

弱すぎる。

「おどれ、“同業”のモンちゃうやろ」

力尽きたのか
時折ヒューヒューと
か細い息遣いが聞こえる。

「な…何にも知らなか…」

「ああ!?」

ゲンじいは
男の胸ぐらを掴み上げる。
恐怖と痛みでガタガタ震える男。

「お、俺らはただ…金を貰って…、頼まれただけです」

「…何やと!?」

どう見ても
裏の世界の人間には見えねえ。

「俺らの溜まり場に男が現れて…、金やるから、ある街潰せって…」

ただ粋がってるだけの
街のチンピラだ。

「おどれ…、カタギか」

男は何度も頷いた。

「まさか、こんな…、マジの人らが来るなんて…」

血液と涙で
顔をぐちゃぐちゃにする男を
再び立ち上がらせる。

「堂善寺組の襲撃に見せかけたんは何でじゃ」

「そ、それは――――」

突然
ヒュッと男の体が飛び跳ねる。

「クソが！！」

そのまま全身の力が抜ける様に
足から崩れ落ちる。

その胸元からは
大量の血液……

オレの目から見ても
男がピクリとも動かなくなったのが分かる。

次第に地面を伝い流れる
赤黒い血液。

背筋がゾクリと震えた。

「口封じか」

男は目の前で殺されたんだ…。

オレの目の前で――――

「捨てろ」

冷たく言い放ち
相模が踵を返す。

次第に騒然となる現場。

白昼、
大勢の見てる前で

ただ、口封じのためだけに

人が殺された――。

別れ　6

「その男の身辺を洗い出せ」

それだけ言うと

相模がオレの方へ近づいてくる。

奥には
変わり果てた男の屍。

ついさっきまで動いていた
男の残像が脳裏にこびりつく。

たった一瞬で
その命が奪われた事が
未だに信じられない。

「嫌なモン見せちまったな…」

ドアを開けざまそう言うと、
アイツの腕が外に出るよう促す。

「相模…」

オレの手は
微かに震えてた。

相模はいつも通り
オレを包み込むと、
ポンポンと頭を撫でた。

「厄介な事ばかり起きやがる…」

ため息混じりにそう呟く。

近くに相模の匂いがして
少しほっとした。

「アイツら…、組を襲撃したのって…」

「まだ分かんねえ」

指を絡める様にして
手を握る。

あったかい体温が
じんわりとオレの手を包んでくれる。

また
この匂いが嗅げて
良かったと思った。

「けど…、命知らずのバカヤロウが　回りにウロついてんのは確かだな」

「相模…」

「お前は心配すんな」

守ってやるさ、

そう言って
アイツの手が
今度は頬を包み込む。

相模と目が合った。

僅かに目を細めてオレを見つめる眼。

あんたの目に
またオレが映って良かった。

相模が無事で良かった。

「バカ、心配すんな」

なだめる様に頬を撫って、
アイツの顔が近付いて来る。

その唇を
静かに受け止めようと思った。

「若！！」

「――ああ！？」

「……ゲンじい」

何でだ。

何でだ。
いつも肝心な時にやってきては
邪魔ばっかするんだろう。

ちょっと…

マジでムカついた。

「取引の変更の申し出が、突然…」

「変更、だと」

別れ　7

なんか分かんねえけど、
事態がどんどん
変な方向に進んで行ってる。

「香港マフィアの李総裁です。どこから仕入れたのか、今回の一件が早くも耳にはいっているらしく…」

携帯片手にゲンじいが唸る。
ゲンじいの携帯は“厄災”だ。

「そこから薬の密売が洩れるのを恐れているようです…。なるべく早く売り払いたいと」

「いつだ」

「明後日、ＮＹで、と指定がありました。場所と時間は当日に知らせると…」

明後日――

しかもＮＹって…。

「クソが…」

「明日には出発しねえと間に合いません」

相模、

今度はそんな遠くまで…

「ルイ」

相模が

だんだん遠くへ行っちまう気がする。

「悪いが、今回ばっかりはお前を連れて行けねえ」

「ウン…」

それは分かる。

だってオレ、パスポートなんか
持ってねえし。

「明日の朝には日本（ココ）を発つ。おそらくすぐには戻って来れねえ」

「…ウン」

ギュッと抱きしめられた。

明日…。

相模が居なくなる…。

「暫くお前に会えねえ…」

「――おう」

いつも傍に居たから
そんな事考えもしなかった。

相模が
オレの前から居なくなるなんて…。

抱きしめられた服から
またアイツの匂いがする。

なんて言ったらいいか分からねえ。

当たり前のモンが居なくなる

この感じ。

なんて表せば……

「その代わり…、今日一日、お前のために使ってやる」

「……」

なんて

表せば――――

「最後に死ぬほど愛して可愛がってやる」

「相模……？」

アイツは

オレの気持ちとは裏腹に
ニヤリと笑ってこう言った。

「お前に最高にイイ思いをさせてやる」

「……」

違う。

多分

コイツとオレとの考えには
溝がある。

相模の言う
最高にイイ思いって…

多分違うと思う…。

別れ　8

「お前の行きたい所、どこでも連れて行ってやる」

「……え」

でも、相模から出た言葉は
めちゃくちゃ意外な物だった。

「言ってみろ。　何でも叶えてやるから…」

「ま、待って下さい！」

またもやゲンじいが
相模を引き止めた。

「ああ！？　テメエいい加減にしろよ！　邪魔すんじゃねえ！」

「お嬢を、連れ出すんは危険です」

ゲンじいは
ウザいのは百も承知なんだとばかりに開き直ってた。

「今朝　あんな事件があったばかりなんで、どこでお嬢が狙われるか分かりませんよ」

相模に対して
珍しく強気だと思った。

そして

ゲンじいの思惑通りに
相模は固まったんだ。

「テメエ、何が言いたい」

固まる相模をよそに
今度はゲンじいがニヤリと笑った。

ゲンじいは何故かオレを見て、

「お嬢に女装させましょう」

そう言ったんだ。

一日姫　1

相模のオンナ
一日姫
車内から
身慣れた街が遠ざかって行く。

その場に残った兄ちゃん達が
店員と一緒にガレキを片付けてる。

少し離れた先で屍と化した男は
ブルーシートに囲まれ
その姿を伺う事は出来ない。

オレらと入れ替わる様に
街を占拠する、
赤色灯の付いた車。

「なあ、大丈夫なんか、兄ちゃんら」

隣に座る男に声を掛ける。

ソイツはその問いに答える前に

腕を掴んでオレを抱き寄せる。

「おい…」

そのまま
シートに体を倒される。

覆いかぶさる様に
上からジッと見つめた後、
アイツはやっと口を開いた。

「何もしてねえのに　気にする必要ねえよ」

優しく頬を撫られた。

柔い愛撫に目を閉じて

残された男との時間に浸る。

オレらの目の前で男が殺害された。

音も無く、

胸から血を流して。

『犯人は、かなり遠方から狙い撃ってやがる。　どう見てもプロだろ。　バックに殺し屋が居る辺り、組織絡みだろうな』

オレの目からは見えなかった。
あの時　何が起こったのか。

銃声も無かった。

『厄介な事に、死人が出た。　そろそろサツが来る。　暫くは表立った捜索は控える』

現場に残る兄ちゃんらに指示を残し、

『ルイ、おいで』

オレは再び相模と車に乗り込んだ。

そして、
現在に至る。

心地良い振動を背中に受け、
目の前にいる男がもたらす
指の温もりを感じる。

「やっとお前にキスできる」

覆いかぶさる熱い男。

ソイツの声を聞きながら
オレも同じ事を考えてた。

今日は相模と居る間に
いろんな事がありすぎた。

最初はオレが盛って
相模を襲って、

それから盛大な相模ファミリーと飯を食った。

かと思えば、
廊下で得体の知れない何者かに銃撃され、

その直後
オレの元へ
凶器が投げ込まれたんだ。

呆然とする中、
ゲンじいの携帯に掛かるＳＯＳ。

あの煌びやかな街が
堂善寺と偽る男達によって
めちゃくちゃに潰されてた。

そして
事件に関与する男の一人が殺害された。

オレらの目の前で…。

最後に待っていたのは
相模との別れ。

相模が明日には居なくなる。

暫く会えない…。

それが

どれくらいの期間かも
分からない。

いつも当たり前みてえに側にいる奴ほど
居なくなる時のショックは大きい。

今　それを痛感してる。

相模は
今日一日、

全てをオレに捧げてやると言った。

そんなオレ達に

ゲンじいは

危険を回避する為に
オレに女装を促した。

いや、
オレ　女なのに。

見た目男だけどよ…。

多分オレらはあのホテルに向かってるんだ。

不本意だけど、
女になる為に…。

その道中

邪魔者の居なくなった車内で

相模が熱い唇を落とす。

やっと　唇に感じる
しっとりと柔いアイツのキス。

風呂場以来だ。

やっとキスできた。

アイツの髪に指を絡めて

次第に深く合わさる口付けを受け止めた。

一日姫　2

仕方無えのは分かってる。

『何処から仕入れて来たのか…。　相手方、若以外とは取引きしねえと言ってます』

相模がトップだって証拠だ。

この組の…。

オレとは違う世界に居る男。

この東京（マチ）を　庭だと言い、

かけ離れた、でか過ぎるスケールの中に生きる。

“足”　と言うと　車が出る。

“店”　と言うと　街全体の事。

数えきれない位の女達が
毎晩相模に抱かれるのを待ってる。

もう…、抱かねえらしいけど。

アイツの行く所全てに“道”　が出来、

学校へ戻ると頭取の“顔”　がある。

目の前に居る奴は
そんな男だから、仕方無い。

「…お嬢か？」

物思いに耽ってた時
ふいに声を掛けられた。

本日の“厄災”を持つ男。
今日何度めの登場だろ。

「凄えな…」

ソイツが初めて
オレに魅入った。

中腰でマジマジと見て来る。

オレは脚がスースーすると思った。

顔にも何か色々された。

ウイッグの髪が肩に触れて
何か気になる。

少年式のあの出で立ちでは無い事は分かる。

でも、まだ自分の姿を
鏡で見てねえ。

ゲンじいの反応も、
もしかしたら自分が
バケモンみてえになってんじゃねえかと不安になるんだ。

「ゲンじい…、オレは今　どうなってる？」

実際、ハイテンションな姉ちゃん達に取り囲まれ、
何がどうなったか　良く分かんねえ。

ゲンじいは暫く何にも言わずに
オレを見つめた。

「ーーー若は」

「まだ、会ってない」

「そうか…」

参った、と呟いて
その場にしゃがみこむ。

「お嬢が…、オンナに見える」

「そうか。　そりゃ良かったな」

オレは元々女だぜ。

ゲンじいの反応で、
とりあえず女には見えるんだと思う。

『いや、孫にも衣装っては　お嬢の為にある言葉だな』

かなり失礼な事を
ズケズケと言ってくる。

『アンタ稼げるよ』

『死ね』

ゲンじいは、また暫く見つめて来る。

今までに無くジイっと見られて、恥ずかしくなる。

『早く若に見せてやんな』

『……』

頬をチョイと撫でられた。

…心なしか、いつもより
可愛いがられてる気がする。

慣れないヒールをカツカツ鳴らして
相模の“クローゼット”を後にする。

最初、ココに連れて来られた時は
男に拍車を掛けられたけど、

それから暫く経った今、
オレは女に変身させられちまった。

いや、女なんだけどな…。

オレの姿を見ると、

入り口に立ってる紳士が
ホテルへと続くドアを静かに開けてくれる。

いつでもココは
至れり尽くせりだ。

「大変素敵なレディになられて…」

「…ウス」

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

「…ウス」

気恥ずかしく思いながらも部屋を出ると

その先で
カウチソファに体を鎮める
男の姿が見えた。

やっぱりアイツは
何処にいてもすぐ目立つ。

長身で真っ黒いスーツを着こなす男前。

ギラリと光る、只ならぬオーラを放ち　ソファに身を鎮めるその男
の存在感に、気付くなという方が難しい。

アイツはいつものように
テーブルに両足を乗せて、
携帯で誰かと話してるみてえだった。

一日姫　3

ヒールの音がカツカツと鳴り響く。
アイツの所に向かうのに
何故か変に緊張した。

ホールに響く足音につられる様に
途中、何人かの人が振り向いた。

これまでに無い
集中的な視線を浴びて

途中で引き返そうかとも思ったけど、その方が余計におかしいと思って止めた。

相模に近付く。

アイツは携帯を閉じると
こっちをチラリとも見ずに立ち上がる。

そのままオレの方へ
歩み寄って来た。

広いホールの中。

オレの足音が反響してる。

音に吊られて振り返る人々。

ホールをゆっくりと歩く相模に一歩ずつ近付いた。

アイツと向かい合う。

相模はそのままーーー

オレを

通り過ぎた。

「……」

思わずその場に固まっちまった。

アイツーーー

「相模！」

気付かねえのかよ！？

「……あ？」

広いホール一杯に
オレの声が響く。

アイツはいつもと違って
気だるそうに振り返って

初めてオレを見たんだ。

「アンタ、気付かねえのかよ」

「……」

そのまま固まった。

「おい…」

「……」

いい加減ホールのど真ん中に立ち尽くして恥ずかしくなってくる。

「相模…！」

「……」

アイツの驚いた顔、
初めて見た。

「マジかーーー」

やっぱり相模も
オレをじっと見つめて来る。

通り過ぎた男が歩み寄って来る。

目を見開いて

信じられねえ、って顔して。

アイツが近付く。

「お前…、ルイか……？」

「おう」

「お前ーーー」

ぎこちなく
手を頬に充てる。

アイツにしては珍しく、
戸惑いながら。

確認するように、そうっと触れられた。

「まるきり　女じゃねえか…」

「……」

あんまり嬉しく無い。

アンタまで
ゲンじいみてえな事言うなよ。

「オレは元々女だ」

「ああ…。　今、確信できたぜ」

「……」

アンタ、何だと思ってたんだよ…。

「マジかーーー」

ゆっくりと胸元に抱き寄せて
上から顔を覗き込まれる。

自分の姿が確認出来ねえだけに、

その反応に戸惑っちまう。

「相模…、オレ　どうなってる？」

「凄え　可愛いぜ…」

胸元に抱き寄せたまま、
頬を撫でられる。

驚いた様でいて、
何処か見惚れてる様な…。

アイツから色んな表情が見える。

「ますます純粋無垢に見えんな…」

「そういう感じか」

「ああ…。　めちゃくちゃに乱してやりてえ…」

「……」

コイツ…、

絶対　今、

良からぬことを

想像してるよ。

絶対変な事考えてる…。

一日姫　4

暫くこうして見つめられた。

相模は
何かしたそうだけど
戸惑ってる様で

これ以上触れようとして来ない。

「鏡　見てねえのか」

「ウン」

来い、と呟いて引っ張られる。

受付カウンター横のエレベータに
そのまま連れてかれた。

「見てみろ」

隣に取り付けられた、デッカい鏡の前。

「ーーーは…、えええー！？」

鏡の前に
人形みてえな格好した少女が…

口をあんぐり開けて立ってる。

「そうなるだろ」

相模がオレを見て笑った。

「ウン…。　スゲえや。　女だ」

めちゃくちゃ可愛いワンピースを着てた。

服を見せられた時は普通だったけど、着ると全然違って見える。

真っ白い、裾にかけて広がる様な
ふんわりしたワンピース。

髪が柔らかく見える、
ほんのり茶色の髪。

それが
鎖骨の辺りまで掛かってる。

極端に手を加えられてない
自然なストレート。

それがやけに
自然味を出してる。

純粋無垢ってアイツは言ったけど
正にその通りだと思った。

ほんのりピンクの唇。

自分が言うのもアレだけど
多分喋んなかったら絶対バレない。

自然すぎて違和感が無いんだ。

鏡の前のオレはーーー

強く抱き締めれば
壊れちまうんじゃないかって位、

繊細で　可憐な少女に変身してた。

一日姫　5

「抱き締めてもいいか？」

「おう…」

いつも　そんな事聞かねえクセに。

突然改まられると
オレまで緊張する。

そっとオレの手を取って
優しく撫でる。

確認するみてえに

何度も、優しく手を撫でられる。

そのうちアイツの手が上がって来て、

腕や肩を撫でた後
顔を埋めるように
頬を寄せて
オレの背中に腕を回す。

最初は　そっと包まれて、
それからギュウっと抱き締められた。

「これだけで悪い事をしてる気分だ…」

頭を撫でられる。

相模が溜息を吐いた。

「お前の女装は　体に悪い…」

「ーーー複雑」

バカか、って体を少し離して小突かれる。

オレと目が合うと、
アイツは一時の間固まって
次に深く溜息を吐いた。

「参った…」

やっぱゲンじいと同じだ。

「とりあえず、車　乗れよ」

腰に腕を回してエスコートされる。

こんなのも初めてだった。

入り口にドアを開けて停まる
一台の高級車。

促されるまま
シートに座る。

「よお」

聞き覚えのある声がして前を向いた。

運転席に、いつもと違うメンツ。

今日はこの男と縁がありすぎる…。

これで　何度めだよ。

「今日は俺が責任持って面倒見てやるよ」

相模がシートに腰を下ろすと直ぐにドアが閉まり、
車は白昼の都会の中を走り出す。

「お前の運転は久しぶりだな」

「ウス。　自分も懐かしいですね」

「戻るか、世話人に」

相模がそう言うと、
運転席の男が軽く頭を下げた。

「今日だけは　若とお嬢の世話人させて貰います」

「世話人て…」

「お嬢、何処か行きたい所あるか？」

前を向いたままソイツが話し掛けてくる。

慣れた手つきでハンドルを切る。

無理な圧力が掛からない
心地良い運転だった。

「ここいらの地理なら知り尽くしてる。　大概の我が儘なら応えてやれんぜ？」

行きたい場所…。

一日姫　6

オレの行きてえ所…。

「ーーー山」

「ああ！？　山だあ！？」

「お嬢…。　そんな格好しといて山はねえぜ」

何だよ。

何処でも良いっていうから言ったのによ…。

「お前…、マジで野生児だな」

「…別に嫌ならいいよ。　オレの地元とは違って、ココに山がねえから見たかっただけだし…」

「そりゃあ“行きたい”じゃなくて、“見たい”だろ」

「……」

しかも　いちいちうるせえ…。

「いいよ、別に　何でも」

「拗ねんな、バカ…」

顎を撫られる。
ネコを可愛がるみてえに
指先を転がして。

「くすぐってえよ…」

「今日は可愛いペットだな、お前は」

そして
めちゃくちゃ優しい顔で微笑んだ。

ドキドキした。

「あー…、そんなら、まあ期待通りかは分からねえが…、それらしい所なら連れて行ってやれるぞ」

後ろのオレに目配せしながらゲンじいが何故か笑った。

「アンタ幸せモンだわ。　若と俺と独り占め出来てよ」

ゲンじいは余計だと思うぜ。

アンタ、勝手に付いて来ただけじゃねえか。

心の内だったにせよ、
車内でゲンじいに対して吐いた暴言の数々。

それを今、
訂正して　お詫びしようと思う。

神様　仏様　ゲンじい様…。

この度は、失礼な事を心の中でめちゃくちゃ言ってゴメンナサイ。

塔の最上階から景色を眺めながら
心の中で何度も唱えた。

『アンタは運が良いぜ、全く…』

雲一つ無い青空。

季節は5月半ば。

この時期に、この景色が見れるのは
かなり珍しいらしい。

「たまにはこんな時間も良いかもな…」

「おう」

相模と二人、
最上階の入り口の上に座って
その景色を眺めた。

うっすらだけど
雄大な姿が見える。

ここは、とある新緑公園の一角。

『昔、ここで富士山を見た事がある』

東京から展望出来るのは
専ら寒い季節、しかも雲一つ無い秋晴れで
見晴らしの良い所があればの話。

それが、この季節に
うっすらだけど見えたんだ。

真っ白で

雄大な、日本のシンボル。

テレビでしか見た事無かった。

地元のそれとは少し違うけど、
それでも　見れるか見れねえか…。

賭けにも似た景色が見れて
感動が胸に迫る。

隣に座る相模に手を握られて
ふと横を見た。

風が強い。

アイツの柔らかな髪が
風になびく。

陽に当たって　熱い目が茶色く光った。

「一つだけ、願いがある」

光に当たって消えて行く様に
白く透き通る悪魔の顔。

相模が凄く綺麗に見える。

「今日だけでいい…」

目を細めてジッと見つめられると、目が離せなくなりそうでーーー

「今日だけ…、俺の女で居てくれ」

この景色とアンタに
酔わされてると思うよ。

一日姫　7

高い所に居るせいかな。
風がちょっと冷たいや。

「ルイ」

だからなのか、
オレの肩を抱き寄せる男の腕を
そのまま受け入れたんだ。

「今日だけは、俺らは　ただの男と女だ。　頭取も、若頭も、世話人も関係ねえ」

「難しいよ…」

「何処が」

「…だって　アンタは相模龍だよ」

オレが今見下ろしてる景色を“庭”だって言う、別世界に生きる男だ。

「忘れろ、そんなの」

「無理だよ急に…」

「無理じゃない」

気が付いたら
また相模のペースにハマってる。

肩を抱いたまま
アイツが頬を寄せて来て

チュ…っと
頭にキスをした。

「俺を見ろ」

額と額がくっつく。

まるでキスの手前って感じで、触れそうで触れない距離にちょっと戸惑った。

「今日だけは忘れろ、何もかも」

「相模…」

アイツの声が　すぐ前で聞こえる。

掠れた様な、ハスキーボイス。

「今の俺は…、お前に恋してる　ただの男だ」

相模の髪からお日様の匂いがする。

光と不釣合いな感じなのに、

一度そこに降り立つと　全部がアイツに味方してるみてえだった。

そっと触れた熱い手。

もう慣れてる筈なのに…、

触られた瞬間、胸が高鳴った。

「今日だけ、お前と恋人で居たい」

「んなの…」

「お前から口付けてくれ。　返事の代わりに」

どうすりゃいいんだよ。

「オレ……」

「安心しろよ。　嫌でも明日には開放してやるさ」

風になびくオレの髪を片手で束ねて
光に透き通った顔が　じっと覗き込む。

最近、相模の表情が豊かになったと思う。

以前は微妙にしか分からなかった顔の変化が、今はありありと映し出されてるんだ。

今は、切な想いが溢れてる。

頼むから…って、
アンタから寄せられる気持ちが
表情だけでよく分かる。

胸が詰まるよ…。

「今日だけ…だよな」

「そうだ」

戸惑いながらも
隣の男の顔に触れる。

珍しく　風に晒されて
少しヒヤい相模の頬。

起きてる時に初めて触った。

ゆっくり動いて
間近で見つめる男に顔を近づけると、相模は静かに目を閉じた。
オレも目を瞑った。
唇にあたる柔い感触。

オレがそうっと重ねると
応える様に両腕で抱き寄せて　そのまま何度も口付けた。

真っ青な空だった。
光に照らされて真っ白になる世界で　アイツと今日一日だけの誓いのキスをする。

純粋なキスだった。

珍しく　純粋で
凄く綺麗な時間だと思った。

「目一杯　愛してやる…」

今日の出来事は　きっと忘れられそうに無い。

一日姫　8

「結婚式挙げるなら、ここでしようぜ」

「…話　飛びすぎだって」

「付き合ってんなら　当たり前の流れだろ」

「……」

手を繋いでオレを引っ張る男が振り返って笑う。

相模の場合、何処までが演技なんだか…。

そこら中に
花の甘い香りが充満する。

辺り一面に咲くガーベラは鮮やかなオレンジ色で、陽の光に反射して金色に輝いて見えた。

相模とこんな場所、来ると思わなかったな…。

「花は好きか」

「ウン。　母ちゃんが結構好きで良く花植えてた」

「そうか」

花畑の中に作られた小道。

二人並んで歩くのがギリギリ位な狭い小道は、遠くから見ると花に隠れて、まるで花の絨毯の上を歩いてる様にも見える。

何処までも続く
金色の絨毯。

ワンピースが風でヒラヒラと舞ってる。

蝶になった気分だ。

「お前の両親連れて　また来るか…」

「ウン」

「花はルイに似てる」

「オレ？　何で？」

「癒される。　お前と居ると…」

「そうなんか」

「お前に出会って変わった」

照れくさい事を平気で口にする。

相模って、そういう所素直だ。

好きとか、そういう気持ちを隠そうとしない。

「相模…」

何げなく顔を上げた時、優しい笑顔でオレを見る男と目が合った。

いつから　そんな目して見てたんだよ。

「俺の心に無かった物を　お前が与えてくれた」

ーーーーー。

これって…、
演技…なんだよな？

恋人同士の……。

相模がいつもと違う。

握られてる手が熱いよ、相模。

そんな顔で微笑まれたら、
マジでアンタの恋人になってる気分になっちまうよ。

いつものドキドキじゃない。

言葉に出来ない、
オレの胸を一杯にする想い。

自然と　こみ上げるんだ。

相模が愛しい。

今　どうしても、

「相模ーーー」

相模に触りたい…。

手を繋いで前を歩く男に後ろから抱きついた。

「お前……」

「アンタがそんな事言うから…」

男の体って
こんなにゴツゴツしてるもんなんだ。

服の上からも感触が伝わって来る。

相模の匂いもするよ。

「お前ーーー」

「……」

今日は

アンタのオンナだから。

「相模…。　今日だけだよ……、アンタが愛しい…」

「お前……！」

「今日だけだ…」

「違うーーー」

アイツの腰に回した手が引かれる。
向かい合って抱き合った。

「お前の本心だ…！」

「相模…」

「お前は…俺に惚れてる。　そうだろ…！？」

今日、一番強く抱きしめられた。

一日姫　9

目の前にある相模の胸元に
頬擦りした。

「…相模、今日だけって約束じゃん」

「違う！　お前の　その想いは　、作り物じゃねえだろ…！？」

顔を埋めて目を瞑る。

「気付けよ、自分の本心にーーーー！」

気付けーーーー。

ー早く気付け……！ー

アイツの言葉で

いつだったか見た不思議な夢を思い出した。

不思議な夢。

目の前に自分が居て、
必死に話し掛けて来てた。

「相模…」

自然と体に腕を回した。

目の前の“オレ”は何故か泣いていて、
オレに早く気付けって言って来た。

相模を好きになるって…。

その気持ちに
早く気付けってーーー。

そう言いながら泣いてたんだ。

ーアイツに会いたい…ー

そう言って泣いてた。

「俺は…、例え望みが無くても　ずっとお前を想い続ける」

未来は予測もつかない。

ーーーーでも、

例え…、用意されたレールがあったとしても、それを無視して新しい方向に歩き出せばーーー

「だけどな、もし…、ほんの少しでも　お前の気持ちが俺に傾いてんならーーー」

そこには

新しい道が出来るんだ。

「俺は　リョウを裏切ってでも、お前が欲しいーーー！」

用意されたレールの先には無い、

全く違ったゴールが

新しく作られるんだ。

「矢田は　オレが両方と両思いだって言ってた」

「…バカ、俺が言ってんのは　そういう事じゃねえよ」

キャンドルに炙られて湧き立つアロマの香り。

ベッドみてえなフカフカのソファに相模と横になってる。

たまに頬を撫でながら
付いては離れる甘いキスを繰り返してる。

「お前は俺に　一人の男として惚れてる」

「何でアンタに分かるんだよ…」

ゲンじいって最高の世話人だ。
オレらが散歩してる間に
こんな部屋を見つけて来るなんて…。

「分かるさ…、　お前は今、俺と気持ちを共有してる」

花畑の延長みてえな
甘い香りの充満する部屋。

レースで隠されたベットルーム。

心を穏やかにさせる
オレンジ色のライト。

白い陶器の中に浮かぶ薔薇の花弁。

オレら、二人きりだけの空間だ。

「ルイが好きだ。　俺を振り回す厄介なオンナに心底惚れてるよ」

アイツは　何処から取り出したのか、
ガラス細工のボトルを開けて
そこから良い香りのするオイルを手に取る。

「エッセンシャルオイルだ」

「エッセン…？」

「腕…、出してみろよ」

手首から肘の辺りまで
ゆっくりと揉みほぐす様に
オイルに濡れた手が滑る。

ヌルヌル滑るけど
マッサージみてえで気持ちイイ。

「ルイ…」

「ーーーん？」

気持ち良くてボーッとしてた。

「なるか、俺の女に…」

「ーーーん」

いい匂いだけがそこら中に漂ってる。

相模の言葉に
夢心地で返事を返した。

一日姫　１０

「俺が好きか」

「ーーーん」

横たわってる体が
次第に重くなっていく気がする。

「ーーーお前、催眠に掛かりやすいだろ」

「ーーーは」

アイツの手が
滑る様に手首と腕の間を上下する。

瞼が重くなる。

「お前…、本心はどうなんだよ？」

「ーーーえ」

真っ暗な世界の中に
アイツの声が響いてる。

それも
夢か現実か分かんねえ様な感じだ。

「俺の事、どう思ってんだ」

「……」

本心はーーー

本当は…、

相模と離れたくない。

いつも側に居る筈の相模が居なくなるなんてーーー

本当は　めちゃくちゃ寂しい。

アンタが側に居て
当たり前だと思ってたから。

「……」

本当は

こうして一緒に居られて嬉しい。

あの時、アンタが無事で良かった。

また　その目にオレが映って良かったよ…。

「お前なあ…！」

「ーーーえ…」

突然の怒鳴り声に反応して目を開けた。

「お前ーーー」

相模はやけに
顔を赤くさせてる。

「お前、俺にべた惚れじゃねえか！」

「……」

いや、待て……

何だ　そのセリフ。

まるでさっきの心の声が……

「お前の本心、きっちり聴かせて貰ったぜ…」

心で呟いてる筈がーーー

「お前、俺に惚れてんじゃねえか」

声に出てたんだ……。

いつも

オレの思ってた事をーーー

「ほう。　お前　いつもそんな事考えてたんかよ」

「……」

また　やっちまったーーー。

「隠すな。　悪い事じゃねえだろ」

「……」

だって、
アンタに本心を打ち明けたら
直ぐにでも世界が変わっちまいそうな気がするよ。

「当たり前だろうが」

「ーーーん」

オレ、まだ
そんな覚悟出来てねえよ…。

「バカ。　何で覚悟なんかいるんだよ」

だってーーー

もう、オレの居る世界に
戻って来れない気がして怖い。

自分が
変わっちまう様で……。

「それは“変化”じゃねえ、“成長”だろ。お前の女の部分、俺はもっと見てえよ…」

「……」

ホラ、

そうやっていつも
アンタのペースに呑まれるんだ……。

「ルイ、愛し合うってのは悪い事じゃない」

ーーーうん。

「俺の女になっても　お前は藤堂ルイだろ」

アンタの女に…。

「お前が逃げても、気持ちは前向いてんだ…。　逃げられねえよ」

オレがーーー。

「逃げんな…。　ちゃんと言葉に出してくれ。　変に怖がるな」

「相模……」

「言っただろうが。　俺も初めてなんだよ。　一緒に進めばいいだろ」

アンタにまた口説かれてる。

「俺の女になってくれ」

一日姫　11

アンタのオンナーーー。

「ルイ……」

閉じた瞼に
暖かくて柔らかい感触がする。

次いで

頬にーーー

耳たぶにーーー

「ーーーん」

首筋にも…

甘い音と一緒に
柔らかい感触が広がる。

「今、どんな気分だ…？」

「気持ちイイ…」

心のままに　素直に伝えた。

「それだけか？」

ワンピースの裾を
少しずつ捲り上げられる。

両脚が露わになるーーー。

「ドキドキするよ…、凄く」

声が掠れて溜息になる。

「ーーーもっと教えてくれ」

「アンタの…、体温で暖まるのが好きだ。　心地良いよ…」

太ももを撫で上げながら
ワンピースの裾が捲られていく。

首筋に伝わる淡い余韻。

自然と息が上がる。

「可愛い事　思ってんじゃねえか…」

手が　上に上がって行く。

「ゾクゾクするよ…、凄く　恥ずかしいけど、嫌じゃない」

「それでいい」

太ももの内側を撫で回す熱い手。

首筋に噛み付く様なキスをされる。

「難しい事じゃない。　俺を受け入れてくれればそれで良いんだ…」

「相模…」

「俺らの想いを素直に共有すればそれでいい」

アイツの手が
ワンピースの中に入って来る。

腰から
お腹を撫でて…

慣れない下着に包まれた、
柔な胸を揉まれた。

「ーーーん」

「それなら出来るだろ？」

「うん……」

「それでいいんだ」

「ーーーん」

下着を胸からズラされる。

途端に熱い手が包み込んでくる。

ワンピースの裾から入った両手に
オレの柔な胸を揉まれてる。

「やっぱ成長してんな、お前の胸…」

「ヤバ…、相模ーーー」

「どうした？」

「ソレ、感じるよ…、凄く…」

「そうか」

裾を胸元までたくし上げて

突然アイツは胸の突起を口に含んだ。

熱くて柔らかい、濡れた舌が
突起に絡める様に攻めて来る。

「ーーーあ…っ」

そこから何とも言えない

快感の渦が押し寄せるんだ…。

優しく刺激するみてえに
吸い付いては離れてく……！

「気持ちイイよ…」

背筋から寒気にも似たゾクリとした震えが湧き上がる。

なのに、

アイツの唇は
突然オレから離れて行った。

「ーーー残念だ」

「う…そ…？」

ゆっくりと下着が戻されて

捲られてたワンピースを元に戻された。

「相模…？」

「この姿じゃあ　風呂は入れねえだろ」

「ーーーうそ…」

アンタ、
こんな事しといて…。

「抱きてえ…。　今、凄え。　…でも、夜までオアズケだ」

うそーーー。

オレ、
めちゃくちゃ体が火照ってんのに。

「欲しいか…？」

「……」

「無理だ…」

「……」

アンタ、嫌な奴だ…。

一日姫 ？ 1

相模のオンナ
一日姫　2

パチンッ…

指を鳴らす音が朦朧（もうろう）とする意識の中で聞こえた。
まるで　悪い夢から覚めたみてえにハッとして、
瞑ってた瞼が開いた。

「冗談みてえな奴だな」

「相模…」

あんなに眠かったのが嘘の様に
目がパッチリと開く。

相変わらず
部屋に充満する甘い香り。

フカフカのソファの上で横たわってる、相模とオレ。

「ーーーオレ…？」

さっきまでの会話が
まだ頭ん中でエコーしてる気分だ。

あれってーーー

「夢……」

「バカ。　んな訳ねえだろ」

「……」

頬を撫でる熱い手。

オレを見下ろす相模の顔は
凄く満たされた笑顔で…

ー俺の女になってくれー

「……」

その笑顔で

さっきまでのやりとりが
マジの事だって実感した。

何より
火照ってる体が物語ってる。

ーやっぱ成長したな、お前の胸…ー

変に弄(いじ)られて
引き際を失った体の熱。

ここであった会話も
数々の情事も　夢じゃないーーー。

ソファに軽く鎮みながら　ゆっくり起き上がった。

支えるように、
アイツの腕がスっと身体にのびる。

腕の中に包まれる。

固くて暖かい胸元に顔が埋まる。

「今日は　記念日だな」

「……」

マジかーーー。

一日姫？　2

「待て…、さっきのはナシだ」

「ふざけんな」

「だ、だって　オレ、意識が無かった」

「あったぜ、バッチリ。　俺とあれだけ会話しといてよく言うよ」

「い、いやいやいや!!　あれは、反則だ!」

「反則なのは　お前の本心の方だろ」

「ーーーうっ!?」

「よくもあれだけの想いをひた隠しにしてやがったな…」

「う、うるせえ!」

相模とガッシリ抱き合って、
付き合うのはナシだの何だのと言い合ってる。
変てこりんな気分だった。

「お前いい加減にしろよ…。　どれだけ待たせりゃ気が済むんだ」

「ーーーうう…」

「俺の女だからな。　いいな、言ったぜ？」

「…マジかよーーー」

やっぱり相模は
満足げな顔して微笑んでる。

「マジで俺の物だ…」

どうなるんだ、これからーーー。

「ヤケに長かったな、お前の“半日”は」

「……」

やっぱ憶えてたんだ…。

相模は徐ろに抱き締めてる身体を離してオレの顔をクイと持ち上げる。

「契約解除だ」

「ーーーは」

「さっきの誓いだ。　もう一日だけの関係じゃねえだろ」

親指の腹で
頬を何度も撫でられた。

「これから俺は、ルイの前では　ただの男になる」

「そんなーー」

「これは、恋人の誓いだ」

「相模、勝手にーーー」

喋ろうとする口に
人差し指を充てて黙らせる。

切れ長の目が
ジッとオレを射止める。

人差し指はゆっくりと
唇の上を辿っていく。

少し目線を上げれば、
目を細めて微笑む優しい顔の悪魔。

「諦めてくれ…。　お前に出逢ったのは運命だ」

優しい顔で
オレを雁字がらめにしようとする。

どうしても逃がしてくれない。

さっきまで一日だけだって言ってたのに。

やっぱり油断すると
どんどん中に入り込まれちまう。

「俺にはお前しか居ねえ。…ルイも、そうであってくれ…」

アイツの指が離れた唇に
待ち構えた相模の熱いキスが振ってきた。

キスしてる間も
ずっと顔を撫でられた。

悪魔からの
契約のキスだーーー。

それも、

いつ解けるのか分からない……。

運命なんて言葉、
相模が使ったら洒落にならない。

「は！？　ラブホ行っといて　何もしなかったんすか！？」
「出来るか。　思い切り乱すなら夜だろ…」
「おいーーー」

「そりゃあ…、ちょっと誤差っすわ…」

ハンドルを片手で切りながらゲンじいは頭を抑える仕草をする。

「…まあ、そうですね。朝も　昼も夜もじゃあ　さすがにお嬢でも身体が持たねえか…」

「どういう意味だよゲンじい…」

へっ、って
吐き捨てる様に笑われた。

「お嬢、今朝エライ凄かったなあ」

「……あ？」

「アンタのあの声、組中に丸聞こえだったぜ…。　ったく、アンタが女だって　今日何人に弁解してやった事か…」

「……」

それって、つまりーーー

今朝って……

「あんだけ燃えりゃあ　そら風邪も治るだろうよ」

「嘘ーーー」

アンタ知らねえだろうけど、
ウチは朝からその話題で持ちきりよ？　って笑いながら
ニヤニヤ顔のエロ親父がオレを見る。

「んで、どういう関係なんすか　お二人は？」

「…関係って何だよ」

「男の勘よ。　若とは　只の　“主従関係”　？通り越したか？」

組の奴らに全部聞かれてた恥ずかしさと、
ゲンじいの人間をもはや超越した怖るべし嗅覚とに気分が撃沈するぜ…。

「何でもねえよ…」

「ああ！？　お前は俺の女だっつってんだろうが！」

「う、うるせえ…！」

「若の女ねえ…。　やるじゃねえかお嬢」

「ち、違う！　相模が勝手に…」

「ああ！？　殺すぞテメエ！」

「よっしゃ！　？そういう事なら　俺の演出も報われるってモンよ」

「は…、アンタ　今度は何考えてんだよ！？」

急に鼻唄を歌い出すエロオヤジ。

しかも、演歌だ…。

嬉しそうに演歌歌ってやがる。

「お嬢！」

「は…？」

しかも一人で相の手入れてやがる…。

「アンタの恋、一日で最高に盛り上げてやるぜ」

「おい…、オヤジ…」

「ああ！？　まだそんな歳でねえっつの！」

「おい…」

「たまにゃあ良いねえ、こんな仕事もよ」

何処までお節介なんだよこのオヤジ…。

「……」

ゲンじい…

ゲンじい様…。

先程からの暴言の数々…

今　再び、訂正してお詫びします。

オヤジだの何だのと言っちゃってゴメンナサイ。

「アイツの頭ん中は薔薇色だな…」

相模も感服したとばかりに溜息を漏らす。

「おうーーー」

でも、こういうの

嫌いじゃないぜ…。

何だろう…。

何て現せばいいかな。
今の　この状況。

「手、繋ぐか」

「ウン…」

フワフワもしない。

フカフカでも無い。

空を飛んでる様で飛んで無い。

地に足が付いてる様で付いて無い。

「星が降って来てるーーー」

「そうか？　俺はぶつかって来てる様に見えるがな」

「いや、絶対降って来てるよ…」

何百と輝く星は
頭上じゃなく、目の前でキラキラ光ってる。

灯しては消える、幾千の星。
その中を、時折奔り去る流星。

真っ暗闇の中にキラキラ輝く星の群れ。
それはまるで、宇宙空間に相模と二人で降り立ってるみてえだった。

だって今、
雲の上を歩いてる。

フカフカしそうでしない、
フワフワ飛びそうで飛ばない。

作り物だって分かってても
眼の錯覚に騙される。

こんな気分、初めてだ…。

現実離れした星の大群の中を手を繋いで歩く。

星の瞬く音がする。

キラキラって音が聴こえる。

不思議な宇宙トンネル。

目の前に輝く星を手に取ろうと手を翳すと、それはスっとオレの手を通り過ぎた。

「何してんだお前」

その様子を隣で見てた相模が笑った。

一日姫？　5

「どんな感じかと思ったんだよ」
「映像に感触があるわけねえだろ」

そりゃあそうだけど…。
やってみたくなるだろ。

「星は好きか？」
「…あんま考えた事ねえ」
「そうか」

アイツは歩くのを止めて
その場に座ると
ゴロンと寝転んだ。

「ルイもおいで」

雲に隠れて
アイツの姿がうっすら見える。

仰向けの状態で手を引っ張られた。
そのままアイツの隣に横になると、さっきまでとは違う、
流れる様な星の大群が頭上に見える。

雲の中から見る夜空は　少し白く霞れて見えて、
子供の頃ならきっと
マジで雲の国に来たんだって信じ込みそうだと思った。

「俺も　見上げた事ねえなあ…」

星の瞬く音に混じって
相模のハスキーボイスが聞こえる。

自然の景色とは違う、流れる様な星の行き交う宇宙トンネル。

それをジッと見上げていると、まるで雄大な宇宙に身体ごと包み込
まれてる気分になる。

「この世に、意味の無い物は存在しねえ…」

「ーーーえ？」

白い霧の間から
アイツの横顔が見える。

「何億ってある星にも　存在する理由がある」

綺麗な横顔だと思った。

「塵みてえに小さな存在一つ一つが　この世では無くてはならない“現在”　を作り上げてる。　この世は寸分の狂いも無く、必然の塊だって事だ」

「難しいよ…」

「そうか」

頭にアイツの手が伸びて来た。
耳の辺りを擽（くすぐ）り撫でる指が心地良い。

「お前は　俺の“星”だ」

「…オレは塵かよ」

「バカか」

雲の中で
腕枕されて横になる。

星の声が聴こえる。

「だから、お前との出会いは必然だったって事だ」

「ーーー難しいよ…」

「いいさ、理解しなくても。　側にさえ居てくれればな」

「アンタ…、良く言えるな　そんなセリフ」

「バカ。　言わなけりゃあ何も伝わんねえよ…」

真っ白い雲の中。
横になって二人見つめ合った。

「認めたく無えけどな…」

「何を？」

アイツは溜息を吐いて目を閉じる。

「リョウにとっても…、お前の存在は必然的だって事だ」

「矢田にとってーーー」

意外と長い睫毛。

瞼を閉じたせいで　切れ長の眼が見えなくなる。

「府に落ちねえけどな」

凛とした唇が動く。

オレを惑わせたり、

ドキドキさせる唇だ。

「同じ女を同時に好きになるなんてよ…、星なら幾らでもあんのにーーー」

横になってるせいで
アイツの髪が
額に掛かってる。

「俺もリョウも、同じ星(オンナ)を必要としてる」

「ーーー」

「皮肉なもんだ」

突然開けた眼が
オレの視線を捉えた。

「これまでリョウとは　全てを“共有”して来た」

オレが見つめてたのを知ってるみてえに、相模は僅かに微笑んだ。

「権力(チカラ)も、人生も、痛みや悲しみもだ」

「ーーーそう、なんだ」

それってまるで
“二人で一つ”　の人間みてえだ…。

中身は全然違うのにーーー。

「でも、お前は無理だ」

「ーーーウン」

当然、オレは細胞分裂なんかしない。

ましてや、アンタらみてえに
二人で一つの物体でも無い。

オレはこの世にたった一人だ。

「お前だけは譲れねえし、共有するつもりも無い」

「ーーーウン」

「初めてだ…。“自分の為に”　欲しいと思ったのは」

「…そうか」

相模って情熱的だ。

心のままに　自分の想いを伝えて来る。

体温みてえに熱い心が伝わって来る。

「リョウを好きになるなよ…」

「何だよソレ？」

「勝ち目が無え…」

額に掛かった髪の奥から
潤んだ切れ長の眼が覗く。

相模にしては珍しく
弱気な発言だと思った。

「お前をリョウから奪い取る自身無えよ。　その反対はあってもな…」

「相模？」

情熱的な想いと哀愁の間で彷徨う相模の表情（カオ）。

何でそんな事言うのか分からない。

「お前がアイツに惚れなけりゃ良いんだ」

相模はソレ以上何も言わなかった。

ただ、広いトンネルの中で
キラキラ音を立てて光る無数の星を見つめた。

「…プラネタリウムってこんなんだったっけ？」

「さあな」

こうやって寝転がってると
マジで夜空を眺めてる気分になる。

雲の上ってのが
ちょっと違うケド。

「何でオレら以外、誰も居ねえの？」

「貸し切ったんだろ」

「……へえ…」

「今度、本物の星　見に行くか」

「ウン」

アンタとの約束、
また一つ増えたな。

暫く見つめあった後
相模が笑った。

「アイツの思うツボだ」

「…ウン。　そうかも」

勝手に「源二プロデュース」とか言いながら、実際　ゲンじいに乗せられてる。

こんな場所、オレは絶対に思い付かない。

タワーみてえに巨大なビルの前で車を停められた時はどうしようと思ったけど。

まさか　その最上階に
こんな場所があるとは。

怖るべしゲンじい。

史上最強のエロオヤジ…

「ルイ」

「え？」

相模に呼ばれて、
オレのゲンじい妄想は
ココで終わった。

オレとは反対に真剣な顔だった。

「最後に連れて行きたい所がある」

陽の沈みかけた街を一望する
ガラス張りのエレベータの中。

耳に一気に空気が入ったみてえにキンとする。

別世界に誘(いざな)ってくれた
天空のプラネタリウムから、オレらは地上に戻ってる。

「連れて行きてえ所って何処？」

「何処って訳じゃねえよ」

ポケットに両手を入れて、
どんどん降りて行く景色を眺めたまんまでアイツは呟いた。

変に言葉を濁された気がした。

相模が何故かソレ以上話そうとしないから、オレもそこまでで聞くのは止めた。

地上に降り立つとすぐさま颯爽と外へ出ようとする相模の服を引っ張って止めた。

「何だよ？」

「トイレ行きたい」

いつもと違うから
直ぐに足が冷える。

「行ってきな」

「ウン」

車に戻ってるぜ、って
頭をポンポンされて別れた。

ーーーここまでは普通だった。

ここまでは…。

嫌、何が言いたいかと言うと、

習慣とは恐ろしい物で

いつも通りの行動が
オレを無意識に落とし穴に誘い込んだんだ。

オレはこの後、大変なミスを侵した。

「うわ!?　オネーチャン、ここ男子トイレよ!?」

「……」

出てくるや否や
鉢合わせした男に発狂された。

忘れてたーーー。

いつものクセで入っちまった。

オレ、今
女の格好してるんだった。

「間違えたの？　マジ？　ってかアンタ…、可っ愛いねえ…」

しかも絡まれた。

一日姫？　7

外に出ようとするオレの前に立ち塞がって入り口を塞がれた。

見知らぬ男。

多分少し年上だ。

「てか、そのワンピ、ＡＬＩＣＥの新作じゃん？　もしかして箱入りお嬢？」

白いライダースにゆったりしたブラックジーンズ。

灰色の前髪を黒の細いカチューシャで上げてる。

黒の編み上げブーツ、シルバーの指時計。

「ココに来るの初めて？」

バニラみてえな甘い匂い。

ジロジロこっちを見ながら

オレの顔を覗き込んで来やがる。

「…通せよ」

矢田より少し高めの身長に
ネコ科っぽい細い眉。

「残念だったネ。　今日ココ、全面貸し切りだってさ」

綺麗なM字型の薄い唇。

マジで虎かネコみてえ。

「どっかの金持ちが　突然貸し切ったんだとよ～。　ざぁんねん。
折角遊びに来たのにネ？」

何かを考えてるみてえに
ゆっくりと喋りかけて来る。

入り口の両端に手を付いて。

見知らぬソイツはどうしてもオレを外に通すつもりはないらしい。

？

「うっせえ。　いいから通せよ」

「おー怖…。　アンタ可愛い顔して口悪いナ。　何、そういうヤバイ系のコ？　俺そういうギャップも好きよ」

目の前の体が緩く動いてジワリと迫って来る。

「オネーチャン、暇なら一緒に遊ばナイ？」

「ふざけんな」？？

キッと睨みあげたけど
相手は全然動じて無くて、

それどころかますます迫って来る。

「ウン。　可愛いネ、そういう反応。　あんま男経験無いの？」

「うるせえ。　マジで怒るぞボケ！」

見た目はこんなでも、
中身は藤堂ルイだ。

コレ以上近付く様ならぶちのめしてやるぜ！

「おっと。　女のコとやり合うつもり無えよ？　てか、そのダイヤ変わった形してんネ。　初めて見たんだけど？」

ふいに胸元に手を伸ばされて反射的に型が出る。

両手で打ち返す様に跳ねのけると、男はギョッとした目でオレを見た。

「オネーチャン、只のお嬢じゃねえワケね」

「うるっせえ！」

さっさと追い払っちまおう、こんな奴！

そのまま回し蹴りを喰らわしてやらあ！

跳ね返した勢いそのままに、目の前の男に向かって勢い良く脚を振り上げたーーー！

「ーーー白！」

「ぎゃっ！？」

バシッて音と共に固まるオレ…。

奴は動きを見透かした様にヒョイと片手で脚を受け止めやがったんだ！

ワンピース姿のまんま
無様に脚を上げたまんま…。

男がニヤついた顔でオレを見た。

「ビンゴ！」

「クソっ！　は、離せっ！」

「ん～、もうちょい…」

ぐぐっと脚を上げようとしやがる。

そのせいで足元がふらついた。

「や、やめろ！！」

無理矢理脚を振り上げて腕から逃れた途端、態勢を崩して後ろ向きに体が倒れた。

「危ねえよ？　オネーチャン」

ネコ科男がすぐさま背中に腕を回して来て、不覚にもその腕に助けられる。

「女のコが男と張り合っちゃあダメっしょ…」

至近距離に男の顔がある。

奥二重な力強い目。
その目でジイ…と見られてる。

「やっぱアンタ、めっちゃタイプだわ…」

「クソっ！」

男の体を思い切り突き飛ばして横をすり抜けて逃げた！

クソっ、何なんだあのネコ男！？

「ちょい待ち！」

「ああ！？」

ボケ！　？

付いて来んな！！

何　後追って来てんだよ！？

足早に歩くオレの後を
ネコ科男が追って来やがる！

「なあなあ、よくここらに来んの？」

「うっせえ！　付いて来んな！」

コイツ、何だか良く分かんねえけどメチャメチャしつこい！

いつの間にか悠然とオレの隣に付けてペラペラ喋るネコ科男。

「んじゃあ、名前！　名前だけ教えてよ、ネ？」

「マジで付いてくんな…」

角を曲がり掛けた辺りでオレの足が止まった。

「ん？　気が変わった？」

「ボケ…、お前のせいだ…」

体から血の気が引きそうになった。

相模がーーー

相模が戻って来た…。

奥のガラス張りの入り口から
相模が入って来るのが見えたんだ！

ヤバイーーー。

オレの帰りが遅いから
きっと見に来たんだ！

「相模…」

「ーーー何？」

オレの呟いた声に
ネコ科男がピクリと反応した様な気がした。

角から見える、黒い男を目で捉える。

ポケットに手を入れて
いつも通りゆったりと歩いて来る。

でも、その顔が
不機嫌に歪んでんのが
遠くからでも分かる。

オレの視線を追う様にネコ科男が目線を向けた。

奴の動きが止まった。

「相模龍…！　何でこんな所に…」

「テメエのせいだ！　変な事して来やがるから、相模が見に来たじゃねえか！」

「は…、お、おい、まさかアンタ…」

こんな奴と一緒に居る所なんて見られたら、相模がまたメチャメチャ怒る。

とんだとばっちりだ！

「ボケ！！」

「いっ…、痛ってえーー！？」

思い切り足を踏んづけてやった！

「もう付いてくんなよ、バカ男！」

踵を返して相模の元へ走って行った。

「マジに…、相模龍の、オンナ…！？　？あのコが！？」

遠くに聴こえる男の呟きも、もう耳に入らねえ。

ただ、何も起こらない事だけを願って走ってく。

ゆったり歩く相模の顔がふとこっちを向いた。

相模がオレの姿に気付いた。

「遅い…」

案の定、イライラしてるよ。

「相模…！」

そのままアイツの腕に飛び込んだ。

「ルイ…、お前、トイレだけは一丁前に長えよ」

「…ごめん」

体に腕を回して抱きついた。

「どうした？」

「何でもねえ、ちょっと…、迷っちまってただけだよ」

そうか、って頭を撫でて腰に手を回す。

さっきと同じ仕草にホッと胸を撫で下ろす。

アイツは軽く額にキスをしてからゆったりと歩き出した。

まるで狐に摘まれた様な気分だった。

一度も振り返る事無く、変な男に出会った場所を後にする。

「あのコ…、凄え欲しいわ」

そんな不吉な空耳が聴こえた…

気がした。

最後の夜　1

相模のオンナ
最後の夜
相模が見せたいって連れて来た所は　都心に佇む高層マンションだった。

入り口に天使をモチーフにした噴水。

ホテルみてえな広いロビー。

鏡みてえにピカピカの大理石の上を歩くと、ヒールのカツカツした音が響いた。

セキュリティチェックの付いたドアにカードをかざすと、重厚なドアがゆっくり開いた。

「何だよ、ココ…？」

相模は我が物顔で
中に入って行く。

「ウチの　“小遣い稼ぎ”　ってとこか」

「ーーーは」

緩いライトの照明。

温度管理の行き届いたホール。

何処からか　甘い香りと音楽が聴こえる。

「建設費用を立替えてやった代わりに、ココ一帯の土地権を握ってんだよ」

「……」

まあ来いよ、って

簡単に言う事じゃねえよ、相模…。

アイツに導かれるままに、
エレベータに乗り込んだ。

相模と行く所は
いつも高級な場所ばかりだと思った。

汚れを知らない様な
真っ白い絨毯が敷かれてる。

ココがエレベータの中でなきゃあ
土足で踏み入れるのを躊躇するだろうと思う。

エレベータはオレ達を乗せて
どんどん上昇する。

全然停まる気配が無い。

7階、8階…

まだまだ上がる。

また耳がキンとして来た。

不思議な重力を感じたまま、どんどん上昇して行く。

隣の相模に目配せすると、アイツはやっぱり平然とした顔で両ポケットに手を突っ込んで佇んでる。

エレベータはとうとう最上階まで上がって止まった。

ドアが開くと共に
都会の賑やかな音が耳に入る。

エントランスから下を見下ろすと、夕暮れ時に紅く灯した都会のネオンが目下に広がる。

「すげ…」

「そうか」

オレを見て相模が笑った。

管理の行き届いた、黒絨毯のエントランスを、手を引かれるままに歩いた。

最上階の部屋は一つだけだった。

長い廊下の先に、重厚なドアが一つ。

「おいで」

その中に導かれる。

薄暗い室内。

入ってすぐ、ホールみてえに広いフロントに圧倒される。

奥にある扉に続く　薄暗い廊下を歩く。

前を歩く相模が
チラリとこっちを見た後、
先へと続く扉を開けた。

「ーーーう、わ…！」

薄暗い部屋。

見渡しても足りない位の
広い部屋。

まるでモデルルームみてえに
センス良くソファや家具が置かれてる。

「すげ…」

そして、壁一面を覆い尽くすーーー、

めちゃくちゃデカい水槽。

本当に、水族館みてえな。

そこにだけ照明が当てられ、薄暗い部屋の中に浮かんで見える。

真っ青な海の色。

映える様に赤色の珊瑚礁が幾つも植えられてる。

黄色と黒のストライプに、海みてえに真っ青な柄の熱帯魚。

エンゼルフィッシュ…。

薄暗い部屋に浮かぶ、幻想的な景色。

幾重にも空気の粒が下から湧き上がってる。

その景色に吸い寄せられる様に近付いていった。

「お前の為に用意させた」

幻想的な景色の水槽に
そうっと触れる。

顔がライトで照らされる。

後ろから相模が抱きついて来た。

首元に顔を寄せてーーー。

「魚は好きか？」

「…ウン。　めちゃくちゃ…綺麗」

「そうか」

そのまま首筋に
熱い刺激が奔った。

最後の夜　2

「お前の好みが分からなくてな…」

そう言って耳を噛まれた。

薄暗い部屋で

青い光に照らされて

「そう……」

水槽に手を付けたまま後ろから抱き締められる。

そのキスはもっと続くと思っていたけど、

耳に伝わる暖かい感触は

直ぐにオレから離れた。

「相模？」

「あそこに立ちな…」

あそこって…、

アイツの指差す先にあるのは、
白いスモークの掛かった窓。

只の、

なんの変哲もない窓。

「何で？」

「いいから行きな」

何故か必要以上に語ろうとしない。

変に無言の相模。

その目が「早くしろ」って無言で訴え掛ける。

「何だよ…」

言われるがまま、渋々窓の方に歩み寄った。

「……」

この　白いスモークの窓が何だってんだよ…。

一切の景色も見えやしねえ。

相模、アンタ何考えてんだ。

「……」

ジッと窓を見て考えた。

相模のやりそうな事ーーー。

今までの経験上…、

真夜中に香水を持ち寄ったり、

隠し部屋でダイヤのネックレスを渡されたり、

マッサージで催眠に掛けられたり、

部屋の中に地中海を作ってみたり…、

何か、

良く考えたら色々されてばっかだな。

ーーーて事は、やっぱり

何か、ココに隠されてる物があるとか？

アイツのメッセージとか…。

タン…。

目の前の窓に突然手が伸ばされる。

窓を眺めて考えてるうちに

いつの間にか相模が後ろに迫っていた。

「何ーーー」

アイツは突然

窓を向いてるオレの体を引き寄せて、横から唇を塞いで来た。

「相模……！？」

キツく体を抱きしめられて

横から奪う様なキスを繰り返す。

「何…！？」

そのまま後ろの窓に体を押し付けられた。

体に広がる、冷やい感覚。

突然の奪う様なキス。

アイツの言動に
めちゃくちゃ混乱する…。

怖くなって押しのけようとした。

突き放そうと体を捩った時、
アイツが何かを持ってる事に気付いた。

最後の夜　3

その一瞬の隙をつく様に
体に腕が回されて抱き上げられた。

頭一つ分デカい男と同じ目線になる。

久々に見る、無表情の真顔。

何も言わずにオレを見る。

「何の真似だよ…！？」

やっぱり怖い。

急にこんな事されて、付いて行けないーーー。

オレの戸惑った顔を見てもアイツは無言で、それどころか白く曇った窓ガラスに体を押し付けて、強引に唇を重ねて来た。

「おい…！」

本当に奪われる様なキスだった。

顔を捩ろうとするものの、
窓ガラスと相模の顔に挟まれて動けない。

息継ぎもままならない。

知らない部屋で
無理矢理……。

「嫌だーーー！」

オレ、

やっぱ相模に付いて行けない。

こんな事、

絶対慣れないよ。

オレはアンタの玩具じゃない。

やっぱアンタとはやって行けないーーー。

逃げようーーー！

この部屋からも。

相模からも…。

今ならまだ、

「離せーーー」

間に合う……。

最後の夜　4

強引にこじ開けられた唇が離される。

ツウ…っと
唾液が伝う様に漏れる。

「ようやく気付いたか…」

豹変したと思っていた目の前の男が、それを舌で舐め上げた。

「あ……」

声が出なかった。

ただ、呆然と眺めたままだった。

相模の腕から逃げようと暴れ出した時、ふと気付いたんだ。

窓の景色に。

「う…わーーー？」

白いスモークが掛かってた筈の窓が、いつの間にか外の景色を映し出していた。

真っ赤な

夕日に染まった東京の街をーーー。

気付かなかった。

これ…、

壁一面が窓になってたんだ。

相模に持ち上げられて見てるオレの目に映るのは、

巨大な大パノラマから見る、夕日に沈む東京（マチ）。

馬鹿でかいビルや建物が
ココからは全て見下ろされる。

早くも点灯し始めたクルマのライトが、赤に白にネオンの様に光ってる。

ゴミゴミした、窮屈なその場所が、ココからだとイルミネーションみてえに綺麗に見えるんだ。

そして、東京の街を見下ろすシンボル。

ライトアップされた東京タワーが目の前に見える。

薄暗い室内に入り込む、
真っ赤な夕日。

「いい眺めだろ…」

今度は　耳元で囁く
穏やかな声が響いた。

状況が飲み込めずに
暫く放心してた。

恐る恐る振り向いた先にある相模の顔は　いつもの様に緩く微笑んでいて、

さっきとの余りのギャップに更に混乱する。

「驚いたか」

オレの表情を見て
アイツは嬉しそうに笑った。

「何なんだよ、アンタ…一体…？」

「普通に見せるだけじゃつまんねえだろ」

そう言って頬にキスされた時、
さっきからのコイツの豹変が、オレを紛らわす為の演技だったんだ
ってようやく気付いた。

「アンタ、やっていい事と悪い事とがあるだろうよ…！？」

相模のイタズラーーー。

危うく、マジで…

逃げ出す所だったんだぜ。

恐怖で。

「その分驚いただろ」

「……」

そういう問題じゃねえよ。

アイツは手に持ってたリモコンを無造作に投げ置くと

オレの両脇を手で持って、子供の様に持ち上げた。

お陰で相模を少し見下ろしてる。

「ルイ…」

「なんだよ」

目と目がぶつかる。

夕日で紅く染まった髪。

陽に当たると綺麗だ。

相模は目を細めて笑った。

「この景色も、この部屋も、この街も、俺も…、全部お前の物だ」

そして、また抱きしめられた。

「おい…、相模ーーー」

アイツの肩に手を置いて顔を覗き込むと、橙色に染まる男が目に映る。

見惚れそうになった。

「お前にやるよ、全部」

一度胸元にキスを落として、

それからソファに体を寝かされる。

部屋一面の窓から入る夕日の紅。

照明の代わりに
室内を橙色に染める。

その部屋の中でソファに寝かされ、横になるオレを見上げながら…、

相模は着ていたスーツを　ゆっくりと脱ぎだした。

最後の夜　5

真っ赤に染まる部屋の中でーーー

「おい…」

服の擦れる音だけが聴こえる。

スーツの上着を脱ぎ捨て、
シャツのボタンに手を掛ける。

「相模……？」

無言でボタンを外してく。

一つ一つ、時間をかけて。

まるでオレに見せるみてえに…。

ゆっくりと服を脱ぐ相模の顔は、夕日の所為なのか
紅く染まって見えた。

黒いシャツから覗く、
鍛えられた男の体ーーー。

ソファの上で
それを見上げているうち、
訳もなく胸がドキドキし始めた。

シャツのボタンが全て外される。

今朝、発情させられてたとはいえ、
獣みてえに欲情した、
艶かしい男の裸体だ。

「相模、何してんだよ…」

シャツが取り払われて
裸の上半身が露わになる。

「……」

脱ぎ去ったシャツが床に投げ捨てられる。

アイツは返事の代わりに
甘い溜息を吐いた。

その目が捕らえる様に
オレを見てる。

「分かんだろ…」

掠れた甘い声を響かせて、
ソファの方へ迫って来る。

オレとは違う、
男の体が

目の前に迫るーーー。

心臓の音が
体中で聴こえてる。

これって

これって…、

もしかしてーーー。

「約束の時間だぜ…」

恍惚とした表情を称えて
ベルトに手を掛け迫る。

アイツの声が鼓膜と胸を震わせた。

ギシ…っと音を立てて
相模が手を掛けるソファが唸った。

オレには逃げ場が無い。

ただ、目の前に迫る男を
見上げるだけだ…。

「何て顔してんだよ…」

相模の呟く声が甘く掠れてる。

ベルトが摩擦音と共に引き抜かれる。

ソファの上で

後ずさろうとするオレの体の上に、
相模が膝を立てて馬乗りになった。

これからの事を考えると
どうしようもなくドキドキする。

これから　相模にされる事を考えるとーーー

「待ったぜ…、充分にな」

「ま、待ってーーー」

「そればっかだな」

手を握られた。

キュッと握った後、
指の腹で手の甲を撫で始める。

フウ…

オレの顔を見つめたまんま、
掠れた溜息を漏らす。

アイツの顔が欲情の色に染まる。

相模の視線が

撫でられてる手に、

震える胸に

固く閉じた脚に

ゆっくりと移動する。

何かを飲み込む様に呼吸した後、

手を握ったまま

アイツの体が覆いかぶさって来た。

最後の夜　6

「実はなーーー」

「…な、に」

相模はオレのほんの数センチ前まで顔を寄せて
目の前で呟いて来た。

「お前の生脚見て…、ずっと欲情してたぜ」

獲物を目の前にした、男の顔だと思った。

それから

吐息を吹きかける様に
溜息混じりに頬にキスを落とす。

「相模……」

唇じゃなくて、頬に。

柔い黒髪が肌に触れる。

オレの手を緩く撫でながら
そのキスが首元に移動した。

「うあ…っ」

首…、凄く弱い。

ゾクゾク震えるよ…。

どうしよう。

めちゃくちゃドキドキする。

今日一日、相模と過ごした
恋人みてえな時間を思い出して

嬉しそうな笑顔でオレを見る男の残像と、目の前の男とが重なる。

塔の上で誓いのキスをして、

手を繋いで花の道を歩いた。

「ああ……っ」

雲の上で二人寝転んで、

今度は本物の夜景を見るって約束したんだ。

花畑もーーー

オレの両親連れて来ようって。

「相模…」

その時間に酔ってたのはオレの方だ。

「相模ーーー…」

アンタに凄え気持ちがくっついてるよ。

ー俺の女に　なってくれ…ー

今日あった出来事が

胸に埋まって…、

確かに、オレの中で
何かが芽生えて行ってると感じた。

それが、
アイツとの行為を
更に心から昂らせる。

凄くドキドキするよ。

アンタに触られてるって思うだけで、心臓が痛い程高鳴ってるんだ。

首筋にキスを繰り返して

そのまま熱い体に抱きしめられる。

今日一日、一緒に過ごした。

相模の笑顔。

ーお前は俺に、一人の男として惚れてるー

繋いだ手。

ー諦めてくれー

優しく抱きしめられた腕…。

ーお前に出逢ったのは運命だー

相模のーーーー

「ん…」

相模の、キス。

「ルイ…」

ドキドキさせられた
甘い時間だった筈なのに。

色んな約束して、
色んな事を一緒にしたのに。

楽しい思い出の筈なのにーーー。

「さがみ…っ」

何でこんなにも
胸が締め付けられるんだろう。

「お前…、何で泣きそうなんだ」

「相模…」

オレにも分かんねえ。

何で切なくなるんだよ。

最後の夜　7　＊（性描写有り）

両手で顔を包みこんで
オレの顔を覗き込まれる。

目の前の男と目が合うと、
やっぱり胸が切なく疼いた。

相模はそのまま唇を奪った。

「ん…」

最初から濃厚なキス。

直ぐに口を押し開けて
熱い舌が入って来る。

相模の熱い舌が

オレを絡め取る。

歯型を辿って動き回り、弄ぶ様にオレの中を刺激する。

だんだんと唾液が溢れ出してくる。

それを舌で掬われた…。

顔を包んでた手が背中に這わされる。

「あ…っ」

一度、背筋を指で辿り　オレの反応を確認してから、背中のチャックに手を掛ける。

脱がされるーーー。

小さく音を立てながら、ゆっくり下まで下ろされた。

口の中にアイツの熱さを感じたまま、そっと肩から服を脱がされる。

手馴れた仕草に、また胸が疼いた。

「怖いかよ?」

露わになった肌の上を　滑る様に熱い手が這い回る。

怖いか、とオレに聞きながら…。

でもその手は辞める素振りは無かった。

指先でくすぐる様に肩を撫でられた時、思わず口から吐息が漏れた。

「んん…っ」

その声も相模の口の中に消えてくんだ。

ブラの中に手が入って来る。

大きな両手にすっぽり入る胸をやんわりと揉みしだかれて、

小さな突起をくすぐる様に摘まれた。

「ん…っ、ん…」

擦れたゾクゾク感が　次第に体全体に広がった。

ブラを刷り上げて胸が露わになると、そのままソファに倒されて更に攻められる。

両親指の腹で突起の先端を孤を描くみたいに撫でられた。

「……っ」

「コレ、好きか？」

唇が離された。

オレの反応を愉しむ様に、指の腹で先端を攻め続けて…、

甘い攻めに歪む顔を覗き込まれる。

「溜まんねえ…。　マジで…」

うっとりと、溜息を吐いた。

先端を柔く刺激されるに連れ、ビクビクと身体が痙攣してきた。

「うあ……っ」

思わず声が漏れて、
夢中で相模の腕にしがみついた。

それでも攻めるのを止めてくれなくて、
体を震わせて　先端を弄(いじ)くる指の動きに鳴き続けた。

「我慢、出来ねえ…」

アイツは短く呟いて、
しがみつく腕を頭の上で一つに纏(まと)めると、
胸の突起にイキナリ喰らい付いて来た。

「ああ…っ、ん…」

熱い、濡れた唇に

ピンクのソレが含まれる。

急激に甘い刺激が体を襲った。

ソコを吸われると、更に止め処ない甘い痺れに襲われる。

相模は片手でオレの両腕を束ねて、もう片方の手で胸を揉み上げる。

熱い攻めを繰り返す相模の口から、堪え用の無い溜息が漏れ始めていた。

「…限界だーーー」

胸に喰らい付いたまま、服を足先まで刷り下ろされた。

下着も、ズラされてたブラも、全てが取り払われた。

固く閉じた脚を割り開いて、
間にアイツの体が滑り込む。

「相模……」

体の中心部に指を這わされて
更に感度が上がる。

これまでに無い位の激しい動きでソコを攻められた。

「あぁぁ……っ！」

我慢出来ない様な快感が体中を襲い出す。

「相模…！」

激しい攻めから逃れようと身を捩らすと、更にグッと脚が開かれて
無理矢理に体重を掛けられた。

この手の動きから逃れられない！

「相模ーーー！」

ソコから水浸しになった様な、濡れた水音が響き出した。

自分の体から出てる音とは思えなかった。

最後の夜　8　＊

卑猥な音が漏れると同時に絶頂がやってくる。

相模は体中にキスを落とす。

その余韻と重なって、逃げられない苦しい快感が頭を占領する。

顔を歪めて　体一杯に甘い痺れを感じた。

ヌルヌルと滑る程
感度が増して行くーーー。

「ハア…、ハア…あぁあ！」

「クソ…、無理だ…！」

快感の渦に攻め立られる。

これまでに無い、激しい絶頂を迎えた。

体が何度も痙攣した。

「ハア…、ハア…」

絶頂の余韻に浸る間もなく、服の擦れる音がして、高められたばかりの中心部に熱いモノが充てがわれた。

それはーーー

「もう待てねえ…」

オレには無い、男の証。

風呂場で触らされた、あの、硬くて太いモノが…、充てがわれてる。

「相模…」

「…激しいが　我慢しろよ」

心の準備も出来ないまま

ソレが、ググ…っと中に押し入って来た。

力を込めて、
ソレが押し入ってくるーーー。

それまでとは一変して、刺す様な痛みが襲う。

「痛…、痛い…！」

やっぱり、キツイ。

キツくて無理だって痛みが奔る。

風呂場で目の当たりにした、あのブツを思い出してた。

あんなモノが

今、オレの中にーーー。

「…うあ……っ」

「力、抜いてろよ…」

相模はオレの脚を大きく割り開いて、更に深くまで貫いて来た。

「うう…っ」

刺す様な痛みと、内壁を擦られるジンジンとした痛みとが一気に押し寄せる。

同時に、掠れた溜息が漏れる。

覆いかぶさってる男の、感じてる顔だ……。

相模は切なそうな顔をしてた。

でも、その目は
何処かうっとりとしていた。

「溜まんねえよ…」

切ない表情をして、そのままアイツの体が動き出した。

「ア…っ！　あぁぁ…！！」

両脚を更に割り広げて、躊躇無く動きが早くなる。

激しいピストン運動で中から攻められる。

脚を腹に付く位広げられて、息を荒くしながら何度も撃ち込まれた。

「相模…っ！　待って…！」

内壁が　次第にジンジンする。

激しい攻めに
体が悲鳴を上げる。

「無理だ…！」

荒く呼吸を繰り返して、奪う様に口付けられた。

「相模ーーー！」

もう、イタズラなんかじゃない。

アイツの感情が外に溢れ出てる様だった。

肌と肌のぶつかる音が部屋中に響く。

悲鳴にも似た喘ぎ声は
すぐ熱い口の中に飲み込まれる。

次第に打ち込まれるソコから、卑猥な音が聴こえ出す。

こんな激しい攻めに、

体が反応し始めてた。

最後の夜　9　＊

激しい攻めに
無理矢理高められてしまう。

昨日と違って　全然優しく無いのに……！

激しく奥まで打ち付けられると、溢れ出る様な熱い痺れが全身を襲いだす。

オレの中に入る程ーーー。

「は…っ、ああ…！」

何かがソコから溢れ出してくる。

中が熱い。？

中がヌルヌルと滑ってるのが自分でも分かる。

一緒に激しく高められる。

どんどん気持ち良くなる。

感度が上がり過ぎて麻痺しそうだ。

相模の欲望が打ち付けられる。

オレに襲い掛かって来る。

「んん…！　ン…っ、んン…」

昂る快感に耐え切れなくて、引き剥がそうとした。

アイツの胸に手を置いて押し退けようとする。

その腕を掴まれ、頭の上で束ねられた。

両手の自由が奪われる。

「ルイ…、我慢してくれ…！」

「ああぁ…！！　っう…、んん」

嫌だと被りを振った。

オレの喘ぎを口で遮って、
更に激しく攻められた。

「お前が悪いんだ…。　俺をずっと、欲情させるから…」

「んなの…、酷え！　そんなの…」

荒々しく口付けたまま相模が唸る。

アイツに攻め続けられるソコは、感じすぎて　とうとう我慢の限界まで来ていた。

「無理ーーー、もう、もう無理！！」

アイツの体から逃げようと、必死で後ずさった。

だけど、太ももを掴んで直ぐに引き寄せられる。

「逃げんな…！？俺をもっと感じろよ…」

オレの両脚を抱えて、思い切り突かれると同時に下腹部をグッと手で抑えられた。

「あああぁーーー…！！？」

鮮烈な快感だった。

急激に中で何かが弾けて溢れ出る。

「見せてくれ、お前のイク時の顔…」

“イク”ーーーーー。

出て行っては奥まで突き上げ、中を擦られる。

「やめて…！　もう、死ぬ！」

「イイ顔してんぜ…」

昨日探り当てられた急所を思い切り突かれた。

もう、駄目だーーーーー！！

声にならない。

激しい快感に苦しむ。

終わらない攻めに、とうとう体が極限を迎えて悶絶する。

突き上げ続ける相模のモノによって、快感が最高レベルを超えた。

苦しい程の絶頂がやって来る。

声を上げて泣いた。

必死で腕にしがみついて、拷問に近い快感の極みを味わった。

途端に相模からも荒々しい溜息が漏れる。

更に強く突かれて、ソレがようやく引き抜かれた。

また、白い液体が迸る。

オレも相模も、呼吸が荒い。

ついさっきまで高められていた余韻で、体が小さく痙攣してる。

相模は一度キスをして、そのままオレの体を抱き寄せた。

余りにも激しい行為の直後で
暫く体が動かなかった。

最後の夜　１０

ハア…、ハア……。

荒い呼吸を交わしては顔を寄せ抱き合う。

相模の額に汗が滲んでた。

オレの生気を吸い取られた気分だ。

物凄く、グッタリする…。

「また汚しちまったな…」

胸を上下させて、小刻みに呼吸する…。

横たわるオレの顔を何度も撫でられた。

「相模の…、バカ…」

アイツは、最後の言葉を遮る様にキスをして

「今日、何回まで耐えれるか？」

恐ろしい事を聞いて来た。

「無理…。　もう無理…。　マジでふざけんなよ」

「……風呂入って飯食うか」

「……」

おいーーー。

今の間は何だよ。

風呂に入った事で、オレは藤堂ルイに戻った。

色んな物が取れて、軽くなった気がする。

もう鏡を見ても驚かなくて済む。

いつものアイツの間違った作法で、頭から足先までガシャガシャ洗われた。

痛え！！　って叫んだら、我慢しろよって言われた。

何か違うと思った。

おいでって湯船に引っ張り込まれて、アイツの膝の上に座る。

あんな激しい行為の後なのに、相模は直ぐに体を触って来た。

「やめろよ…」

「目の前の獲物を逃せるかよ」

体を真探る手が、両胸を覆った。

「おい…！」

目の前で、アイツの手が動くのが見える。

めちゃくちゃ恥ずかしい。

相模の手の中にスッポリ入る小ぶりな胸が、

やんわりと揉まれて湯船の中で動いてる。

「……っ」

あんな事をされた後なのに、
体が反応するのは何故だろう。

片手が下に伸ばされた。

「バカ……！　やめろよ…！」

「お前のその声。　俺にとっちゃあ誘ってる様にしか聴こえねえよ…」

相模の膝が開かれる。

その上に乗ってるオレの脚も、自然と開いていった。

そこにすかさずアイツの手が入り込む。

「アンタ、あんな事した後で…！？」

「感じるなら　ヤルか…」

「はあ！？　何考えてんだよ！？　やめろよ…、マジでやめろよ！」

さっきの余韻がまだ抜け切れて無い秘部を、アイツの手が真探り出した。

湯船を揺らして、アイツの手が敏感になってるその部分に触れた。

ついさっきまで激しく高められたソコは、そっと触れられただけでもすぐに反応してしまう。

意思に反して、体が痙攣を起こすみたいに震えた。

「嫌だ……！」

ソコは自分の思った以上に敏感に疼いてて、少しの刺激で直ぐに激

しい快感に包まれた。

感じすぎて痛い…。

小さく被りを振った。

「うう…っ」

「さっきは悪かったな」

優しく擦る様な愛撫…。

熱く湧き上がる快感。

少し目線を下ろすと見えてしまう。

オレを翻弄する、優しい指の動きが。

オレを攻め立てるアイツの柔い愛撫の様子が、目の前で見えてしま

うーーー。

激しい攻めじゃ無いのに、自分の体が目の前で高められるのを見て…、これまでに無い位興奮させられる。

「は……、っぁ」

恥ずかしいのに、目が離せない。

アイツの指が動いてる……。

湯船が音を立てて揺れる。

「もうしないなんて、言うなよ…」

相模の膝の上で脚を開かれて、擦る様な愛撫で優しく攻められる。

興奮した体は、どんどん熱くなって、湯船の中でも濡れて来てるの

が分かってしまう。

嫌なのに、抵抗出来ない。

後ろから耳を甘噛みされた。

突然の甘い刺激に、体がゾクゾク震える。

後ろの男に体重を預けた。

相模は湯船に体を寝かせ、更に脚を割り開かれた。

キスが首筋に伝う。

「んん…」

噛み付く様なキスと、舐め上げる舌の感触。

それが、体の中心の愛撫と重なって　更に感度に拍車がかかる。

いつの間にか、息遣いが荒くなってた。

体がゾクゾクするーーー。

優しい動きなのに、めちゃくちゃ興奮させられる。

凄く恥ずかしいのに、気持ちイイ…。

最後の夜　１１　＊

胸を揉まれて
首筋に痛くて甘いキスをされ、
敏感になってる体の中心から湧き上がる快感を与えられる。
アイツの膝の上で
脚を開かされて、
下を向けばその様子が見えてしまう。

「ああ…っ」

何もかもが興奮材料で、
相模の与えるモノ全てに感じる。

「気持ちイイだろ」

「ウン…」

そして　相模も、

太ももの辺りで
硬い物が当たってる。

湯船の中でも、熱くて固いアイツの欲望。

「次は　お前の為に抱いてやる」

そう言って

湯船から引き上げられた。

今日二度目ーーー。

浴槽に座る相模に馬乗りになって抱かれた。

腰を持って
下から突き上げられる。

体が上下に揺れる。

体重が掛かって、より深くまで入って来る。

浴室に響く、オレの掠れた声。

卑猥な水音。

体に口付ける、キスの音。

さっきと違う。

緩い腰遣いで　ゆっくり奥まで入れては、オレの急所を入念に刺激する。

「ハア…、ハア…っ」

緩い絶頂が続く。

どんどん濡れて行く。

アイツのが、音を立てて滑る様に出入りしてる。

まるで体全体がヌルヌルで、溶けて行きそうだ……。

「気持ちイイ…、相模！」

快感を与える男の首に　腕を絡ませた。

そうしたら目の前にアイツの肩があって、そこに顔を埋めた。

ボディーソープの甘い香りの漂う相模の素肌…。

体を上下に揺らされながら、真似る様にそこに口付けた。

「…っ、もっとしてくれ…」

艶っぽい、掠れた声。

相模の体が僅かに震えた。

「んーーー」

舌を使ってネコみてえに舐めてみた。

相模の肌はしっとりとしてて、オレの舌よりほのかにあったかかった。

「イイぜ…、凄え…」

体に腕を回して、体を震わせて溜息を吐く。

その吐息が肌に掛かって、尚更感じた。

それからは

夢中で抱き合い、キスを交わした。

オレは終始体を震わせ、
後は相模の与える快感に浸った。

さっきのが拷問の様な絶頂なら、今は　きっと癒されてく絶頂。

深く合わさる度に響く、

体内から出る水音。

そこに静かに聴こえる二人の吐息。

官能的で

エロくて…、

愛し合ってるオレらは

凄く綺麗だと思う。

相模はこういうの、『恥ずかしい事じゃない』って言う。

矢田は、

『好き合ってれば　当たり前の事』って言ってたーーー。

もう嫌だって思ってたのに…、ふざけんじゃねえって、そう思ってたけど。

こうして抱かれて、
めちゃくちゃ感じて
身体が歓びに浸ってんのは

今の行為に
優しい愛情を感じるからだ。

心が満たされた分も
きっと感度に加わってる。

気持ちイイよ…。

凄く、イイ。

最後の夜　１２

やっぱり
心の距離がグッと近くなる。

アイツの気持ち良さそうな顔見てたら…、本当に只の男としてオレを抱いてるんだって思う。

相模はマジで、最近表情が豊かになった。

オレと同じ位感じてるんかな…。

額に汗が流れてる。

時折目を瞑って、恍惚とした、それでいて苦しそうな表情を見せる。

息が荒くなって　掠れ声と溜息が混じるーーー。

きっと相模のこの顔は、

オレにしか見れない。

オレの前でだけ見せる、全ての仮面を外した　男のカオ…。

相模でも、気持ちイイ時は顔を歪ませる。

溜息を漏らして、オレの中でこんなに感じてるんだ。

頭取とか、

若頭の仮面を外したら……、

やっぱり

普通の17歳の男なんだーーー。

最後の夜？　1

相模のオンナ
最後の夜　2
「そんなに若の身体はよかったかい」

「……」

ニヤニヤ顔のオッサンがエプロン姿で話し掛けて来る。

黙って刺身をつついた。

だから……、

今日はなんだってこんなに登場すんだよ!?

「ゲンじい。　オヤジ丸出しだぜ」

「うるせい。　これも健気な親心よ」

「…は」

歌謡曲みてえな鼻唄を口ずさみながら、軽やかな手つきで料理を仕上げる。

風呂から出て来たら、既にこの状態。

どうやらこれも“源二プロデュース”らしい。

激しい情事の跡形は綺麗に片付けられ、テーブルの上にはキチンとセッティングされたテーブルセット。

既にエプロン姿のオッサンが料理を作ってる最中だった。

オッサンは、オレらを見るや否や、『いやいや、熱く盛り上がった様で…』と菜箸片手に頭を掻きながらヘラっと笑ってみせた。

……。

一体、いつから居たんだろう…。

しかもオレの着替えまで持って来てる。

やっぱ変な名前だけど、ゲンじいは最高の世話人だ。

「俺は最高だったぜ」

言わなくてもいいのに、隣の男はそんな事を言って微笑む。

「だとよ、お嬢！」

「…うるせえ」

俯いて白飯をかっ込んだ。

噎せた。

「お前、何動揺してんだよ」

オレの背中を叩いて相模が笑った。

「グゾ…っ」

涙目で水を一気読みしてるとゲンじいと目が合った。

ゲンじいはこっちを向いて、凄え嬉しそうな顔で笑ってた。

「……」

「お嬢、このままだとカマ野郎にしか見えねえぜ」

最悪なジジイだった。

でもゲンじいの最悪な言葉は、まるで今の表情を隠す為にも思えた。

ゲンじいは作るだけ作って、自分は食べずに速やかに帰って行った。

帰る間際、

「それでは、明日の朝　迎えに上がります」

って相模に一礼して向けた言葉で、何となく現実に戻された。

相模が隣に居るこの時間は、タイムリミット付きの制限あるものなんだって事を思い出す。

この時間を過ぎれば、暫く相模に会えない。

気がつけば　真っ赤な夕焼けは影を落として、暗い夜の街に明るいネオンが姿を現わしてる。

もう、夜なんだ。

後どれ位一緒に居られるんだろう?

今日一日で余りにも隣の男の体温が染み込みすぎた。

これって逆効果じゃないかと思う。

だって時間が経つのが無性に早い。

一緒に居すぎて、マジで明日から相模が居ねえのが信じられない。

当たり前に与えられてた手や唇や優しい声が、明日になったらもう無いんだ。

何だか凄く寂しい。

「ルイ、こっちおいで」

オレの気持ちを知ってか知らずか、相模は顔を緩ませて手招きしてきた。

呼ばれるままバルコニーへ出る。

イルミネーションの様に光る街は正に絶景だった。

着ていたスーツの上着を肩に掛けられ、腰に手を充てて体を引き寄せる。

シャツの胸ポケットから煙草と取り出して火を付けた。

高い所なのもあって、風が更に強い。

相模は煙草を一度吸い込んで、フウ、とオレに吹きかけて来た。

「バカ…」

苦い煙が鼻を付いて咽せる。

その反応を面白そうに見やる男は、更にグッと体を引き寄せて来て、至近距離で向かい合う様な態勢になる。

ソイツがポツリと漏らした。

「お前と離れるのが怖い」

以外な言葉に思わず男の顔を見上げた。

目の前に白い煙が吹きかけられる。

「相模…！」

ゴホゴホ咳き込んで煙を撒き散らすと、煙草を咥えたままオレを見つめる男の視線とぶつかる。

その目には、オレの心まで映し出されそうだと思った。

「ほんの少し手放した隙に　お前が遠くへ行っちまいそうだよ」

「相模……」

「お前…、ちゃんと俺の事　想ってろよ」

徐ろに首にかかるネックレスに指を絡ませた。

「遠くへ行っちまうのは、アンタの方じゃねえか」

そういう事じゃねえって小突かれた。

「男が何で自分のオンナに飾りモン付けさすか、知ってるか？」

「ーーーは？」

最後の夜？　2

月の欠けた様なダイヤのネックレス。
それを指先で持ち上げる。

「首輪なんだぜ、コイツ」

自嘲気味にフッと笑う。
相模の言ってる意味がイマイチ分かんねえ。

「いや、違うだろ。　コレはお前の母ちゃんの形見で…」

「バカ。　俺の大事な女だって首輪だよ。　？お前を俺に縛り付けたくて付けさせてる」

「……」

「分かれ」

分かるか…。

「ソレは言わば、　虫除けと独占欲の象徴だ」

鋭い視線に捉えられて　思わず足が竦みそうになる。

その男は、深く吸い込んだ煙草の煙をやっぱりオレに吹きかけて、
ようやく煙草を揉み消した。

「お前が他の男と居るだけでイライラする。　リョウなんて尚更だ」

髪を掬って撫でる。

意味ありげに見つめられて…、

「お前が　俺の側から離れたら…、間違いなく狂うだろうな」

洒落にならない一言を放った。

相模が怖い。

冗談で言ってないから。

この男は、いつもマジだ。

だからこそオレは、恐ろしいまでの独占欲の末、こんな体験までしたんだ。

こんな短期間で…、本当に相模のオンナになっちまったんだ。

相模龍は、冗談みてえな事でもマジで実行する。

コイツの場合、口先だけじゃねえ。　もし　オレが他の男に惚れたりしたら…、きっと　“狂う”　どころじゃ済まねえ。

そう思って寒気がした。

「いいか。　絶対リョウに惚れるな。　そのダイヤも外すな。　外にも絶対出るんじゃねえ」

「注文多いよ！」

「多くねえだろ。　俺が帰って来るまで、ずっと部屋に閉じ篭ってりゃあいいんだ」

「アンタふざけんなよ」

「マジで言ってんだよ」

顎を掴んで強引に持ち上げられた。

鋭い視線がオレを射止める。

顎に掛かった指先から　煙草の残り香がする。

「お前の味は　俺だけの物だ」

舐める様に目線が下りる。

何の事を言ってるのかが分かってしまって、恥ずかしさから一気に体が熱くなった。

アイツの目はそんなオレを逃してはくれない。

冷や汗が滲んで、
金縛りになったみてえに体が硬直する。

オレの顔を見て、アイツはボソッと呟いた。

「…中毒で死にそうだ」

「ーーーな、に」

「…何でも無え」

不意打ちでキスされる。

バルコニーの柵に寄り掛かって、抱き上げられてキスされた。

ほろ苦い煙草味の舌が押し入って来る。

アイツの胸に両手を置いて、攻める様なキスを受け止めた。

そのまま室内に戻り、照明を落とす。

真っ暗な部屋に時折差し込むネオンの光。

うす明かりに魅せる本能。

ベットルームに連れて行かれて、服を剥ぎ取られた。

両脚を腹に付く位押し広げられて、そこに舌を這わす。

時に顔を動かして攻め立てる。

白い壁に　オレらの交わる姿が映し出されるーーー。

時間の経過が分からない。

ただずっと喘いでるーーー。

その晩、

オレの意識が続く限り

ずっと相模に抱かれ続けた。

甘い声が室内に染み込んでしまいそうだった。

たった一日で、

男に抱かれる快感を

嫌と言うほど味わった。

最後の夜？　3

ールイー

こんなに死んだ様に寝たのは初めてだーーー。

夢の中でも相模に抱かれてた。

シーツの擦れる音。

それに混じって共鳴するオレと相模の荒い息。

目の前に汗を滲ませてオレに覆いかぶさる男。

乱れた髪が額に掛かり、切れ長の眼がオレを見つめてる。

相模の腕の中で泣かされ、絶頂の顔を見られ、恥ずかしい部分も全て曝け出した。

ールイ…ー

よく考えたら、物凄い恥ずかしい態勢にさせられてたと思う。

脚を大きく広げられて、しかもそのまま腹に付くまで押し上げられて、隠したい部分が全部見られてしまう。

相模は、オレのその部分を見て、必ず「綺麗だ」って呟く。

『お前、生えねえのか』

『ーーーえ…』

『いや、いい…』

顔を寄せて、舌を使って舐められて、唇でソレを揉む様に弄られる。

ヌルヌルになっても止めて貰えず、されればされる程　気持ち良くなって、

思わず弱々しい声を上げて鳴いてしまう。

『いい声出すじゃねえか…』

どれだけ乱されたか分からないその場所で、またアイツに中まで貫かれる。

その気持ち良さを知ってしまった……。

ヤバイ位にーーー。

「……」

エロい夢を見てしまった。

「んん…っ」

布団の中でゴソゴソ動く。

何か、めちゃくちゃ体がダルい。

いや、それより　下腹部辺りがズンとした重い痛みがある。

原因はーーー

分かってるけど。

「……」

モゾモゾ動いて、布団から顔を出した。

途端に冷やりとした空気が顔に当たって、一気に目が覚めた。

昨日の妖艶な夜が嘘みてえな、真っ青な青空が見える。

暫くボーッとした後、ハッとしてベットを見渡した。

「相模……？」

ベットを手で何度か真探る。

でも、アイツの感触も　体温も何処にも無くてーーー

「嘘……」

まさか相模…、

もう行っちまったのかよ？

オレをココに一人置いて…？

「嘘ーーー」

ベットから起き上がって布団を捲った。

やっぱり、居ないーーー。

「嘘だ…」

オレの体には、まだアイツの余韻が残ってる。

ーお前、ちゃんと俺の事　想ってろよー

相模の声も、まだ耳元に残ってるのにーーー。

「相模…」

そう呟いた時、

後ろでドアの開く音がした。

思わず振り返った。

「相模…？」

遠くに見える男の影を追った。

黒いスーツを纏った男が見えるーーー。

「さが……」

咄嗟にベットから抜け出した。

ポケットに手を入れて近付いて来るソイツはーーー

「何でーーー」

立ちすくむオレの姿を見て、

「ゴメンね？」

ニコリともせずにそう言ったんだ。

「何でココにーーー」

体中の力が一瞬で抜けて行く思いがした。

ジロリを怒った様な目線でオレを見るソイツは、何にも言わずにスーツの上着をオレの体に掛けて来た。

裸だったことに気付く。

「タツ、もう行っちゃったよ」

「嘘ーーー」

オレの言葉を聞いて、綺麗な顔が不機嫌に歪んだ。

「タツじゃなくてゴメンね？」

相模と同じ、真っ黒いスーツを纏った矢田が　？オレの目の前に居る。

最後の夜？　4

本当に相模が居ないーーー。

あれだけ乱すだけ乱しておいて、
寝てる間にオレの目の前から居なくなっちまうなんて…。

アイツの身体の感触も、アイツの声も、まだ鮮明に残ってんのに。

余りにも急すぎる別れだった…。

「藤堂　また風邪引くよ」

業とオレを見ない様にして、部屋に散乱してる服を拾って寄越す。

無言でそれを受け取った。

「…そんなにタツと離れて寂しい？」

「…え」

「何で俺がココに居るか、気にならないの？」

俯いたままの矢田が怒った声で話しかける。

「…服、着替えて」

？

オレの返事を待たずに　そう言い残して、ベットルームを出て行った。

ノロノロと着替える。

人肌から離された服は冷たくて身震いする。

着替える間も身体が痛い。

相模の名残を感じて、泣きそうになった。

あの声も、アイツの顔も、あのキスも、もう残像でしか感じられな

い。

「電話があったんだ。　？“明日の朝、ルイを迎えに来てくれ”って」

着替えた後でも　矢田はオレを見ようとしなかった。

矢田は何にも言わずに腕を掴んで歩き出した。

静まり返った室内を後にする。

あんなに熱く沸き上がった甘美な時間は、余りにもあっけなく終わりを告げた。

「……」

「おい…」

掴まれる腕が痛い。

こんな無言の矢田は初めてだ。

矢田は前を向いたまま、オレを連れ歩く。

「矢田…」

黒いスーツを纏い、前髪を無造作に上げて額を見せる。

今は見えないけど、その表情はきっと怒ってる。

「矢田…！」

無言でエレベータに乗せられた。

矢田はオレを見ようとしない。

その重苦しい空気に耐えられなかった。

「何で怒ってんだよ」

「…何で？」

突き放す様に腕が解放される。

横を向いてた矢田の顔がオレを捉えると、両肩を持って後ろの壁に押し付けられた。

「…ってえ」

「藤堂のあんな姿見て、俺が何とも思わないとでも思った？」

「矢田…」

締め切った密室で、ソイツはオレの脚の間に体をねじ込ませ、突然迫って来たんだ。

「あんなに乱されて…。　女の顔して…、俺が、欲情しないとでも思った？」

「やめろ…」

誰も居ない密室で、肉体の感触がはっきりと分かる位密着する。

前髪を掻き上げてる矢田は、いつもより男らしく見えた。

そして、見慣れない黒いスーツ。

矢田特有の甘い香りが鼻を霞める。

「俺だって藤堂を抱きたい…」

覆いかぶさる様に肩に顔を預ける。

矢田の感触が、オレの身体に刻まれた記憶を塗りかえて行く…。

「藤堂のハダカ、頭から離れないよ…」

だけど、この密室をすり抜けても…、オレを奪い取る手は　もう無い。

もう、アイツが怒ってオレを引き寄せる事は無いんだーーー。

ーちゃんと俺の事　想ってろよー

アイツが現れる事は、もう無い。

じんわりと体温に温められる。

矢田の口付けが降ってきた。

最後の夜？　5

柔らかい感触がそうっと重ねられた時、僅かに振動が伝わる。

ようやく扉が開いて、矢田との密室の時間が終わった。

唇を霞める様な軽いキス。

少し体温が伝わる位の　本当に僅かだけ触れて、ようやく体を放される。

「…俺の事も見て」

嫉妬の混じった目で見つめられ、頬に手を充てて額が付けられる。

「今　藤堂の目の前にいるの、俺だよ」

弱々しい声は、泣いてる様にも思えた。

扉が開いてもなお、暫く抱きしめられた。

どうしようーーー。

アイツとの契約が体を縛り付けてるのに、やっぱりこの手を振りほどけない…。

「藤堂が欲しくて仕方ないよ…」

あの時　邪魔が入ってなければ…、

オレらは繋がってたんだ。

天使みてえな少年と、男と女の関係になってた……。

「俺、嫉妬で死んじゃいそうだよ…」

なってたんだ…。

アイツの影　1

二人の若
アイツの影
一息吐いて歩き出した矢田はやっぱり無言で、強引に掴まれた腕が
熱く痺(しび)れてた。

それは車内でも同じで、矢田は殆どオレの方を見る事は無くて
ただ無言で窓の外を眺めてるだけだった。

じっとソイツの横に座って、何となく初めて拉致されて車に連れ込
まれた時の事を思い出してた。

あの頃は　事あるゴトに歪みあっては衝突ばかりしてたと思う。

ー嫌なら、早く辞めちまえー

オレを敵としてしか見てなかった矢田。

ーコレ以上俺達に拘わんな！　住む世界が違えんだよ、テメエとはな！ー

もし、お前がオレに『飯を作れ』なんて言わなかったら、

オレらは今でも衝突し合ってたんかな…？

ー藤堂、タツの物にならないでー

お前は今でも、オレの事を恨んだままだったんかよ？

ー俺、嫉妬で死んじゃいそうだよ…ー

でも　そんな事、オレにも矢田にも分からない。

あんなに嫌われてた奴に　たった数カ月でこんなにも好かれるなん

て事も、

例えそのターニングポイントの一秒前に戻されたとしても…、その時が来るまでオレらには絶対分からないんだ。

その結果が良かったのかどうかさえも、勿論分からない。

そんな事を考えながら

無言の車内で時間を過ごした。

いつもより長く感じた。

ようやく見慣れた場所にさし掛かった頃には、もう何時間も経過してる様な気分だった。

「ーーー何だ、あれ…？」

組に近くなるに連れ、いつもと違う情景が目に映る。

組を建て護る門構え。

沿う様に並んだ黒塗りの高級車に混じり、赤色灯を付けた白黒の車が停まってる。

「矢田ーーー、警察が　来てる…」

思わず矢田に話し掛けた。

「……」

車は静かに停止した。

矢田は無言で車を降りたかと思いきや、

「藤堂は来ちゃダメ」

オレが車外に出る前にドアを閉められて　運転手に顎で指図する。

車はそのまま走り出した。

「おい、矢田!?」

ドアの内側からロックを掛けられてるみてえで、ドアノブを捻ってもビクともしない。

窓に手を付いて矢田を見る。

「矢田ーーー!」

スーツのポケットに手を入れて、オレを見る顔が小さく首を振った。

『ダメだよ』

「何でーーー？」

『来ちゃダメだ』

矢田の視線が無言で語りかけて来る。

その姿がどんどん小さくなって行く。

「……クソ！」

何度窓を拳で殴ってもビクともしない。

車に背を向けて　組の中に入って行く男の姿が見えた。

何でーーー、

何で警察が来てんだよ。

何で…、オレが居ちゃいけねえんだよ？

昨日の事件と
関係あんのかよーーー？

「クソ…！！」

窓をガンガン叩いた。

「無駄ですよ」

「ああ！？」

前を向いたまま、運転手が呟いた。

「“タマ”も抜けませんで。手ェが痛むだけですぜ」

初めて拉致られた時もコイツが運転してた。

多分、矢田の専属運転手。

「クソーーー！！」

ドアを蹴り上げた。

勿論、ビクともしない。

「リョウさんの命令は　絶対なんで」

初めてオレに声を掛ける、低音の響く声。

ソイツはまるで、ゲンじいと相模の関係の様…。

『若の命令は絶対』と　、時にはオレをも巻き込んでまで主従関係を貫く程…。

「っ、何の冗談で…」

「ーーー黙れ」

コイツらにとっては自分の主の言葉が法律であり、
例え意思に反してようと絶対的に正しいのは主の命令なんだ。

ーーーだったら

「…ッ、ーーー死にますぜ?」

「車を停めろ…」

その鎖、利用してやるよーーー!!

男の頭とシートがギリギリ唸る。
腕に男特有の“喉仏”の感触。
「…グッ」
ソイツは小さく声を漏らした。
後ろから伸ばしたオレの腕が、更に男の首を締め付けた。
「車を止めろ！」
「ーーーググ、冗談…よして下せえ、自分は何されても…」
「今この“シマ”を仕切ってんのは　オレだ！」
相当苦しい筈なのに、男は車を止めようとはしない。
締め上げられた顔は血が登り赤くなっていく。
「相模の居ない間、ココを取り仕切るのはこのオレだーーー」

「ご冗談を…」

いつだったか、アイツが突然言い出したんだ。

オレは相模の代わりにするって。

アイツが居ない時、このシマのトップはオレだとーーー。

アイツは確かにそう言った。

『お前が此処を仕切れ』って。

「車を組に戻せ。　相模の…、若頭の命令に背く気かよ?」

「……」

あれから暫く経った今、

まだ有効かどうかも分からないアイツの言葉を使って

?ひと回り以上も歳の離れた運転手を脅してる。

おっちゃんゴメン。
内心そう思いながら
心を鬼にする。

「これは　若頭の命令だ！」

運転手は明らかに動揺してた。
速度が僅かに落ちる。
油汗が額に滲んでる。

この男もオレと同じく、
相模龍って男の見えない鎖に縛り付けられる一人なんだ。

「…無理です」

男は青い顔でそう呟いた。

アイツの影　2

「裏切れ、ませんで……、自分には」

震える手でギアを動かす。

車は信号前で停車した。

「勘弁して下せえ」

「アンタ死にてえんかよ！」

ソイツは震える手でハンドルの横にあるボタンに手を伸ばす。

途端にドアからカチリとした機械音が聞こえた。

「ーーーこれ以上は無理です」

「……」

「勘弁して下せえ……」

青信号なのに進まない車に、後方からバッシングが鳴らされる。

言動の真意を知り、首に絡めた腕を解放した。

男は何度か肩で息を繰り返した。

「ありがとよ！」

「……」

返事は返さず、ただ前を見つめる。

さっきまでビクともしなかったドアが開いた。

渋滞のバッシングが飛び交う中、車を飛び降り　組へ急いだ。

息を切らして走る。

組が見えて来た頃、その前に見慣れない一台の白い車が付けられて

る事に気付いた。

ーーー何だ?

オレが組の方へ近付くと、その車がゆっくりと向かって来た。

近付くにつれ
車体の異様さが目につく。

その車は、車体の半分がボコボコにへコんでた。

片側のウインカーが割れて剥き出しになってる。

白い車体に擦ったみてえな黒い傷。

何かにぶつかったのか、大きくへコんだボディー。

フロントガラスにもヒビが入ってる。

異質な車はガラス全てに黒いスモークが掛かってる。
運転手も見えない。
中にどんな人間が入ってんのかも…、勿論分かんねえ。

不気味だった。

その姿は誰でも恐ろしさを覚えると思う。

ほぼ半壊状態の車は、ノロノロと走らせる。
まるでオレに接近するみてえに。

「……」

組に向かうオレと
こっちに向かう半壊の車。

その車が

止まったんだ。

「何だよ…」

オレの真横で。

思わずその場に立ち止まった。

オレの目の前に停車する、

何処からどう見ても　めちゃくちゃ怪しい不振車。

「何だよ　この車…」

スモークの向こう側から見えない視線を向けられてる気がして、気持ち悪さから寒気がした。

思わず後ずさる。

目の前に停車した不気味な車は僅かにエンジンを唸らせ、そこに不穏に佇んでる。

ゆっくりと後部座席の窓が下ろされた。

そこから伸ばされた腕と声に

言い知れない恐怖を覚えた。

僅かに開けられた窓の奥から伸ばされた、細く白い腕。

指先から肘の辺りまで血管みてえに張り巡らされた火傷の跡。

まるで皮を縫い合わせたみてえに、ツギハギの縫い目だらけの腕。

墓場から這い上がった様な、不気味な…

猟奇的な光景だった。

気持ち悪い……。

何だよ　この腕ーーー。

それが

手招きする様に“おいで”と無言で動いた。

見えない男の声がした。

「僕、可愛いねえ」

クスクス…

ねっとりと
貼り付く様な

狂気を思わせる声が聴こえた。

窓の奥に、
ギラリと光る二つの目。

クスクス…

僅かに漏れる笑い声。

人の物と思えない
傷だらけの腕を伸ばして

見えない誰かが話し掛けて来る。

「オジサン好きだよ　可愛い子」

クスクス…

ゾワッと一気に鳥肌が立ったのが分かった。

その腕が伸ばされる

オレの方へーーー

「可愛いねえ。　近くで顔見せてごらん？」

不気味に笑う男の声に

金縛りにあったみてえになる。

見えない相手の狂気に足が竦む。

オレの体に

その腕が

「お　い　で」

伸ばされるーーー。

「嫌だ…」

グア…ッ！！

その手は

突然凄い力でオレの腕を掴んで来た。

火傷でしわがれた白い手…。

まるで、蒼白いミイラみてえにギスギスしてた。

取り付かれた様にオレの腕を掴み、ズルズルと引き寄せられる。

腕がギリギリ音を立てて軋む。

言い知れない恐怖が身を襲った。

「離せ…、離せ！」

掴まれた手を乱暴に引き剥がし、組の中に走って逃げた。

クスクス…

それと同時に　不気味な笑い声を残し、車の走り去る音が聞こえた。

暫く震えが止まらなかった。

アイツの影　3

広い庭を入り口まで掛け走る。

体の中から悪寒がして、
振りほどいた腕には未だに不快な爪跡がジンジンと残ってるんだ。

振り返ればミイラみてえな男が後ろから追いかけて来てるんじゃないかと怖くなる。

手を振り解いて逃げた後でも、

得体の知れない何かに追い詰められる恐怖感が拭い切れなかった。

窓の奥から覗く、ギラギラ光る二つの目。

ねっとりとした声とは対象的に
動物的な強欲さを感じた。

あの目は確かに
オレを見てたんだ。

さっき、矢田と別れた時あの車は無かった。

あんな不気味な
白い車なんて無かったーーー

「お宅ら　また“戦争”　始めるつもりや無いやろなあ」

混乱する頭の片隅に、見知らぬ男の声が響いた。

「…まあええ、暫くはウチらも張らせて貰いますわ」

玄関口から漏れる話し声に無言で聞き入った。

閉じられた戸口の向こう側で、知らない誰かが話してる。

「お宅ん所の頭がおらんのも、何か裏があるんと違いますか」

「オッサン　んな妄想ばっかしてるとハゲるよ」

後に続く声は
凄く聞き覚えがあって、

でもその声は　？いつもオレに話し掛ける甘い声じゃなく、出会った頃の様な刺々しいものだった。

「相変わらず子生意気なべっぴんさんやの。　？いうか、お宅ん所はホンマに変わってますわな…、頭が二人おるヤクザなんざ　聞いた事無いわ」

「用が無いなら帰れクソジジイ」

「まあそう言わんと」と笑い声混じりに言う。

「今回はお宅らショッピクんで来たんと違うんやから…。　まあそんな目クジラ立てんでええがな」

ーーーどういう事だ？

思わずオレも気になって、もっと話し声を聞きたくて戸口に更ににじり寄った。

そっと玄関口に耳を近付ける……

「お嬢！　何してんだ　こんな所で！？」

「うっわわわぁ！？」

突然後ろから肩を掴まれて、

さっきの緊張から
思わず叫び声を上げてしまった。

「シッ、ゲ、ゲンじい!!　何しやがんだ!!」

「あ?　お嬢こそ何コソコソしてんだ」

「う、うるせえ!」

何だ!?

何なんだこの男は!?

何だっていつも肝心な時に邪魔して来んだよ、ゲンじいーーー!!

「ア、アンタ、相模と一緒に行ったんじゃねえんかよ!?」

「ああ。　そのつもりだったけどな、若がどうしても…」

ガラッ!!

ゲンじいの言葉を遮る様に、
突然玄関のドアが開けられた！

「……藤堂」

「あ”……」

開けられた玄関の目の前に
めちゃくちゃ怖い顔した矢田がーー

「……何で、ココに居んの」

「……」

オレの眼前にツカツカと歩み寄って、ほっぺをむにっと掴んだ！

「藤堂、悪い子」

「……ひて」

立ち上る、怒りのオーラ…。

「藤堂、悪い子！！」

「……」

可愛い言い方なのに
めちゃくちゃ怖い。

本当に凄え怖かった。

「藤堂、ダメって言ったらダメだよ！　悪い事しちゃダメ！」

「う…、ご、ごめん」

矢田はほっぺをプニプニ摘んで、頭をナデナデして、ギュウって抱きしめながら怖い顔で怒った。

怖いのと優しいのが一緒に混ざって不思議な感じだった。

「上崎のボケ…、アイツシバいたる」

矢田はオレを抱き締めて色んな所をサワサワしながら凄みのある巻き舌で唸った。

矢田は器用だと思った。

「どうせお嬢の事だから、カミさん脅したんだろ。　ここはオレの

シマだとか何とか言って」

「……ゲンじい。　アンタどっかで見てたんじゃ…」

「アホウ。　男の勘よ」

男の勘て、

アンタ異常だよ　その嗅覚ーーー。

「お邪魔して悪いけど、そちらさんは　お宅ん所の関係者？　エライ一般向けな兄ちゃんやけど」

オレの背後から突然声を掛けられた。

さっき、玄関口から聞こえてたその声だと思った。

「ーーーるせえ　クソジジイ。　藤堂は関係ねえよ」

「フン、君　藤堂君て言うん。　頭さんの新しい趣味かいな」

オレを抱き締める矢田を興味津々に見つめる男。

中年の、白髪混じりの髪をオールバックにして、
灰色のトレンチコートに紺のスーツをゆったりと纏う。

色黒の顔には小じわが薄ら刻まれてた。

小さめの下がり目が
マジマジとオレを覗き込む。

「藤堂、気にしないで。　コイツらの性分だから」

「イヤイヤ、こりゃ失敬…」

トレンチの中年は
ゴソゴソとコートの内ポケットを探り、それを目の前に差し出した。

「警視庁の嶋本言います。ちょっと調べ物しとるんですわ……」

“嶋本”　と名乗った男は　警察手帳を目の前に見せ、軽く挨拶した後、何故かズズイと顔を近付ける。

何にも悪い事をしてないのに
凄くドキドキして怖かった。

「ーーー君…、何処かで会った事ないかね？」

突然そんな事を尋ねられて、更にジロリと見られた。
返事の代わりに顔を横にブンブン振った。

嶋本は　それでもマジマジとオレを見つめて、顎を癪(しゃく)って顔を傾ける。

そして、しかめっ面で尋ねられた。

「いや、君…どっかで……、会うた事……無いかね、本当に？」

「いい歳してナンパしてんじゃねえよ。　エロい目で藤堂を見んな！」

矢田がオレの顔を隠す様に　胸に押し付けて抱き締め直す。

瞬間的にフワッと矢田の香りが鼻を掠める。
微かにトクトクと鼓動が耳に響く。

その後ろで、嶋本の乾いた笑い声が聞こえた。
？

「お宅　偉い気に入られ様やなぁ。　男嫌いの頭がねえ、珍しい事もあるもんやな」

そう言って笑いながら懐から封筒を取り出す。

「まあええ、嘘付いとる様にも見えんしな…。　それより本題やけども…」

ゴソゴソと封筒の中から一通の便箋を取り出し、それを開けて見せた。

「何だよそれ？」

矢田に続いてオレも便箋に顔を寄せた。

便箋にビッシリと書かれた、
角ばった片仮名混じりの分章。

「数日前に差し出し人不明の投書があってな……。　その時はワシらも単なるイタズラやと放っといたんやが。　それがどうや…、ホンマに事件になってしもうた」

「おい…矢田、これってーーー」

「……」

その文面にゾワッと身の毛がよだつ思いがした。

嶋本はそれを持ち直して
確認する様に読み上げた。

『コレハ、我々ノ社会ヲ　オビヤカス暴力団組織ト、名バカリノ国家ノ犬ニ成リ下ガッタ警察ドモヘノ警告ト思エーー』　？

攻撃的な分章から始まったそれは、まるでオレ達の今居る世界を真っ向から否定する様な、強い恨みの篭った内容だと思った。

『コノ警告ヨリ二日後ノ午後十三時、白昼堂々　無意味ナ勢力争イデ都民ガ巻キ添エニナル。　場所ハーー』

それは時間も場所も、まさしく　店を襲撃された　昨日の事件に間違いなかった。

『社会悪ニ対シテ見テ見ヌ振リヲ行ッテ来タ、貴様ラノ責任ダ。？アイツラガコノ世カラ居ナクナラナイ限リ、事件ハ何度デモ続クゾーー』

嶋本はそこまで読み上げると　便箋を再び封筒に戻し、フウと溜息一つ吐いた。

口の中に、苦虫を噛み潰した様な…、嫌な感覚が湧き上がる。

「お宅ら　恨みツラミは慣れとるやろうけどな……、今回はちいと違うわ」

コレ、脅迫紛いの犯罪予告やな……。

そう言って　ピラピラと封筒を振ってみせた。？

アイツの影　5

「そやけど、どうも厄介なんですわ」

再び考える様に顎を癪って
オレらを見やる。

「ワシらが慌てて駆けつけた時には　既にあの状態や。　アンタらの縄張りが散々やのに、お宅の組員は誰一人として報復に動いた形跡が無い」

チラリとゲンじいに目配せする。

ゲンじいはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「さすがタツ…」

矢田がオレの横でボソッと呟いた。

「あの死体もそうや。　何人か名前の上がっとる奴らも全員、只の街のチンピラやないかい…。　勢力争いどころか、一方的なテロとしか思えん」

相模がゲンじい達を窘めたんだ。

『お前らが動いたらどうなるか、考えろや』

アイツは、手出しする奴全員破門するとまで言って、一人で事態を沈静化させた……。

「アンタらをショッピくつもりやったワシらも二の足を踏んだままや。　いや、それどころかーーー」

“今回の被害者は、天下の相模組さん、て事になりますわな……。”

あの時、もしゲンじい達が頭に血が登ったままだったら

間違い無く乱闘になってた。

“手ェ出しとったら立場が間逆どころか、一般人（カタギ）に手ェ出したっちゅう事で、組に大打撃を与えられとったんですけどな…。”

姿無き犯人に、もう少しでハメられる所だったんだ。

“ワシらも残念で仕方ないですわ”

矢田の言う通り、

相模は最高のヤクザだーー。？

突き放される想い　1

二人の若
突き放される想い

「おっと、お呼びだわ…」

嶋本の胸ポケットからバイブ音が響いた。

使い古したシルバーの携帯を一度開いて、暫く見やってから無造作に元に戻す。

チエッと唸った後、頭を掻きながら向き直った。

「どうやら勝手に聞き込みに行ったんがバレたみたいですわ…」

そそくさと封筒を内ポケットに仕舞い直すと、身仕度を整える。

話途中のまま一方的に話を切られた。

嶋本は軽く会釈をして、片手を上げる。

「ほなら、また来ますわ」

「もう来んな」

男は乾いた笑い声を上げると
ふいにオレを見て、

「藤堂君、ほな　また何処かで…」

変に意味深な言葉を残して　立ち去って行ったんだ。

「藤堂……」

同時に矢田は腕を離して、オレから少し離れた。

矢田に距離を開けられた気がして、ちょっと…、ショックだった。

「俺、店の状況見に行くから」

「……うん」

「藤堂も　おいでね？」

「……う、ん」

以外な言葉にビックリした。

「じゃないと、また悪いコトしそうだから」

「……」

矢田が怒ってる。

いつも通り、
綺麗で穏やかな顔だけど…。

絶対、怒ってる。

多分　色んな理由で。　？

店までの道中は、“カミさんの代わりは自分が”　とゲンじいが車を回して来た。

隣に矢田の熱を感じる空間はやっぱり重苦しくて。

無言のまま、じっと窓の外の景色を見てた。

ゲンじいも何も話さない。

さっき距離を置くように体を離された時、オレと矢田の間に溝が出来てる様に感じた。

開かれた心を、また閉ざされたみてえな…、寂しい気持ちになった。

矢田と男女の関係になる一歩手前で中断され、

アクシデントだったとは言え、オレはそのまま相模と共に姿を消した。

再び矢田がオレの前に現れた時は裸で、相模に乱されたそのままの姿を見られたんだ。

ータツじゃなくてゴメンねー

矢田はきっと傷付いてる。

矢田の唯一心を許してるオレ達2人が連れ立って消えたんだ。

「ーーー」

“タツの物にならないで”　って、オレにだけ差し出される手を…

オレはきっと無惨にも突き放してしまった。

矢田があんな顔見せるの、オレの前でだけなのにーーー。

きっと、矢田を悲しませた。

いたたまれなくなって、窓枠に肘をついたまま、隣の美少年にチラリと目配せした。

矢田はーーー

ジッとオレを見てたんだ。

「……っ」

背もたれに体を預けて、
頭を僅かに傾けて…

強く、意思の篭った瞳でオレを見つめてた。

さっきの挙動とは正反対な熱い視線に射止められ、胸が締め付けられる様に高鳴った。

視線が絡まって反らせない。

美少年の凛とした瞳が　オレを見つめてるーーー。

前髪を掻き上げて、いつもより男らしく見える美少年。

少し茶色い、透き通った瞳。

その瞳は今、オレだけを映してる。

視線が反らせない……。

矢田に嫌われたと思ってた。

怒った顔で腕を掴んで、

エレベータの中で体を抑えられて。

だけどその顔はオレの方を見ようとしてなくて、
抱きしめられたと思えば、距離を置く様に離れて行く。

なのに　こうして振り返ると、思いがけない熱い視線でオレを見つめてる。

静かな車内で、
何日ぶりかに矢田と見つめあった。

「……っ」

ドクンと心臓が飛び跳ねた。

矢田の手が、そっとオレの左手に触れたんだーー。

柔い、ほのかに暖かい手。

ゆっくり撫でる感触に、オレの全神経が持っていかれる。

いつもより男らしい少年の顔が段々と近付いて来る。

シートにもたれた体を起こして、左手をキュっと握られて…。

その表情に見惚れているうち、少年はそっと目を閉じて　赤い唇を重ねて来た。

柔らかくて暖かい

矢田のキス。

矢田の匂い。

何度も重ねられた筈なのに、
締め付けられる様な胸の鼓動が収まらないーーー。

何故か緊張して、握られてる左手が微かに震えてた。

矢田はゆっくり顔を離すと、潤んだ目でオレを見つめてーー、

そっとオレから離れて行った。

「……」

それからは　ずっと目が合わなくてーーー、

体一つ分開けられたシートに　矢田との距離を感じた。

オレはーー

さっきのキスの感触が離れなくて。

でも、自分の横の埋まらない空間に、近くて遠い少年との心の距離を感じて……。

その喪失感が、甘い余韻を切なく変えた。

突き放される想い　2

「……そういや　あの脅迫めいた手紙、何なんでしょうね」

車内に気まずい雰囲気が漂い始めた頃、それを察した様にゲンじいがそれとなく話出した。

オレらの微妙な距離も、さっきのキスも、

もしかしたバックミラー越しに見えてたのかもしれねえ。

それでなくても、ゲンじいって元々変に気がきく所があるからな。

「あれって、とどのつまりは…、店の襲撃も、堂善寺に成りすました事も、何者かが組をハメる為に仕掛けた罠だったって事ですよね」

ゆったりとハンドルを切ってギアを操作する。

「金で買ったチンピラに堂善寺を語らせて、こっちを挑発させて。

ご丁寧に抗争が起きる事を事前に投書までしやがって…」

チッ、と舌打ちが聞こえた。

苛ついてんのかゲンじいは、片足を軽く揺らす仕草をする。

「これ……、一連の事件と繋がってるんですかね」

「……」

オレも矢田も無言だった。

「お嬢が狙われて、今度は組を……。犯人の目的がまるで分かんねえですわ」

誰に語る訳でも無く、
後ろのオレらに軽く目配せして、一人コンコンと話し続けるゲンじい。

「これ……、マジであのヤクに対するただの口封じ…だとは思えねえんですわ」

ゲンじいが言ってるのは、“凶器の灰”の事。

裏でも禁止されてる薬物を摂取した男をオレとサナだけが目撃してる。

？元京王の生徒であるソイツは相模に逆恨みして、組の縄張りで暴行事件を起こしたんだ。

組が炙り出しに掛かってから判明した事実。

ソイツは、禁止の薬物を摂取し、半狂乱になってるって事。

そして、おそらく男のバックには何らかの組織が付いてるって事。

ー狙われるやもしれんのうー

そんな組長さんの言葉通り、次々に起こる事件。

だけど、ゲンじいの言う通り、それが口封じの為のものとは思えないーーー。

「あの文面、どう見ても　恨みの篭った復讐っぽかったんだよなあ」

オレも、そう思うんだ。？

暫くゲンじいの話に耳を傾けながら色々考え事をしてた。

ゲンじいの声も車の振動も、段々と脳裏の奥で響いて来る。

シートにもたれて目を瞑りかけた時。

ゆっくりと減速を始めた車の抵抗を体で感じて、ふと前を向いた。

まだ煌びやかさを見せない白昼の街が、目の前に見える。

事件の現場となったそこは、やっぱりいつもより人通りが少ないものの、行き交う人々で早くも活気が戻りつつあった。

ゲンじいは突然タイヤを唸らせてハンドルを大きく切ると、道のど真ん中を陣取る様にして、車を停車させた。

通行人が一斉にこっちを向いた。

矢田と二人、外に出る。

行く手を塞ぐ様に停車した黒塗りの高級車。

そこから矢田が姿を現した瞬間、何処からともなく溜息が漏れた。

そこに居る人間の目が、矢田に集中する。

乗り付けられた車を取り囲む様にして、そこに人々が群がり始める。

人が人を呼んで、そこはあっという間に野次馬でごった返してた。

「……何だ？」

「気にしないで。　いつもの事」

「いつもってーー」

あの時と同じだ。

あの、土手に連れ出された時と同じ。

行き交う人間全てが矢田に目を奪われる。　？

良くも悪くも、人類最強の美貌で人々を魅きつける。

磁石みてえな魅力を持った少年。

「俺が、普通より珍しいから」

矢田がオレの手を取って歩き出すと、更に大きな歓声が上がった。

「危ないから」

「おう……」

何処かよそよそしい矢田に連れられて現場の方へ向かった。

「オラオラ、見せもんじゃねえんだよ！　散れ！！」

ゲンじいが野次馬を蹴散らしてた。

突き放される想い　3

矢田と歩くそこは、まだ至る所にガラスの破片が飛び散っていて、
そこを歩くだけでガラスがジャリジャリ音を立てて飛び散った。

相模に連れられ、何度か来た街。

こっちから丸見えの
小さな個室が幾つも並ぶ部屋の中から、

半裸のネーちゃんらが
キャーキャー騒いで
矢田を呼んでた。

「リョウさぁーん！　抱いてぇ！」

「あぁん、一度でいいから遊ばれたい…」

「あのツレない顔、もうたまんない！」

ネーちゃんらは嬉しそうに笑ってこっちに手を振って、またキャーキャー騒いでた。

「だから嫌なんだよ……」

「え？」

溜息混じりに呟く。

子供みてえにはしゃいでる店のネーちゃんらを見据えて、ボソッと漏らした。

「タツは甘やかし過ぎ…」

「何が？」

「もっと厳しく引き締めたっていいのに…」

「だから、何が？」

「アイツら。　タツは“家族だ”　って言って大事にし過ぎなんだよ」

「家族……」

矢田とオレが通り過ぎる度
店から顔を出して
口々に騒ぎ立てる。

京王とは　まるで違う。

ここのネーちゃんらは恐れるどころか、嬉しそうに話し掛けて来る。

ずっと前、連れて来られた時もそうだった。

「俺らは“親”。　ここは…、店だけど、アイツらにとっては
“家”　だから…」

「何だよ、それ」

「タツが決めた。　組の人間は俺らの家族だって。　だからって、
自分を犠牲にし過ぎなんだよタツは…」

不機嫌そうに呟いて、
腕をグイと引っ張られた。

「どういう事だよ」

「タツ、毎晩ココにアイツらを抱きに来てたんだよ。つい最近まで」

ポツリと漏らすその言葉に、

ーもう、お前以外の女は抱かねぇー

あの時の相模の言葉が蘇った。

「タツのエッチって凄い癒しなんだよ、ココの奴らにとっては」

ーアイツら、最後まで納得しなかったけどなー

「それがタツの愛情表現だから。アイツらが唯一、大事にされてるって思える時間」

レイナの言葉が頭を掠める。

ー龍さんは、あたし達の為に抱いてくれてるんだよ？ー

泣きそうな顔で、そう言ってた。

「藤堂も分かるでしょ？　タツに抱かれて心が満たされるのって」

？？

矢田にそんな事を言われて、
瞬間的にアイツのキスや熱い体の感触が蘇った。

ついさっきまで、
嫌と言うほど高められた。

最初は激し過ぎて苦しい程の快感を与えられて、もう嫌だって思った。

でも　その次は
オレの身体をじっくり火照らせて……、

弱い部分を入念に刺激されて。

身体の感じる快感と
気持ち良さそうな相模の表情とが合わさって、緩い絶頂となって押し寄せて来たんだ。

確かに…、心が満たされた分も　感度に加わってると思う。

ールイ……ー

だって　今でもアイツの身体の温もりが離れて行かない。

だから…。　それは、

オレだけじゃなく、相模に抱かれる女達は皆感じてたんだ。

きっとあんな風に、
身体を抱かれて

優しく何度も攻められて。

目の前で自分に感じる相模の表情に胸が一杯になってーーー

言い様の無い、不思議な気持ちで満たされて行くんだ。

それはオレだけじゃなく、
相模に抱かれる女達全てが感じる快感。

ーもう、お前以外の女は抱かねえー

アイツがあんな事言うまで、皆それを待ってたーーー。

ずっと、ずっと……。

「だって藤堂、タツが欲しくて仕方無いって顔してるもんね」

そう言うと、矢田はいっそう腕を強く掴んで来た。

腕に奔る痛みに顔を向けると、鋭い目線で見つめる少年と目が合った。

「何、言ってんだよ…」

一瞬、その視線が怖いと思った。

「そんな色っぽい顔して…。　エッチ、凄く気持ち良かったんだね」

「バカな事言うんじゃねえよ」

少年の顔の裏に、
秘められた男の顔が
覗いた気がした。

「俺は本当の事を言ってるだけ」

腕を強く掴まれたまま
矢田は突然踵を返すと、
薄暗いビルの中に入って行った。

そこは中も薄暗くて、
何処にも人の気配がしなかった。

割られた窓ガラスが店内にも散らばってて、
営業途中で時間が止まった様だった。

まるで、人間だけが忽然と姿を消したみてえな…。

入れかけのシャンパンに
扉の開けられたままの貯蔵庫。

散らばった洋服。

注いだままの、グラスタワー。

手を引かれるまま奥の個室に入ると、矢田は後ろ手にドアを閉めた。

カチャリと金属音の擦れた音が聴こえた。

「矢田？」

矢田の方を見ると、
怪しげな顔を見せて微笑してるのが分かった。

黒塗りの木の柵で囲われた、薄暗い個室。

壁に沿う様に、黒い革張りのソファが置かれてる。

ベットにもなりそうな位
奥行があって、そこに唯一あるオレンジのランプが　その部屋を更に怪しく見せた。

「二人っきりだね……」

「おう？」

矢田は扉に
チェーンを掛けた。

少し俯いた顔から、ギラリと光る　男の本能を見た気がして……

「無防備だね、藤堂」

それは、矢田の放った言葉で　ようやく確信に変わった。

ドアから手を離すと、
ゆっくりオレの方へ歩み寄って来るーーー。

「何だよ急に…」

何となく嫌な胸騒ぎがして、後ろに後ずさった。

ジリジリと壁際に追い詰められる。

「油断、し過ぎでしょ？」

その時、オレは確かに見たんだ。

獣の様にペロリと舌舐めずりしながらにじり寄る矢田の表情を。

怪しく光る、その視線をーーー。

「ずっと藤堂に欲情してたの、分かんなかった？」

薄暗い部屋の中で、

ソイツはさっきまでとは全然違う人間みてえだと思った。

まるで暗闇に姿を現わす魔物だ。

「急に何言ってんだよ…」

「我慢しようと思ったけど、やっぱ辞めた」

更に一歩後ずさった時、

ソファに後ろ足を引っ掛けてそのまま倒れ込んだ。

矢田がオレの脚を掴んだ。

「離せ…」

小さく振り絞る様に呟くと、
それを合図にでもするようにズルズルと引き寄せられた。

「離せ…！」

暴れる脚を束ねてそこに跨る。

ズシッと重みが加えられた脚は、バタつかせてもビクともしない。

ソファの上でオレを支配して馬乗りになったまま、

ギラリと冷たい視線をオレに向けた。

「不公平だよ。　俺だけこんなに嫉妬で苦しむなんて…」

矢田はスーツの胸ポケットから携帯を取り出し、何処かに掛けた。

その間もオレを見据えて光る怪しい目つきが、

一瞬悪魔の様に見えたんだ……。

暫くして携帯を耳に充てる。

「タツ？」

矢田は……

確かにそう言った。

「相模……？」

まさか…。

この状況で
まさか相模にーー

「タツ、今何処？　？……ふうん。　まだ飛行機なんだ」

矢田が

楽しそうに呟いた。

「ーー藤堂？　……ウン、元気そうだよ？」

冷たい、悪魔の様な笑みを浮かべて

目の前のソイツがオレを一瞥した。

「矢田……」

本気で背筋がゾクリと震えた。

矢田が薄笑いを浮かべて話してる相手は、

つい数時間前まで

オレの側に居た男ーー。

ーお前と離れるのが怖いー

そう言って

何度も身体を重ねた……

オレの前でだけ、知らない顔を見せる男ーー。

「今からちゃんと可愛いがって抱いてあげるから…」

「やめろ……」

オレがそう呟くと、

ソイツは不機嫌そうにオレを見た。

「聞かせてあげるよ。　俺に感じる藤堂の鳴き声」

「やめろ……」

声が震えてるのが自分でも分かった。

受話器越しに聴こえる怒鳴り声。

相模の声……。

数時間前まで隣で聴こえてた

アイツの声……。

「タツも嫉妬で苦しめばいいんだ」

携帯を傍に置いて、
今度は両腕を締め上げられた。

「クソ…！」

何処にそんな力があるのか分かんねえ位の、全然ビクともしない腕。

「ゴメンね」

矢田が頬に舌を這わせて舐め上げた。

被りを振ると、今度は首筋に歯を立てて噛まれた。

カリッと、鋭い痛みが瞬時に伝わる。

「……っ」

「本当は、タツから俺に電話なんて無かったんだ」

「……何、だってーー」

矢田の言葉は、
オレの思考を停止させるには充分な衝撃だった。

「俺がタツの携帯を盗聴させた。タツも藤堂も、いつまで経っても帰って来ないから」？

「…に、言ってんだよ…」

とてもじゃないけど信じられなかった。

身体を震わせて顔を上げた。

冷静に見下ろす美貌がそこにはあった。

その顔は、本当に悪魔みてえに見えた。

「“今日は一日戻らねえ。　明日から急な取引き変更で組を開ける”　って言ってた。　最初は何の事かと思ったよ」

「お前……」

「“俺は明日の早朝此処を発つから、その間ルイを護衛してろ”って。　絶対にリョウに会わすなって…」

そこまで言うと、矢田はオレのシャツのボタンに手を掛けた。

ボタンは?半ば引きちぎられる様に、プチプチ音を立てて外れていった。

「やめろ…」

「その後　源二から俺の所に連絡があったんだ。　タツの代わりは俺だけだから。　それで全部が分かった」

サラシに巻かれた肌が露わになると、矢田は一瞬顔を歪めた。

でもすぐに、キスを始める。

「きっと今頃組の奴らは、あのマンションで藤堂の事を待ってるんじゃない？」

独占欲ーーー。

相模と同じく、コイツも同じだけの欲望が渦巻いてる、男……。

「矢田！　こんなの…、こんなの間違ってる！」

「何で？　好きな子を自分の物にして、何が悪いの」

高められた肌に

新しい余韻が芽生え始める。

相模のキスが、

オレの身体から離れてく。

？

「嫌だ！！」

手脚の自由を奪われたまま、それでも必死に暴れて抵抗した。

「つっ……」

頭が矢田の顔にぶつかって、一瞬腕を掴む力が怯んだ。

「離せ！！」

懸命に振り解いて、ソファの角を掴んで身体からすり抜けようとした。

「藤堂、悪い子だね」

少し赤くなった頬を拭って、オレの両足を掴むとソファの下に引き摺り下ろされる。

「嫌だ！！」

必死に掴んだソファがガタガタ揺れる。

それでも身体が引き摺られてく。

「甘いんだよ…、タツは何もかも」

脱がされかけた素肌に床の冷たい感触が刺す様に伝わった。

矢田が馬乗りになって、ベルトを引き抜いた。

凄く

怖かった。

「電話で簡単に場所を言っちゃダメだよ。　いつ、何処で聞かれてるか分かんないんだから」

暴れる両腕を頭の上に捻り上げて、手首にベルトを巻かれる。

「矢田……、なに、何してんだよ!?」

?ギュウっと縛られ、手首が悲鳴を上げる。

両手首をベルトで縛り、それをソファの脚に括り付け始めた。

「俺も少しは誤算があったけどね。“サツ”が来てたり、源二が護衛で組(こっち)に残ってたり…」

もう、無理だーーー。

もう逃げられない。

「藤堂が、誘う様な格好で目の前に立ってたり……」

両手を縛られて、ビクともしない…。

「俺、こんな事するつもりじゃ無かったよ？」

こんなの、違うーー！

絶対間違ってる……！

嫌だ…。

「さがみ…」

嫌だよ……。

「相模…！！」

助けて…。

相模、

助けて…。

「……そんなにタツが好きになっちゃった？」

怖い……。

矢田が別の人間みてえで、

オレの知ってる天使みたいな少年は何処にも居なくて…。

好き合ってする行為じゃないと思った。

一方的な、歪んだ愛情。

「言ってあげなよ、タツが好きだって。　聞こえるんじゃない？
タツが電話を切って無ければの話だけど」

胸が刳られる。

息が、出来ないーーー。

全身が凍りつく。

突き放される想い　5

「……何でこんな事するんだよ」

乱暴に衣服を剥がされた。

?布の破れる音が時折響いた。

そうして下まで剥がされて行くのを、されるがままに見つめた。

矢田がオレに触れれば触れる程、心が刺される様に痛んだ。

「何で？　じゃあ、どうして藤堂はいつもタツだけの物になるの？
何で俺の側に居てくれないの」

服を全て脱がされると、顎を掴まれ無理矢理目線を合わされた。

冷淡で綺麗な顔が、目に溜まった涙で掠れてく。

「何で、藤堂は俺をもっと見てくれないんだよ」

それはもう堪え切れなくて、溢れた涙が幾筋も伝って頬を流れた。

「タツは良くて、俺はダメ？　そうやって　傷つけられるのはいつも俺ばっかり」

強引に口付けられた。

重ねられた矢田の唇を強く噛んだ。

「…っ」

ガリッと音がして、口の中に鉄の味が残る。

それでも矢田はキスを辞めなかった。

更に強く顔を掴まれて、血の味のする舌が中に押し入って来る。

「嫌だ……！」

脚をバタつかせて抵抗した。

キスされてる間も、何度も嫌だって懇願した。

ふいに矢田の唇が離された。

「叩くよ」

その声は震えてて、行き場の無い怒りと哀しみを振り絞って曝け出してる様だった。

矢田は涙目になってた。

オレを襲ってる筈の矢田が、辛そうな顔して目に涙を溜めて見下ろしてた。

悲しい声が響いた。

「……何で皆、俺を捨てるの」

矢田の目から涙が零れて頬を伝い、オレの額に落ちた。

溢れ出した涙はとめど無く流れた出し、オレの頬に、首に、幾つも透明なシミを作った。

それから矢田はオレの傍らに顔を寄せてすすり泣いた。

「捨てないで……」

それは、これまで溜めてきた矢田の心の声にも思えた。

家族の暖かみを知らない、たった一人　孤独で育った少年……。

「藤堂の愛情が欲しいよ……」

矢田を突き動かしたのは、

欲しくて欲しくてたまらない物を追い求める故の結果だったんだ。

「俺の夢、藤堂しか叶えられないんだよ…？」

そこには、もうさっきまでの狂気の少年は居なくなっていて、

代わりに愛情に飢えた、寂しがりやの少年が顔を出してた。

矢田の涙は、オレの心に芽生えた恐怖も少しずつ溶かしていった。

「矢田…。　オレも、お前と同じ捨て子なんだ…」

身体を震わせて泣き続ける少年に語り掛ける。

オレの言葉に、矢田は驚いた表情で顔を上げた。

目の下が少し腫れてて、

目がウサギみてえに赤くなってた。

「分かるよ、お前の気持ち」

親父から初めて聞かされた時、暫くはオレも思ってた。

自分は　要らない子なんじゃないかって。

突き放される想い　6

「オレも知らねえから。　本当の両親」

１２歳の終わり、親父に道場に呼ばれた。

“お前はワシらの実の子では無い”

それまで、微塵にも思ったことが無かった。

親父達と血が繋がって無いなんて。

“捨てられとったんじゃ。　この道場の前でな。　まだ言葉も理解出来ん様な赤ん坊でのう…”

唯一の手掛かりは、“ルイ”　って書かれた名前の紙だけ。　？

“戸籍を調べればいずれ分かる事じゃからな…”

あの両親でなければ、オレも多分矢田の様に愛に飢えてたと思う。

「だから…、オレは　矢田を捨てたりしない」

オレと矢田は何処か似てる。

実の親に捨てられた事も。

何かと衝突し合ってた事も。　？

きっと似てるから、ぶつかり合うんだ。

「お前と居ると、癒されるよ。　心があったまる。　オレだけに心を開いてんのも、ちゃんと分かってるよ」

オレの言葉を矢田は無言で聞いてた。

「オレはあの時、お前を受け止めるって覚悟したよ…。　矢田をコレ以上傷付けたくないって…」

矢田の目から、涙が一筋流れた。

「でも、これは違う」

「ーーウン」

「こんなの、一方的過ぎる。　好き合ってする事じゃない。　オレ、こんなのは嫌だ」

「……ウン」

「凄く怖かった。　お前が別の人間みてえで…。　怖かったよ」

「……ゴメン」

「オレ、矢田の事、ちゃんと受け止めるから」

「ウン……」

矢田は静かに頷いて、ゆっくりと起き上がった。

両手首を縛ってたベルトをゆっくり解き始める。

手首を拘束する皮の痛みが　やんわりと引いて行く。

その時、扉の奥からバタバタと人の駆け寄る音が聴こえた。

その足音はロックとチェーンの掛けられたこの部屋の前で止まり、

次いで張り上げる男の声と、ドアを打ち鳴らす音が響いた。

「お嬢!!　大丈夫か!?」

ガンガン叩きながらオレを呼ぶ声。

「ゲンじい…」

ゲンじいが何でココを突き止めたかは、何となく察しがついた。

「居るなら返事してくれ！！　頼むから…、　クソ…っ！」

何度も体当たりする様な激しい音が響く。

矢田は無言でオレの手を解放すると、携帯の電源を切った。

裸のオレを持ち上げてソファに寝かせる。

「ゲンじい……」

オレの声に、ドアにぶつかる音が止んだ。

「お嬢！？　おい、リョウさんと何があったんだよ！？」

「何も、ないよ」

矢田のキスが降ってきた。

それを目を閉じて受け止めた。

「何もないって…、若から狂ったみてえに連絡があったんたぞ！！」

「オレは…、大丈夫だから」

キスの合間に声を出した。

付いては離れるキスに、何度か言葉が途切れた。

「ゲンじい…、頼むから、相模に大丈夫だって……、伝えて…」

掠れる声に、時折漏れる溜息。

耳を澄ませば、きっとゲンじいにも聴こえると思う。

オレらが鍵の閉まった密室で何をしてるか。

「クソウ…！　若に何て言やあいいんだよ」

ゲンじいは勘が良いから。

それだけできっと分かってしまう筈。

独り言を吐き捨てる声がして、その後はドアを叩く音も、ゲンじいの声も聞こえなかった。

その日、

とうとう矢田に抱かれた。

衝突し合って、

憎まれて、

でもいつの間にかオレに懐いてて。

どんどん心を開いて来る天使みてぇな少年。

相模の部屋で襲われたり、

オレを独占出来るって喜んだり。

矢田を受け止めるって覚悟してからも、そういう関係になる事は無くて……。

“絶対にリョウに惚れるな“

相模への嫉妬で悪魔の様に豹変した少年は
次の瞬間には“捨てないで”って涙を流してて、

それからは
いつもの
寂しがりやで甘えたがる少年に戻ってた。

両手を縛ってたベルトを外されて、

さっきまで襲われてた密室で、ソイツを受け止めるって誓ったんだ。

オレも矢田も涙で顔が濡れてて、キスを交わすとしょっぱい味がした。

相模の余韻がどんどん消えて行く。

目の前の少年の唇に翻弄され始める。

赤い唇と小さめの舌で攻められると、身体が燃える様に湧き立ち昂る。

自分からこんな声が出るんだって思った。

矢田の良い匂いがする。

艶かしい身体がオレを中から狂わせる。

でも　一番は、

オレの中で感じる矢田の甘い喘ぎ声が

オレをもっと興奮させた。

少年天使　1　＊性描写有り

二人の若
少年天使
ハア……、ハア……

「ああぁ…、んん、っあ…」

クチュッ、クチュ…ッ

身体から漏れる歓びの音。

矢田のが出たり入ったりする度、そこはますます熱くとろけて、卑猥な響きを出す。

気持ち良さは隠せなくて、何度も喘ぎ声が喉をついて出て来た。

オレの目の前を、裸の少年が支配する。

オレの両脇に手をついて、少年の欲望で優しく　激しく中を掻き回す。

時折、オレの中心部の蕾にも指を這わせる。

ヌルヌルと滑る様に愛撫されると、余りの気持ち良さにすぐ絶頂がやって来る。

口から唾液が流れる。

自分の体液で、
全身が水浸しになる。

「藤堂の体……、めちゃくちゃ良い」

やっぱり矢田も
顔を歪めて、オレの中で感じてる。

天使みたいな少年が切なそうに声を上げると、それだけで感度が高まる。

ハア…、ハア…ッ……

矢田の、男の欲望。

矢田の動きのリズム。

玉のように流れる汗。

官能的な匂い。

全部に頭と身体が支配されていく。

気持ち良くて、

声を上げて歓ぶ。

違う自分が顔を出す。

快感を全身で感じるオンナの本能が目覚めて行く様だった。

「藤堂、凄い感じてるね…。　めちゃくちゃ可愛い顔」

口から溢れる唾液を舌で拭われ、少年の唇に塞がれる。

感じ過ぎて息が上がってる。

小刻みな呼吸がキスの合間に漏れた。

ソイツが腰を動かす度に、呼吸は更に激しくなって行く。

時折激しくなったり、緩くなったり……、

波の様に訪れる快感は、何度も絶頂の直前まで追い上げられてはゆっくりと消えて行く。

発散仕切れない疼きが熱く渦巻いて、それが更に本能を昂らせる。

矢田との行為は、

欲しくて欲しくて仕方なくなる。

もっと激しい、中から震える様な快感が欲しくて、自分がとても淫らになって行くんだ……。

「んん……っ」

矢田の口の中に吐息を漏らして、自分から抱きついた。

指先が背中の火傷痕に触れた。

そこを何度か撫でた。

掌に、ざらっとした感触。

「イイよ……、藤堂…」

矢田は気持ち良さそうに溜息を吐いた。

「矢田……、もっと……！」

また唾液が口を伝う。

オレ、凄え淫乱だ。

矢田に淫乱にさせられるーーー。

「まだダメーーー」

閉じた瞼から汗が弾けて、宝石みてえにキラキラ光ってた。

こんな時でも天使みてえな少年は
腰を強く弱く動かして、また行き場の無い快感を与え出すんだ。

「あぁぁ……！　このまま、このまま突いて……！　お願い…」

「可愛い…、藤堂。　もっと見せて。　俺に感じてる顔……」

激しい腰の動きが、突然緩くなった。
またどうしようもない気持ちが、体の中に閉じ込められてしまう。

「嫌だ……、矢田のバカ。　もっと、もっと欲しいのにーーー」

「まだダメ…。　？藤堂に、気絶する位の気持ちイイ思いさせてあげるから」

薄く消えて行く余韻を離したくなくて、夢中で手と脚を絡ませた。

「まだダメーーー」

オレのもどかしい思いを分かってるクセに、
矢田は腰の動きを完全に止めてしまった。

「嘘、嘘……、酷い。　ココで止めるなんてーー」

絡めた腕をそっと解いて、
ソイツは体を起き上がらせた。

それから、
オレの中心部に手を這わせて……

「ああーー…っ！？」

またゆっくりと抜き挿しを始めた。

「ああ、……やば…っ、ハア…っ」

体を極限まで高められるのに、緩い動きじゃあソレ以上の快感が得られない。

めちゃくちゃ気持ちイイのにーーー！

極限の昂りがやって来ない。

それでも矢田は、

オレのソコを優しく攻め続けた。

「藤堂のココ……、凄く赤くなってる」

摘む様に回りを指先で擦られた。

「……っあ、ダメ、ああぁ！！」

突然の鮮烈な快感に身体がヒクついて、イキナリ絶頂の渦がやって来た。

矢田はオレの感度を全て察してる。

すぐに指は離されてしまった。

「嫌だ…、矢田…！　死んじゃうよ。　お願いだから……」

モヤモヤした絶頂途中の快感は、余りにも苦し過ぎた。

頭も身体も、

与えられない極限の快感を求めて狂い始めてた。

「イキたい？」

涙を滲ませて何度も頷いた。

それを合図に
オレの両足を一杯に押し広げると、
これまでに無い位
激しい動きで中を突き上げ始めた。

「ああぁ、ああん、ハア……っイイ！　矢田…！」

その動きは　もう止められる事は無くて、
ギリギリまで高められた内壁を激しく突き上げ続けた。

もう、もう……気持ち良すぎてどうしようもない。
動物的な悲鳴を上げて悶えた。

受け止め切れない絶頂がとめど無く押し寄せる。

ソコから体液が溢れ出して来た。

絶頂がいつまで経っても終わらない。

身体の全部が敏感になり過ぎて、狂った様に声を上げた。

霞れた視界の中に、
目を潤ませてオレを見つめる美少年が映った。

頬が上気して仄(ほの)かに赤い。
ソイツも息が小刻みに上がってる。

激しい動きで攻め続けながら、喘ぎ悶えるオレの顔をうっとりとした表情で見下ろす。

その腕の中で
溜まらない位感じ続けた。

「藤堂…、気持ちイイ？」

「うん…、ウン、ッああ！？　？ハアッ、イイ……、イイよ…！」

身体がガクガク震え出した。

全身に力を入れないと耐えられない程の凄まじい快感だった。

矢田が力一杯突き上げる度、
ソコから体液が溢れ出して流れ落ちる。

「ハア…ッ、ハア……、ああぁん！」

どうしようもなく気持ち良くて、溜まらなくて…、

矢田の首に腕を回して縋り付いた。

応える様に身体が動いて、繋がってる部分が見える位　脚を押し広げられる。

それからソファの振動を利用して、更に強く打ち込まれた。

「あああーー！　イク…、イっちゃう……！」

もう何も見えない。

オレ達を繋ぐ卑猥な音と、

二人の体液の混ざった官能的な匂い。

交わる吐息。

固く閉じた瞼の奥に
オレ達の姿が映し出される。

鳴き声か喘ぎ声か分からない声を上げて、

絶頂の更に高みへ追い上げられて行った。

息継ぎも儘ならない位激しい呼吸を繰り返して、

身体をビクビク震わせて

全身で快楽を味わった。

オレが絶頂の最期を迎えてからも、矢田の攻めは止まらなかった。

一度経験した高みは

味わってしまえばクセになってしまうんだ。

矢田に攻め続けられる間、その快感は何度もやって来た。

涙か唾液か分からない。

汗か体液かもーーー。

まるで

麻薬みてえに、

頭を占領する快感を貪る。

次第に矢田からも
吐息混じりの喘ぎ声が聞こえ始めてた。

「ねえ…っ、藤堂さ…、ココから血が出た事…ある？」

“ココ”、って中心部を愛撫しながら聞かれた。
絶頂と混ざって感度が倍になって、一気に昇天して行った。

「あぁぁーー！　無い…、無いよ…！」

「そうーーー」

残念だねって呟いては突き上げる。

矢田の息もどんどん上がる。

「…藤堂…、俺……もう、イキそう…」

美少年の顔が苦しそうに歪んだ。

「残念て、…ハア…ッ！　ざ、残念て、何がーーー」

オレの両手を取って、
指を絡ませる。

荒い息を吐きながら
激しい口付けを交わした。

お互いの吐息が口の中で漏れる。

「ーーん、藤堂がお母さんになる準備…。　まだなんだね……」？

舌と舌が、糸を引いて離れる。

強く激しい動きが更に加速度を増して、一気に高みへ追い上げられて行った。

それから矢田は何度か体を震わせて、ギュウっと手を握りしめて声を上げた。

オレの中で熱い何かがドクドクと弾けて行くのを感じた。

汗と体液でヌルヌルになったまんま、息を震わせて二人抱き合った。

「ーー藤堂…。　いつか、俺の赤ちゃん産んでね…」

ハアハアと息継ぎを繰り返して、矢田がそう言って微笑んだ。

それからも甘える様に重ねて来る唇を受け止めて
冷め切らない余韻の中、矢田の腕の中でそっと目を閉じた。

「きっと子供は女のコだよ。　藤堂に似て、お転婆な子」

お互い裸のままソファに横たわる。
腕を絡ませ、オレの髪を指先で遊ばせながら矢田が呟いた。

「俺が毎日ご飯作って、たまに藤堂が“たまごやき”を作ってくれるんだ。　それを皆で食べて、お昼になったらあの公園で一緒に遊ぶんだよ」

現実味の無い夢物語りを、矢田は嬉しそうに目を細めてオレに話した。

「皆で一つの部屋に横になって、俺と藤堂の間に子供を挟んで寝るんだ…」

そう言いながら呟く少年の目は、優しさと哀しさを相混ぜた様に潤んでた。

「そしてね、皆いつも一緒なんだよ」

「お前、何で泣いてんだよ」

微笑みを湛えて話し続ける少年は、いつの間にか泣き出していた。

甘える様に、

オレを腕の中に入れて抱き締めて。

自分の夢を語りながら涙を流して、時折グスッと鼻を啜る音が聴こえる。

「藤堂…。　俺、幸せだよ。　藤堂が俺の側に居てくれて…、受け入れてくれて…」

裸の胸元に顔を寄せて抱き締め直すと、矢田はまた　すすり泣いた。

「こうやってお母さんにも甘えてみたかった…」

肌を擽る柔い髪。

オレよりも年上の筈なのに、まるで子供みてえに甘えて来る少年。

だけど、寂しさや悲しさを隠そうとしない少年の姿は

オレの中に眠ってる母性をやんわりと刺激して来るんだ。

「矢田って泣き虫」

「ーーウン」

小さく震える背中に腕を回して背中をさすった。

オレの手が火傷痕に触れた。

矢田は気持ち良さそうな声を出して、何度か目を瞬いて

オレに抱きついたまま濡れた瞳をゆっくり閉じた。

そのまま自分も堕ちる様に暗闇に引き摺り込まれて行った。

薄暗い密室で、二人寄り添って裸のまんま眠った。？

真っ暗い意識の中で、
相模の声が聴こえた。

“クソ……！　お前、約束覚えてんのかよ!?”

相模ーーー。

“ルイ、何処へも行くな。　お前は俺の女だろうが…！”

夢の中の相模は怒ってて、強引にオレの手を引っ張ると
アイツの胸元に引き寄せられた。

夢の中でもアイツの匂いがした。

相模……。

数時間前まで一緒に居た筈なのに、目の前のその顔はとても懐かしく感じた。

“早くお前に会いてえ……。　早く、この腕にお前を抱かせてくれ”

目の前に居る筈の相模が呟いた。

“リョウに惚れないでくれ。　お前はずっと俺の物だ…！”

アイツはオレの頬を両手で包みこんで…

熱い口付けを落とした。

熱い

熱い、

相模の唇の感触がした。

“ルイ、お前が好きだーーー”

何度もキスをして

抱き合ううち

その感触が少しずつ遠くに消え始める。

相模……？

“忘れんな、俺の想いを。　お前を感じていいのは俺だけだ”

相模ーーー。

声も、温もりも

オレの体からどんどん消えて行く。

“お前、何してんだよ”

頭の奥で、

新しい声が響いた。

消えてしまった相模の代わりに、いつしか夢で見た時と同じく自分の姿が映る。

目の前にオレが居る。

無言で佇んでオレを睨みつけて来る。

“　お前、何やってんだよ　”

ソイツは怒った声でオレに語りかけて来た。

“　本当は相模の方が好きなクセにーー！　”

……バカ、言ってんじゃねえよ。

“　バカなのはお前だよ！　あれだけ言っただろうがよ　”

やっぱりオレは泣いてた。

辛そうに、顔を歪めて…。

“　ーー後悔してるんだ…　”

そう漏らして涙を流した。

“　相模に伝えて……。　お前が好きだって。　大好きだってーー。
　頼むから…！　”？

何、言ってんだよ？

“　頼むから伝えてーーー　”

夢の中のオレは、いつも泣いてる。

辛そうに

相模が好きだって言いながら。

“　変えてくれ、未来をーー　”

そして、あの時と同じく
またその姿が薄らいで行く。

オレの心にモヤモヤした蟠り(わだかま)を残したまま、目の前のソイツは涙で
目を腫らした顔でオレを見た。

“そうすれば、オレは今度こそアイツの全てを受け入れるから……
”

待てよ。

教えてくれ、オレら　これから何があるんだよ?

目の前のオレは、無言で目に涙を溜めて首を振った。

そのままどんどん消えて行く。

真っ暗な夢の中で

オレの声が何度も響いてた。

“　未来を変えろ……。オレと相模を助けて?”

分かんねえよ、
そんなんじゃ…。

“助けて…”

消え入る様に小さく掠れる声。

哀しく響くその声は、
オレの意識の奥の方へ薄らいで行くと、とうとう消えて無くなった。

瞑った瞼が熱い。

そこから涙が一筋流れ落ちた。

少年天使　４（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます！！

ここまでで更新全部ＵＰです。

次回更新まで暫くお待ち下さいませｍ（＿＿）ｍ

目尻を拭う、
しっとり温かい感触が伝わる。

何か分からないけど、それはペロペロとオレを慰める様に目尻に滲んだ涙を何度も拭って来た。

「……ん」

変なの……。

何だか気持ちいいや。

その感触に、次第に意識がはっきりして来る。

「ーーん？」

ゆっくり目を開けると、

赤くて小さめの舌を這わす美少年が見えた。

「ー矢田…」

そうだ。

矢田に抱かれて、そのまま眠ってたんだ。

「藤堂、寝ながら泣いてたよ?」

オレが目を覚ますと
目尻を舐めてた舌を離して、代わりに両手でオレの頬を撫でた。

矢田の手は少しひんやりしてて、涙で火照った顔を優しく冷ましてくれる。

それから顔を覗き込んで、そうっと触れる様なキスを落とした。

さっきまでの激しい行為を思い出して、そのキスにちょっとドキドキした。

目の前にいるソイツは
やっぱり天使みてえで、フワッと笑うと凄え愛嬌があって、

乱れて額に掛かった金髪から覗く顔を見ると、どうしようもなく見惚れてしまう自分が居る。

それは間違いなく、

さっきまで喘ぎ乱れるオレをうっとりと見つめてた、あの少年なんだ。

ひんやりした手も
独特の良い匂いも
艶かしい体のラインもーーー

全部がオレを狂わせたんだ。

「怖い夢でも見た？」

「ーーん」

少しだけ見つめ合って、
それから抱き合ってキスした。

あったかくて

甘くて

真っ白い感じ。

矢田と居る時は
時間がゆっくり流れる。

チュッと音を立てて唇が離れた。
見つめられるとやっぱりドキドキした。

「着替える前にさ…」

「うん？」

サラリとした柔い手が
何度も頬を上下した。

その手はゆっくり上に上がり、サワサワと手グシで髪を掬(すく)っては撫でた。
気持ちよくて目を瞑った。

「藤堂の事、抱きしめたい」

凛とした少年の綺麗な声が聴こえる。

その声は耳元で囁かれ、

掠れた吐息がそのまま聴こえて凄くゾクゾクした。

「ーーん」

矢田の腕が身体に回され、後ろから抱き締められた。

密着した裸の感触はめちゃくちゃエロくて…、

でも、暖かくていい匂いがして…。

甘える様に頬ずりされると、胸の奥が溜まらなくキュウっとうずいた。

「藤堂大好き…。　俺、どんどん好きになっちゃうよ。　本当にヤバイ位……」

「矢田ーーー」

「柔らかいね、藤堂…、いい匂いするね」

「お前も　するよ？」

「そう？」

「うん。　そう」

後ろから覗き込む少年と目が合った。

顔をフワッと緩ませ、花の様に笑った。

「ふふ…、可愛いね。　女のコの顔してるよ？」

ドキドキが止まらなくなった。

「藤堂大好き」

今、この状態でのキスは反則だと思った。

だって、心の全部が持っていかれる。

矢田の想いで埋め尽くされる。

心が癒されてあったかくなる。

「ちっちゃいオッパイも好きだよ？」

「……うるせー」

「いいじゃん」

クスクス……

甘い。

甘すぎる時間だったーーー。

矢田はやっぱり綿菓子みてえに甘い少年だ。

キスも

声も

お前との時間も……、

全部が砂糖菓子みてえに溶けちゃいそうだ。

少年天使　6

数時間振りに薄暗い室内から外に出た。

白昼の街は、太陽に照らされて眩しかった。

半壊の店までも光の反射で綺麗に見える。

店の目の前に
見慣れた黒塗りの高級車が一台。

オレらがそれに近付くと
待ち構えてたとばかりに一人の男が姿を現し、

無言で後部座席のドアを開けた。

いつ、いかなる時でも気の訊くその男は　どこかヤツれた顔をしていて、僅かに哀愁を漂わせていた。

矢田は先にオレを中に入れた。

「タツ、何だって？」

いつもより元気の無いその男に話し掛ける。

「……聞かないで下さい」

ソイツは顔が青白かった。

「怒ってた？」

「……ええ、そりゃあもう。　さっきからＳ．Ｐ達の泣きの電話が何度も…」

そう呟いてる矢先、男の胸ポケットで携帯が鳴った。

ピルルルル…

「ああもう……！」

ガシャガシャ頭を掻くと
半ば投げやりに電話に出る。

やっぱりソイツの携帯は厄災だと思った。

「お前ら…！　頼むから若を引き止めろ！　相手方は若じゃねえと無理なんだから…、ああ！？　ジェットをハイジャックだ！？　アホウ！　アホンダラ！！　早う止めんかい！！」

相模が暴れてる。

しかも機内で。

よく分かんねえけど、ゲンじいはハイジャックとか何とか言ってた。

「ああ！？　機長を脅してるだあ！？　アホウ！！　お前ら早う裏に手え回せや！　契約破棄でも何でもええから脅せ！　絶対現地へ向かわせろ！」

やっぱりあれは正夢だ。

相模の生霊がオレに呼びかけて来てたんだ！

携帯から誰かの叫び声が漏れてる。

この空の上で一体何が起こってるんだろう。

ギャーギャーと人の悲鳴が大きくなる。

終いには、何かが壊れる音まで加わり、ゲンじいは片眼を瞑って耳から携帯を離した。

「クソウ…！　若がキレちまった…」

相模が怒ってる。

その姿は今　見えない筈なのに、ゾワゾワと悪寒がした。

オレらが何だかんだしてる間に大変な事になってた。

矢田が相模に挑発的な電話をしたから。

『タツも嫉妬で苦しめばいいんだ』

相模は嫉妬を通り越して、怒りが頂点に達したんだ。

オレを絶対矢田に会わせるなって念押してたにも拘らず、

矢田は相模の包囲網を潜り抜けオレの前に現れた。

そして今からオレを抱くって電話を掛けたんだ。

もしかしたら、あの時の叫び声が電話越しに聴こえちまったのかも。

最初、矢田は本当に怖かったから……。

「貸せ」

矢田がゲンじいの携帯を奪い取った。

「おい、この携帯スピーカーに繋げ」

電話の向こうの相手に向かって「いいから早くしろよボケ」と、さっきまでとは想像出来ない恐ろしい声で唸った。

？

その様子を車内で見てたオレの方へ体を向けると、手に持ってる携帯を差し出して来た。

「……？」

「ん。　機内のスピーカーに繋いだから」

恐る恐るその携帯を受け取り、耳に充てた。

“若!!　冷静になって下さい…!”

騒ぎ立つ機内の音がそこから聴こえる。

バタバタと忙(せわ)し無い足音に、何かが壊れる様な振動が電波を通して伝わって来る。

“うるせえ!　おどれら俺の命令が聞けねえんか!?　今すぐ引き返せや!!”

ガツン!!　と鈍い音がして、その後人の呻き声が聴こえた。

次いで、幾つものグラスの割れる音ーーー。

“死にてえんか、ああ!?”

“あ、あかん、無理じゃ。　とてもじゃねえが自分らには手に終えんぜ…!?”

“うわっ!?　若!!　ホンマに落ち付いて下せえ!!”

電波越しでも分かる。

何かが地響きを立ててひっくり返るみてえな凄い音が響いた。

それはオレの想像を遥かに越えた、恐ろしいまでの惨劇の状態だと思った。

「相模……」

ポツリと呟いた時だった。

それまで聞こえてた嵐の様な騒音が……

まるで時間が止まったみてえに突然ピタリと収まったんだ。

本当に

急に

静かになった。

“ルイかーーー?”

静まり返った電話越しに

オレを呼ぶアイツの声が聴こえた。？

見えねえけど

電波を通じて相模を感じた。

アイツの声だ。

「アンタ……、何してんだよ。　そこ、機内なんだろ？　危ねえじゃんか」

“ルイお前……”

「危ねえよ、相模」

目に見えねえのに

携帯越しに聴こえる声は

目を瞑ればすぐに相模の姿を映し出してくれる。

“お前…、リョウに何された…”

「……何も、ないよ」

相模に嘘ついた。

ツキン、て胸が針で刺されるみてえに痛んだ。

“何も無え訳ねえだろうが！　お前、どれだけ心配したか分かってんのかよ！？”

声が大きくなる。

きっと相模は近くに居るんだ。

「オレは大丈夫だから…」

“ふざけんなよ…。　そんな嘘、見抜けねえと思うか！？”

「相模ーー」

“頼むから、リョウから離れろ…！　俺が戻るまで二度と会うな”

「無理だよ」

“無理じゃねえ！　そうしろよ！　……クソ、俺をコレ以上怒らせんな…！”

「相模…」

そこに相模の姿は無いのに、今、強く抱き締められてると思う。

怒ったまんま

オレを抱き寄せて……。

きっとそれから

両手で顔を包みこんでーーー、

「おしまい」

相模の声に浸ってた
オレの妄想は、

イキナリ耳から携帯を取り上げられた矢田の声で終わりを告げた。

「タツ？」

イジワルそうに矢田が微笑んだ。
？？

片手をポケットに突っ込んで顎を上げて話す矢田は、何だかふてぶてしく見えた。

「タツのばか」

開口一番、

矢田はそう言うと拗ねた子供みてえにブスっと頬を膨らませた。

「タツのバカ！　こうなったのも全部タツが悪いよ。　タツが藤堂を独り占めするからだよ。
藤堂の声聞けて嬉しい？
それとも会いたくなった？
俺、藤堂を抱いたから。
めちゃくちゃ可愛いかったし気持ち良かったよ。
藤堂めちゃめちゃ悶えて感じてたよ。
あ、こっち戻って来たくなった？
仕事投げ捨てて？
タツ、仕事は最後までやり遂げないと、男じゃないよ。
ちゃんとやる事やってから戻って来てよね」

ブツッ！！

「……」

「……」

オレもゲンじいも無言でその様子に見入ってた。

矢田は電波越しの相模に一方的に捲し立てると、有無を言わさず携帯の電源を切った。

「オラ、さっさと運転しろよ」

電源の切れた携帯をゲンじいに渡し、オレの隣に座った。

それから矢田はオレを見て、
ニコオっとめちゃくちゃ可愛い顔で微笑んだんだ。

「……」

「藤堂、目が点になってるよ?」

クスクス…。

何事も無かったかの様に
ニコニコと笑い掛ける少年。

「……」

矢田だけは敵に回すもんじゃない。

マジでそう思った。

「はあ～～～…」

ゲンじいがハンドルを抱え込んで、大きな溜息を吐いた。

呪われた組　1

二人の若
呪われた組

今日は静かな歓楽街。

ポツポツと歩行者の居る通りを、ゲンじいの運転する黒塗りの高級車が走り抜ける。

本来安全が守られる筈の歩行者達は、
スモーク貼りの如何にも的な車が悠然と接近するや否や、まるで蜘蛛の子を散らす様にして道路の端に散らばって行った。

車はその中を我が物顔で走行する。

ほんの数ヶ月前までは、
オレも取巻きと同じく遠目で見る方の立場だったんだって思うと
何だか不思議な気分になる。

親父に騙されて京王に進学してからというもの、
オレの生活は目まぐるしく激変しちまった。

オレに一生縁の無さそうな裏社会に生きる男に半ば脅され、
「お前をオンナにしてやりたくなった」なんて恐ろしい発言そのまま
ズルズルとブラックな世界に引き摺り込まれて行ったんだ。

誰が想像しただろう。

この、男勝りなオレが

男に気に入られ、

女を開発され、

オマケにヤクザん中で世話になって

今やその世界に浸かり込んじまってるなんて……。

ーーーいや、

男勝りだからこそ

こんな事になっちまったのかも。

普通の娘なら

こんな学校入ったりしねえか。

そういや、ここって男子校だし……。

だからオレはサラシ巻いて、こんな事してんのか……。

「ーーん？」

過去を振り返ってた時、何となく気になった。

そういや、
何で親父はオレにサラシを肌身離さず着けろとか
男らしくなれとか言って来てたんだろう。

「……」

まあ、今となっちゃあ
そのお陰でオンナってバレねえ訳だけど。

「……ん？」

いや、

違くねえか？

そのお陰でバレねえって……。

まるで、オレが男子校に進学する事を想定して

親父がオレを育てたみてえじゃねえか……。

男に見える様に……。

「……いや、無い。　絶対無い、そんな事…」

あり得ねえって。

だって、それってーーー

親父は元々オレを京王に入学させる為に、業と男みてえに育てたっ

て事じゃんか。

いや、まさか……、

あの親父に限って
そんなに頭が回るとも思えねえ。

だって、それなら

オレがこんなに男らしく育ったのも
あんなに鍛えられてたのも
数々の大会を総ナメにして来た経歴も

全部親父の策略みてえじゃねえか……。

“ほんに、よう似とるわい”

ふいに

入学当初の校長の言葉が脳裏を掠める。

“お嬢がおなごじゃというのは、最初から知っとった”

校長はオレに言ったんだ。

“ワシがお嬢を受け入れたんはーー”

“お嬢が　特別　じゃからじゃ”

「イヤイヤ…」

でも

確かにオレを見て、

“お嬢は、本当の両親に会いたいとは思わんか？”

そう言ってたーー。

「イヤイヤ…」

無い無い、

絶対無い。

良く分かんねえけど、
あり得ねえ。

親父の事も、

校長の意味深な発言も……。

だって、ますますおかしいだろ。

親父でさえ
オレの実の両親を知らねえのに。

何で進学先の校長がオレの出生を知ってるんだよ……

「藤堂さっきから独り言多いね？」

「……え」

突然掛けられた声と共に、頬を撫でる少し冷やい手の感触が

考え事で一杯になってる頭の中にスルリと入り込んで来た。

呪われた組　2

振り向いた先に
オレを見つめる穏やかな顔の美少年。

「考え事？」

オレの頬に手を充てたまんま、不思議そうに顔を覗き込んで来る。

「あ…、うん、ちょっと」

「ふうん」

考えれば考える程分かんなくてモヤモヤしたままの謎は、
結局矢田の言葉と共に頭から薄れて行った。

「タツの事？」

心に大きな蟠り（わだかま）を残したまんまーー

「さっきタツに言った事、怒ってる？」

目の前の少年天使に意識が持っていかれる。

澄んだ瞳にオレを映す少年は

探る様にジイッとこっちを見つめて、親指の腹で何度か頬を撫でて来た。

「藤堂が俺に抱かれた事…、タツに知られたく無かった？」

滑らかな指の感触は

オレの何処に触れても気持ちイイんだ。

「……」

凛とした瞳を向ける少年。

澄んだ瞳のその奥に、

オレも知らなかった男の欲望を隠し持つ事を　ついさっき知った。

あの時確かに、それまでオレの心の殆どを占領してた相模の記憶が
段々と少年の残す甘い余韻に摩り替わって行くのを感じたんだ。

でも何故か、その事実を相模に隠そうと思った。

“お前…、リョウに何された…”

不意打ちだった相模との会話で、オレは咄嗟に「何もないよ」って、
嘘吐いた。

相模に言えなかった。

どんな理由だろうとも
矢田に抱かれたのは事実で、

ーお前と離れるのが怖いー

あの時、心の奥で思ってしまったから…。

矢田の夢を叶えてやりたい、って……。

ーほんの少し手を離した隙に、お前が遠くへ行っちまいそうだよー

相模の言葉がマジに現実味を帯びてて、
取り乱すアイツを前に
どうしても言えなかった。？

オレは卑怯だ。

やっぱり結局、
相模も矢田もどっちも選べない。

どっちに対しても

宙ぶらりんのまんまなんだ。

どっちの手も受け入れてしまう。

現に今

相模と離れてすぐ
こんな事になってる。

まだ、ほんの少しの間しかアイツと離れてねえのに……、

「藤堂…、黙らないでよ」

オレは早くも揺らいでるーーー。

「悪い、また考え事してた……」

「やっぱりタツが好き？」

この少年天使に

早くも惑わされてるーーー。

「俺とあんな事しても、まだタツの事考えてるの？」

「矢田…」

少年はジッと目を見つめて

段々と顔を近付ける。

頬に充てた手が少しずつ暖かくなる。

オレがこの顔に弱いの知っててーー

「でも藤堂の顔が赤いの、俺のせいだよね？」

業と心を揺さぶって来るんだ。

こんなに時間を掛けて見つめられて

オレが耐えれる訳ねえのに。

「ーーー好き？」

少し下を向いた少年は

長い睫毛が掛かって、

綺麗な瞳を僅かに隠してる。

「何、言ってんだよ」

いい匂いにどんどん包まれてく。

赤くて柔らかそうな唇を少し開けて、

少年は更に顔を寄せる。

「タツと俺。　どっちが好き？」

甘く呟くと、

軟らかな吐息を漏らす。

それはオレの唇に僅かに触れた後……

今度はゆっくりと唇を塞いだ。

「……っ」

チュッと音を立てて離れて、

赤い舌がオレの唇を舐める。

甘い蜜でも舐るみてえに。

「藤堂はどっちが好きなの？」

独り言みてえに呟いては唇を重ねる。

「俺はドキドキしちゃうよ。　藤堂とこういうコトしてる時…」

甘える様に
首に腕を回して

なのに何処か強引なキスは
オレの心を掻き乱す。

「藤堂が好きで溜まんなくなっちゃうよ?」

唇の付いては離れる音が
車内に響く。

少しずつ矢田の体重が掛けられ、シートに凭れる様にしてズルズルと押し倒されていった。

「うあ……」

矢田の手は

サラシで巻かれて平らになってる胸元に充てられる。

そこを微かに摩(さす)りながら甘い舌が攻め立てる。

薄目を開けてキスを続ける少年が目に映る。

「オレだってそうだよ……」

キスの合間に呟いた。

矢田の胸元に手を充てて距離を取ろうとした。

矢田はオレの手を掴んで、そこに口付けを始める。

「オレだって…、ドキドキするよ」

「そうなんだ…」

柔い、こそばゆい感覚。

矢田は指を口に含み、
舌を緩く動かしながら
音を立てて吸い上げた。

「バカーー」

「フフ…」

変に息が上がる……。

矢田のは何でも気持ちイイ。

「でも、相模の時もそうなるよ、オレ」

「ーーウン」

ソイツはオレの指を何度も舐め上げた。

暖かい感触にスッポリ包まれては離される。

「お前らのどっちにも翻弄されちまうんだよ」

「そう……」

アイスを舐めるみてえに
唾液で音を立てて

口に含んで舐め上げる。

「何、してんだよ？」

「ん、エッチな事」

確かにエロい。

見てる方が恥ずかしくなる。

ただ、指を舐めてるだけなのにーー。

「じゃあ、藤堂と長く一緒に居た方の勝ちだね」

「え？」

咥える指を二本に増やした天使は、上目遣いでオレを見た。

「藤堂は流されやすいんだよ」

「……ウン」

確かに。

「だから、沢山居れば居るほど相手を好きになっちゃうんだよ」

「……ウン」

それ、言えるかも。

チュプって音を立てて

矢田が指を咥え込んだ。

「じゃあ、俺　今チャンスだね」

「…そう、なんか？」

「ウン」

赤い舌で下から上にツウ…と指を舐め上げる。

その表情にゾクリと鳥肌が立った。

「暫く藤堂と俺、二人きりでしょ？　そしたら藤堂、俺を好きになるね…。　きっと、そうなっちゃうね」

そうっと指から舌を離すと、少年天使はニッコリと微笑んだ。

「……もっとエッチな事する？」

「し、しない」

「何で」

「何でって…、さ、さっきしたばっかじゃねえか」

「ウン。　だから？」

「だからって…、あのなあ…」

矢田は有無を言わさず
シャツのボタンを真探り出した。

さっき引きちぎられかけたボタンは、少し引っ張るだけで呆気なく
外れて行った。

「待て……、マジか、それ」

「ん。　マジ」

はだけた胸元に顔を寄せて、少年は鎖骨に口付けた。

「バカ、マジでやめろ」

「ヤダ」

やっぱ何しても気持ちイイ少年のキスは、オレから抵抗を奪って行く。

「う……」

その感触が疼き始めた時、

「ああ！？　あんのバカタレ共があ！！」

ゲンじいのそんな呻き声と共に車が急停車した。

「……は？」

「……」

考える間もなく、

バンッ！！　と窓を叩く音。

「こんの、クソバカが！！」

そしてゲンじいは窓を開け怒鳴る。

「……」

「……」

何となく嫌な予感がした。

不意に上を向くと…

「ひっっっ！？」

後部座席の窓にベッタリと貼り付く、謎の物体が２つ…。

『あぼびぶぶ』

『ぐえぶばー』

こっちを覗き込んで何か言ってた。

「ー妖怪」

矢田がボソッと呟いた。

呪われた組　4

ソイツらは中を覗き込もうとして更に顔を押し付けて来る。

べちょって窓に映し出されるタコ顔……。

それは正に妖怪そのものだと思った。

そのうちの一人がオレらを見て鼻血を流し始めた！

「ーー汚い」

奴らは更に荒い息遣いでオレらを見て来る！

「お前ら店抜け出して何晒しとんじゃゴルぁ！！」

とうとうゲンじいが車を降りて、二体の妖怪の頭を鷲掴みにした。

『ふんぐえーー！！』

妖怪達は奇声を上げて暴れ出した。

そんな時間が5分は続いた。

コイツらが現れるといつもめちゃくちゃだ。

「いやん、ルイくんが羨ましい！　龍さんともリョウさんともあんな事しちゃうなんてっ！　やん、ルイくんのエッチ！！　この見境ナシっ！！」

「……」

ソイツは一方的に喋り終えるとバンバンとオレの肩を叩いた。

どう見ても楽しそうだった。

「ル…、ルイくん…グホアっ！！」

もう一人の方がまた鼻血を吹いた。

あれから半ば強制的に店に連れ込まれたオレらは、

今や見慣れた店内でされるがままになってる。

その場所も大分悲惨で、
店内に散らばった椅子や破片を数人のネーちゃん達が片付けてた。

妖怪達と同じく、
そのネーちゃんらもオレと矢田の姿を見るとキャーキャー言って喜んでた。

「藤堂、知り合いなの？」

怪訝そうな顔でオレを見る矢田。

「ちょっと……」

言えまい。

ココで相模に襲われ鼻血を吹いたとは……。

「ルイくん、ココで龍さんとエッチな事して鼻血出して倒れたんだよ？」

妖怪1が余計な事を言いやがった。

「ふうん……」

矢田は声のトーンを落としてつまらなさそうに呟くと、ジロリとオレを見た。

「何だよ…」

「じゃあココって、藤堂にとって思い出の場所？」

「そ、そんなんじゃねえよ」

いつの間にか周りにはネーちゃん達が群がってて、皆うっとりとした顔で矢田を見つめてた。

その目は正に恋する乙女の瞳だと思った。

ウン、

やっぱそうなるよな。

オレだけじゃなく、誰だって。

矢田の魅力には理性では決して適うまい。

「そういえば噂でさあ、昨晩から男の人が龍さんの女を捜してこら辺ウロウロしてるって聞いたよ？」

そうしてオレも矢田の横顔を見てた時、

ふいにソイツが喋り出した。　？

「うん、サナも聞いた」

妖怪2も相槌を打つ。

「でもさあ、龍さんの大事な人って……」

「な、なんだよ」

ゲンじいに妖怪……、もといレイナとサナ、矢田までが一斉にオレを見た。

「だって、龍さんが唯一大事にしてるのって　ルイくんじゃない。
だったらその人、一体誰を捜してるんだろ」

綺麗にメイクした顔でジイッとこっちを見て来る。

どうも店は営業してる気配がねえのに、

レイナは今日もシースルーのキャミソールにショーツ一枚の半裸に近い格好をしてた。

やっぱ見てるこっちの方が恥ずかしいと思った。

「知らねえよ、そんな事…」

やっぱレイナは良い匂いがして、

色気があって、

ピンクのシースルーから透けて見える胸とか、真っ白い肌とか……、

触るとぷにょってなりそうで。

同じ女でもオレとは全然違うんだ。

「だって……、龍さん言ってたもん。“仕事”は終わりだって。ルイ以外は二度と抱かねえって」

「ふうん…」

隣で矢田がつまらなさそうに呟いた。

相模だって男だし、
本当はこういう女らしいのが好きなんじゃねえんかな。

オレ、胸もホントに無いし。

見た目男だし。

レイナみてえに可愛く出来ねえし……。

「……」

何だ、この胸のモヤモヤは。

「藤堂、また考え事してる」

「うん……」

アイツ、オレの何処が良かったんだろ。

「ねえねえ…」

上の空だったオレの肩をツンツンしてくるレイナ。

「……なに」

その仕草も可愛い。

オレ、あんな事出来ねえ。

モヤモヤモヤモヤ……

モ…「男同士って、ど、どうやってするの？　エッチ」

「……」

ポッと顔を赤らめて

レイナは突然凄い事を聞いてきた。

「へえ。　男同士……」

また矢田が呟いた。

？

「ブフッ……」

ゲンじいが口元を抑えて変な声を出した。

肩を震わせてる辺り、
多分笑ってやがるんだ。

「やっぱ龍さんのエッチって、男の人でも感じちゃう？」

レイナはカウンターに両手を付いて、まるで女彪みてえなポーズでオレを見て来る。

何を想像してんのか、頬を赤らめて見つめる表情は？

まるで発情した矢田みてえだと思った。

「知りたいの、お前？」

そしてオレの隣で聴こえる声は、何度と無く惑わされて来たあの美少年のもので。

ソイツは突然俺に腕を絡ませ、ほっぺにチュッとキスをした。

「ばっ、や、やめろよ」

それだけで回りのネーちゃん達は大騒ぎだった。

その上矢田は少し体を浮かせてオレの正面に回り込むと、赤い唇をそっと重ねて来たんだ。

「いやん、ああっ、こんなの間近で見れちゃうなんて…っ！　ヤダ興奮しちゃう～！」

「ル、ルイくんが……、はぐぁ！」

「ちょ…っ、矢田…！？」

矢田は公衆の面前で唇を重ね、
しかも甘える様に何度かチュッて音を鳴らして、
しかも舌まで入れてキスを繰り返した。

その間、レイナとサナの声に混ざって色んなネーちゃん達の黄色い悲鳴が店中に響いてた。

悲鳴は悲鳴でも、多分喜んで出してる感じがした。

「……ムっ、バカ、こら…、矢田!?」

「藤堂とのエッチ、めっちゃ気持ちイイ。　俺、またしたい」

目を潤ませて口付けながら矢田が声を漏らした。

「ええ、もしかしてルイくん、リョウさんとも!?　えっ、ええー!?　いいなー!!」

オイ、レイナーー。

悲鳴が歓声に変わって、その後雄叫びが上げられる。

「レイナもしたくなっちゃった…。　あんもう!　ルイくんいいな…」

「おわ、…この店エロいネ」

矢田がオレにキスして来た事で熱気立ってた店内に、
見知らぬ男の声が突然聴こえた。

「レイナも……」

さっきまでキャンキャン騒いでたレイナが静かになって、声の方を向いて固まる。

「はあ!?　何、ココってゲイＢＡＲなワケ？　つかオネーチャンイイ子揃ってんじゃん」

突然現れた声の主は遠慮を知らねえみてえで、
オレの頭の後ろでズカズカと中に押し入る足音が聴こえた。

「い…いオトコ～。　龍さんの次に…」

「あん?」

ポツリと漏らしたレイナの声に反応して、ゲンじいがジロリと後ろを見やった。

「うわっ、レイナちゃんじゃね!?　マジ!?　俺凄えお世話になってんだけど。　おお、モロ見え…。　エロいネ」

「ん～、声もイイ感じ」　？

何だろう。

何となく…、

あのチャラい喋り方に聞き覚えがある様な……。

呪われた組　6

「何だあの野郎は」

ゲンじいはどうも声の主が気に入らないらしく、

さっきから威嚇する様な目線を向けてる。

こっちはこっちで相変わらず矢田がキスして

ネーちゃん達が騒いでて……

「何、もしかしてレイナちゃんとエロい事出来んの、ココ？」

「ん～、あたしとはねえ　ホントはさ、お金注ぎ込んでくれた人だけなんだけどね。　お兄さんならイイよ」

「おお、マジで！　ヤリ。　俺ってめっちゃラッキー？」

「おどれ勝手な事すんなや！　レイナ！　お前ヤんなら金取らんかい！」

「おおこわ…。　イイの？　後ろでお兄さんめっちゃ怒ってるケド」

「ウンいいよ」

「レイナ！！」

後ろは後ろで、
修羅場みてえな空気になりつつある。
この状況でネーちゃんらはよくキャーキャー言って喜べるなって思った。
「ハア…ハア…、ルイくんが……、リョウさんに食べられ……、フグァ！」
ココにも一人……。
おかしな奴が……。
「ヤダよ～。　あたしこのお兄さん欲しい」
「ヤベ、いい匂いすんね。　レイナちゃん、胸とかモロ当たって来てるんですケド」
「ねえ、今からしよーよ」
「ええ加減に晒せよ！！　本気に怒らせたいんか！？　このクソバ

カが！！」

ゲンじいがとうとう身を乗り出して来た。

「お兄さん、女のコには優しくシテあげねーと嫌われちゃうヨ？」

「ああ！？　何じゃおどれ」

ゲンじいは言葉途中で声のする方へ向かって行った。

椅子の蹴り飛ばす音がして、その後店内に鈍い音が響いた。

「おい、矢田…！」

さすがに気になって、
矢田を引き剥がそうと動いた。

「おどれ……、堂善寺の幹部か」

その時、ゲンじいの唸り声が聴こえたんだ。

呪われた組　7

「おい…、矢田」

堂善寺って確かーー

「…ん、何？」

「何、じゃなくて」

組に短刀が投げ入れられたり

この街を襲撃されたり……、

オレらを
陥れようとしてた

渦中の奴らの事じゃねえか……！？

「な、なあ…、堂善寺って、アレじゃねえか？」

「いいじゃん、向こうは向こうで放っとけば…」

チュ…ッ。

……。

吸い付く様なキス。

……。

気持ちイイ。

……。

じゃねえって!!

「よ、良くねえよ!」

だって、

もしかしたら

ここ最近の事件に関わってるかもしれねえトコじゃねえか！？

その事件のせいで

相模は遠くに行っちまったんだ！

「今、ゲンじいが堂善寺って言った…！」

未だに重ねて来る矢田の唇を交わし、抱き締められてる腕の中で体を捻って後ろを向いた。

「源二…、アイツシメる」

「んな事言ってる場合かよ…」

ギギィと腰が軋むのを感じながら振り向いた先には、

ゲンじいと拳をぶつけて睨み合う男の姿。

「……は」

片腕にレイナを抱き寄せ、
ゲンじいより少し大きめの拳でその怒りを受け止める人物。

色を抜いた灰色の髪。

前髪を黒いサングラスで上に束ねて、

交わる拳に光る、シルバーの指時計。

胸板が覗く、タイトなVネックの白いニットにブラックジーンズ。

何より、ネコみてえな奥二重にM字型の口。

「ア、アイツ…」

「何、藤堂？」

全部が印象的で忘れる訳無え。

「オレ、アイツ……見た事ある」

拳を突き出した腕から覗く、真っ赤な刺青。

燃えたぎる、炎の様な刺青の紋章。

それは、間違いなくーーー。

ー此奴はタツと母親を貶めた、諸悪の根原じゃー

あの、

ナイフに描かれてた模様だ。

「昨日の男だーー」

あの傍迷惑なナンパ野郎が
堂善寺の幹部。

あんな奴がーーー。

「昨日って何？」

「ーーは」

「藤堂、昨日タツと居たんじゃないの？」

「ウン…？」

「タツと居て、何であの男に会うの」

「……」

「何で？」

な…、

何だよ突然。

？

矢田は「答えて」って怒り口調で聞いて来た。

「たまたまトイレでナンパされ掛けて…」

「は？　何でトイレでナンパされんの。　もしかして男好きなの、

アイツ？」

「い、いや、たまたまオレが間違えて男子トイレに入って…」

「ん？　藤堂さあ……、見た目男なのに普通じゃん？　しかも間違えてって何」

「う……」

な、何なんだ！？

何でそんなに昨日の事に執着すんだ！？

オレが言いてえのは、

そういう事じゃねえのに。

「藤堂…、何か隠してる？」

「な、何もねえよ」

「隠してる」

「ギクッ」

「ホラ……」

「ワレェ此処が何処のシマか分かっとって顔出しとんのやろなあ」

矢田の言葉を遮る様に
ゲンじいのドスの効いた唸り声が店内に響く。

その強面の男は
拳を交わせたまま、今にも掴みかかりそうな位殺気立ってた。

オレらが変なやりとりをしてる間に、現場は緊迫した空気に包まれて始めてた。

「おーこわ…。　お兄さん　俺が違う組の人間だからって、んな目クジラ立てなくてもいいっしょ」

ネコ男は危機感てのが無えのか、片腕にレイナを抱いたまま、へラっと笑って見せた。

しかもその手はレイナのキャミの中に入れられ、胸を真探り出したんだ。

「あん…」

「ナマ乳…いいねえ」

あの時と同じ、ニヤついた顔でソイツが笑った。？

呪われた組　8

その時ーー

オレは見たんだ。

ゲンじいが後ろ手に
何かを抜き出した瞬間を。

「ウチの嬢に何しやがるクソガキ」

そう言うが早いか、
交わせた拳を突き放し

後ろ手に抜き出したモノを男の額に突き付けた。

「その手　退けぇや」

カチリと冷たい金属音が響く。

「……お兄さん怖いってェ。　俺らの組なんて、天下の相模サンが相手するに及ばねえでしょ？　それとも何すか、嫉妬しちゃってます？」

「黙れや！！」

この状況で

何て飄々としてやがんだ、この男はーーー。

ネコ男は更に挑発するみてえにレイナの腕を掴むと、ゲンじいの目の前でワザとらしく抱き寄せた。

額に拳銃を突き付けられた状態で、今度は両手を中に入れて胸を揉みしだき出した。

「ああん…っ」

途端にレイナから甘い声が漏れ出す。

「おどれ　いい加減に晒せや！！」

「フン。　そういう事ネ…」

ソイツはニヤついた顔で一人呟いて

ゆっくりとピンクに透けた下着の中から手を抜き出し、

その手でレイナをギュウっと抱き締めた。

「レイナちゃんまた今度ネ……」

ネコ男がレイナの耳を甘噛みした。

「ああん…」

レイナの体がビクビク震えた。

「ええ度胸やなあ！！」

「お兄さん、一つ忠告してあげるヨ」

ネコ男は片手でレイナを脇に寄せると同時に、同じく片手で抜き出したブツをゲンじいの胸に突き付けた。

ネコ男の額に、

そしてゲンじいの右胸に、

それぞれ拳銃が突き付けられる。

「惚れてるなら惚れてるってちゃんと言ってあげねえと。　んな事してると死ぬまで片思いのままヨ？」

「どこぞの色ボケクソガキとは違うんじゃ」

「酷え事言うねえ」

クックックック……

静まり返った店内に響く乾いた笑い声。

「あ、俺の事殺っちゃったら、千単位で人間が動くヨ？」

男はそう言って口角を上げて笑うと、そこから尖った八重歯が覗いた。

「…お兄さん、獣みたいだね」

「ん～、良く言われるねェ。　ま、名前がソレらしいからネ」

「ふうん」

「退かんかいレイナ」

レイナは未だにネコ男の隣に居て、ソイツの顔をジイッと覗き込んでる。

「ヤダよう」

しかもソイツも危機感が無いらしく、嫌だと言って駄々を捏ね出した。

「チイッ！　こんの　クソバカが…」

「レイナちゃん、男は立ててあげねーと」

「あたし、お兄さんの体が欲しいモン！」

レイナは男の腹に腕を回して抱きついた。

「ハア……」

ーーゲンじいの呆れた様な溜息。

「レイナちゃん、性欲に正直ネ。　ウンウン、合ってるわ。　天職でしょ今のシゴト」

「そうでもないよ。　気持ちのイイエッチじゃないモン」

「そりゃあお兄さんに頑張って貰わねえと」

「ゲンじいは嫌！　一番気持ち良くナイよ？」

「殺すぞワレ」

ゲンじい。　どっちに言ってるんだか。

やっぱレイナが喋ると締まりが無くなる。

「お兄さん、だから　そういう事ばっか言ってると…」

「黙れ」

ゴリ…、という音がして、強面の男の突き付けた拳銃が　ネコ男の額を刳る様に充てられた。

「言うとくがなあ、ウチは万単位で人間を動かせるんやぜ」

「やっぱ違うねえ、天下の相模サンはーー」

それでも男は笑ってるんだ。

まるで、ゲンじい達との会話を楽しむみてえに。

「おどれ…、幹部や無くて頭か」

それは何を根拠に言い出したのかは分かんねえケド、

ゲンじいの見当が外れた事は

これまで一度も無い。

その証拠に、

ネコ男はいっそう口角を上げて笑った。

「お兄さん勘もイイのネ」

「ふうん。　龍さんと同じなんだ」

レイナの言葉に、

ネコ男が声を上げて笑った。

「ハハ…、そりゃあね、俺らも相模サンと肩張りたいケド。　規模が違い過ぎるんでネ。　ホラ、ココの若なら　遊び惚けたり出来ないっしょ」

「おどれ名前だけか」

「あら酷ェ。　これでも有名なのよ？　？“堂善寺の彪”　って。ま、　お宅の若程じゃ無えケド」

ネコ男は抱きついてるレイナの腕をゆっくりと片手で解き出した。

「なんせ最後の次期組長だから。　堂善寺のヒョウガって、一応それなりに名は通ってんだけどナア…」

何だよ、“最後の次期組長”って。

まるでそこで途絶えるみてえじゃねえか。

「ん～、手放すの惜しい」

ソイツの意味深な発言が気になるけど、

ネコ男はそこまで言うと、レイナの方をチラッと見やり、その背中に片手を添える。

そのままポンとゲンじいの懐にレイナを渡した。

「え～～～」

「シバクぞワレ！」

怖い口調なのに、ゲンじいの顔は何処か安堵してる。

その証拠に、一瞬レイナの頭を撫でかけて……

その手をすぐに引っ込めた。

「……」

きっとあの手は、ゲンじいの無意識に出た本音だと思った。

「お兄さん、これで文句ナイっしょ。　残念ながら今日は目的が違うもんでネ。　……レイナちゃんゴメンね？　次は指名に来るから」

「ブウ……」

額に付けられていた拳銃を掴むと、その手で銃口を塞いだ。

「チッ」

それと共に、
ネコ男の銃口も下を向いた。

どうやら最悪の事態は避けられたみてえだった。

「お兄さんの嬢を手放した代わりに一つ教えて貰いたいんだけどさ…」

名残惜しそうにレイナの後ろ姿を見つめるエロ男。

ソイツは今にも触り出しそうな勢いでレイナの尻を見てる。

「相模龍の女って何人？」

「……ああ！？」

「一人、めっちゃ欲しい子が居るんだけどさ…」

その視線を突然上に向けると、
ギラリとした眼でゲンじいを見た。

「昨日からどんだけ探しても情報が掴めないんだよネ」

ーー何だろう。

凄く、嫌な気分になってきた。

「あの子だけでも俺にくれないカナ」

ネコ男は何かを思い出すみてえに空を仰ぎ見た。

「テメエが何を見たか知らねえが、若に女は居ねえぜ」

「んな訳無えっしょ。俺、実際に昨日見たからネ。　あの若さんが、それはもう溺愛してたのよ」

「ー昨日、だと？」

ギクッ！

オレはその瞬間、
マジで心臓が止まっちまうかと思う位、すげえ胸がバクバクした。

何故ならば……、

ネコ男の言葉に、
反射的にゲンじいがバッとオレの方に顔を向けたんだ！

“お嬢……、こりゃどういう事だ？”

“お、オレに聞かれても知らねえよ！”

少し離れた所から
目と目を合わし、

無言のテレパシーを送る。

「まあ、なんせ可愛いのよその子。　色白で、ピュアな感じで、あんま男経験無いみてえでさ」

ジロッ

「うっっ！？」

ゲンじいが再びオレを見た。

「その癖意外と男みてえに口悪くてネ。？女のコなのに俺と張り合おうとしちゃったりして…」

ジロリ……

「ひっっっ！！？」

今度は隣の矢田がオレを睨んだ。

「そういうヤバイ系でメチャメチャ可愛い子　探してるんだけど…」

ギンロリンギラ！！！

「な、何だよ……！！？」

ゲンじいも矢田も、
しかもレイナにサナまでが一斉にオレを見た！！

「あの子って、相模龍のお気に入りなワケ？　俺、めっちゃ気に入っちゃったんだけど」

その目は遠慮なく
オレにビシバシ突き刺さる！！

まるで事件の容疑者を発見した様な、鋭い視線をオレに向ける８つの目！！

「色白でピュアで…、溺愛する位の龍さんのお気に入りって……、

あたし一人しか知らないんだけど」

「えっ、ナニナニ、レイナちゃん知ってんの！？」

いや、

レイナ、やめろ。

これ以上言うな……。

「だって、それって……」

レイナは

不思議そうに

ーーオレを指差した。

「ルイくんしか居ないでしょ」

？？

呪われた組　１０

「えっ、マジで！？　ウソ、どの子……」

レイナの指先を辿り、顔をこっちに向けるネコ男。

「……あ？」

まるで点線を辿る様に移動する視線は、最終的にオレを捕える。

「ビクッ！！」

ビシイッと、

とうとうバッチリ目と目が合ったんだ！

「ん？　？ん？」

だけどネコ男はどうも納得がいかない様で、

獣みてえな奥二重で

？何度もレイナの指先とオレとを見返してる。

それを何度か繰り返した後、
凄え怪訝な顔してこっちをじっと見て来やがった。

「レイナちゃん、俺言い方間違ったカナ？　俺が探してんのって、可愛い女のコなんだけど」

「ウン。　でも、龍さんのお気に入りって多分ルイ以外居ないと思うよ？」

「イヤイヤイヤ……、冗談が過ぎるよレイナちゃん。　彼、どう見ても男でしょ。　てか、全然、違うから」

オレはネコ男とレイナのやりとりを傍で見る間、気が気じゃ無かった。

レイナ、頼むからもう何も喋んな！

マジで真剣にそう祈った。

「龍さんが言ってたんだよ？　もうお仕事はしないって。　ルイくん以外、抱かないって……フグッ」

「はあ？」

「本当にテメエは…！」

ゲンじいが慌ててレイナの口を塞いだ。

「何で相模龍が彼を溺愛すんのよ？」

ネコ男は
今度は訝しげな顔して、

「うげ……」

ジィィーー…。

っとオレを見ると……

突然驚いたみてえに目を見開いた。

「そのダイヤ……？」

そう呟きながら

こっちに歩み寄って来たんだ！

もう、ドキドキなんてモンじゃない。

獣みてえな目でジイッと見られて、しかもオレの方に歩み寄って来やがるソイツに

マジでバレたらどうしようと心臓があり得ねえ位バクバクした。

更に変な汗が一気にドバッと出て来た。

「ゲロ……」

「ソレ、そのダイヤ、あのコが付けてたヤツによく似てんなあ……？」

オレの間近まで詰め寄ると、首元のダイヤを手に取る。

バニラみてえな甘い香りが、フワッと鼻についた。

目の前に、あの時しつこく追い回されたネコ男。

オレの体は瞬時にコンクリートみてえに固まった！

「コレーーー」

「その子から離れろよ」

その時、

ネコ男の呟きを途中で消すように、

隣から美少年の声が聞こえた。

美少年はソイツの腕を掴んで、無理矢理オレの首元に絡まる手を引き剥がした。

ネコ男は突然伸ばされた手の持ち主ををジロリと見やったかと思えば

一瞬固まって……、

驚いたみてえに目を見開いてその少年を凝視した。

ヤツの腕がギリギリと唸ってる。

「ーーー兄ちゃん、えげつねえ位のイケメンじゃん。？メチャメチャ顔良いネ。　てか、何か用？」

その声のトーンが低く冷たく変わって行く。

オレから離れろと腕を掴む美少年を、ギロリと鋭い視線で威嚇した。

「俺の大事な子に気安く触んな」

その美少年は、

まるで何者かの魂が入ったみてえに顔色をスウッと変えて

怒りを表面に現わした恐ろしく整った顔で、ネコ男を睨んだ。

「……」

渦中のオレは変な板挟み状態で、

ただ冷静にその光景を見てた。

怒った美形程、迫力のある物は無いと思いながら。？

呪われた組　11

いつの間にか静まり返った店内で
無言で睨み合う二人の男達。

「……チッ」

ネコ男は掴まれてる手を振り解き矢田を一瞥すると、
つまらなさそうに舌打ちして眉間にシワを寄せた。

「……フン。　ちょっと俺よりイケメンだからって、偉そうな口聞いてんじゃねえヨ、坊や」

「ダイヤとか変な口実作って触りやがって。　……俺が見逃すとでも思った？　」
？

「……」

心なしか、二人の会話が微妙にズレてる気がする。

「美形だからって何でも許されると思うなよ」

「藤堂に二度と触んなエロ男」

「……」

その時確かにオレは見た。

二人が目から、バチバチと光線みてえな火花を散らしてる瞬間を！

赤や黄色の混じった火花が二人の目線の先で交わり、音を立てて弾け飛んだんだ！

やがてネコ男は、
更に鋭く光る目線のまま

再びオレを睨んだ。

「ひっっ!?」

そして笑った。

可笑しそうに、笑い声を口の中で押し殺して。

「ーーナルほどねェ……。　レイナちゃんも酷いよね、グルになって騙そうとするなんて」

「ん?」

レイナは難しそうな顔をしてネコ男を見上げた。

「でもさ、嘘吐くなら　もっとちゃんと根回ししなきゃ。　彼だって可哀想でしょ」

「ん?　……どゆ事?」

「いや、でも　そのダイヤは凄いネ。　俺もちょっとは疑ったヨ」

そう言って笑いながら、
ネコ男はオレから離れた。

「でも違うのヨ。　昨日見たヤツじゃない。　良く似てるケドね」

オレの首元に掛かってるダイヤを指差して、ソイツは昨日見たのと違うって言った。

「テメエ案外見る目あるんじゃねえの？」

ゲンじいが小馬鹿にした様に笑った。

「でもさ、レイナちゃん。　ちゃんと女のコを用意するべきだったね。
これじゃあ相模龍の女を隠すために、俺に嘘の情報流したの、バレ

バレだヨ？」

「え？　何ソレ？　ん、んん？　何でそうなるの？」

レイナの言葉に
ネコ男は声を上げて笑う。

「ハハ…。　そういう惚けた所も可愛いケドね。　でも、俺も誰でもイイって訳じゃないからサー」

ネコ男の目が獣みてえに鋭くなって、
更にギラギラと不穏に光った。

「レイナちゃん、俺はね……」

それはまるで、
抑えの効かなくなった野獣の様な妖しい光。

「全ヤクザの頂点に立ってる、相模龍のオンナだから奪いたいんだよネ……」

ネコみてえに鋭い視線は、
睨みを利かすだけで更に凄みを増してギラギラ光る。
そこには優しさの欠片も映し出されて無くて、
ひたすらに送る冷たい目線に恐怖を覚えた。

「あの男のオンナってだけで、どれだけの価値がそのコにあると思う？」

その言葉に
今更ながら体が震え出した。

ー俺のオンナになる覚悟はあるか？ー

まさか、

そこまで深く考えてもみなかった。

ただ

男女の関係になるって、

ソレ位の事かと思ってた。

「誰だってトップの座に憧れるモンよ、レイナちゃん」

オレは

知らなさ過ぎた。

ーー相模龍って男を。

例え形だけだとしても

アイツとそういう関係になっちまってるって事は事実な訳でーーー。

それはもう

オレだけの責任では済まされない大変な事なんだと、今更強く実感した。

現にソイツは

相模の女ってだけで
目の色変えてオレを探してる。

“相模の女を寝取った男”　って肩書きを手に入れるためだけに。

そう。

ヤツの狙いはきっとソレだ。

もしかしたらこれから
オレと相模の周りには、
あんなネコ男みてえな奴がウヨウヨと……

「大丈夫？」

「ーーえ」

考え途中の頭の中に、凛とした綺麗な声が響いた。

そこには、心配そうにオレを覗き込む美少年。

えげつない位のイケメンと称されたソイツだ。

「そういう下らない事に、藤堂を巻き込まないでくれる」

そしてオレは再びソイツの腕の中に包まれた。

ー一矢田は何げに爆弾を落とす。

再びオレと矢田を捕らえる鋭い視線の男。

「渦中の組のトップが何の用かと思いやあ、テメエ只の泥棒ネコかい」

その目を反らすかの様に、ゲンじいの声が響いた。

「……毒舌ネお兄さん。　でもさ…、可愛くて、タイプで、相模龍の女なら、そりゃあ誰だって狙いたくもなるヨ」

「藤堂、おいで」

再び勃発したゲンじいとネコ男の抗争を見ている最中、？

オレを包む少年の小さな声が聴こえた。

「……え？」

「早く」

矢田はそっと手を引いて歩き出した。

途中、ネコ男と向き合うゲンじいもオレにチラッと目配せした。

“お嬢。　だからこりゃあどういう事だよ！？”

“あ、後で話す！！”

そんな暗黙の会話がなされた。

「まあイイさ。　その子、嘘吐いて隠そうとする位　相模龍は気に入ってるって事ネ。……面白いじゃねえの」

「おいクソガキ、俺からも一つ忠告したるわ」

店を出る最後　ゲンじいの声を背中に聞いて、その重厚な扉をそっと閉めた。

「本質を見抜けん人間やから、目の前の獲物を取り逃がすんじゃ」

「ーーーは…」

「ーーウチの若なら、こんなヘマは絶対しねえなあ」

店に付けられた一台の黒塗りの高級車。

さっき脅して酷え事をしちまった、“　カミさん”　ておっちゃんが運転席から顔を出す。

オレらが乗り込んだ時、店の扉が勢い良く開いて、ネコ男が飛び出して来た。

「……ウッッソだろーーー！！？」

ソイツが追いつく間もなく車は発進したんだ。？

呪われた組　13

立ち竦んで車を見送るネコ男がどんどん小さくなって行く。

その様を見届けたオレは
ようやくホッと一息吐いた。

「ー安心してる場合じゃないよ」

「……」

一難去って……

「俺、藤堂に聞きたい事沢山あるんだけど？」

「……」

また一難ーーー、

……の予感。

窓に噛り付くオレの肩をポンポンと叩いて、

その美少年は冷徹なまでの美貌を歪め、完璧な笑顔を作って見せた。

それは、とても怖い笑顔だと思った。

「藤堂はアイツの事知ってたのに、向こうはそれに気付いて無かったよね？　何で？」

「えと……」

「色白で、ピュアで、めちゃくちゃ可愛い女のコって、何」

「それはーー」

「藤堂昨日一体何してたの？」

「……」

怖い。

あんなネコ野郎よりも、矢田の方が数倍怖い！

やっぱ怒った美形の顔程、恐ろしい物は無いぜ。

「藤堂！」

「わ、分かったから！」

車ん中で昨日の出来事を矢田に話した。

オレが女装してたって事も、

男子トイレでネコ男に遭遇した事も。

自分から聞いといて、

矢田は終始不機嫌そうにオレの話を聞いてたんだ。

「藤堂の女の子の姿、よっぽど可愛いかったんだろうね」

一連の説明が終わった頃。

怒りのボルテージが最高潮に達したのか、矢田は言葉攻めに入った。

「じゃないと、一晩探し回ったりしないでしょ。　それはそれは、可愛いかったんだろうね」

「……」

「フーン。　オレに内緒で、そんな事してたんだ…。　へーえ。？そりゃタツもさぞかし楽しかっただろうね」

「……」

一言一言がなんて刺々しいんだ。

まるで見えねえ針で、チクチク刺されてる気分だぜ。

眉根を寄せて仏頂面で話すソイツは、明らかに嫉妬の滲み出た顔をしてて。

また爆発したらどうしようとか考えると、ちょっと怖くなった。

「認めたく無いけどさ。　俺、今凄いタツの気持ちが分かっちゃうんだよね」

「何がーー」

矢田はイキナリ唇を奪って来た。

オレを両手一杯に抱き留めて。

そのまま引き寄せて、脚の間に閉じ込められる。

矢田はまるで相模みてえに
強引に唇を重ねて来たんだ。

「どっかに隠して無いと　どんどんライバルが増えそうでさ、本当に気が気じゃないよ」

顔の至る所にキスを落として、
息を吹きかける様に話す矢田の唇は次に首筋を這い回る。

「あ……っ」

「腹立つケド、俺に会わせたくないタツの気持ち…、凄い分かる」

湿った暖かい舌が首筋を舐め上げた。

「バカーーー」

「ホラ、そんな可愛い声出しちゃダメだよ」

イタズラな天使は言葉とは裏腹に、
敏感な首筋に何度も口付けては、オレの感度を助長させて行った。

「矢田のバカーーー」

「ホラ、もう声がエロくなってるよ」

肌を舐められる度
さっきまでの行為が思い出されて、

気持ちとは裏腹に
再び体が歓びに浸って行くのが分かった。

「あ……っ」

「藤堂のこんな姿…、他の奴に見せたく無い。　藤堂の可愛い顔も、誰にも知られたく無いよ」

体中を這い回る柔い舌。

優しい愛撫は凄く気持ち良くて、無意識にソイツの体に腕を回した。

「ムカつくケドさ…、俺もきっとタツと同じ事考えてる。　藤堂を隠したくてしょうがないよ」

ヤバイーーー、

めちゃくちゃゾクゾクする。

「藤堂って、無意識に小悪魔だよね」

「うあ…っ、バカ…」

車が緩い振動を与える間中、
矢田はオレに甘い愛撫を与え続けた。

ココが車の中だって事も忘れて
息を切らして喘ぎ続けた。

いつの間にか解かれたサラシが散らばってる。

頭の中が溶けるみてえにクラクラになって来た頃。

ゆっくりと停止した車に合わせて、矢田の舌もオレから離れて行った。

まただ。

また中途半端に、
体を離された……。

「……組長が、話があると」

遠慮がちにこっちを振り返って、厳ついおっちゃんがそう言った。
その顔はすぐに前を向き直る。

「風呂入ってから行くって伝えろよ」

「……へい」

車内で脱ぎ散らかしたまんま、そのまんまの格好で矢田に抱えられて外に出た。

「矢田、自分で歩けるから…」

「ん。　ダメ」

「何で」

「……」

ソイツはオレの問いに無言だったけど

庭園を渡り

戸口を抜け

廊下を歩む足取りは……、

確実に

風呂場に向かってる。

それだけは分かった。？

呪われた組　？　1

二人の若
呪われた組　2
途中、何人かの組員がオレらを出迎えた。
皆一様に頭を垂れ、
相模と同じく忠誠の姿勢を取る。

服がはだけた状態で矢田に抱えられてるオレを見ても、誰も何にも言わなかった。

まるで暗黙の了解のうちに
オレらの関係を知ってるみてえだと思った。

矢田も当たり前みてえにオレを抱えて、そのまま風呂場に入って行った。

服も着たまま中へ入れられたそこはまだ湯張りもされてなくて、
どことなく空気が冷やい。

「……どうしたんだよ？」

「……」

ソイツはやっぱり無言で、

檜の香りに包まれた、木造の床にそうっと下ろされた。

そのまま両手を壁に付き、戸惑うオレを中に閉じ込める。

「おい……？」

少年は天使みてえに、ニッコリと微笑んだ。

「……エッチ、しよっか」

そう一言漏らして

甘えるように手向ける視線に、どうしようもなく胸が疼いた。

「何で……」

冷静なフリをしてるクセに、体の中では心臓がいっそうバクバクと音を立てて飛び跳ね出してた。

矢田がシャワーの栓を捻る。

雨音みてえに滴る音が響いて、
見つめあうオレらを白い湯気が包み込む。

「何でも」

はだけてたシャツを脱がされた。

滴る水滴に包まれ、吸い付くように腕に張り付いたソレがゆっくりと取り払われる。

露わになった上半身を見つめる少年の視線。

たまに覗かせる、欲情した男の顔だ。

少年は

うっとりと

時間をかけて
オレの体に視線を這わす。
今から自分のしようとしてる事を想像して、恍惚とした世界に浸ってるみてえだった。
視線がジワジワと上がって来る。
欲望を滲ませる少年の目は、
どうしようもなくオレをドキドキさせる。
「バカ…、矢田…」
「……ね、エッチしよ?」
甘える声と一緒に柔らかな唇が重ねられた。
その唇の間から
暖かな水滴が頬を伝っては入り込んでくる。

舌に微かに残る水の味と
室内に充満する甘い吐息と
胸を揺さぶる柔い口付けと……。

矢田の与える甘い余韻に抵抗できる訳もなく。

髪の毛も、体も水浸しになりながら
その全部を受け止めた。

目の前の美少年が睫毛を揺らしてキスの雨を降らす。

音を立てて唇を吸われる度、イケナイ事をしてる気分になる。

綺麗で
喋らないと純粋そうで
オレなんかより可愛くて、

大切に扱わねえと
ガラス細工みてえに壊れちゃいそうで……。

いつもいい香りがする。

オレにだけ心を開く、
可愛い少年。

その小悪魔な美少年に攻められてるオレの方が、悪い事をしてる気分になるんだ。

「どうしたんだよ急に…」

気を抜くと、思わず見惚れてしまいそうになる。

攻められてんのに、これじゃあ喜んでるみてえで恥ずかしい。

両手を重ね合わせて、
檜のタイルに押し倒されていった。

矢田の服もびしょ濡れで、
少し起き上がるとそれをゆっくり脱いで行った。

「藤堂…。俺、メチャメチャ嫉妬深いかも」

「ウン？」

知ってる。

さっき、充分にそれを知ったから。

「俺だけが知ってるあの可愛い顔、また見せてよ」

スーツを脱いで、
片手でシャツのボタンを外して行く。
濡れて透けたシャツから覗く、白い肌。

滑らかな体のライン。

水滴で張り付いたズボンの奥に、きっと張り詰めた少年の欲望が疼いてるんだ。

ソレを味わってしまった。

余りにも

濃厚な快感だったんだ。

呪われた組　？　２　＊性描写有り

「ねえ、あのカオは俺だけの物だよね？」

裸の少年を目の前にして

思い出さずには居られない。

さっきの官能的な情事を。

「ウンーーー」

全てを脱ぎ払った少年の裸体。

滾(たぎ)る欲望を表す様に、

ソレはドクドクと波打つ様に動いてた。

全てを脱ぎ捨てたその手で

オレのズボンを脱がしに掛かる。

その間も

少年のソレから目が離せなかった。

「フフ…、エッチな目で見てる。　……コレが藤堂の中に入っちゃうんだよ？」

「ウン……」

矢田の言葉に変に想像して、背中がゾクゾク震えた。

ソレをじっと見つめるオレ。

よく見ると先端とか不思議な形だ。

何でコレが中に入ると、あんなに気持ち良くなるんだろう。

「……」

「触ってみる？」

片手でズボンを下ろしつつ、

もう片方の手でボディーソープを手に取る。

矢田はそれをオレの手に塗りたくった。

「……」

「これで触ってみて」

ーーー触る。

矢田のソレを。

いや、一回相模のに触れた事あるけど。

服越しに矢田のに触れた事もあるけど……。

「下から上に、扱くみたいにして…」

し、下から上にーー。

「……」

ヒタ…、と触れたソレは凄く熱くて。

根本をキュッと掴むと
一瞬ビクンて跳ねた。

「うわ……」

まるで脈打つみてえに中からドクドク動いてる。

コレ、違う生き物みてえだ。

ソープでヌルヌルの手で根本から上に動かしてみた。

「ーーん、イイよ　藤堂…」

それはスベスベしてて
凄く固くて
やっぱ日常生活とかで支障ないんかなって気になった。

「ソレ…、繰り返してみて」

「ウンーー」

たったちょっと手を動かしただけであんなにビクンってなる。
矢田も気持ち良さそうだ。

それを何度も繰り返したらどうなるんだろうって変な好奇心が湧いて来て、
言われるまま何度もソレを手で扱いてみた。

根本をキュッて握って
そのまま手を上下させてみた。

手の中のソレは
どんどん固くなって、

握ってる感じだと
大きくなってる様な……、
不思議な感じがした。

そして時々ビクンて強く反応する時がある。

「うあ……」

オレを脱がす手を止めて、

小刻みに体を震わせて小さく喘ぐ少年。

切なそうに顔を歪めてるケド、その口からは気持ち良さそうな吐息が漏れててーー、

その顔を見ると

まるでオレが矢田をイジメてるみたいと思った。

「矢田、気持ちイイの？」

綺麗で可愛い美少年に
イタズラしてる気分だ。

「ウンーー」

それを何度も繰り返すうち分かって来た事がある。

根本部分を撫でる時、矢田のソレはいつも反応してる。

何となくソコが感じるのかなって思って、今度は敏感な部分ばかり
手でヌルヌル擦ってみた。

「あ……っ、アッ、藤堂の…、エッチ…」

「……」

オレの予測は

多分当たりだったみてえだ。

ソレはより一層張り詰めて、矢田はもっと切なそうに声を上げた。

「……」

オレは今、

矢田をイジメてる。

「ーーんッ、……ハア…もういい…」

「……」

可愛い。

「もういいよ、藤堂……」

「……」

もっと見たい。

「うあ……っ、ダメだってーー、アッ」

「……」

オレは変態かーー。

オレは多分悪い事をした。

好奇心で矢田のソレを弄ってるウチに、ソレはどんどん張り詰めて来て……。

『もういい』ってよがる矢田を余所に敏感な部分を刺激し続けた結果、だんだんと声が切なさを増して…、

手の動きに合わせて体がビクビクと反応し始めてた。

オレはそんな矢田を前に
変な気分になって、

もっとイジメたいって思って手を動かすウチに、矢田は力が抜けた
みてえにオレの上に突っ伏した。

ソコを攻めれば攻める程、
矢田もどんどん追い上げられて行ってるみてえだった。

それから暫くして

小さな喘ぎ声を上げた後、ソレは弾けるみてえに大きく震えた。

『ああ…っ、ウソーー』

『……』

矢田はめちゃくちゃ可愛かった。

その顔を興味津々に見つめてたら……、

突然そこからピュッて何か白いのが飛び出して来た。

『……』

それは凄え衝撃だった。

ソレが男にとっての絶頂なんだって、後から知ったんだ。

そして、
グダグダのまんま
その行為に及ぶ前に、終わったんだ。

オレは何もされないまま、オレのせいで変な終わり方をした。

『ウッウッ…。　藤堂のバカ、藤堂のバカ…』

『……』

矢田はグスグス泣いた。

ただ、矢田のお陰で要らぬ知識がまた一つ増えたんだ。

呪われた組？　3

「いい加減機嫌直せよ」

「……」

浴室に響くオレの声。

少し動くと
チャプチャプ音を立ててお湯が揺れる。

風呂場の中に脱ぎ散らかした服。

ハチミツみてえな匂いの入浴剤で真っ白になった檜の浴槽。

その浴槽に一緒に浸かってる少年は、さっきから顔を下向けたまんま何も喋らない。

向かい合ってるオレの顔を一度も見ようとしない。

こっちから少し覗く尖った唇で、ソイツは多分拗ねてるんだろうと思った。

「ゴメンって。　もうしねえよ、あんな事」

「……」

少年は上気してサクラ色に染まった体を抱えて、更に小さく丸まった。

「興味があったんだよ、あの後どうなるんだろうって」

「……グスッ」

オレの言葉にさっきまでの屈辱を思い出したのか、少年はまた泣き出した。

「矢田、あんな事してゴメンって」

「……ウッウッ、……ズズッ」

その姿も可愛いって思うオレは、やっぱ悪い奴かもしんねえって思った。

「特別に抱っこしてやるから。　ホラ」

「……」

おいでおいでって両手を広げると、少年はちょっとだけこっちを向いた。

「矢田〜。　ホラ、おーいーでー」

「……」

ウサギみてえな目でオレを見る可愛い美少年。

その顎をチョイチョイって撫ってやった。

「……ううッ……ズルい」

オレの指に素直に反応する。

ソイツはくすぐったそうで、
でもちょっと嬉しいそうに顔を緩ませた。

「あと１０秒以内に来なかったら抱っこしねえからな。　いーち、にー…」

「ううううっ…」

ソイツは一秒でオレに抱きついた。

犬みてえにグスグス鼻を鳴らして子供みてえに抱きついた。

矢田はやっぱ可愛い。

イタズラしてた時も

拗ねてる時も

やっぱいつも可愛い。

未だにグスグス鼻を鳴らすソイツを抱き寄せて、頭を撫でた。

「いい子いい子…」

「……グスッ…」

母ちゃんに子供の頃されたのを真似してみると、

矢田は甘える様にオレの肩に頬ずりした。

「よしよし…」

「……」

そのうち機嫌が直ったのか、少年はゆっくりと体重を預けると

気持ち良さそうに何度か瞬きを繰り返してた。

「ーー矢田、機嫌直った?」

「……」

ナデナデ……

「機嫌直せよ、な？」

「……」

ナデナデ……

「……機嫌直すから」

「うん？」

長い睫毛が閉じる度揺れてる。

「もうちょっと、ソレして……」

「分かった」

「あと……」

「何だよ？」

「今日、一緒に寝て」

「…何で」

「そしたら機嫌直す……」

これはーー

「わ…、分かったよ」

もしかして

確信犯……。

まあ……、

ーーしょうがないか。

「機嫌直せよ？」

「ウン」

もう、コイツって本当に……

「ホラ、いつもみてえに笑って」

「ウン」

子供なんだから。

「う…、へへッ」

「ウヘヘって…」

変な声を出して、
矢田はへにゃって笑った。

オレより年上の子供。
甘えっ子な美少年。

結局、そういうトコが可愛くてイイんだけど。

「エラいエラい…」

何だかんだ言って、乗せられてるオレ。

結局甘やかしてるし。

「……藤堂」

矢田は暫くぶりにオレをじっと見た後、
縋り付いてキスをして来た。

ちょっとして顔を離すと、今度は恥ずかしそうに顔を緩ませて笑った。

（マジで機嫌直ってる……）

よしよし、って頭を撫でた。

少年はまた

グスッて、鼻を鳴らした。

「やっぱ藤堂、大好き…」

そして、また首元に腕を回して甘える様に唇を重ねて来た。

「ウッウッ…、藤堂大好き……、グスッ」

「ーー何で泣くんだよ」

少年は泣き虫だ。

多分、オレの前でだけ。

「大好き……」

「……」

ホラ。　オレにだけ見せる笑顔に……、今キュンとなった。

「藤堂大好き…」

「そう…」

キュン、てなっちゃったよ矢田。

何か

オレの方もヤバイかも。

矢田と一緒に居れば居るほど、どんどん可愛く感じて、放っとけなくて、もっともっと甘やかしてやりたくなる。

「オレも、お前の可愛いトコ好きだよ」

「……俺可愛くないよ」

抱きついたまんまで呟く矢田の声が耳の側で聴こえる。

さっきまでグズってた少年。

「矢田は可愛いよ。　一緒に居るとさ、子供みてえで放っとけないよ」

「……俺子供じゃないよ」

?って、そういう言い方が既に子供っぽいんだよなぁ。

「何処がだよ。甘えっ子で、すぐ泣いて、好き嫌いが激しくて…、まるきり子供みてえ」

「ウウ…、ヒドイ……」

ホラ、またグズってる。

「でも、お前のそういうトコ好きだよ」

「……」

「綺麗で可愛くて甘えっ子ですぐ泣いて…」

「ソレ…、褒めてないよ藤堂」

「すぐ拗ねるしヤキモチ焼きだしちょっと我が儘だし…」

「ウ、ウウ…、グスッ…、ヒドイ」

「でも、何でかな…。オレ矢田のそういうトコ好き」

ちょっと拗ねかけた少年を抱っこし直して、背中の火傷痕を撫でた。

グスグス言いながら、気持ち良さそうな声も一緒に聴こえ出す。

「素直で可愛くて、オレはそういうトコ好きだよ」

「うあ……、グスッ…」

背中を撫でると、矢田はいつも気持ち良さそうな声を出す。

「矢田、気持ちイイんか？」

「ウン…」

ハチミツの香りの湯船の中で、少年の体から少しずつ力が抜けて行く。？

グスグス言ってたのも静かになった。

それからも、何度も背中を撫でた。

吸い付く様な白い肌の上で、ソコだけがざらっとした異質な感触を生んでる少年の背中。

こうやって撫でてるウチにこの傷が無くなればいいのに。

「ん……」

目の前の少年は気持ち良さそうに肩に顔を預けて、湯船の中で小さく伸びをした。

「犬みてえ」

クスクス…

「ウン…？」

コイツ、何か
赤ちゃんみてえな顔してる。
母ちゃんの腕の中で安心して眠ってる、赤ちゃんみてえな顔。

気持ち良さそうで幸せそう。

「矢田、もしかして眠いんか？」
「――ん…」

ホラ、ウトウトって目を開けたり閉じたり……。

「ここで寝たら溺れて死ぬぜ？」

「ウン……」

オレの肩に顔を預けたまま、小さくあくびした。

「寝るなよ？」

「――――ん…」

体が重くなって来る。

多分半分寝てるんだ。

「うあ…、ふぁぁ…。　ム…、　風呂出て寝る」

？

「分かった」

この背中の傷は

まるで矢田の眠りスイッチだ。

「矢田フラフラしてんじゃねえか」

「ウン……」

パシャパシャ…

「ホラ、一回お湯で体流して」

「ウン……」

ザバザバ…

「お風呂から出る前に体拭いて」

「ウン……」

フキフキ…

「ホラ、寝冷えすんなよ」

「ウン……」

セカセカ…

「ベットまでもうちょっとだから」

「ウン……」

トタトタ…

何か、

母ちゃんみてえだなオレって。

「ホラ、服着て」

「ウン……」

呪われた組　？　6

矢田は今にも眠りそうだ。

何とかその場に立ってるものの、頭がコクンコクンて揺れてる。

目も半分閉じてるよ。

ベットの上に綺麗にたたんでる黒のパーカーを着せた。

「矢田、バンザイして」

「ム……」

返事がおかしくなってきた。

素直にバンザイする矢田に背伸びしてパーカーを着せた。

パーカーから出て来た顔はもうウトウトし始めてる。

同じく綺麗にたたまれたハーフパンツを渡した。
矢田はソレをベットの上でノロノロと履きながら
その途中でとうとう動きが止まる。

「おい、矢田――」

「スースー…」

……寝てる。

ハーフパンツ履きかけの、めちゃくちゃ変な態勢のままでスースー
寝息が聴こえる。

思い切り腰パンが見えてるよ矢田。

途中で止まってるハーフパンツを刷り上げて、
変な形の態勢を元に戻した。

矢田の体をゴゾゴゾ動かしてると、突然オレの腹にソイツが抱きつ

いて来た。

「とー、どー…」

「おい……」

眠ってる筈なのに
やたらと強い力で抱き締めて来る。

「とぅど……」

「矢田……」

矢田の腕はギュウっと回され、ビクともしなかった。

「と…ど……」

「……」

眠ってる筈なのに

何て執着深い……。

「……グスッ」

「居るから……」

観念して
少年の隣に横になった。

矢田はその様子がまるで見えてるみてえで、
オレが隣で横になると安心したように今度こそ静かに眠り始めた。

それにしてもよく寝る奴だ。

赤ちゃんは一日２０時間寝るっていうけど…。

矢田は今でもソレ位寝てそうだ。

隣で寝息を立てる少年は、変な言い方だけど

本当に一生懸命寝てるんだ。

それこそ
マジで赤ちゃんみてえに。

本当に一生懸命寝てる。

「……」

絡み付いた腕を引き寄せて、オレも矢田を抱き締めて目を閉じた。

矢田の母ちゃんって

何でこんな可愛い子を捨てたりしたんだろ。

矢田って

こんなに可愛くて

甘えっ子で

凄く綺麗だしいい匂いもするし、料理も上手いし……

「……」

たまに男らしいトコもあるけど

性格とか、容姿とか、相模を好きだって言ったりする所とか…。

女のコみてえで可愛いのに。

「……」

こんなに可愛いのに。

きっと赤ちゃんの頃から凄え可愛いかっただろうに。

何で矢田の母ちゃんは我が子を捨てたりしたんだろ。

呪われた組　？　7

途中で捨て子だって知ったオレと違って
最初から、物心ついた頃から両親に捨てられたって知ってる矢田は
一体どんな気持ちで育って来たんだろ。

自分を捨てた親を恨むどころか、心の奥底で母ちゃんの愛情をいつも求めてんのに――。

矢田の心の闇は
きっとオレらじゃどうにも出来ない。

矢田の求めてんのは
闇雲な優しさじゃなく、
親の本当の愛情なんだから。

それだけは……
どんだけ頑張ったって、オレにだって埋める事は出来ないんだ。

おそらくこの国の何処かに居る、矢田の本当の母ちゃんにしか心の
傷を癒す事は出来ない。

それが実現しないなら

少年はきっと

いつまで経っても
愛情に飢えた子供のまんまだ。

ずっと

ずっと

心に傷を抱えたまんまだ。

「……ウウ…」

どれ位経ったんだろう。

――いつの間にかオレも寝てたみてえだ。

「――ハア…、ハア…ッ」

体が重い――。

「助けて……」

「──ん…」

気温も低くなって少し寒い。

「いやだ……、嫌……！」

「──…矢田？」

真っ暗だった意識の中に
突然矢田の声が入り込んで来た。

「……助けて…」

ハア…ハア…

オレの隣で
小刻みに震えてる体。

苦しそうに息を切らして
助けを求める少年の声も微かに震えてた。

「な、に……どうしたんだよ矢田？」

「ウッ……、ウッ……」

重い瞼を擦って目を開けた。
体を震わせ、
何かに怯える様に蹲り泣いてる。

――矢田が魘されてる。

「おい……？」

でも何か、普通の魘され方じゃねえ。

「痛い…、痛いよ……、ウウッ…、やめて…」

目をギュッと瞑って、
涙をポロポロ流してる。

苦しそうに歪んだ顔は凄く青白くて、

まるで得体の知れない何者かに苦しめられてるみてえで……

「言う事聞くから……」

オレの腕を軋む程掴んで泣き続ける少年を前に

「皆を殺さないで……」

どうする事も出来なかった。

呪われた組　？　8

殺さないで……って

何だよ――。

「お願いだから……」

「矢田――」

どうしよう

どうすればいいんだ。

矢田が……

「ウウ……ッ…」

魘されて泣いてる。

「矢田……」

どうしよう。

「おい、矢田……？」

ソイツの肩に手を置いた瞬間、

「…っあ、あぁ！！」

ビクンと怯える様に反応し、
それから突然弾かれた様に暴れ出した。

「ちょ…、オイ、矢田！？」

手を振り解いても尚、暴れ回る手脚がオレにぶつかる。

「来るな！！」

必死で手を振り払って逃げようと身を捩る矢田。

「コラ、落ち着けよ！？」

咄嗟に腕でガードして
暴れる手脚を何とか我慢した。

「クソ…！　俺に触んな！！」

バタバタ暴れる少年に馬乗りになった。

振り回される両腕を掴み、渾身の力で組伏せた。

「バカ！　？矢田、オレだよ！」

「ハア……、ハア……」

頬を打った。

パチンと掌に広がる痺れと同時に暴れてた矢田が覚醒した。

「ハア…、ハア……」

「矢田…。　ゴメン、痛かったか?」

「藤堂……」

意識が戻った矢田の体からスウッと力が抜けて行く。

小刻みに震える腕をそうっと手放した。

矢田は全身が汗でぐっしょりで、小刻みな呼吸はまだ少し震えてた。

薄目を開けてオレを見ると

ソイツは直ぐに抱きついて来た。

「ゴメンね……、俺…」

矢田……、まだちょっと震えてる。

「お前、大丈夫かよ」

「……ゴメン」

オレに抱きつく顔はまだ青白くて、絡まる腕も何処と無く弱々しい。

「ゴメンね……」

縋り付いて震える少年の背中に、戸惑いつつもそっと触れた。

手が触れた時、その背中は少しピクッと跳ねたけど

もうさっきみてえに暴れる事は無かった。

「驚いたよね……」

服の上から
背中の火傷痕を辿って撫でた。

「ゴメンね、藤堂……」

少しずつ震えが治まって来た。
小刻みだった呼吸も
大分落ち着いてる。

……良かった。

「矢田、怖い夢見たんか？」

「――ん…」

「どんな夢？」

「……」

「言ったらラクになるから」

オレの体に抱きつく腕の力が強くなる。

「……」

押し黙ったままの矢田の背中をさすって、それとなく促した。

「矢田、怖い夢は言っちゃった方がいいんだよ？」

少年の顔を覗き込んでみた。

オレの胸元に顔を埋めて小さく呼吸を繰り返してる。

首筋に伝う寝汗をそっと指で拭った。

「……アイツが」

「――何？」

矢田の体、

凄く熱い。

「アイツが、言う事聞かないと皆殺しちゃうって…」

「――アイツって？」

「俺を裸にして、酷い事するんだ……」

「矢田…」

それって――

「夢なのに全身が熱くて痛いよ…」

矢田は何かを思い出した様にカタカタと体を震わせ始めた。

「あの時と同じ痛みが…いつまで経っても無くならない……」

矢田が震えながら語ってるのは――

もしかして……

「俺……、一人になるのが怖い…。　夜になるとまたアイツがやって来そうで……」

もしかして……

「夜が怖い……。　一人で居たく無いよ……」

「ゴメン矢田、オレ――」

「もう二度とあんな事したくない……」

「ゴメン……！」

「俺、本当は逃げ出したかったよ……」

「ゴメン……、ゴメン……！」

何で気付かなかったんだろう。

「藤堂……」

気付いたらオレの隣で寝てたり

オレと一緒に居たがったり

背中を摩るとすぐ眠くなるのも――

“藤堂はアイツらとは違う。　あったかいよ”

全部、コイツからの助けを求める無言の声だったんだ――。

「気付けなくてゴメン、矢田」

相模の部屋で
オレの隣で寝てたあの時から

矢田はオレの側でだけ
安心して眠れてたんだ……。

「お前……、辛すぎるよ」

いつも寝れないから

ふとした事で
すぐに眠くなっちまうんだ。

いつも

こうして
一人で怯えてたんだ。

呪われた組　？　１０

「藤堂……？」

「何でお前ばっかりそんなに背負わなくちゃいけねえんだよ……」

両親が居ないのも

虐待まがいの陵辱を受けるのも

どうして矢田なんだよ……。

神様はどうして

誰もが羨む美貌と引き換えに

立ち直れない程の傷を矢田に与えるんだろう。

もうこんなに傷ついてボロボロなのに

過去の恐怖から逃れる事さえ許されないなんて……。

「どうしてお前ばっかり……」

「……藤堂泣いてるの？」

余りにも不公平すぎるよ。

「藤堂……」

お前

傷だらけじゃんか

「藤堂、泣かないで」

ああやって

いつも知らねえ所で怯えて泣いてたのかよ、お前？

「泣かないで」

「ゴメン――」

「藤堂……」

辛いのは矢田の方なのに

泣いちまってるのはオレの方で

「優しいね……」

そう言って

目尻を伝う涙を、矢田がそっと舌で拭ってくれた。

「俺、大丈夫だよ？」

「大丈夫じゃねえよ」

矢田はまたオレの胸に顔を埋めて
少し鼻を鳴らした。

「大丈夫だよ……」

その中で子猫みてえに頬擦りする。

少年のもたらす柔くてくすぐったい感触に愛しさを覚えて、こんな時でも胸をいっぱいにしてくれる矢田の健気な優しさを想うと、また涙が溢れた。

「よく魘されるんか？」

「ウン……。　昔程じゃないけどね」

障子の隙間から

暮れかかった夕日の薄明りが差し込む。

ベットの上で二人横になって

触れ合う手と手を繋ぎ合った。

「――ウチの幹部だったんだ、ソイツ……。　その頃からソイツの部屋に俺位の男の子が出入りしてんのも知ってた」

暫くして

矢田は静かに話し出した。

「気持ち悪かったよ、アイツ。　俺の事付け回して、何か言い訳付けては触って来てさ…。
？でもあの頃は、アイツのして来る事がどういう事か、よく分かって無かったんだ」

片手に矢田の温もりを感じ、
仰向けになったままその声にジッと耳を傾けた。

「あの日さ、組に誰も居なかったんだ。　おっちゃんも、源二もさ。
どうしてか居なかった」

「ウン……」

「だけどアイツだけは組に居て、皆が俺を呼んでるからおいでって…。
そう言って　連れて行かれた所は誰も居ない廃虚だったよ」

以前、矢田から少しだけ聞いた事がある。
男嫌いなのもそのトラウマのせいだって。

「アイツ、後ろ手に鍵を掛けながら俺を見て笑ったんだ」

その時
矢田は僅か１０歳の少年だったんだ……。

「今すぐ着ている服を全部脱いで見せろって。？
逆らったら……、おっちゃんも、タツも、皆殺しちゃうよって言われた」

「矢田……」

「それからアイツは跪いて口を開けろって……。　良いって言うまでそうしてろって…」

「もういいよ……！」

「言わせて……」

頬を撫でる
矢田のあったかい手。

聞いてるオレの方が思わず耳を塞ぎたくなる位の辛い体験をしてるのに

「誰にも言えなかったんだ」

こんなに穏やかな顔で微笑む事が出来るのは何故だろう。

「タツにも、おっちゃんにも、言えなかったんだ……」

本当はオレの方が
矢田の体験の全部を受け止める覚悟が出来て無いんだ。

暴力を受けるって事は、
オレの育った環境の中では無縁だったから……。

矢田の話を聞きながら

オレは体の震えが止まらなかった。

怖かった。

矢田がボロボロになっても尚、暴力と恐怖を与え続けて

心の奥底まで、立ち直れない程の傷をつけたソイツが憎かった。

復讐でも何でも、
矢田が受けただけの痛みをソイツに全て与えてやりたいとも思った。

「それはダメだよ、藤堂」

心の中が怒りで占領されて、その感情が体外に狂気となって押し出されそうだった。

「俺らとアイツは違うよ。
……　何があっても、アイツと同じにはなりたくない」

オレには分からないよ、矢田。

この感情を

どうすれば抑える事が出来るのかも……、

そんな体験をしたお前が

どうして穏やかな顔で自分の傷を曝け出せるのかも……。

何でお前は

その辛い想いを

愛情に変えて

オレに与えてくれるんだ。

どうしてそんな事が出来んのか

オレには分かんねえよ……。

波乱の始まり

運命の行方
波乱の始まり

「いつまで経っても子供なもんで。　ホンマ、すんませんなあ」

「いえ……」

再び寝入った矢田を囲んで厳ついオイチャンとオレが向かい合う。

ベットの前にあぐらを組んで座り、その体勢のまま深々と頭を下げた。

矢田を寝かしつけた丁度その後、まるでタイミングを見計らった様に部屋に現れたその人は、

『ヤレヤレ、どんだけ待っても来んと思うたら…。ウチの我が儘防には困ったモンやな』

大きな独り言を呟いた後、いつもみてえに顔をくしゃくしゃにした笑顔を見せた。

その目尻からは涙がうっすら滲んでる様にも見えた。

『ウチのが二人共迷惑掛けてしもうて……。　すんません、ホンマ、ありがとう…』

こみ上げる物を抑え込む様なその声に、

もしかしたら
さっき矢田の話してた話を聞いてたのかも知れないって思った。

もしそうだとしたら……

“逆らったら、タツもおっちゃんも皆殺しちゃうよって言われた”

“俺、本当は逃げ出したかったよ”

くしゃくしゃの笑顔の裏で

この人もオレと同じく湧き上がる憎しみを必死に鎮めてんじゃないかって

そう思った。

『――榊…』

組に忠誠を誓う裏で、
凶悪な組織を影で操ってた男。

“サカキ――…”

この名前だけは
絶対に忘れねえ。

その男は
矢田を歪んだ欲望で汚し、
組を乗っ取る為の道具にしようとした。

何処までも卑劣で残虐な行為で少年の純粋な未来を汚したんだ。

矢田の優しさを利用して
大切な人の命を足枷に
立ち直れない程の傷を体と心に刻んだんだ。

矢田が何と言おうと
オレはソイツを許さない。

絶対に許さない。
？

波乱の始まり（後書き）

更新分全てＵＰです。

暫くお待ち下さいませｍ（＿＿）ｍ

波乱の始まり　2

「……ん」

たまに小さく寝言を漏らす少年を抱き締める。

オレも半分夢の中で

そろそろ睡魔に負けて闇の中に堕ちようとする直前だった。

心地良い寝息を漏らし眠る少年の静かな呼吸が子守唄代わりに聴こえる。

ー今回の一件、堂善寺はどうやら“シロ”みてえですわー

朦朧とした夢の中にまで組長さんの声が聴こえて来る。

色んな事がありすぎた所為なのか、

夢と現実の区別が付かねえ位鮮明な映像が、闇に沈むオレの脳裏を占領していった。

『まあ、ワシらもプロやないんであくまで憶測ですけどな…』

矢田の寝息の聴こえる静かな部屋で、声を潜めたガラガラ声が響いてる。

『何処をどう探しても、組絡みやっちゅう痕跡は見当たらんのですわ、これが』

その人はゴツゴツした大きな手で、オレの隣で眠る矢田の頭をワシャワシャと撫でた。

何となく、
オレの頭を洗う相模の手と重なった。

『……』

やっぱ親子だ。

『撃ち込まれたタマも、ワシら世界のルートじゃあ話にもならんような代物なんですわな…』

その後、何を思ったか
矢田の頭をバシバシと叩いた。

『う”う”……』

矢田がちょっと唸った。

『……』

『度の過ぎたイタズラなんか、組織絡みの厄介な客人なんか…、実の処ワシらにもよう分からんのですわ』

こんな時に限って
ホンマ良い気なモンやで、コイツは。

そう言って矢田の頭を小突いた。

組に存在する、二人目の若。

相模の居ない今、
それを支えられんのは矢田だけだ。

血縁関係どころか
犬に拾われた捨子が……。

『……あの、矢田って何で相模と肩並べてる立場に――』

『……』

ギロリ――

（ひっっっ！！？）

前々から気になってた事が思わず口を突いて出た瞬間、
凄え怖い凄味を効かせた目線がオレを捉えた！
余計な事聞くんじゃ無かった…。
マジでそう思った。
『……これが精一杯の償いなんですわ』
だけどその目を見せたのは一瞬で、組長さんの顔はすぐにくしゃくしゃの笑顔に戻った。
『償いって――』
『コイツには…、もう一生足を向けて寝れん位の大きな借りがありますんで……』
そう言って
ジッと矢田を見つめてたんだ。

『ホンマ、情けない話ですけど…。　これがワシにとって、せめてもの罪滅ぼしなんです』

どうしても

それ以上聞けなかった。

俯き加減に影を落として微笑む組長さんの顔は、

もうコレ以上は勘弁してくれって、無言でそう言ってる気がしたんだ。

「ルイ……」

「ん……」

夢か現実か分からない闇の中で、オレを呼ぶ声が聴こえた気がした

――。？

波乱の始まり　3

「ルイ――」

誰だよ、オレを呼んでんのは。

「……ん…」

折角

寝付いてたのに――。

「ルイ……」

もう起こさないで……。

ダメ……、

矢田から引き剥がしちゃダメだ。

また魘されちゃうよ……。

オレが居なきゃ

オレが側に居てやんなきゃ……

また怖い夢に魘されちゃうよ――。

「ダメ――」

「…何言ってやがる」

鼻を霞める煙草の残り香。

耳に残る
ハスキーボイス。

揺り籠みてえな腕の中――。

誰かが
オレを抱き抱えて歩いてる。

誰……。

「目、覚ませよ……」

「ん……」

誰だよ……

オレを呼んでんのは――。

あ……、

さっきと違う
フカフカの何かの上に寝かされた。

フカフカ…
気持ちイイ。

「死ぬ程会いたかったのは俺だけかよ？」

熱い手。

オレよりも
ずっと体温の高い手。

何度もオレの頬を撫でる――。

アイツの手……。

「相模……？」

アイツの手だ――。

「相模…？」

ウソ……

「会いたかった…。見せてくれ、お前の可愛い顔」

重い瞼の先に

薄明りに薄ら浮かぶ男の顔。

もう何度も見上げた。

少し細めてオレを見る切れ長の目。

額を隠す黒い髪。

ひと束だけあるゴールドライン。

いつもの黒いスーツ……。

「相模……」

何より

このキス――。

熱い唇でオレの口をゆっくり塞いで……

どんどん深く口付ける、アイツのキス。

ほろ苦い煙草の味……。

「相模……」

「会いたかった、ルイ」

相模のキスだ――――。

波乱の始まり　4

「相模…っ、ン…、何で…」

「好きな女を…奪いに戻っちゃ悪いかよ……」

薄明りだと

目の前の男の顔もはっきり見えない。

だけど……

この声

奪う様なキス

熱い体――。

ほろ苦い煙草味の舌も全部、

一人の男がオレに与えて来た物だ。

「たった一日だぜ……」

「相模…」

相模が

帰って来たんだ。

「たった一日離れただけで…、お前をリョウに奪われた……！」

相模――――。

「相模、待って……」

服を捲られ

サラシを解かれる。

薄明りに
白い肌が晒される――。

「待って……！？今はダメ――！」

「ふざけんじゃねえ」

露わになったばかりの肌の上を、直ぐに熱い手が這い回る。

言葉とは反対に
体がゾクゾクと震える。

相模の手に感じてるんだ。

「……ダメ、矢田が――」

「ああ！？」

相模の熱い手……

「矢田が…、寝てるんだ」

「お前…」

「オレが居なきゃ、矢田がまた魘される…。側に居てあげなきゃ……」

「ルイ…、お前――」

アイツの手が乱暴に体を真探り出す……！

ズボンも下着も
身包み全てが覇がされる。

「リョウに惚れたかよ！」

「違う……」

「クソが！！」

「相模――――！」

乱暴に脚を押し広げられ、間にアイツの身体が押し入って来た。

強引に唇を奪われる。

息継ぎも儘ならない位の激しいキスだった。

「違うよ」

「今更気付かねえとでも思うか」

暗闇の奥で

ベルトを外す金属音が響く。

「お前が否定する時は図星なんだよ！」

「相模、待って！」

「思い出させてやる」

「……っああ！？」

薄闇のせいではっきり見えない。

突然アイツの指が秘部に這わされて、見えない手の動きに無意識に身体が大きく跳ねた。

「お前の中からリョウが消えるまで、俺の身体を味わせてやるよ！」

「相模、待って……！」

波乱の始まり　5　＊性描写有り

これじゃあまるで質の悪い悪夢だ――。

「うあ…、ぁあ…あん…！」

「お前…！　何でこんなに濡れやすくなってんだ　、アア！？」

クチュクチュ音を立てて悦ぶ身体。

相模が指で掻き回す程に、卑猥な体液がどんどん流れ出る。

また

官能的な匂いが漂う。

「ハア…、ハア…、アッアッ…！」

つい数日前、
この男に嫌という程抱かれた。

その指も
舌で齎(もたら)す快感も
身体が全部憶えてる……。

「相模……！」

「クソ…！！　そんなにイイかよ！？」

オレの身体が悦んでるよ……。

「相模…」

どうしよう…。

相模が怒ってるのに

矢田の元に戻りたいのに――、

オレの身体が

アンタに抱かれて悦んでるよ。

「あぁぁ――っ！？」

オレの身体が

アンタが欲しくて仕方ないって

そう言ってんのが分かっちゃうよ……。

どうしよう。

オレ……

相模が欲しくて仕方ない。

ガンガン突いてくるソイツの欲望に声を上げて悦んだ。

「クソ…！　ルイ…、お前は俺だけの物なんだよ！　この可愛い顔を見せて良いのも俺にだけだ…！」

怒りと愛情の入り混じった相模の声――。

アイツのが
出入りする度

オレの身体が卑猥な音を立てて受け入れる。

「ひっ…、ああぁ――！！　？アアん、気持ちイイ…！　イイよ…

！」

「お前…、分かってんのかよ！？」

無我夢中で体をくねらせて悶え続けた。

繋がった部分から
体液が溢れ出してる。

余りの気持ちよさに気付かなかった。

誰かが

部屋の戸をそっと開けて侵入して来た事に――。

「アッ…アッ、ひあっ…、んんっ」

――それは突然の事だった。

喘ぎ乱れるオレの顔を

相模じゃない誰かが両手で包みこんだんだ。

波乱の始まり　６　＊

突き上げられて小刻みに上下する身体が、誰かによって抱き締められた。

「ああ…、ウソ――――！？」

相模で一杯になってめちゃくちゃに感じてるオレの顔を覗き込まれる。

暗闇の中でも、

うっすら浮かび上がる美貌。

白に近い金色の髪は、

夜の闇に照らされ灰白く輝いてるんだ。

ソイツ独特の良い匂いがする……。

「ウソ――――…！？」

「……」

ソイツは無言で

相模に乱され続けるオレに口付けた。

「何…、やってんだよテメエ！？」

途端に相模の攻めが激しくなった。

「……あぁぁっ！？　ハ…ッ…アッ…」

「藤堂…、こんな顔してタツに抱かれるんだ……」

「クソ…！　ルイから離れろ！！　俺の女だ――！」

コレ以上無いって位奥深く突かれて、溜まらなく感じた。

気持ち良すぎて苦しい…。

お腹の下辺りから何かが溢れ出してくる――！

「ダメ――、ダメ……ッ、相模…！」

「クソが！！」

オレの唇を塞ぐソイツが、突然中心部の蕾を触って来た。

「待って！？　ああっ！　……ああん！　ダメだって…！」

始めは上下に撫でる様に――

そして次第に指で摘んで擦られる……。

その下では相模の物で一杯になってるソコが否応無しに奥まで攻められ、

鮮烈な快感を与えられ続ける。

「藤堂凄く気持ち良さそう…」

ソイツはうっとりとした目でオレを見下ろした。

オレの急所を

二人の男が

一気に攻め立てる……！

「クソ…！　お前、どっちに感じてんだよ！？」

「ああ――！！　ど…どっちも……」

「ああ！？」

ハア…ハア…

「どっちも気持ちイイ……！」

「お前なあ！！」

相模に抱かれるオレの顔を見られて、

しかも二人共に攻められて……、

且つてない程の絶頂の中で身体が水浸しになっていく。

４本の手が
身体を這い回る。

それが

こんなにも気持ちのイイ物なんて――。

これまで受け止めた二人の快感が、一度に押し寄せたんだ。

波乱の始まり　７　＊

相模を受け入れるソコがクチュクチュ卑猥な音を立てる……。

矢田の動かす指が
ヌルヌルと蕾を刺激する。

急所を一度に高められて
とめど無く押し寄せる絶頂がいつまで経っても終わらない。

「ダメ…、ダメ、もう――！」

激しく攻める快感と
淫乱になるまで高められる指の動きと……、

体の奥にある急所攻めに鳴かされ

唯一の弱点の蕾をヌルヌルと擦られ、逃げたくなるなる様な快感を
与えられて……、

どんなに被りを振っても
その快感から逃げられなくて

気持ち良くて

どうにかなっちゃいそうで……。

「ああ…っ！！　イク…、イク！！　イッちゃうよ――！」

恥ずかしいより先に
本能のまま声を上げて鳴いた。

また
身体が痙攣する。

気持ちイイのが身体に溜まって溢れ出してく……。

なのに、
相模も矢田も
いつまで経っても止めてくれなくて……、

何処までも続く
甘い毒に冒され続けた。

「藤堂…、めちゃくちゃエロい」

「リョウ！　ルイに触るんじゃねえ！」

「嫌だよ。　藤堂はもう俺の大事な子だもん」

「ふざけんな…！」

「俺…、タツに勝っちゃうから」

「ルイは俺の女だ…！」

「でも勝っちゃうよ」

「お…、お前らなあ…！！」

オレをめちゃくちゃに攻めながら言い合う二人の様は

まるで兄弟喧嘩だ。

人をここまで淫らにさせといて、

取っただの取らないだのと……。

「ルイは俺の物だ！」

オレは取り合いのオモチャかよ……。

「ああぁ――――！！　うあ…、バカ……！」

また

イキそう――――。？

何だよコレ――――。

突然相模が現れて

矢田から引き剥がされて…。

しかも、再会したばっかりのアイツにめちゃくちゃに乱された。

オレの弱い部分を容赦なく突き上げて鳴かされる様子を

部屋に押し入って来た矢田に全部見られて……

あろう事か

矢田にまで攻められ

二人の男に同時にイかされたんだ。

顔もはっきり見えねえ暗闇で…、

まるで夢の続きの様だった。

「……ん…」

ゴゾゴゾ…

夢――――。

そうだ、揺り籠みてえに揺られて、本当に夢みてえだった。

「ふぁ……」

ゴゾゴゾ…

もしかして

相模も

矢田も

さっきの事も全部

夢……、か？

波乱の始まり　8

「ん……」

暗い意識の中に
射す様な眩しい光が
どんどん押し入って来る。

「寒い……」

ゴゾゴゾ

冷ややかな朝の空気が眠り途中の身体に射さる。

「相模……？」

ゴゾゴゾ

昨晩の事を思い出して、
嫌と言うほど乱された男の名前を呼んだ。

「おい――…」

モゾモゾ…

返事が無い。

目を瞑ったまま、手だけ動かしてみた。

フラフラ振り回すそれは、スカ…っていう虚しい音だけ響いて、悲しく空を切る。

そのうちボスンと音を立ててフカフカの中に落ちて行った。

「相模――…」

ようやく目をこじ開けて回りを見渡すと、

そこは知らない部屋で、オレは一人ソファの上で寝てたんだ。

「嘘……」

まさか

マジで夢だったんかよ……？

「相模……？」

昨晩までアイツの熱い位の温もりも、身体が齎（もたら）す快感も、オレの全身であんなに感じてたのに――。

あんなに乱されて感じたのに――。

「嘘だ……」

矢田も相模も、

何処にも居ない……。

起き上がって辺りを見回してるうち、服を着て無い事に気付く。

「なんだよ、この状態…？」

昨日の当事者が二人共何処にも居ねえのに、

何故かオレだけが素っ裸で知らない部屋で寝てる。

「何なんだよ――――？」

昨日起こった事が

夢か現実か分かんねえ……。

「……」

でも、
良く考えたら

昨日遠くに行っちまった相模が、今日戻って来るなんて事……

「無いよな……」

ウン。

どう考えてもあり得ねえ。

幾ら矢田が挑発紛いの電話を掛けたからって

相模が機内で暴れてたからって

まさか
こんなに早く帰って来る訳ない。

ハア……。

そんな訳

無い、よな――。

「そっか…」

オレって

夢遊病の気があったんだ。

ハア……。

「そうだよな……」

何か

凄い寂しい。

“コツン…ッ”

「服着よ……」

あんなに鮮明に目の前にあったものが

オレの只の妄想だったなんて。

“カツ……ッ”

それにしても

なんて夢見てんだか。

相模にも矢田にもなんて、

お、オレって奴は……

“カツン……”

服まで脱ぎ散らかしてこんな所まで来ちゃって。

マジで淫乱みてえで自分が恥ずかしいぜ。

波乱の始まり　9

コレって

アレかな。

“カツン……”

欲求不満てヤツか？

「……うーん」

あ、あんなに

矢田に色々されといて。

イヤ

オレってもしかして、

そういうのがメチャメチャ好きだったりして……

“カツン…！”

「――ん？」

何だ、今の音？

アレコレ考えながら着替えてる時、

窓側の方で

何かが軽くぶつけられるみてえな音が聴こえたんだ。

“カツ……ッ”

その音はやっぱ空耳じゃないみてえで

動きを止めて耳をそばだててると、またカツンと小さく窓が音を立てた。

「な、なんだ……？」

それはまるで
オレを呼んでるみてえで。

“カツン……ッ”

自然と音のする方へ足を向けた。

ソロソロと近寄って
窓の外を覗き込んだ。

「……」

……。

「あれ…？」

さっきまでの音が急に聴こえなくなった。

暫くジイイっと睨んでたけど、やっぱりそれから音がしない。

窓を鳴らす不思議な音がピッタリ止まった。

「……」

き、気になるじゃねーか…。

一体何の音……

「確保！！！」

「ぎゃっ！！？」

窓に耳を近づけようと顔を寄せた時だった。

突然窓が開いて、

目の前にヌッと男が飛び出して来た！！！

あんまりにも驚き過ぎて、まるでネコの毛が逆立つみてえに身体が跳ねた！！

ソイツは有無を言わさずオレに抱きついて来たんだ！

「オイオイ…、マジでこんなんで捕まえたちゃったワケ？」

「な…、なな…っ！？」

「警戒心ゼロだネ」

こ、このチャラい口調……！

バニラみてえな甘い匂い。

至近距離に見える、
綺麗なＭ字型の唇。

獣みてえな奥二重……。

「兄ちゃんもっと警戒しなきゃ。　相模龍の世話人なんだから」

これは

コイツは……、

「俺みたいな奴だって居んのヨ？」

堂善寺の……

ネコ男――――！

波乱の始まり　１０

何で！？

何でコイツ、相模の組に居るんだよ！？

コイツ――、

「離せよ！！」

何考えてんだ――！！！

「おーおー、暴れちゃって。　可愛いー…、くはねえか」

骨ばった腕が身体ごと抱き上げる！

バタバタ暴れる手足は虚しく空を蹴る。

ネコ男はそんなオレを見て、難しそうに眉根を寄せて顔を傾けた。

「マジでこんな奴が…相模龍の世話人なワケ？　めっちゃ弱っちいじゃん」

「クソ…！　離せ！！」

「兄ちゃんも大変ネ？　相模の護衛の為に、あんな格好までしてサ…」

ネコ男に抱きかかえられた無様な姿のまま、部屋の外にズルズルと連れ出された！

コイツが一体何を考えてんのかが全く分かんねえ！！

とにかく…

とにかく逃げねえと……

「ホント、俺もバカにされたモンだネ…」

「ああ！？　何ワケ分かんねー事言ってやがんだ！？　いいから離せよ！！」

「兄ちゃんさあ、折角捕まえた獲物を逃すバカが何処に居んのヨ…」

朝っぱらなせいか、
周りに組員が一人も居ねえ…！

渾身の力で暴れて大声を出そうとした時、
寸前の所で口元を抑えられた。

「……！」

「調べたよ、君のコト…、ちゃんとネ。　藤堂、ルイくんだっけ？」

組が

遠くなる――――。

「……っ、さが…」

「アハハ、無駄無駄～。　ちゃんと調べたつったじゃん」

必死にもがくオレの上で、
ネコ男が獣みてえな八重歯を出してニヤリと笑った。

「今、居ないんだってね…、相模龍」

「……っ!?」

何かを目論む様な、
マジでヤバイ目……。

「オタクに色々聞きたいことがあんのよね……」

羽交い締めにする腕から
赤い刺青が覗く。

「兄ちゃんが相模龍の代役っての、あれマジなワケ？　なら、教えて欲しいんだけどサ」

必死にもがくオレに顔を寄せて、ソイツは耳元で囁いた。

「ウチの組を襲撃させたのって、誰よ？」

「……は…っ！？」

コイツ……

何言ってやがんだ――！？

「昨晩…、まんまとオタクくん所にヤラレタよ。　アレって、相模龍の指示？　それともアンタ？」

「……に、言ってんだよ…！？」

襲撃…されたのか？

堂善寺も……

「俺ぁ、んな姑息な手段は好かねえなあ…お兄チャン？」

「んん……！！」

「この落とし前…、どうやって付けてくれんだって言ってんのヨ…」

だとしたら――――

「相模じゃ…、ねえよ…！」

組長の言う通り、
堂善寺はシロだ……！

「へエ。　じゃアンタが襲撃させたってコト…。　良い度胸してんじゃねェの」？

「ちが…っ…！」

「ウチの組でその落とし前付けろや…」

ネコ男の顔に
これまでとは違う怒りの色が滲む。

凄みの増した声は
男の印象を豹変させる。

「来い……」

「んん…っ、ん……！！」

もう
どうにもならない。

力の増した赤い腕に引き摺られる！

「離せ……！！」

逃げられない――…！

「クソ……」

もう、無理だ……

もう――――

ドガアア！！！

無理だって

そう思った瞬間だった。

「あ……？」

オレの目の前から

ネコ男が消えた。

いや…

違う……。

吹っ飛んだんだ。

「何で――」

さっきまで羽交い締めにされてた腕が解かれ、
ソイツはオレの目の前で
鮮やかなまでに孤を描いて吹っ飛んだ。

「何で……」

羽交い締めにされてた赤い腕の代わりに、
黒いスーツを纏った男の腕の中に抱えられる。

「お前は目を離すと……」

耳元に聴こえるハスキーボイス…。

波乱の始まり　11

後ろから抱き締める男の、ほろ苦い煙草の匂い。

もう何度もその腕に抱き締められた。

アイツの匂い……。

後ろを向かなくても分かるんだ。

「相模……」

身体が一気に
安心感に包まれる。

「相模…！」

アイツの腕だ……。

「誰だこの男はよ」

夢じゃなかった……。

「相模…」

オレを包む熱い手をギュッと握った。

「ルイ、聞いてんのかよ」

「ううー……」

「お前――…？」

嬉しかった。

相模が目の前に居て……

「泣いてんのかよ……、オイ？」

「……」

また
オレに触れてる。

「相模…龍……!?　ハア…?居るじゃねえの!　?誰があんなデマ……」

相模――。

「俺の、可愛い女を泣かしたのは……、テメエか」

「……ハア?」

相模…。

アイツは
オレの顔を覗き込んで
目尻に溜まった涙をそっと拭うと、未だに倒れ込んでるネコ男の方にゆっくりと顔を向けた。

「おい、相模？」

「よくも、俺の可愛い女を泣かせやがったな」

その顔が
みるみる悪魔に変わって行く。

背中に黒い羽を纏った悪魔に――。

あの時の、
“制裁”　を行ってた時の悪魔の顔だ。

「殺してやる」

相模が

オレの涙を勘違いして

キレちまった。

そう言うが早いか、
アイツは立ち上がりかけたネコ男に正面から蹴りを入れる。

「ウハッ！？　……面白れえ。　天下の相模龍が直々にお相手してくれんの」

舞う様にヒラリを交わし、M字の口角を上げて構えるはネコ男。

仁王立ちでソイツを睨み付け、その眼光で相手を威嚇し追い詰めるは相模。

今は最凶の悪魔が降臨するソイツは、ネコ男が喋るや否や、胸ぐらを掴み襲い掛かる。

男と男の拳が交わる。

ゴツッッ！！！

また

骨と骨のぶつかる音が響く。

「えげつねェ」

冷や汗を流しネコ男が呟いた。

次いで、

ドゴオォッッッ！！

肉を割く様な痛烈な悪魔の拳が振り下ろされる。

「ウゲ！！？　痛ってえぇぇ！！」

辛うじて両手でソレを受け止めたネコ男は、その衝撃で体が大きく揺れる。

「テメエの犯した罪、死ぬ程後悔させてやる」

「ハハ…、　流石に強えわ、相模の若は。　どんな鍛え方してんだか…」

拳をギリギリ唸らせるその男の額から、更に冷や汗が流れる。

相模は瞬時に拳を振り払うと、ネコ男の胸ぐらを蹴り上げた！

「グ…ッ！？」

今度こそ

ネコ男の体が宙に舞う。

相模の蹴りはまるで弾丸みてえに胸を刳り、

その男は吸い込まれる様に地面に堕ちて行ったんだ。

悪魔が懐から“アレ”を持ち出す。

「死ねや」

軽い金属音を立てて、

ソレはネコ男の左胸を捉えた。

「相模！？」

ソレがカチリと音を鳴らした時、

「パパ……？」

小さな女の子の声がオレと相模の後ろから聴こえたんだ。？

波乱の始まり　１２

パパ……。

「パパ～」

何だよこの子。

急に後ろから現れて

相模とオレを

すり抜けて

「パパあのね～…」

ネコ男の方へトコトコと歩いてく。

「……」

そして相模はネコ男に銃口を向け

今正に

ソイツを――――

「はっ、ダメ！　相模！　女の子がいる！！」

「ああ！？」

撃つ一歩手前で

相模の持つ銃口を引っ掴んだ。

耳元でガン！！て音が響いて、

相模の放った弾丸はネコ男の顔の横を突っ切って

少し奥の芝生に穴を開けた。

「お、オイオイ…、マジかよ？」

ネコ男の顔は完全にヒクついてた。

「ルイ！！」

「ば、バカ！！　下見ろよ、下！！」

「ああ！？」

そりゃそうだ。

「パパ～」

「…ちーちゃん。　来ちゃダメって言ったでしょ」

「うん。　でもね～、ちーちゃんね…」

良く分かんねえケド
この子が突然割り込んで来なけりゃあ、
相模はマジでネコ男に銃弾を浴びせてたんだから。

「……ルイ、この子どうした」

「オレが知るかよ」

「しらないおにいちゃんとお話してね～…」

「ちーちゃん、ダメよ。　知らない人と話しちゃあダメ」

「うん～…」

相模の蹴りを受けて地面に倒れるネコ男に縋り付く女の子。

「テメエ、父親か…」

チッと小さく舌打ちして、手に持つ拳銃を懐に戻す。

その様子を隣で見届け、
ホッと胸を撫で下ろした。

「でもね～、ちーちゃんね～、おにいちゃんに、ここのおうちの人につたえてって言われてね～」

「ん？　何を？」

ネコ男はよいしょと起き上がり、ちーちゃんて名乗る女の子を抱き上げた。

「あのね～、またつぶしちゃうよって」

「ん？　ん？　？何の事、ちーちゃん？」

「あのね～、なんかね、おにいちゃんがね、またつぶしちゃうよって言ってきてねって、ちーちゃんに言ったよ～」

また潰しちゃうよって

それって……

「そう言ったらね、おうちの人にわかるからって言ってたよ～」

それで思い出される事は
一つしか無い。

「クソが！！」

「相模！？」

？「帰って早々ふざけやがって…！」

また誰かが
店を襲ってるって事かよ？

「お前にロクに触れやしねえ！」

そう吐き捨てると、オレを肩に担いで何処かに歩き出す。

「バカ、下ろせよ！」

「潰しちゃうって何ヨ？　オタクらでも問題が起きる事があるワケ？　？ネエ～？」

ネコ男の声が遠ざかって行く。

勿論　相模がネコ男の問いに答える訳も無く。

「出せ！　いいから店に行けや！！」

組の外に待機してる黒塗りの車にオレを抱えて乗り込むと

運転手を一喝して

車はそのまま走り出した。

「クソが」

「……」

オレを胸に抱く悪魔は怒り口調で小さく舌打ちした。

「ルイ！」

ギロリ！！

「ビクッ！！」

それから相模は何故かオレを睨み見たんだ。

あの悪魔の怖ーい目で

オレを睨みやがった！？

波乱の始まり　１３

久し振りに見る悪魔は
再会直後から怒ったまんまだ。

「何だあの野郎は！？」

至近距離に迫られると
更に迫力が増して怖い。

「し、知らねえよ」

だから自然と口も噤んじまう。

そう。

これは紛れも無く、防御本能だ！！

「知らねえ訳ねえだろうが、ああ！？」

「……」

う、うるせえやい。

オレはなあ…、

目の前のアンタが怖くて話せねえんだよ――！！

「クソ…！　お前は次から次へと…！！」

「……」

だって、ネコ男の事を話し出したら…

女装の時から話さなきゃなんねえじゃねえか！

あの時既にネコ男に会ってたなんて言ったら怒る！！

確実に怒る！！

「昨日は昨日でリョウに感じやがって……！」

「……」

昨日――。

「おい」

「ああ？」

昨日って

「き、昨日アンタ、お…、オレに何かしたか？」

矢田に感じてって

それってもしかして……

「あぁぁ！？」

「ビクっ！？」

アレは

夢……

「テメエ！！　昨日あれだけ俺とリョウに感じといて、ふざけんじ

ゃねえぞゴラァ！！」

「……」

じゃなかった。

「お前、都合良く夢だとか思ってんじゃねえだろうな！？」

「……」

「お前…、殺すぞ！！」

「……」

あの恥ずかしい記憶は

現実だった。

オレは戻って来た相模に抱かれて、
相模の体にめちゃくちゃ感じてる所を、目を覚ました矢田に見られちまったんだ。
動物みてえに声を上げて、相模に抱かれて悶える様を全部見られた……

「クソが…！」
ドサッ！！
「相模……！？」
「お前、いい加減にしろよ…」

矢田にイキまくる顔をうっとりとした表情で覗き込まれたのも
指でイカされたのも

「目を話せばいつもそうだ…」

相模の体が欲しくて溜まらなかったのも、

全部マジの事なんだ。

「結局俺の片思いかよ！？」

オレ、あの時

相模に抱かれたくて溜まらなかった。

「相模……」

無意識の本能が

早くアンタに抱かれたいって叫んでた。

「ふざけんなよ…」

あれは

ヤバイと思う。

だって……、

気持ち良くて仕方無かったよ、オレ。

「何処までお前を追い掛けりゃいいんだよ…」

あれじゃ
まるで中毒だ。

悪魔の毒に

全身が侵されちまってるみてえだ。

波乱の始まり　１４

「お前、聞いてんのかよ！？」

「うん……」

目が合うと

昨日の事を思い出しちゃってドキドキする。

「クソ…、何でこんな奴を好きになっちまったんだ……！」

「うん……」

あ……、

相模の匂い。

覆い被さる様に抱き締められて、

煙草の匂いに隠れてたアイツの匂いがする。

ドキドキ…

「クソが……」

唇が首筋に触れた。

「あ……」

怒ってるクセに

そんな優しいキスすんなよ――。

気持ち良くて

震えちまうじゃんか。

「何でこんなに惚れてんだ、俺は」

ドキドキ…

アンタのキスは

やっぱりいつも熱い。

体温と重なって
凄いポカポカする。

アンタの這わせる手の動きが気持ち良くて、
キスして重なってる所が凄く熱くて

昨日もこうやって抱かれたんだって思うと
無性に胸が高鳴った。

「相模……」

オレ、
相模と居る時は
女になっちゃう。

「クソ……、そんな目で俺を見るなよ」

お前何考えてんだよ、って呟く相模の唇。

それがオレのと重なる。

相模は怒ってるのに、何故かドキドキしてるオレ。

「――お前に話がある」

「……なに…」

怒ってるクセに
優しいキス。

唇から頬に、
耳たぶに首筋にと移動する。

それも、今にも抱かれそうな位情熱的に、キスの音を立てて吸い付いては離れる。

「大事な話だ」

「……」

怒ってるクセに……。

このまま、またアンタに抱かれちまいそうだ。

もし今、

ココが車の中じゃ無くて

組の中だったら――。

もし

あと少しだけ

車が走ってくれたら――。

「戻ったら、返事をくれ」

「……何を」

「分かれ」

「……」

オレは――

アンタの言う大事な話

ちゃんと聞けてたんかな。

ズドン！！！

「な、なんじゃおどれら…」

「げ…へへ、う、動くなよおぉ！！」

「居たぜぇ…！　へ…、へへ、コイツだ。相模の“オンナ”だ」

「お、お嬢！！」

「動くなよお！　ヒヒヒ…」

街に消えた相模を見送った直後、

オレを乗せて待機する車が突然後ろから追突された。

次いで

運転手が銃を充てられ引き摺り出される。

頭に伝わる、冷たい鉄の感触。

「う、動くんじゃねえぞ。　へへ…」

「……！？」

声と共に後ろから伸びた手が

白い布で鼻と口を塞いだ。

「……ん、んん！？」

「う、動くなぁあ！　こ、殺すぞ！」

数人がかりで体を抑えられるうち、

暴れる手足も自分の意識も、次第に麻痺した様に揺らぎ始めた。

「げ…へへぇ…！　う、上手くいったぜ…」

「さ、がみ……」

コイツら……！？

“お兄ちゃんがね、またつぶしちゃうよって…”

「は、早く車を出せぇぇ！」

「さがみ……！」

“そう言ったら分かるからって言ってたよ……”

これは

罠だ――――……！！

下品な笑い声

掻き毟ったのか、皮の捲れてジュクジュクになってる腕。

顔を覆う包帯に浮かぶ赤黒い滲。

「げ…へへ……！　とうとう来たぜぇ。　さ、相模龍…。こ、こ、後悔させてやる…ヒヒヒ…ッ！ガフッ…ウゲエ！！」

相模――――……！

“大事な話がある”

「――――…っ」

目を閉じたく無いのに……

意識が無理矢理

暗闇に覆われる。

「グフッ……ウガア…！　へ、へへ…、ふ、復讐の始まりだ…！
ぎゃはははは…！！　？ヘグっ、グホオ！」

“戻ったら、返事をくれ”

相模……

相模……！！

お願いだから

相模の元に返して……。

オレ……、

今度こそ

アンタの帰りを待ってたのに――。

救世主　1

運命の行方
救世主

何も見えない。　何も聞こえない。

?ただ、オレの全部を支配する暗闇が相模を呼ぶオレの意識を奪っていくだけ。

アイツの声に、アイツの指…。

熱いキスに、絶え間なく注がれる甘い言葉。

それらの綺麗な時間が
奴らによって消されてしまう。

ここが同じ空間なんて思えない。

オレらの情事の染み込んだシートの上。

暗闇に拐われる意識と共に、アイツの名残までもが薄く消えていく

のを感じながら……

崩れる様に

頭からシートの上に沈み込んで行った。

「……だ…てろ…」

腕が痛い。

手首も、ジンジンする。

「……してやる…、殺してやる」

埃っぽい、嫌な臭い。もう何年も締め切っていた様な、篭った空気の臭いがする。

「……う…っ」

時々耳に入る、下品な笑い声。
器官に詰まりがあるのか、喉の奥から絞り出す様なひしゃげた声。

「さ、相模龍も…、これ、これで終わりだ…、ヘヒヒヒ…グボアッ!!」

体の中から吐き出される呻き声。無意識に喉を突いて出るのか、引きつけみてえなその声は、まるで馴れ果ての怪物が出す悲鳴の様で気持ち悪かった。

「へ、ひひ…、お、お目覚めだぜ……、ヘギァ!!」

「……う…っ」

思うように体が動かない。

犬のように首根っこを掴まれ、無理やり体を起こされた。

泥臭い埃が辺りに散らばり、不快感で喉が詰まる。

「……っ」

首にめり込む男の爪がギリギリ音を立てる。
焼ける様な痛みが体を襲った。

霞む視界の中、いつかの包帯男の姿が映る。

それも、数が増えてる……。

「おい…、そ、そいつは大事な“餌”だ。す、すぐ殺っちまったりヘギウ！！　す、すんじゃねえぞ……オゴア！」

「クソボケ…！」

オレを掴み上げる奴と、体を掻き毟りながらオレを見て笑い声を出す男。

見張りなのか、金属バット片手に体を揺らしてる奴――

「わか、グググ…、分かってる…ゴボボ……！」

いや……、その他にも
周りに白い包帯ずくめの男が……

ズサアッ！！

「い……って！」

突然掴んでた手が突き放され、肩から地面に落ちた。

「こ、殺すのは…さが…、相模を殺ったあとだ……ヘギエ！！　ヒヒヒ……」

男は包帯の隙間から白い泡を垂れ流しながら呟き笑った。

「げろ……」

コイツらめちゃくちゃ気持ち悪い。

「へっヒヒ……こわ、怖くて…フング！　こ、こ、声も出ないぜコイツ！　ケヒヒヒャ…グエェ…ギギ、ギャアハッハハハ！！」

何で全員包帯を巻いてんだ……。

しかも、所々赤黒いシミが滲み出てる。

服から除く手や腕は、まるで生皮を剥いだみてえに血交じりの身がむき出しになってた。

マジで墓場から這い上がって来たゾンビみてえで、とてもじゃないけど同じ人間とは思えねえと思った。

未だに引きつけを起こしながら声を上げて笑う男を睨み上げた。

「テメエら……、バカな事してんじゃねえよ！」

両手を後ろ手に縛られて倒れこむオレを見下ろし、狂ったように笑い声をあげる。

その声を遮るように奴らを一喝した。

それまで笑い続けてた男の声が止んだ。

「馬鹿……、ば、馬鹿だと……ヒグッ！　お、お前……」

「テメエらに相模は倒せねえ。　倒せる訳がねえよ。　アイツは――」

「お、お、お前ぇぇ！！　俺を、ギヒャ！　俺を馬鹿だと言ったなぁぁぁ！！」

包帯男は突然狂った様に発狂して暴れだした。

「クソックソッボケがぁぁ！！　お、お前に、グギギ！　お前なんかに何が分かる！　死ね！　死ね！　死ね！　死ね！　ボケがぼけがああ！！」

半狂乱に振り回す手足がオレに向けられるけど、そのほとんどが掠りもしなかった。

男はそれでも闇雲に手足を振り回し続けた。

救世主　2

「クソが！　クソが！　クソが！　クソがぁぁぁ！！！」

「ウッ！？　お、オレに近づくなよ！」

男はゼイゼイ息を切らし、闇雲に暴れ続ける。

そのせいで砂埃が顔に付いてむず痒い。

しかも包帯から時折流れ出る白い泡までもが飛び散ってる。

絶対、絶対こっちに寄ってくんな！？

「バッカ！　き、汚ねえんだよテメエら！！」

「ば…ばば…馬鹿だとおおお！！　ヒイィ…ヒイィ…っ！　お、俺を馬鹿だと言ったなあぁぁぁ！！」

「うげ……！」

だからこっち来んなよ！

うわっ、包帯から泡が吹き出してる…。

キモイ。　ヤバイ前にキモイ！！

「こ、こ、殺してやる！　グブブ…！　ゴロズ！！　ゴロズ！！」

なのにソイツは

ミイラみてえに両手を伸ばして
近寄って来やがるんだ！！

い、嫌だ…！

あの手にだけは
触られたくねえ！

来んな！

絶対来んな！！

「ぎゃあぁぁぁおおおう！！」

「ボケ！　近寄るんじゃねえ！！」

奴が両手を上げて向かって来た！

我を忘れて叫んでる。

顔を振り乱す男。

白い体液を口から流し、狂った様に声を上げる。

それが近付いて来る！

どんどんオレの方へ！

来るな！　って言う程声を荒げて、

身が剥き出しの腕が伸ばされる！

そう、正に今

キモイあの手がオレの肩に掛けられる…

バキィィ！！

「ヘブジ！！」

「ハア…ハア…」

既(すんで)の所まで伸びた腕は、

鈍い音と一緒に体ごと吹っ飛んで行った。

「ハア…ハア…」

ふつふつとこみ上げる怒り。

奴を蹴り飛ばしても尚、消えない不快感が怒りに変わる。

「ふ、ふざけんじゃねえ！！」

咄嗟に出した脚が男を捉え、見事みぞおちにヒットした。

ソイツは奇妙な声を上げ、数メートル先に吹っ飛んで行った。

オレとした事が……。

奴らにばっかり目が行って気付かなかったんだ。

腕は無くとも

脚は出せる。

脚は、自由だ……！

「コ、コイツ…！　な、なに、何しやがる…！」

ソイツを吹っ飛ばした直後、それを見てた包帯野郎共が騒ぎ始める。

包帯に隠された見えない目が、一斉にオレに集中する。

「……ボケ、テメエら…俺に触るんじゃねえ！！」

壁伝いに後ろ手を這わせ、フラつきながらも立ち上がった。

車が数台入りそうな廃墟の中、散り散りになってた野郎共が
口々に叫びながら集まり始める。

その数や、数十人…！

気持ち悪さで数が倍増して見える！

「ゆ、許さねえ…ベグジ！！　こ、こ、殺ス…、お、お前なんか…
！」

何とか立ち上がったけど、すぐさま奴らが壁際ににじり寄って来る。

ミイラみてえに手を伸ばして。

来るな！　って言ってんのに追い詰められる。

ソイツらは倒れる男を中心に囲む様に輪になると

「ゴアァァァ！！！」

雄叫びを合図に襲い掛かって来やがった！！

「ぎゃあああ！！」

最悪！！

ズバシ！！

「グエエ…！」

最低！！

ドゴッ！！
「フギャ…！？」

何で……

何でこんな目に！！

スパパパパパン！！！
「ゲロ…！！」
「グエッ」

オレばっかり

何でいつもこんな目に合うんだよ――――！！！

ズダンボガコンベキペシ！！！

クソ！！
コイツらのせいで！

「ふぎゃ」

「ぐえ」

オレを
巻き込むんじゃねえ――――！！

「ハア…ハア…」

「あ、アイツ…、おか、おかしい。　俺らの…ギギ！　俺らの…ち、力が、訊かねえ…」

「ブギぇ！　猿！　猿！　さ、猿男！　アイツ人間じゃない！」

「うるっせえ！！」

一気に向かって来る奴らを片っ端から足蹴にする。

軸足をバネに跳ね上がり、
怒りの回し蹴りを喰らわせた！

脚を祓い、打ちのめして行く。

奴らは驚く程弱かった。

いつしか室内を埋め尽くす、男達の悲鳴。

「ダルァァァァ！！！」

そしてオレの怒りの声。

痛烈にエグり込む衝撃音。

コンクリートに叩き付けられる鈍い音に、パニック状態に陥った男達の悲鳴。

逃げ場なく彷徨う足音。

ズガン！！！

「ひぎゃあ！！？」

包帯野郎の顎にオレの放ったカウンターキックが炸裂する。

途中から形勢逆転したオレは、逃げ惑うソイツらを追いかけ回してボコボコにし続けた。

これまでの嫌がらせの数々に、こんなことに捲き込みやがった恨みを込めて、執念深く追いかけ回した。

両手が使えなくても何とかなるもんだ。

否、そもそもコイツらが弱すぎるんだ。

話にならない位、弱すぎる。

「ぐええ……！！」

最後の一人が血反吐を吐いて唸る。

最早、誰が見ても勝敗は明らかだった。

数十人対一人。

絶体絶命な状況の中、唯一残された二本の脚が奴らにとって致命的な落ち度となったんだ。

「ひっ…、ひいい……！！」

コンクリートの上に血反吐を垂らし、それでも逃げようと体を引きずる男。

倒れこむ仲間に囲まれ、
自分の噴き出した唾液と血液にまみれ、
無様にも地を這い逃げる。

そのうち逃げ場が無くなると、ソイツは壁に縋り付き泣き出した。

「クソボケ！！」

今更遅いんだよボケ！

「よくもオレにこんな事しやがったな」

ジワジワと壁際に追い込む。

「たす…、た、助けてくれえええぇ！！」

自分の馬鹿さ加減をたっぷり夢の中で後悔しやがれ！！

「ひいっっっ！？」

ソイツの姿
ソイツの顔が恐怖に歪む。

体を前に傾けて攻撃態勢を取った。

「覚悟しやがれぇぇぇ！！」

脚が空を切る。ヒュンて音を鳴らし、そのまま男を目がけて勢いよく蹴り出した――――

ズダァァァン！！！

「調子に乗るんじゃねえぞボケエェェ！！！」

突然聞こえる銃声に、扉の奥から聞こえる怒鳴り声。

振り被った脚は、突然の轟音に勢いを失った。

その姿を捉えた時、完全に動きが固まった。

みるみる血の気が引いていくのが自分でも分かる。

拳銃を掲げる腕を天井に向けて立つ男。

奴らと同じく顔に包帯を巻き、皮の剥けた腕。

「殺すぞ、殺すぞぉぉぉ！！！」

その腕に掴まれて震える少女。

ロープに縛られ、ガムテープで塞がれた口から小さな声が聞こえる。

ー助けてー

救世主　4

振り絞る掠れた声色。
あどけない顔を悲痛に歪めて

赤く腫れ上がる痛々しい顔を
流れる涙が幾筋も伝う。

「やめろ……」

「これ以上暴れてみろ！　こ、こ、コイツを殺すぞぉぉぉ！！」

火薬臭の混じる銃口を少女の額に充てる。

少女はいっそう悲鳴をあげて泣いた。

「やめろ！！」

ールイくん、助けて…ー

「サナ――」
「グアァァァ！！」

そう呟く間もなく

体を取り押さえられる。

ついさっきまで泣き縋っていた男によって、オレの体は再び地面に倒される。

「お前ら……」

「グラァァァ！！　ギャハハハ！　フゲエ！　お、俺らの勝ちだあぁぁ！！」

もう、抵抗しなかった。

――――ううん、出来ない。

出来るわけない。

「よくもあの時俺をブチノメシテくれたなあ！！　殺してやる！　さ、相模も、コイツも、お前もなあ！！」

「お前ら……！！」

「楽しい楽しい復讐の始まりだぜえええ！！　ヒイイッハハハハハハ……！！」

あの男だ――――

サナを襲い、相模の街を荒らした男。

組を挙げて炙り出しても消息の掴めなかった、アイツだ。

京王を追放した相模を逆恨みして
罪のない少女を傷つけた。

組でも使用禁止の薬物に手を染め、わずかな証拠を残し忽然と姿を消した男だ。

コイツだ……、

この男だ――――

「グラァァァ！！」

「……！！」

覆いかぶさる男に容赦なく頬を打たれる。

馬乗りになって、無抵抗のオレの顔をソイツは叩きつける。

乾いた音と一緒にジンジンとした痛みが顔中に広がった。

サナが泣き叫んでる。

その光景を見て、男は声を上げて笑った。

口の中に鉄の味が広がる。

「ヒッ、ヒヒヒヒハハ！！　ざまあみろ！！　ざまあみろ！！」

痛い……、痛い……

――でも

それよりも悔しい。

守ってやれない。

助けてあげられない。

悪を目の前にしても
今のオレにはどうすることも出来ない。

こうやって

奴らの暴力に耐える事しか

今のオレには出来ない……

――クソ

――クソ…

クソ……！！

グッタリと倒れる体を引き摺られ、両足をロープで何重にも巻かれた。

「ゲフ…、て、手間取らせやがって」

サナがオレの隣に投げられる。

「サナ――！」

「……ンウ」

体を精いっぱい捩り、華奢な少女を全身で受け止めた。

「――――ウッ…」

背中にズシンと重みが掛かる。

少女は涙目でオレを見て、
小さく顔を振った。

その顔を、出来得る限りの穏やかな目でジッと見つめた。

ー大丈夫ー

「……」

ー助けるから…、絶対ー

「……ン」

潤んだ目が微かに動いた。

そのまま少女を見つめ返す。

頬が赤く腫れ上がってる。可哀相に。痛かっただろうに……。

でも、膝にある擦り傷以外は他に外傷は無さそうだ。

多分、奴から逃れようとして殴られたんだ……

「ヒヘヘ…、お熱い友情なこった」

ジャリジャリと靴底を鳴らし、あの男が近付いて来る。

倒れこむオレらを見下ろしながら、懐から携帯電話を取り出した。

「これで相模をよ、呼び出せ。　一人で来いと、つ、伝えろ。　へへ……、テメエらをダシに、あ、あ、アイツをブチノメシテやる！」

男達は鉄パイプに鉈を振り翳し、不気味な声を上げて笑った。

薄暗い廃墟の中、男達の持つ凶器だけが気色悪く光る。

異色を放ち、獲物を求めてギラギラと光る刃。

その只ならぬ雰囲気に背中がゾクリと震える。

錆びた光の中に、
人間の脅威が映り込んで見える。

あんな物で滅多打ちにされたら……

相模だって、

死んじまうかもしれない。

「相模の携帯を教えろ。　ふ、ふざけた真似するなよ。　ヒヒ……、お前が話すんだ。　相模の可愛い“オンナ”だからなあ！

お前の為なら、な、何でもするんだろうなあ。

目の前でみせてやるよ、テメエの大好きな若さんが…、ボコボコに殴られて死んでく様をなあ！」

相模がマジで

殺されるかもしれない……

アイツならきっと

オレらを守るために自分を犠牲にする。

「番号を吹き込め。　へ、変な考え起こすなら、女から殺す」

だって――

「……」

ーもう、失いたくないー

アイツが何よりも恐れてるのは

「言え…、言えぇぇぇぇぇ！！！　殺すぞおお、こ、殺すぞぉぉぉ！！！」

女の苦しむ顔を見て、母ちゃんの記憶を思い出す事だ。

ー俺の命に代えてもお前を守ってやるー

守りきれなかった母親の面影に苦しめられる位なら――

「早くしろぉぉぉぉ！！　殺すぞお！！　こ、殺すぞおぉぉ！！」

相模はきっと死を選ぶ。

相模なら……きっとそうする。

「０９０……」

だから、来させる訳にいかない。

絶対……

相模に死んで欲しくない。

「……」

オレにアイツは呼べない。

「ヒヒヒ……、お、俺を追放なんかしやがった罰だ。お前らの目の前でいたぶって殺してやる！！」

「……」

通話の切れた携帯を投げ捨て、
男は再び声を上げて笑った。

その声につられ、周りからも啜り笑いが聞こえる。
男たちは時々呻きながら白いヨダレを垂らして笑った。

「テメエらも可哀相にな。　さ、相模と関わりがなきゃあ　こんな事に巻き込まれなかったのになあ」

「……」

隣からサナの震える息遣いが聞こえる。
まだガムテープで覆われてる口元から、小さく嗚咽が漏れる。

サナも今
必死で恐怖と闘ってるんだ。

”大丈夫……”

オレと同じなんだ。

お願いだから助けに来ないでって、何度も願いながら恐怖と向き合ってる。

“大丈夫だから……”

「……」

相模は負けちゃダメなんだ。

アイツは、誰よりも無敵なんだから。

こんな事で、こんな奴らの言いなりになっていい男じゃないんだ。

”大丈夫……”

アンタがこんな奴にやられる姿なんて見たくない。

オレらのために命を犠牲にする姿なんて見たくないんだ。

相模龍は、その程度の男なんかじゃない。

“アイツは来ない”

「……」

相模龍は

オレの、理想なんだから。

”大丈夫”

アンタもサナも

オレが守る。

救世主　5

サナにだけ聞こえる声でそっと話しかけた。

サナは驚いたように目を見開いて、暫くオレを見て固まった。

「……」

言ってる事が呑み込めないのかも。

そんな感じの顔。

幼さの残る二重の瞳が
確認するようにジッと見つめてきた。

”相模に電話なんてかけてない”

「んんっ！？」

「シッ……」

“ううん、そもそも知らないから。　アイツの番号”

「……」

「心配すんなって」

“アイツらはその事に気付いてない”

「……っ」

サナを絶対逃がせれるって保障は無い。

……でも――――

ー相模、助けてー

オレのメッセージを
あの人が理解してくれてるならば……

ーアンタの街を襲った犯人に捕まってるー

例え極僅かの可能性だとしても

まだ、望みはある。

「テメエら…、な、何コソコソと話してんだ」

その可能性に賭けるしかない。

「うるせえクソ野郎」

「あぁぁ！？」

相模は此処に来ないって
奴らに悟られちゃいけない。

もし、相模に電話を掛けてない事がバレれば

オレもサナも殺される。

「なんだとぉぉ、お、お前！！」

「――聞こえなかったのかよ」

“その人”　がマジで来てくれるかどうかも分かんねえ。

あんな電話で動いてくれんのかな……。

早くて５分。

遅くて……、１５分。

いや、それ以上かも。

「群れてねえと何にも出来ねえ、ゴミ以下のクソ野郎って言ったんだよ！」

「て、て、テメエェェェ！！！」

とにかくやれるだけの事はやるんだ。

他に道は無いんだから。

「ふざけんな！！　ふざけんなぁぁ！！」

奴らになんて屈するもんか。

「オラァァァ！！」

ズガッズガッ！！

「……っ」

オレはこんな奴らに相模は渡さない。

サナを奪わせもさせない。

例え何処にも逃げ場がなくても、奴らの言いなりには絶対なるもんか。

闘ってやる。

それが僅か数パーセントの希望でも、

その希望がゼロになろうとも、

肉体が悲鳴をあげて朽ち果てるまで　闘い抜いてやる。

奴らに、オレの心までは支配出来ない。

負けてたまるか！

「……ヘボい蹴りしやがって。　痛くも痒くもねえんだよ！」

「なんだとぉぉぉ！！　ば、馬鹿にしやがって！！　お、俺を馬鹿にしやがってぇぇぇ！！」

殴れ。もっと殴れ。

我を忘れて騒いでやがれ。

テメエの脚がオレを打ち付ける度、この馬鹿な復讐に終わりを告げるカウントダウンがどんどん迫ってるんだ。

きっと、きっと　迫ってる。

目の前の怒りに精神を奪われて、そのまま滅亡していきやがれ！

オレは信じる。

僅かでも望みはある。

だから、その時まで……

オレが時間を稼ぐんだ。

「グゾォ、グゾ……！」

ズガッ！！　ズガッ！！

「――うっ」

狙いの定まらない奴の蹴りが降ってくる。

ショボイ蹴りに加えて左右に大きくブレる脚のせいで上手く受け身が取れない。

「ば…、バガにじやがって……、ゲフッ…」

体を大きく揺らして何度も蹴りつける。

その間、男はヒキガエルみてえにゲロゲロと喉の奥からひしゃげた声を出し始めた。

片足を上げる度にふらついてヨタれる。

首の折れた人形のように頭を振り回し、それでも闇雲に蹴りつける。

その様子を隣で見るサナが金切り声を上げた。

サナは這いずって男の元に近付いて行こうとする。

「大丈夫……！」

被りを振ってサナを見た。凄く怯えた目でオレを見つめてる。大丈夫だから、と目配せする。

「グゾゥ……ッ」

「――グッ」

一瞬の隙を突いて
男の脚が腹に入った。

途端に苦い物が込み上げて来て、何度か咽る。

少し…、みぞおちに入ったみてえ。

隣で、少女の叫び声が聞こえた。

今まで聞いたことの無いような、獣の様に怒りを露わにした声だった。

「――サナ…！」

涙混じりの目が、真上の男をギロリと睨み付ける。

荒い呼吸を繰り返し、少女は男の元へ這いずって行く。

「来ちゃダメだ――！」

「ハア……ハア……、ゲヒ…、ぐ、グズリ、グズリ…」

まるで別の仮面を付けている様な、豹変したサナの顔がそこにある。

両目を吊り上げて、恨みの込めた目で男を捉えてる。

一瞬、サナが動く呪いの人形みてえに見えた。

「……ウ、ウウッ…、グウウ！！」

テープで塞がれた口から、地を這う様な呻き声が漏れる。

見た事無い表情を出し、少女は男に近付いて行く。

「やめろ――――！！」

その体ごとが男の足元にぶつかった。

奴の体がグラリと揺れる。

両足が宙を舞う。

男は頭を左右に揺らし、

膝から崩れ落ちる様にして

そのまま地面に倒れこんだ。

「ヒ……、ヒイイ、ヒイイ…、グズリ…、グズリ……！」

ゴボゴボと口から白い泡を垂れ流し、狂ったように体を掻き毟る。

脚が空を蹴り、のたうち回る。

「――おい……？」

大きく痙攣するように頭が上下し、コンクリートの地面に何度も打ち付ける。

「グズリ…、ぐ、グズリィィィ！！！」

その場に倒れこんだ男は、突然　意味不明の叫び声を上げてもがき

苦しみ始めた。

救世主　6

次第に顔を覆う包帯の内側から赤いシミがにじみ出て来る。

「ヒッ、ヒイイイ……！！　ギィィィ！！」

赤い液体混じりの泡を吹き出し、のたうち回りながら仲間の元へ這って行く。

「ぐ、グズリ！！　グズリよこせぇぇぇ！！」

その場に居る男を殴りつけ、地面に押し付けると　がむしゃらに服を弄る。

やがて何かを取り出すと、奇声をあげながらそれを掌に出し始めた。

小袋に入った白い粉がバラバラと舞い散る。

何度も体を痙攣させながら
男はそれを鼻に近付け、勢いよく吸い上げた。

「　　」

荒い呼吸を繰り返し、奴はまたカエルみてえな声を上げた。

「グヒィィィィ！！」

突然ソイツは力が抜けたみてえに
顔面から倒れこんだ。

グジャ…！　とひしゃげた音がして、周りに血液が飛び散る。

「グ……、フ」

「……」

「グエ……、ヒヒヒヒヒ…」

地面に顔を付けたまま男は奇妙な笑い声を上げた。

「ふ、不死身だぁぁ！　俺は不死身だぜぇぇぇ！！　ヒヒヒヒヒ！！」

頭を地面に付けたまま

体液を辺りにまき散らして笑う。

その姿は最早人間とは思えない。

「んんんっ、んうう……！！」

突然サナが声を上げてオレを見た。

怪物と化した男を目の前に、サナはある方向に向いて騒ぎ続ける。

「――どうしたんだよ？」

「ん、んん！！」

「なに――――」

必死に何かを伝えようとしてる。

でも、何の事だか分かんねえ…。

サナの顔が、オレを向いた後その斜め後ろに向けられる。

何度も、何かを伝えるように――。

「……」

訳の分かんねえままそこに目を向けた。

「……」

薄暗い室内に

光が差し込むのが見えた。

「──そんな、訳……」

誰かが重く暗い密室の扉を開けたんだ。

「んん……っ」

でも、違う。

“あの人”じゃない。

「そんな訳ない――！」

だって

光に移る人影はスラッと長くて……、

「ウソだ……」

平均より、頭一つ分位デカイんだ。

「ヒ…、ヒヒ……。　早いじゃねえか…」

助けを呼んだ“あの人”じゃない。

「ウソだよ――――」

中に押し入る黒い影。

背の高い、男の影だ。

たった一人、

たった一人でそこに立ってる。

「来ちゃダメだ……」

目頭が熱くなる。

目の前が涙でぼやけて、どんどん掠れて見えなくなる。

涙に歪んで見える姿を見るだけで
奴らに殴られた時よりも
何倍も胸が痛んだ。

「来ないで――」

「……」

ぼやけた影が動いてる。

多分、中に入って来たんだと思った。

嫌だ……

来ないで――。

「……っ」

お願いだから……

来ないで……！

体がカタカタ震えた。

何で来るんだよって、何度も心の中で叫んだ。

アンタの事

「グヘ……、だ、誰だお前！？」

守りたかったのに――――。

「……うっ、ウウ……っ」

オレが何のために

体張ってると思ってんだよ。

「ウウウ……っ」

男達の声の後、

ぼやけて映る黒い影が動いた。

「京王高校は何処だ」

「はあ！？　あぁぁぁ！？」

「……」

涙でぼやけた視界の先に居る男は
箔のある野太い声で確かにそう言ったんだ。

「教えろ」

「な、なんだてめえぇぇ！？」

「……」

図体のデカい、黒い男が

「だから、京王高校は何処だと聞いてるんだろうが！」

「はあぁ！？　あぁぁ！？」

京王高校は何処だと

「……」

確かにそう言った。

救世主　？　1

運命の行方
救世主　2
ソイツは正に

どうしようもない状況のオレ達に差し伸べられた

一筋の光――――

「テメエ！！　ば、バカにしてんのかぁぁぁ！？」

「教えろ！　京王は何処だ！？」

なんだろうか。

「……」

瞳を覆ってる水の膜が万華鏡みてえにユラユラと視界を濁らす。

「……」

曇った視線の向こうに立つ図体のデカイ黒い影。

ソイツに顔を向けたままギュッと目を瞑った。

目尻に熱いものが溜まり、ポロポロと零れ落ちて行く。

それが頬を伝い、流れた涙の線が次第に頬を冷やし始める。

「……」

溜まったものが流れ落ち、瞼が軽くなる。

そうして鮮明になった視界の中に一人の佇む巨人が映り込んだ。

「アイツ――――」

何で

こんな所にコイツが現れるんだ。

この状況の中でさえも

不思議に思ってしまった。

背が高くて

黒い制服を纏い、

短く立った黒髪に

がっしりした骨格。

その姿をはっきりと目にした今でも、この男が自分の目の前に立ってる事がどうしても理解できない。

だって、ソイツに助けを求めた覚えも無ければ
この事件に一切の関わりすら無いんだから。

「何しにきたんだ、アイツ――」

この状況の今でさえも、何でコイツはこんな所に現れてるんだろうって、つい思っちまった。

確かに相模と似てるけど、ソイツは全然違う。

「――貴様ら、もしや奴の差し金か」

「あぁぁぁ！？」

相模と全然違って

まるで昭和映画から抜け出して来た様な古風な男なんだ。

１９０センチは軽くありそうな巨漢で、少し細めのごっつい目つき。口元に敗北の名残の青アザを付けるソイツは、ジロリと奴らに目配せすると、奥まで通る野太い声で低く呟いた。

「……」

方向音痴なのか、変に勘が良いのか、どちらか分からない。

それとも恐ろしく嗅覚が鋭いのか、同情する位運が悪いのかどうかも。

確か相模の部屋の前に突然現れた時も、奴は今と全く同じ事をオレに聞いて来たんだ。

奪われた地位を取り戻しに、相模を探して彷徨ってた。

でも、ソイツが居たのは紛れもなく京王高校の中で、それどころか頭取である相模の部屋の真ん前に佇んでオレにこう言ったんだ。

「なんて恐ろしい男だ」

“京王高校はどこだ”　って――――。

「おい……、こ、コイツは…ヘグッ、だ、誰だ」

「知るかぁぁぁ！！　こ、こ、こんな奴知るかぁぁぁぁぁ！！」

「しら、知らない訳……グボ…無いだろが！！」

そして奴らも、オレと同じく混乱してる。

こんな場所に呼んでも無い男が突然現れ、

そのせいで酷く動揺してんのが見て取れた。

奴らは口々に騒ぎだし、いつの間にか仲間内で罵り始めた。

「な、長岡…、お、お前…グエエ、俺らを裏切るつもりかぁぁ！！」

「ボケェェェ！！　ボケがあぁぁ！！　知るかぁぁ！！　こ、こんな奴…、お、お、俺は知らねえぞぉぉ！！」

「お、お前…、俺たちを裏切って…、グギギ…、あ、あの薬を独り占めする気だなぁぁぁ！！」

「グゾ、グゾ！！　死ねぇぇ！！　お、お前ら全員、し、死んじまえぇぇ！！」

ぐちゃぐちゃの包帯の奥から鼻水混じりの叫び声が聞こえる。

イカレタ様な雄叫びが鼓膜に響いて頭痛がした。

「グゾォ、グゾォォォ！！！」

「裏切り者、裏切り者！！　こ、コイツ…、グギギ…、俺らを　う、裏切るつもりだ！！」

「おおおおお！！！」

突如ソイツは両腕を振り回し、罵り声を上げる男達の方へ向かって行く。

「裏切り者、裏切り者！！」

奴らは狂った様に腕を振り回す男を取り巻き始め、距離をおいて取り囲む。

カエルみてえなしゃがれ声を上げて闇雲に暴れるソイツは、段々と一人孤立して行った。

「グゾ、グゾがあ！！　ヒギィィィ！！！」

裏切り者と円を作り罵る男達の輪の中で、その男一人が奇声を上げて暴れ回る。

そのうち背中をがツンと蹴られると、奇声を上げて暴れる男は呆気なくその場に倒れた。

「ギイィ…！！　グゾがあぁぁぁ！！　ボケ、ボケェェェ！！」

時折鼻水を啜り、コンクリートの地面に頭を何度も打ち付ける。

爪を立てて地面を掻き毟り、引っ掻いた所が赤く滲み出してた。

「お…、お…、お前だなぁぁ１！！」

ガリガリと不快音を響かせる男は独り言の様に呟き、突然その顔をオレに向けた。

「お前が　ハメやがったなぁぁぁ！！！」

救世主　？　1（後書き）

スミマセン、下手です。

読んでくれてありがとうございます。

もっと勉強します。

とりあえず更新分ＵＰです！

救世主？　2

そう言って怒鳴りながら地面に付けた頭だけをオレの方へ向けた。

「お前だなぁぁぁぁ！！」

暴行はさらにエスカレートしていく。床に這いつくばった男を一斉に蹴りあげる。

砂埃を立て、奴らの脚が男を直撃する。

うずくまるソイツの腹を蹴り上げ、背中から踏みつける。

何度か嫌な音が聞こえてた。

「あ、あの薬は俺らのモンだぁ！！　ギヒィ！！　だ、誰がお前一人に渡すかぁぁ！！」

ソイツは「グエ」とか「ゲホォ！！」とかエズいては、血液混じりの唾液を口からダラダラ垂らしてる。

リンチの合間にも奴はオレを睨み続けた。

薄汚れた包帯の奥で、狂気に歪んだ二つの眼がギラリと光る。

本当に逆恨みで呪い殺されるんじゃないかと思って、マジで全身をヒヤリと寒気が襲った。

「何なんだ、これは――――」

突然始まった仲間割れを目の前にして、訳も分からずそこに侵入してきた男はかなり動揺してた。

おそらくこれで、ココが京王高校じゃないって事だけは分かったに違いない。

「お、おい、アンタ！！」

奴らの注意が逸れ始める今、咄嗟にソイツに声をかけた。

その男はどうやらオレに気付いてないらしく、
騒ぎ声に混じって聞こえる呼び声に「ん？」と小さく顔を傾げた。

「こっちだよ、こっち！！」

「――は？」

張り上げた声に反応して奴が振り向いた。
キョロキョロと辺りを見回してる。

「下だよ、下！！」

「――ぬ？」

男は言われた通りに下を向く。

オレが何度も呼ぶもんだから、ソイツは段々と訝しげな表情を浮かべ始めてた。

そして、細めのごっつい目がとうとう地面に横たわるオレの姿を捉えたんだ。

バチィ！！　と目が合った。

「……」

「手を貸してくれ！」

それは数日ぶりの奴との再会だった。

オレはコイツにもう二度と会う事も無いだろうと思ってたけど、どっこい、思ってもみない場所で劇的な再会を果たしたんだ。

奴は暫く様子を伺ってるみてえだった。

ジッとこっちを見て、手足を縛られて横たわるオレを見る。そして隣のサナの方も。

「お、おい！　聞こえてんのかよ！？」

「……」

応答が無い。いや、固まってんのか？

目が合ってからというものソイツは微動だにしねえ。

ただでさえ細長いごっつい目を更に細めて、それからはソイツだけ時が止まったみてえに固まってる。

その代わり、無言でオレを見る奴の顔がどんどん険しい物になってくる。

まるで嫌なものでも見つけちまったみてえに、だ。

「事情は後で話すから！　とにかく手を貸してくれ！　早く！」

「貴様は――――」

しかもどれだけ呼んでもオレの方へ動く気配は無い。

いやそれどころか、体をワナワナと小刻みに震わせて、顔を赤く青

くさせてる。

その後自分の鼻を押さえた所で、あの時の鼻血ブー事件でも思い出したんだろうと思った。

でも悪いが今はそれどころじゃねえんだ。

何がなんでもココから抜け出したい。

幸い今は、奴らが仲間内で争ってるせいで注意が逸れてる。オレ達がここから抜け出すチャンスは今しか無いんだ！

なのにアイツと来たら。未だにデカイ図体を震わせて、しかもオレを指さして……

「やはり――、これは相模龍の罠だったのか……」

この期に及んでそんな事を呟いた。

しかも自分から入りこんでおいて。この状況を見ても勘違いし続ける大バカ野郎だぜ、コイツは。

「いいから早く助けろよ、ボケェェェ！！」

その男の余りのバカさ加減にとうとう堪忍袋の緒が切れた。

いつまで経っても動こうとしねえソイツに向かって、気が付いた時には思い切り罵声を浴びせかけてる自分が居たんだ。

「アンタ、何考えてんだよ――――！！　状況を見やがれ！！　ふ、ふざけたこと抜かしてんじゃねえぇぇ！！」

「……ぬ」

男は小さく呟いた。

「あ、アホかぁぁぁ！！」

――前途多難。

救世主？　3

「クソッ、クソッ！！　よりによって何でアンタかなあ！？」

手足が封じられて思う様に動けねえのがもどかしい。

どっちかだけでも自由なら、オレ一人で充分奴らをぶちのめせんのに。

「……うぬ」

「うるっせえ！！！」

だけど現実はこうで。

結局手足を縛られ、動く事も立ち上がる事も侭ならず

そこのへんちくりんに助けを求めるしか無いんだ！

所詮オレの悪運なんてこんなもんか。

切羽詰まった状況で現れてくれたまでは良い。

だけどその後はと言やあ、只現れただけで、「は？」とか「うぬ」とかおかしな単語を並べて突っ立ってるだけじゃねえか！

テメエは木偶の坊かよ！

「何でもいいから動けよ！　手を貸せっつってんだろうがよ！」

「――――」

「て、手を…貸せ、だとおぉぉ」

「……」

オレの怒鳴り声に反応したのはソイツではなく――

「て、テメエ…、逃げるつもりかぁぁ！！？」

「……」

オレの怒鳴り声に反応し、いつの間にか仲間割れを中断してる男達

で。

「に、逃がすかあぁぁ!!　グヘエ、あ、アホがあぁぁ!!」

オレの望みは
ほんの僅かな時間で呆気なく終わりを告げた。

「お、お前ぇ……！　こ、コイツらの仲間かぁぁ!?」

「――は？」

「あ、アイツ、手を貸せと言った!!　コイツ、相模の仲間！　ギギ……、コイツらを逃がしに来た!!」

「相模――の仲間、だと」

いつしか奴らの視線がデカイ図体のソイツに向けられる。

「どういう事だ」

ついさっきまで仲間の襲撃に明け暮れていた男たちは、その男…もとい、梅太郎を指して騒ぎ始める。

一人が梅を指して叫び出すと、つられる様に数人が「そ、そうだそうだ」と声を上げる。

その声は、まるで伝染病みてえな速さで広まり、そのうち全員が梅に向かってギャアギャアと何かを言い始めた。

「コイツ、さ、相模の手先だぁぁ！！　奴らを逃がしに来やがった――――！！」

「これは……、相模龍の、罠では無いのか？」

ついさっきまで仲間に暴行を加えていた男達は、突如としてその標的を梅へと変えた。

あの、ギラギラと不気味に光る血走った眼を、一斉に梅へと向ける。

男達はそこにあった武器を手に取り始めた。

相模を痛い目に遭わせてやる、とチラつかしてた凶器を再び奴らは持ち直す。

そのまま荒い息を吐き、ジワジワと梅の方へ迫って行った。

「殺す！　さ、相模の仲間……、殺してやるゥゥゥ！！」

そう言うが早いか。

奴らは一斉に梅に目がけて凶器を振り回して襲いかかって行った！

「はあ！？」

奴は細長い目を大きく見開いて、そう一言呟いた。

オレは思う。呟く暇があるなら逃げた方がいいだろう、と。

そして、人の発言に耳を貸し、事態を把握しろと。

今まさに野郎どもが襲いかかって来てるにも拘らず、ただ呟くだけで立ち尽くすその男を見て。

コイツは馬鹿なんじゃないかって。

そう強く思うんだ。

「キァァアアァァ！！」

男達は奇妙な声を上げて梅に飛び掛かって行った。

手に持っている凶器を振りかざし、ひと回り程デカイ男に突進していく。

錆びた光を放つそれが一気に振り下ろされる。

その勢いで、ギュンと曲がって見えた。

梅は動かない。　奴らを見据えたまんま。　ただ片眉をピクリと上げて。

突然の凶器の襲来に視線だけを動かした。

一瞬先の未来を想像する。

奴らの降り下ろす鋭利な鈍器が、梅の胸を直撃する様を。

鮮血が迸る、真っ赤な地獄絵図を。

こんな所に迷い込んだばっかりに、変わり果てた姿で倒れる一瞬先の未来を――――。

哀れな末路を創造し、顔を背けたくなる。

それでも目を離すことが出来なかった。

「おい!!　貴様!!」

その瞬間、周りが真っ白に見えた。

まるで時が止まってる様な感覚に襲われる。

「……」

余りにも鮮やかな光景に

思わず息を呑んだ。

「誰が相模龍の仲間だと」

救世主？　4

凶器を唸らせ振り下ろした先に、梅の姿は無い。

図体のデカイ男が消えた――――と、思った瞬間。

襲いかかる男達が次々と勢いよく吹っ飛んでいく。

「……」

無駄のない一連の動きは、思わず「瞬間移動」じゃないかって錯覚さえ覚える。

梅が動く。　男たちが跳ね上がる。　見えない何かに押し出されるみてえに。

声を上げる時間も与えない程、一瞬で。

見るものを惹きつける。

鮮やか過ぎる、男の舞い。

梅は目にも止まらぬ速さで奴らの背後に回り込む。

男達が気付くより先に、片足を滑らせ足元を払い上げる。

奴らは何が起こったのかも分からないうちに、一気に崩れ落ちていった。

「ギァァァ！！！」

半狂乱になった男が梅に襲いかかる。

体を屈める梅に金属バットが降り下ろされる。

「訂正しろ！！」

ガン！！　と骨の音が響く。

奴は振り下ろされたバットを片手で遮ると、弧を描くように腕を振るう。

バットが腕から離され男の腕が音を立てて変な方向に曲がった。

「ギャ……」

声を上げる時間も許さない。

続けて放たれた回し蹴りが顔面を直撃すると、男はガフッとだけ声を残して吹っ飛んだ。

「社会悪は俺の敵だ！　奴らと一緒にするな！！」

無駄のない動きの一つ一つ。

腕を振るい、脚を上げ、梅に近付く男たちはまるで竜巻に弾かれるみてえに吹っ飛んでいく。

時に身を屈め、手足を伸ばし、流れるような鮮やかな動きを見せる。

梅の動きは、日本古来の“舞い”を思わせる。

見るものを引き込む。目の前の世界が真っ白に映る。　まるで梅の一人舞台だ。

見てるうちに学ランが鮮やかな紅の着物に見えてくる。

奴らを吹っ飛ばす音が、琴の音色に乗った日本舞踊みてえに妖艶に聞こえるんだ。

これで背中に桜の刺青があれば完璧だ。

そうすれば完全なる、時代劇の殺陣役者だ。

それ程までに美しく綺麗なんだ、梅の動きは。

「相模龍は、俺の敵だ！！」

あと数百年早く生まれてたなら、アンタはきっと浮世絵界のアイドルになれただろう。

いや、現代でも十分おっちゃん達の心を掴んで離さないヒーローだ。

悪事を許さない将軍様。　江戸の娘たちの憧れのプリンス。

ある時は浮遊する遊び人であり、またある時は人目を憚る用心棒。

彼の現れる所、事件が起こり、またひとり江戸娘が救われる。

悪代官達はお決まりの「誰だ貴様」と呟いて、江戸のヒーローを潰そうとけしかけるんだ。

お決まりの乱闘の末、気持ちのいい勝ちっぷりを見せた後、プリンスは最後の見せ場に入る。

『おうおうおう！　テメエら、この桜吹雪が目に入らねえってのかい！？』とかなんとか。

自信満々に肩口を見せてそう言うんだ。

かくして男の正体は

現代版、遠山の――

遠山の、梅さん。

「……」

間違いない。　遠山の梅さんだ。

無自覚なお助け人だ、アイツは。

梅さんだ。

ちょっと反応が鈍い所もあるけど。
そこもまたご愛嬌。

正しく奴は今、窮地のオレらの前に現れたお助けヒーロー。

あの人は梅さん。　遠山の梅さん。

救世主　？　5

梅さんの華麗な舞いに包帯野郎どもは次々と吹っ飛ばされていった。

次第に減少する勢力に、奴らは減退し始める。

梅にはあらゆる凶器が通用しない。

それをどんなに振り回そうが、全て容易く受け止めては翻す。

それを目にして立ち向かう馬鹿野郎なんて居るはずが無い。

ましてやこんな雑魚の集まりなんざ、一度壊滅を始めれば崩壊は早い。

どうやら奴らはロクな計画も無く誘拐事件を起こしたらしい。

オレとサナを誘拐して相模を呼び出す。

捉えられたオレ達を使って相模に仕返しをする。

その一連の計画に誤差が生じるなんて思ってもみなかったみてえで、

突然のアクシデントに対する解決策を何ら用意して無かったんだ。

その証拠に予想外の人物の登場によって奴らはパニック状態に陥り、挙句の果てに仲間割れを始めた。

おそらく奴らの中にはリーダー的存在が居ない。

相模やゲンじいみてえに、事が起こる前に態勢を立て直して指示を下す人物が奴らの中には居ないんだ。

「……んん」

言うなれば、全員が全員に依存してる。

奴らは互いに相手に次の行動を委ねてるだけだ。

そんな奴らが突然の梅さんの襲来に冷静でいられる訳がない。

アイツらは自分で判断出来ない。

仲間を倒されてどうすればいいのか、それを伺う相手が居なくなっちまったんだから。

「ん、んん！！」

それは、ただ人数があるってだけで何の意味も成さない集団だ。

依存する相手が居なければどうすることも出来ない奴らに勝ち目なんてあるわけない。

「ん、んん――！」

なんて、短絡的な、単純な奴らなんだろう……

「お嬢――」

「……」

――え？

「お嬢……！」

その、突然背後から聞こえる声は

めちゃくちゃ聞き覚えがあって

「……」

でもまさか、梅さんに気を取られてる間にオレ達の元に誰かが忍び寄ってるなんて思いもしなくて。

「ゲンじい……」

イキナリのゲンじいの登場に、ビックリしすぎて暫く固まっちまった。

ゲンじいはサナを胸に抱き留めて、何度も頭を撫でた。
サナは無言でゲンじいの胸の中に顔を埋めてた。

「酷え事を……」

その手に引き寄せられて、オレもゲンじいの胸の中でギュウっと抱き締められた。

「酷え事しやがって！！」

「……」

その胸は思ったよりも厚くて、広くて、その中に顔を埋めた時、思ったんだ。

ああ、もう大丈夫なんだって。

「ゲンじい…」

ツンとした香水の匂いが鼻に付いた。
どうしてだか、その匂いが懐かしくて
何だか凄く安心した。

「何でココに…ゲンじいが居るんだよ？」

「……一足先にな」

そう言った視線の先に、見事に破られたガラス窓が見えた。

辺りに飛び散った破片が、躊躇無しに打ち破ったであろう衝撃を物語ってる。

「……」

現場が騒然としすぎて気付かなかった。
奴らと梅さんに気を取られてて、全然。

「何で……、ココが分かったんだよ？」

「そりゃ後で若に聞きな」

チョイチョイって頬を擽られる。

オレの顔を覗き込んで、辛そうに顔を歪めた後

オレもサナみてえに何度も頭を撫でられた。

「……」

それからサナを縛るロープを解き始める。

ゲンじいの横顔は、何故か片方が赤く腫れ上がってた。

「お嬢、あの男は一体どうした？」

サナの両腕を解放した所でゲンじいが呟いた。

訝しげな顔をして包帯野郎共をぶちのめす梅さんを見やる。

「――良く分かんねえけど、助けてくれた」

「奴は敵かい？」

「……今は違う」

「は？」

おそらく今ゲンじいの頭には、沢山のハテナマークが飛び交ってる。

突然現れたもう一人のヒーローは、変な顔をして奴らを打ちのめす梅さんを見つめた。

ゲンじいの見つめる先に、暴れ回る梅さんがいた。

「奴と一緒にするな！」「あれは悪の化身だ！」「貴様らこそ何なんだ！？」「仇討ちの邪魔をするな！」「京王高校は何処にある！？」

「ふぎゃ」「ぐえ」「ぎゃあ」

梅さんの声に混じって悪党共が呻き声を上げてる。

手足を振るい、体を撓らせて鮮やかな程の舞で圧倒する。

そして最後の一人を地面から蹴り上げたカウンターキックで地面に沈ませた。

男は最期、豚みてえにしゃげた声を上げて地面に突っ伏した。

「お嬢……、アイツが何だって？」

「梅さんだ」

「はあ？」

「天下のお助け人の梅さん」

「……そうかい」

ゲンじいは呆れた顔でオレを見た。

ヤレヤレって感じで横目でこっちを見てくる。
どうやらこの感動はゲンじいには伝わらないみてえだった。

「ギャハハハハハハ！！　ざ、ザマアミロ、ザマアミロォォォォ！！」

突然ズガン！！と廃墟内に響く爆音がして、“あの男”がフラつきながら梅さんに歩み寄って行くのが見えた。

「ゲンじい、アイツだ！　サナを襲った男……」

「ああ！？」

それまで散々仲間からリンチを喰らった男は、ボロボロになってヨタれた包帯を垂らし、不自然に揺れる左足を引き摺って、血液混じりの唾液を滴らせながら笑った。

「お、俺を裏切り者扱いするからだ！！　ヒヒ……、ザマアミロ！！　ザマアミロォォ！！」

ソイツは目の前に倒れるかつての仲間を拳銃で何度も撃ちつけた。

「ヒギッ！！　フギェェ！！　グギャアァァ、ァァァァ…」

撃たれた男は何度も叫び声を上げ、弾丸を撃ち込まれる度激しく痙攣する。

そのうち声が弱弱しくなり、体をピクリとも動かさなくなった。

「テメエらなんざ死んで俺に償えぇぇぇ！！　ボケが！！　ボケが！！」

男から反応が無くなっても尚、体に銃弾を浴びせ続ける。

力なく横たわる体が衝撃で小刻みに揺れる。

それから再び声を上げて笑った。

救世主？　6

「ヒハハハハ！！　ボケがあ！！　お、俺は最強だぁぁぁ！！」

暫く狂ったように笑い続けると今度は梅さんの方へ向き直り、その銃口を向けた。

「ヒ……、ヒヒヒヒ！！　テメエのおかげで馬鹿は全員オダブツだぜぇぇぇ！！　テメエみたいな馬鹿のおかげでなあ！！」

耳に残る、ねっとりとした笑い声が辺りに充満する。

奴は更に声を上げて笑った。ヒーヒーと苦しそうに、何度も息を詰まらせながら。

「最後は俺が、テメエを殺してやるぜぇぇ！！　ヒヒヒヒヒ…、な、なんせ、こっちには人質がいるんだからなあ……！」

さも楽しげに声を上げ、高笑いしながらオレらを見た。

可笑しそうに腹を抱えて笑っていた男が、オレらの方を向いた瞬間固まった。

ソイツは一瞬にして石みてえに静かになったんだ。

「……」

それもそのはずだ。

奴らに囚われてたオレ達はゲンじいの救護によって解放され、代わりに自分が銃口を向けられて今や遅しと狙われてたんだから。

「長岡ァァァ！！」

「ヒっヒイ……ッ！？」

銃口の狙いを男に定めたゲンじいが
地を這う様なドス声で唸った瞬間

扉の向こうから、何かを押し潰す様な凄い音が響いた。

「ぎ、ぎやあああぁぁ！！？」

それは何度か続いた後、廃墟の鉄の扉がガタガタ揺れ始める。

想像を絶する圧力で扉が薙ぎ倒されるのが見えた。

男はまるで錯乱状態みてえに、ただひたすら叫び続けてた。

鉄の塊がけたたましい音を立てて床を打ち付ける。

薄暗い扉の向こうから

二つのシルエットが押し入って来る。

まるで光から闇に影を落とすみてえに

独特の雰囲気を持った二人の男の姿が。

ブチ破られた扉から差し込む光がオレらを照らす。

陰気だったその場所は、一瞬にして白濁色に染まっていった。

白色混じりの陽を背中に受け、薄暗い世界に足を付ける男達。

?無言で歩み寄る二つの影は?

そこに存在する全てをねじ伏せる。

この空間も、そこに漂う空気も、立ちすくみ震える男の息遣いまでも――

全てを圧倒的な威圧感で支配し始める。

「……」

その、余りにも綺麗で完全なる二人の姿を見て

無意識に胸がドクドクと高鳴り始める。

白に近い金色の髪が光の反射で真っ白に染まる。

整い過ぎた顔に怒りを讃える少年は、恐ろしい程に冷淡で美しい。

言い知れない美貌で魅了し、見た事も無い　凍てついた目で相手を縛り付ける少年天使。

「矢田――――」

恐ろしいまでに美しい天使を連れ、

不釣り合いな光の世界から薄暗い闇の潜む廃墟へと歩を進めるのは

唯一無二の悪魔。

オレの認めた唯一の男。

最高にヤバくて
最高に恰好いい。

あの切れ長の目を据わらせて睨みあげられた時、奴らは心の底から
後悔する事だろう。

自分達は何て奴を敵に回してしまったんだろうと。

こんな奴に、そもそも敵う訳が無かったんだって現実を。

アイツの身体に眠る悪魔を呼び覚まして始めて後悔するんだ。

「相模――――」

揺れるひと束のゴールドライン。

拳を握り締め　表情に影を落とす男は無言で中に歩み寄る。

今、奴の背中には

紛れもなく黒い羽が育って見える。

救世主？　7

「う、うわぁぁぁぁ！！！」

男は悲鳴を上げて銃口を二人に向けた。

その引き金を何度も引くけど、カチカチと乾いた音を鳴らすだけだった。

仲間を散々撃ち殺したせいで玉切れになったんだ。

「ヒイ、ヒイィ…！！」

男は足を引き摺って倒れる仲間の元へ駆け寄る。

夢中で何かを弄ってるみてえだった。

その間にも、一歩一歩男達が歩み寄る。

自分に迫る悪魔を何度も振り返り乾いた悲鳴を上げる。

男は袋に入った白い粉を取り出すと、急いで手に出した。

そしてゲホゲホ咽せながら何度もそれを吸引する。

その直後、体を抉る様な鈍い音が響いた。

「ゲホッ！！　ウゲェ…！！」

相模の蹴りが、這い蹲って薬を貪る男の腹にめり込んだ。

奴の口からドバッと血液が溢れ出る。

男は痙攣を繰り返し、その場でのたうち回った。

「ヒ…、ヒィ…！！　痛えぇぇ！！　い、痛えよぉぉぉ…！！」

鳴き声を上げる男を片手で持ち上げると、その顔を思い切り殴り飛ばした。

気の枝をへし折る様な、不気味な音が響いた。

男は声も無く地面に体を打ち付ける。

「ウウ…ッ、グ、グズリ…、ヒイ、ヒイ…、グズリさえあれば、俺

は……」

異様な光景だった。

男は歯をガチガチ鳴らし、変な方向に首が曲がった状態で地面を這いずり回ってる。

「グズリ、グズリ」と呟きながら、自分の撃ち殺したかつての仲間を手探りで手繰り寄せる。

相模はそこにある金属バットを手に取り、男の足目掛けて振り下ろした。

「うぎゃあああああぁぁぁ！！！」

「ヒッ…」

男の太腿がベキベキ音を立てて飛び跳ねた。

「ヒイィィ！！　エグッ、ギヒャ！！　痛え、痛えよぉぉぉ！！」

骨を貫く様な男の悲鳴。

その光景に、思わず声が漏れる。

「テメエらか――」

相模は再びそれを

ゆっくりと振り上げる。

「組の襲撃も、店潰したんも、テメエらの仕業か――」

「そ、そんなの知らねえよぉぉ！！　違う！　俺らじゃねえよお！！　た、助けてくれぇぇ！」

高く持ち上げられた鉄の凶器が…

振り下ろされる――

「藤堂！」

視界に映り込んだ制裁の光景が、覆いかぶさって来た少年によって覆われる。

「ひいぎゃあああああ！！！」

その直後、男の金切り声が廃墟の中に充満する。

男の悲鳴は、拷問の果てに亡くなった死者を呼び覚ます様な、恐ろしくも凄まじい声だった。

迷宮　1

運命の行方

――――――

男はヒーヒーと裏返った声で叫び続けた。

気がつくと手がカタカタ震えてる。

間近で体感する死の声に、無意識に体が反応していた。

背中がゾワっと寒くて、ヤケに人肌に触れていたくなる。

体の殆どを誰かにくっつけていたくなって、

思わず抱き締める少年の両脇をギュッと掴んだ。

「吐かねえなら殺してやる」

抑揚の無い、アイツの声。

そして滴り落ちる液体の濁音。　充満する生臭い匂い。

それらは何故かオレまで追い詰められてく気分にさせられる。

ホラー映画なんかじゃない。

この恐怖は、今現実に目の前で起こってるんだ――。

サワサワと、少年の手が頭を撫でた。

「藤堂…」

「……」

少し顔を上げるとそこにはいつもの穏やかな矢田の顔があって、

戸惑いながらも何度か目を合わせた。

ジッと見つめ返すその瞳には一切の恐怖も映り込んでいないんだ。

いつもの穏やかな犬の様な瞳。

少し潤んだ、天使みてえに澄んだ瞳。

その穏やかな色を今の状況下で見せる少年が凄く不思議で仕方ない。

「なる程な……」

そして隣には、いつの間にか梅さんが腕組みして立ってる。

ヤケに遠く感じる顔は、おそらく相模と男の方を向いてる。

「悪人同士が復讐紛いの争いか」

下らない事を、と吐き捨てる。

そびえ立つ大男を、矢田がギロリと睨み上げた

迷宮　2

矢田の突き刺さる視線にも動じず、梅さんは言葉を続ける。

「自業自得だ。所詮貴様らも奴らと同罪。悪の回りには悪が栄える。貴様らの犯した行為が返って来たまでの事。

――それを断ち切らない限り、この世には罪と悪が輪廻し続ける」

「……」

「罪を上塗りするばかりでは　いずれ必ず破滅に向かう。貴様らには何故それが分からん」

「黙れや！」

珍しく矢田が声を荒げた。

さっきまでの穏やかな瞳は影を潜め、代わりに猛獣のように敵を威嚇する眼が牙を向く。

「お前なんかに何が分かる」

多くの人間を魅了する少年が、誰をも寄せ付けない尖った刃を身に纏う。

ダイヤの様なクリアな光が、一瞬にしてダークに染められる。

オレはこの顔を知ってる。

『これ以上俺達に関わんな。　住む世界が違えんだよ、テメーとはな』

相模以外寄せ付けない、相模以外に心を開かない。

最初矢田に出会った時の、敵対心剥き出しの顔だ。

「何も知らねえクセに綺麗ごとばっか抜かしてんじゃねえ！　ボケが！　大体テメエ、何なんだよ！？」

「被害者だ」

「ああ！？」

梅さんは言い切った。自分は被害者だと。自分から勝手に足を運んでおいて。

その癖自信満々に自分はこの事件に巻き込まれた被害者だと言い切ったんだ。

「貴様らの悪事の果てに迷惑を被った被害者だ」

「はあ！？」

正義感溢れる、細長い目がオレらを見下ろす。

「この様な馬鹿げた茶番に巻き込まれた上、不覚にも手を貸してし

まった。

二度と俺を陥れてくれるな」

そう言って踵を返すと入口に向かって歩き出した。

「リョウさん、でもサナ、この人に助けてもらったんだよ」

その梅さんの後を追う様に

ゲンじいに手足を解放されたサナがピョンピョン飛び跳ねながら走りより、その大きな背中に抱きついた。

「あ」

サナが梅さんに

抱きついた。

「ば、馬鹿者！！　お、俺に触れるな……、ぐおおおっ」

梅さんは急に顔を高揚させる。

と、途端に今度は真っ青になり、体中があの赤い斑点だらけで一杯になる。

「ぎゃあ！」

「ま、またしても……」

イタズラなのか無意識なのか、とにかく梅さんの女アレルギーを引き起こしてしまったサナは、真っ赤になった顔を見るや否や「怖いよ～！！」と叫んで思い切り突き飛ばした。

「ふ、不覚……！！」

勢いよく鼻血が噴き出る！

ブハーっと真っ赤な鮮血を迸らせ、梅さんは真っ逆さまに倒れこん

で行った。

「……汚い」

「お嬢。　コイツ一体マジで何なんだ！？」

「……」

お助け人の梅さんは女に弱い。

「ほ、本当だ！！　俺達がやったんじゃねえよぉ！！　し、信じてくれよぉ！！」

そして、再び聞こえる男の悲鳴。

さっきまでの一件で、矢田が少し態勢をずらした為か、肩口から相模とあの男の光景が僅かに見えた。

男は片足から大量の血液を流し、真っ青な顔で体を引き摺っていた。

「あ、ある男に吹き込まれたんだよぉぉ！　相模の弱点を教える代わりに、お、俺らに協力しろって……」

「――何だと」

男の這いずった後に赤黒いシミができる。

行く宛も無えのに、ソイツはズルズルと這い回る。

何かを必死で探るみてえに。

「あ、あの日…、女を取り逃がして、その男にぶちのめされた日だ…！」

男は振り返ってオレを見た。

「俺の前に男が突然現れて…、ふ、復讐したくないのかって…。今…、俺を沈めたアイツが、相模の弱点だと俺に言った……」

「な、んだと――」

男は、本当だよお！！と何度も叫んだ。

「ソイツは俺に……、相模に復讐させてやるって、だ、だから…アンタを恨んでる奴らを集めろと言った！

？お、俺らは奴の言いなりにしただけなんだよおぉ！！」

迷宮　3

「テメエらじゃ無え…だと」

喉元で何度も詰まらせながら、男は必死で頷いた。

這い回る両手がガクガクと大きく震えてる。

包帯で顔が見えねえはずなのに、その様子から男の媚びた顔が目に浮かぶ。

「た、確かに俺は女を襲って回った…。？京王をクビになったのも、お　俺を馬鹿にする雌共のせいだ。　だから今度は組の女共を痛い目に遭わせてやろうと思った。だ、だけど…、その女を暴行してた時に邪魔が入った……」

男はまたオレを見た。

「あ、アイツが邪魔しやがったんだ！」

そう言って、また睨み付けたんだ。

「このクスリで最強になった俺を…、う　打ちのめしやがった！！

」

あの時、か――――。

サナに初めて会った日だ。

叫び声を上げる少女の服をビリビリに破き、奴は笑い声を上げながら殴り続けてたんだ。

「ゆ　許さねえ…！　ヒイ…ヒイ…！　お前も、相模も、これまで散々馬鹿にしやがった奴らも皆！！」

その男は言った。

京王に入ったってだけで、これまで馬鹿にしやがった回りの連中の目の色が変わったんだって。

その名前をチラつかせるだけで、女達は掌を返す様に近付いて来たんだって。

あれ程自分を毛嫌いしてた女達が、京王の人間ってだけで驚く程目の色を変えて近寄って来る。

その時、奴の中である感情が芽生えた。

“ドコマデモ強欲ナ雌ブタ共メ！”

“許サネエ。　俺ヲ見タ目で差別シヤガッタ馬鹿共ガ！！”

奴は結局、その肩書きを使って女達に復讐をし始めた。

自分を外見だけで差別して来た奴らが、肩書き一つで近寄って来る。

「バカな女共だぜ…！　ひ、ヒヒ…、欲に目が眩んだ馬鹿共が…！！」

男は一人一人女を監禁し、暴行を加え、恐怖で身動きが取れなくなった所で、

最悪の犯行に及んだ。

暴力でねじ伏せ、その体を何度も犯した。

「助けて！」と泣き叫ぶ顔をビデオに撮り、犯行後も彼女達を脅し、金を巻き上げ、逃れられない恐怖で縛り付けた。

抵抗する女には容赦無く暴力を振るい、手足を縛り、時にはその体を切り裂いた。

復讐は更にエスカレートし、いつしか奴は女を暴行する事で無数の快感を得る様になっていた。

男は今度は自身の欲望を満たす為に女を暴行するようになって行ったんだ。

相模が奴の犯行に気付いたのは、そんな時だったんだ。

ーフム、悪魔。　どちらがかの？ー

相模はコイツを許さなかった。

奴が女にしただけの痛みと苦痛を、彼女達の涙の分だけ奴の体に与

えた。

ー人生は因果応報じゃ。　タツはそれに報いただけじゃと思うがな？ー

奴がどれだけ謝っても許さなかった。

男の意識が無くなっても尚、矢田が止めに入るまで、アイツは殴り続けたんだ。

ー報復は終わったかの、タツよー

本当の

本当の悪魔は……

相模じゃない。

「ヒイ…、あ　あんなクズ共、い、痛い目に遭って当然なんだよぉぉ！！」

この男こそ、

生きた悪魔だ。

「それなのに、アンタらは俺の言い分を聞き入れてはくれなかった…！　お　女共の肩ばかり持ちやがって、制裁を与えられた上に俺は京王を追放されたんだ！！」

生臭い血の匂いを充満させる男は、蜘蛛みてえに這い回りながらそこらじゅうに散乱する袋状の白い粉をかき集める。

それと一緒に塵や埃も奴の手の中に入って行った。

そしてゴミだろうと何だろうと関係なく掌に全てを開け、一気に吸引した。

「ブヘエ！！」と血反吐を飛ばす。

それと同時に関を切った様にボタボタと鼻血を垂れ流しだした。

「ヒイ…、ヒイ…、俺はわるぐない〝……！　俺を馬鹿にじだアイズらのせいだ！！　ヒ…、ヒイ…！　お、俺だげを悪者にじだ、お前らが悪い〝んだよおぉぉ！！」

男の呼吸が以上に早い。息継ぎの仕方を忘れたみてえにガクガクと息を吸い続ける。

奴の喉からしぼんだ風船みてえな乾いた音が聞こえ始める。

それでも喋り続ける男の口から、止めどなく泡が吹き出し始めた。

「……が…っ、が……っっ」

「クソが！！」

相模が血みどろの脚を蹴り上げる。

男は悲鳴を上げ、頭を何度も地面にぶつけた。

「その薬は何処で手に入れた！？」

その衝撃で頭がおかしくなったのか、ソイツは次いで声を上げて笑い始めたんだ。

口から吹き出す泡が次第に赤に染まる。

「……あの人は俺達の救世主だ――――」

意味不明な事を口に出す男は、尚も笑い声をあげながらオレらの方へ顔を向けた。

「矢田さんよぉ……」

ソイツは矢田を見て不気味に笑って言ったんだ。

「さ、榊さんに犯されるアンタの顔、最高だったぜえ……」

忘れる筈もない、その男の名前を口にした。

迷宮　4

その名前を聞いた瞬間、抑え様の無い怒りが一気に全身を駆け巡った。

矢田を今でも苦しめ続ける男の名前を口にして、

少年を汚したおぞましい行為を、最高だったと笑って言ったんだ、あの男は。

「テメエ……！」

堪え切れずに拳を強く握った。

爪がめり込んでギリギリ唸った。

「矢田がどんな思いで――――」

ガラスを引っ掻く時の耳障りな音が奴の口から発せられる。

男はバタンと突然倒れた。

「ギヒ……、む、迎えに来る、いずれ……。
さ　榊さんにまた調教されるんだ――。
？また四つん這いになって……、
ヒヒヒ……ヒ――ィ……」

「矢田がどんな思いで耐えてたと思ってんだよ！！！」

「藤堂！！」

オレの体を憎しみが蹂躙する。

心の中の邪悪な塊が爆発して得体の知れない感情を生み出した。

頭が真っ白になる。

体感した事の無い、抑えの効かない力が溢れ出る。

「ルイ！！」

誰かがオレに向かって叫んでる。

その殆どは途切れ途切れで耳に入って来なかった。

抑えの効かない本能の向こう側で、もう一人の自分が叫んでた。

――殺してやる。

――アイツを殺してやる。

殺す、殺す、殺す！！

拳に伝わる生暖かい肉の感触。

誰かが覆い被さり動きを阻止する。

自分でも歯止めの効かない怒りの塊が頭と体を支配して暴れ回る。

「やめろ！！　もう死んでる！！」

意識の奥で誰かの怒鳴り声が聞こえる。

その直後、首に鈍痛が奔り、真っ白な世界は一気に深い闇に落とされていった。

「ハア…っ、ハア……」

誰かがオレを抱き締めてる。

顔を胸元に押し付けられ、心臓の鼓動が耳から伝わってくる。

「ハア……、ハア……」

トクトクと定期的な音が耳に聞こえ始めると、

何故だか凄く安心した。

目頭が熱くなって意識が遠のく。

体が痙攣してる。

薄らぐ脳裏に、甲高いサイレンの音が聞こえた。

その音は段々と大きくなってくる。

緊急事態を知らせる、オレが待ちに待った音だ。

「……」

やっと――、

やっと来てくれた……。

「クソが…！　何でサツが来やがるんだよ！？」

「オレが…、呼んだ――」

「ああ！？」

「オレが…、助けを呼んだ……」

あの日、

“君…、何処かで会った事、無いかね、本当に？”

気付かない間に嶋本が忍び込ませたポケットの名刺に思いを馳せ、
ゆっくり瞼を閉じる。

今度こそ真っ暗闇の中に意識が落ちて行く。

段々と大きくなるサイレンの音が、

オレの脳裏からは次第に薄れて消えて行く。

小さく溜息を吐いた後、

オレはとうとう深く暗い闇の底へと意識を手放した。

迷宮　5

オレの意識は

真っ暗闇ん中をフワフワ漂ってるみてえだった。

音も無く静かな世界をふんわり宙に浮いてる感じ。

まるで

産まれたての赤ん坊みてえに

心地の良い揺れに全身を預けてる。

寄せては返す波の様な不思議な波長。

トクトクと聴こえる心地良いリズム。

全身が布団で包み込まれてるみてえにあったかい。

あ……、

オレの足、プラプラしてる。

本当に宙に浮いてるんだ。

オレ、本当に漂ってたんだ……。

「ん……」

その感覚が突然消えて、

今度は身体中をふんわりした何かが包み込んだ。

あれ……。

もう、プカプカしないんだ。

――そっか。

でも、こっちも気持ちいい。

ふんわり柔らかくってふかふかでいい匂いがする。

……うん。

何だかいい匂い。

空気に乗って、柔らかい花の様な甘い香りが鼻腔を掠める。

いつまでも嗅いでいたい。

……そういえば、前にもこの香りを嗅いだ事がある気がする――。

チュ……っ

「……」

ほっぺに吸い付く音。

そして頬に広がる柔い感触。

そうっと離れて、また吸い付く。

甘い余韻を残して、それはもう一度チュッと音を立てて離れた。

「クソ、勝手に触るんじゃねえよ」

誰かがオレにキスしてる。

……あ。

頭、サワサワ撫でられてる。

あったかい手。オレの頭を包んじまう位の大きな手だ。

髪の間で指が少し動いて、くすぐったいような、むず痒いような、不思議な気分になる。

その手が今度は額に掛かった髪を何度も掬っては掻き上げる。

サラッと掻き上げて落ちた髪を、また掬い上げて頭を撫でる。

指先が皮膚にちょっとだけ触れる。

ムズムズする感じ。

その感触を繰り返し受けてると、まるで自分が子猫にでもなった気分になってくる。

サワサワ……

サワサワ……

気持ちいい――――。

「フフ……。　藤堂可愛い。　寝ながら笑ってるよ？」

クスクス……

「ん……」

綿菓子みてえに甘い甘い、少年の笑い声。

額を撫でるあったかい手とは別に、もう一つの手がツンツンてほっぺをつついてる。

「……ム」

――何だ？

「お前向こう行ってろよ」

「ヤダ」

オレのすぐ横で誰かの話し声が聞こえる。

低くて少し掠れたハスキーボイスと、凛と透き通る綺麗な声。

それから、大きなあったかい手が額を離れて首筋に伝う。

動物をアヤす様にソコを何度か撫でた。

それは少しゴツゴツした感触だったけど、優しく指を動かして擽られると、じんわりとソコがあったかくなってムズムズして気持ちいい。

何か本当に可愛がられて遊ばれる子猫の気分になる。

ちょっと顔を動かす。

今度は顎を何度か擽られた。

こそばゆくて、何だか嬉しい気分になって、

ふにゃって頬が緩んでんのが自分でも分かった。

「可愛い奴め……」

ハスキーボイスが呟いた。

「うん……」

「タツばっかりズルい！！

それからオレの隣で声が上がって、突然ガバッて誰かがオレに抱きついた。

ふんわり匂う、甘い花の蜜みてえな香り。

いい匂い。

「おい！ルイに触るんじゃねえ！」

「あ、藤堂おはよ」

「……」

さっきのいい匂いと同じだ。

ぼんやりとした視界の中に、

「ルイ……」

「……」

真上からオレを見下ろす男前が見える。

「相模……」

ソイツはオレの名前を読んだっきり何にも喋んなくて。

ただ暫く切れ長の目でジッと見つめると、安心した様に目を細めて優しく微笑んだ。

アヤすみてえに動かされてた指が、もう一度額に触れる。

髪を掬ってはゆっくりと掻き上げる。

?そのまま相模の大きな手に頭を撫でられた。

「目ェ、覚めたか……」

「――――おう…」

気持ちイイ手。

相模のだったんだ。

「……」

あったかくて、優しくて。

擽ったくてむず痒い。

大きな手。

ちょっと骨ばってて

ゴツゴツしてんのに、

触られると気持ちイイ……。

「どうした？」

「うん……」

アンタの手だったんだ。

優しい、あったかい手。

切れ長の目が穏やかに緩む。

黒い瞳の中にオレを映して、

撫ったい愛撫で頬を撫でられて。

無言で見上げるオレの顔をジッと捉える。

オレも　その目を見つめ返す。

相模と視線がぶつかる。

悪魔であって、本当はあったかい優しさを内に秘める瞳。

相模は何にも言わない。

オレも、静かに見つめ返す。

優しい悪魔は　そんなオレの頬や頭を何度も撫でる。

やっぱり気持ちイイや……。

気持ち良くて何度か瞬きした後、また視線を交わす。

暫くそうして見つめ合った。

迷宮　6

「お前……」

「藤堂のバカ」

相模が何か言いかけた時。

ふと後ろから、

どうも聞き慣れた口調が聴こえてきた。

「……」

「藤堂のバカ。　俺だって心配したのに、何でタツばっかり見るの」

その甘えっ子な喋り方と　ちょっと拗ねた様な少年の声で思いつく人物は一人だけ……

「おい、ルイから離れろ！」

「イヤ！！」

「ひて……」

急にオレの脇からニョキっと手が出て来る。
その手がムギュっとほっぺを摘んだ。

「藤堂のバカ」

「……」

意識がはっきりして来るに連れ、背中に密着する何かを感じる。
あったかいモンが、オレの背中に覆い被さってる。

「バカか、離せ！　ルイの傷が痛むだろうが」

「ウウ……、グスッ」

その声の主は、相模に怒られグズってる。

ほっぺを抓られたまま
顔を引きつらせて下を向く。

「……」

オレの両脇から生える、二本の手。

後ろでグズる少年の声。

シクシクと声を啜り、背中が少し揺れる。

「……」

それから　もう一度前を向く。

至近距離に、イラつき始める相模の顔。

「クソ、離れろよ……！」

相模はオレの後ろから突然生えて来た両手を剥がしにかかる。

「ひて…、ひてて……」

「オラ、離せ！」

「イヤ！！」

オレを挟んで取っ組み合う二人。

振動で顔がガクガク揺れる。

まるで兄弟喧嘩の間に割って入っちまったみてえだ。

「リョウ！！」

「グスッ、イヤ！！」

「……」

何なんだ、これは――――。

迷宮　6（後書き）

すみません（・・；）
一つ前の迷宮5の冒頭一ページ抜けていたので追加しました。
申し訳ないですm（＿＿）m

迷宮　7

もう見慣れた古風な部屋。

独特な趣のある黒畳を張る部屋には

オレと矢田の数々の情事を静かに見てきたであろう、黒のダブルベットが空間の中にどっしりと構える。

シーツと枕元から香る、魅惑的な甘い香り。

砂糖菓子みてえに甘い少年に顔を寄せた時、ふんわり漂ってくるそれと同じ匂いだ。

その香りは正しく少年天使を連想させる甘い匂いそのもの。

花の蜜が溢れ出したみてえな、官能的で、濃厚で、理性を刺激するような色気を纏う香り。

『フフ……、藤堂可愛い』

『可愛い奴め……』

耳に入る男達の呟きに、次第に意識が引き戻される。

蜜の香りに甘い言葉。

それらに包まれて目を覚ました時、オレは自分がまるで物語の眠り姫にでもなったみてえな、幻想的な気分に浸ってた。

目が覚めてからもそれらは甘い余韻を与え続ける。

いつまでも嗅いでいたい、甘い甘い香りが鼻腔を掠める。

頭を撫でるあったかい手。

それが緩く柔く動かされる度、髪の毛もサラサラ揺れて気持ちいい。

忽ちクラクラになる視界に映ったのは、予想外にも男前な悪魔。

オレの記憶はまだ事件の延長線上にあって、まるである所から記憶がプッツリと切れて止まってるみてえな感じ。

そして目の前に見える男の顔は、オレが何度も心の中で呼んでた男の顔そのもので。

事件のせいで要らぬ事にわざわざ気付かされたオレは

その男の顔に大いに心を惑わされた。

それに加えて優しく頭を撫でる、男の手がとても気持ちいい。

綿菓子みてえな甘い匂いと重なって、その柔い刺激は　まるでオレの心の奥まで溶かされていく感じだった。

サワサワと撫でる手は、本当にめちゃくちゃ気持ち良い。

瞬きしてソイツの目を見る。

額に　頬に　擽ったい様な　優しい感触が伝わる。

気持ち良くて閉じた目をゆっくり開けて、ジッと目を合わす。

切れ長のアイツの目も、緩く細めてオレを見つめる。

胸がジンジン焦げる感じがする。

熱くなって痛い。

意志に反して何かが心臓を締め付けてる感じ。

『相模……』

自分でも思う。この時のオレは、きっと安心しきった赤ん坊みてえな顔してんだろうなって。

ソイツは更に顔を緩めて、犬っころでも可愛がるみてえにオレの顎を擽った。

悪魔が見せる、愛情いっぱいに溢れ出す表情（カオ）。

アイツの目はオレだけを見てる。

その顔を見ると　何とも言えないキュンとした切ない疼きが胸を一杯に襲ってきた。

「……」

「お前……」

そして、今――

「ウッウッ……、タツのバカ、タツのバカ……」

いい匂いを振りまく主は　悪魔にねじ伏せられてオレの隣でシクシク泣いてる。

「ウッウッ……、藤堂のバカ、藤堂のバカ……」

「……」

少年に抓られた頬がまだ少しジンジン痛い。

バカバカと繰り返しながらもオレに縋りついてくる少年天使を横目で見やった。

「ウッウッ……」

泣きながらもしっかりと胸を触って口づけて来る少年を隣に、コイツは絶対確信犯だと思った。

「……」

そしてそれを可愛いと思ってしまう自分が不甲斐ない。

「お前らなあ！！」

とうとう見下ろす悪魔が唸った。

迷宮　8

一般人なら震え上がる悪魔の声を聞いても尚、少年はそれらの動きを止めようとはしない。

「グスッ……」

矢田は相模の声を無視して身体を重ねて来る。

それからグズりながらも甘える様に顔を寄せる。

「聞いてんのかよ!?」

「グスッ」

目の前に見える矢田の表情は、マジでコロッコロの仔犬そのものだ。

目を合わせると、今にもキューンキューンて泣きそうだと思った。

「……」

思わず撫でてあげたい衝動に駆られる、潤んだ少年の瞳。

間近で捉える瞳は涙混じりの睫毛を何度か瞬いて、
形の良い唇から覗く赤い舌が　キャンディーでも味わうみてえにペロペロと上唇を舐めて来た。

「ウッウッ…、グスッ」

サラシを解いた柔な胸に手を当てて、天使の手がイタズラに動く。
オレの小さな膨らみを揉み上げると、乳首を指で摘まんで転がし始めた。

「……」

次第にソコがゾクゾクして来て、先端がプックリと立ち始めるのが分かる。

「おい…、バカ――――」

「……」

少年はグズるのを辞めて、無言で愛撫を続ける。

「バカ……」

「……」

声…、出そう――――。

覆い被さる美貌が目の前の男前を隠す。

「クソが！！」

天使の後ろからめちゃくちゃ怖い声が聴こえて来た。

相模は矢田の首根っこを掴んで無理矢理オレから引き剥がした。

「うあああああ～！！　タツの、タツの、バカヤロォォォ！！」

「お前…、ふざけんな！！」

相模は両手にオレを閉じ込めて唸った。

「……」

「お前もお前だ！　そんな可愛い顔…、俺以外に見せるんじゃ……ねえよ」

「……」

言いながらうっとりと顔を除き込み、ギュウっと抱きしめられた。

「クソ……」

「……」

「ウウウッ」

矢田がオレらに抱きついて来た。

「離せ、オラ！！」

「矢田……、元気になったら、抱っこしてあげるから――」

「ああ！？　殺すぞテメエ！！」

「……」

「ウウ……、グスッ」

エンドレス――――

「クソが……。　今日だけだぜ！　いいな！！」

「――――」

いつしかの、相模と矢田の痴話喧嘩を見てるみてえだと思った。

いつまで経ってもグズって食い下がる矢田の執着心に、とうとう相模が根負けした。

オレと相模の間に潜り込む仔犬少年は、無言でオレの肩に顔を寄せて目を瞑る。

それから気持ち良さそうに頬ずりしてオレを見つめた。

「チ……ッ！」

その様子にイライラと舌打ちしながら、相模がオレの着てる服を脱がし始めた。

「おい、な、何すんだよ」

「バカか」

柔な胸を抑えるサラシが取り払われてるせいで、シャツをはだけると　直ぐに胸が露わになる。

照明に照らされた室内で、剥き出しになる上半身を矢田と相模、二人の男に見られる。

オレだけが服を脱がされて恥ずかしい。

アイツは躊躇なく胸元に手を伸ばした。

しっとりと熱い指の感触が
オレの身体に落とされる。

それから相模は何かを確認するみてえに手を這わせ始めた。

「……っ」

少しだけど胸元に痛みが伴う。

ゆっくりと、確かめる様に相模の手が動く。

添えた部分を軽く押しながら、少しずつ下に移動する。

軽く鎖骨の下辺りを抑えられた時、突如ズキンと鈍い痛みが身体を
襲った。

「……うっ」

「痛むか」

その付近を確認するみてえに触られる。

途中、何箇所か

さっきと同じく血液の溜まった様な鈍痛が奔った。

「……ッ」

その痛みに静かに耐えた。

「下衆野郎が……」

怒りを滲ませる声と共に、冷たくヒヤリとした感触が突然襲って来て

自然と身体が大きく跳ねた。

迷宮9

「我慢できるか？」

「おう……」

相模は「そうか」と小さく呟いて頭を撫でた。

横になって見下ろす自分の素肌には至る所に赤い傷跡が出来てる。

アイツがそこに手を這わし始めると、熱い痛みが肌の上を駆け巡った。

脇腹に当てられた冷たい感覚が、段々と自分の体温と混ざって温くなってくる。

「……」

アイツは暫く黙ったまんまで、肌の上の傷口を手の甲で撫で続けた。

触られる度ジンジンする。

身体の端々にある、炎症して焼けたみてえな赤い痕。

相模が手を動かすと、何処かしらが必ずヒリヒリする。

「相模、痛い」

「そうか……」

アイツは上の空で呟いて、やっぱり身体に手を這わせて来るんだ。

ふいに、アイツの目が少し手前の枕元へ移動する。

ジッとそこを見つめる悪魔は呆れた様にため息を吐いた。

「いい気なモンだぜ」

「え――」

オレの隣で横になる少年をコツンて指先で小突いた。

「……」

固く目を瞑る少年はその刺激に反応する素振りも無くて、

代わりに規則正しい呼吸音が聴こえてきた。

「……」

ソイツはオレの傍に両手を添えて、布団の中に顔を埋めてる。

顔を覗き込むと

ちょっと口を開けてスースーと心地良く眠る、少年の寝顔が見えた。

矢田、

寝ちゃってる――。

「ルイ……」

「うあ……っ」

矢田に気を取られてるうちに相模の声が近付いてて、
アイツは曝け出した胸元に顔を寄せるとペロリと傷口を舐めた。

「……っ」

ジンジンした痛みの中に、熱くて濡れた柔らかい刺激が加わった。

「代わってやりてえ……」

「……っぁ」

小さく呟いた声は
暖かい吐息になって
肌の赤みを甘く濡らされていく――

焼ける痛みが甘く変わる。

相模は更に舌を出して、ペロペロと傷口を舐めていった。

痛い所が濡れる程に優しく中和されて行く。

唇を付けて吸い上げられた。

「……っ」

まるで身体中の傷が
一斉に騒ぎ立てるみてえにジンジンと疼いてる。

「相模……」

相模のキスが胸の横にも降って来る。

熱い舌で舐められて、その隣の赤い腫れを指で触られた。

「お前の傷、全部吸い取ってやりてえ……」

熱くて痛いのに――――。

それ以上に……

アイツの熱は、身体の痛みまでも官能的な快感に変える魔力を持ってる。

目を瞑ってその刺激を受け止めた。

暖かくて柔らかいソレが、肌に張り付いては傷口を擦り上げる。

アイツに少しずつ開発されてる体は、

何度か刺激に耐えきれなくてビクンと飛び跳ねた。

ベットが軋んだ。

オレの脇に手を添えて、相模が馬のりになってきた。

「……」

無言でその顔を見上げた。

アイツは暫く唇を離して、オレの顔を見て、頬を撫で摩る。

そのまま親指がオレの唇をゆっくり辿った。

切れ長の目に見つめられる。

「気持ちイイんかよ？」

「……うん」

「……」

何かを考えてんのか、暫くそのままオレの顔を覗き込む。

親指の付けられた唇が熱くなる。

そして、オレの胸奥にも

熱を持った感情がどんどん溜まってく。

「イイ顔、してんぜ」

掠れた低温ボイスが降ってきた。

それからアイツが体を沈めると、また体に甘く痛い余韻が始まる。

それまでみてえに傷口を舐めた後、アイツはパクって乳首を口に含んだ。

「……っあぁ」

急に甘い快感を与えられて思わず声が出る。

歯を立てて甘噛みされてソコを強く吸い上げられると、

体は素直に反応して背中からゾクリとした痺れが襲ってきた。

「相模、ソコ怪我してない」

「そうか」

それでもアイツはやめる気配も無くて、それどころか更に舌を使ってソコを攻めて来たんだ。

迷宮　１０

アイツの口に含まれた突起が、どんどん敏感に反応する。

舌先で転がされ、弧を描くようにその先端を弄られると、行き場のないゾクゾク感に全身が苛(さいな)まれる。

それから舌を使って吸い上げると、音を立てて離された。

「ああん……！」

恥ずかしい声が無意識に出る。

口から解放された勢いで、乳首がプルンと跳ねた。

ソコを見ると、アイツに攻められてた先端が真っ赤に染まってる。

これじゃあ相模に感じてんのがまる分かりだって思って更に恥ずかしくなる。

「……」

そのうち太腿辺りに、何か固くて暖かいものが当たってるのが分かった。

相模を見るとアイツは微かだけど息を切らしてて、

さっきまでオレを攻め立ててたせいで少し濡れた唇を見てドキッとした。

その時、隣で矢田がモゾモゾ動き出して、オレは更に心臓がバクバク飛び跳ねた。

「う……ん」

もしかして起きたんじゃないかって思って、布団の中の少年の顔を覗き込んだ。

矢田は布団の中で小さく伸びをして寝返りを打つと、ゴロンと反対

側を向いた。

斜め横から長い睫毛が固く閉じられてるのが見える。

そして気持ちよさそうな寝息がスヤスヤとそこから聞こえる。

隣でその様子を確認して、オレは心底ホッとした。

こうして相模に感じてる顔を矢田に見られたくないって、起きてなくて良かったって、そう思ってる自分が居る。

「ルイ――」

相模はオレの顔を両手で包み込んで正面を向かせると、イキナリ唇を重ねて来た。

「相模……」

閉じかけた唇は相模で一杯に塞がれて、頬を撫でる手が少し動かされると自然と口が開いた。

すかさずアイツは角度を変えて、今度は更に深く唇を塞がれる。

柔くて温かい物が押し入って来る。

口の中を動き回り、オレを中から刺激する。

オレの舌に擦り合わせて来て、無性に体が熱く反応した。

滑らかな感触のアイツの舌に絡められると、自分がとてもイケナイ事をしてる気分になる。

甘い蜜を注ぎ込まれて、かき回されて。

薔薇みてえに真っ赤な余韻と合わさって、それはとても甘美な味のするものだった。

どこまでも柔らかくて蕩ける様な感触に思考の全部が占領されていくんだ。

「……ハア…っ」

溜息にも似た吐息が口の中で交わって、オレとアイツの中で溶けていく。

相模とオレの舌がどんどん絡まる。

今日のキスは最初から濃厚だった。

「……っ」

オレ、アイツのキス一つで
何でここまでドキドキしてるんだろう。

頬が赤く火照ってんのが凄い分かる。

さっきから胸も凄いドキドキしてる。

自分の表情も、熱い胸の内も、アイツから引き出される声も。

オレの中に相模が加わるだけで

こんなにも乱されてしまう。

“相模が”オレにこういう事してるって思うだけで、

胸の中がジンジンて痛い位に高鳴るんだ。

どうしようもない位ドキドキして

それよりも相模に抱きつきたくて。

抱きついて、

目の前の胸板に
顔を埋めてみたくなる。

強く強く抱きしめても全然足りない。

自分でも驚く位の衝動的な感情がこの合間にも襲って来るんだ……。

これはきっと　アイツらのせいだ。

「さっきから思ってたけどよ……」

掠れた声と一緒にキスが遠のく。

舌と舌が
糸を引いて離れた。

オレは今アイツの腕の中で、
黒い服を着た悪魔に見下ろされてる。

相模の目、潤んでる。

手の甲が優しく頬に触れて、擽る様に撫でさする。

「お前、何で今日　そんなに可愛い顔してんだよ」

「……」

アイツらが復讐なんて馬鹿げた事に手を染めなけりゃあ、オレはこんな事に気付かされることも無かったんだ。

迷宮　11

見つめられると逸らしたくなる。

「そんなの……」

じゃないと、今すぐにでもオレの感情が見透かされてしまいそうだ。

静かになると
ドキドキも聞こえてしまいそう。

何にも喋んなくても、アイツにはオレの心の全部が分かられていそうで……

「そんなの知らねえよ」

「……」

思わず投げやりな言葉が口をついて出てきたんだ。

何か言ってくると思ったけど
相模はそれ以上は何にも言わなくて

その代わり、潤んだ目を細めて暫く見つめられた。

その視線を何度か逸らした。

暫くしてから見上げても、アイツの瞳はオレを捉えたまんまで。

そうやって眼差しがぶつかる度に胸の中が焼ける様に疼いた。

気付かれてるんだろうか――。

アイツの表情が変わった。

何度も逸らそうとするオレの目をジッと見て

何度か瞼を瞬いた。

頬に伸ばされた手が　ヤケに熱く感じる。

それから切れ長の黒目を緩ませて、

アイツはこれまで見たことも無いほどの優しい顔でフワッと笑ったんだ。

「……」

どうしよう。

アイツは多分、気付いてる。

気付かれてる……。

「そうかよ」

そう呟いて頬を撫でてた手が視線と一緒に口元へ落とされた時

オレの心臓は今までにない位高鳴った。

あんな事が起こらなければ

オレは相模を想って泣く事も無かった。

アイツが傷つく事が自分に向けられた暴力よりも辛い物だなんて

きっとそんな事気付かなかったのに――。

“お前、相模の事　好きになるよ”

あの時のオレの声がまるで本当にデジャブみてえで、

まるで自分は見えない誰かに操られてて、どれだけ逃げても結局はこうなるんだっていう、

最初から決まってる運命の上を這い回ってるんじゃないかって気分になった。

でもその声を否定できないのも紛れもない事実だ。

相模が最初、戸惑ってた気持ちが凄え分かる。

そして、気持ちに素直になった途端
こんなにも想いが強くなんのかって驚きもある。

もともと自分の中にあった気持ちを素直に受け入れただけなのに。

とめどないドキドキは

今も尚オレの心を震わせて止まないんだ。

オレは

相模に恋してる。

大事な話　1

悔しいけど

認めたく無いけど……。

オレの理想の男像であるソイツは

初体験のみならず

とうとうオレの初恋まで奪って行ったんだ。

認めたくないけど――

相模が好き……。

「ルイ……」

目の前のこの男が好きだ。

「……」

唇が熱いよ、相模。

アンタに触れられて、視線を感じるその部分が焼けるように火照ってるよ。

オレの傍には見上げなくても視界に入りこむ位、至近距離にアイツの顔があって、その息遣いまでも隣で感じて。

目を合わせなくてもアイツに見つめられてるのが分かっちまって…。

切れ長の目を細めて微笑んでる男の顔がどうしても鮮やかに脳裏に映り込むんだ。

やっぱそのままこの顔が近付いて

キス、されんのかなって思ったら、

更にオレのドキドキは止めようもない位に強く高まっていった。

「……して欲しいかよ」

「――なに」

唇を指で撫でられて、すぐそこで息を殺してるオレの耳元にアイツの顔が寄せられる。

「キス」

掠れた声で、そう呟いた。

耳元に響いた声は、存分にオレの心を震わせる。

「欲しそうな顔、してんぜ」

「何で……っ」

耳を甘噛みされた。

まただ……。アイツの唇がそこを優しく攻め立ててるのを想像してしまう。

形のいい口を耳に寄せて　吐息を吹きかけながらそっと柔い余韻を与える。

オレは瞬間的に、アイツの体温をその部分いっぱいに感じるんだ。

それから、しっとり濡れた舌先を味わうように這わせて……

そのままゆっくりと嘗め回す。

「相模……っ」

こういう事初めてじゃないのに……。

左耳が甘く疼いて、変に緊張する。

「してやろうか」

「――ざけんな……」

ビクビクと震える体と同じく、オレの声色もそれを歓ぶみてえに熱を帯びてる。

返事を待たずして、アイツは起き上がると同時に有無を言わさず口付けてきた。

大事な話　2

馬乗りになった体を預けて。付いては離され、また口付けられる。

額に掛かった髪をたくし上げて、そのまま頬を撫でる。

合わさる度にどんどん深くなっていく。

「あの話、覚えてるかよ？」

「――なに」

今までもそうやってオレの心を占領してきた。

相模の愛情は、なにより肌で感じる。

アイツが与える物は何もかもが優しい。

「お前の答えが聞きてえ」

「何の事……」

濃厚なキスが離されて、今度は首筋に降ってきた。

突然の柔い余韻に、思わず体が弓なりに反る。

スルリと背中に手が差し入れられて、背骨のラインを指が辿る。

続けざまにやってきた刺激に耐えられなくて、思わず「ああ……っ」って声が喉をついて出てきた。

相模はそのままオレを抱きしめた。

「結婚してくれ」

「なに……」

その言葉は

本当に突然だったんだ。

「お前しか居ねえ」

「待て……」

思いもしなかった言葉をふいにかけられて、しばらく何にも出来ないでいた。

アイツの声だけが頭の中でグルグル回ってる。

１６歳で、高校一年生で、まだまだ女を自覚したばかりで。

いや、それどころか　つい最近まで愛だの恋だのとは無縁だった。
人を好きになるって事をようやく今分かりかけて来た位の、経験値
全くゼロな状態のオレに、まさかの緊急事態が起こってる。

「返事は」

「――――は」

「答えろ、今すぐ」

「ちょ、ちょっと待てよ」

「ああ！？　待てるかよ」

この場で今すぐ答えろ。

冗談なんかじゃない、相模はマジの顔して言ってくる。

今頃頭が真っ白になってきた。だってこの歳でそんな事考えるわけない。いや、それどころか相模が全部初めてなのに。

初めての相手と16歳で結婚なんて、まるで昭和初期の話みてえじゃねえか。

いやいや、そ、そういう事じゃなくて。

とにかく話が急すぎる。確かに相模は好きだし憧れてる。

それは認める。そこは……、もう否定しない。

だけど、どうしてこの男はいつもいつもオレより一歩手前をリードするんだろう。

オレが相模のキスを受け入れ始めたら好きだと言い、アンタが居ないと嫌だと言えば俺の女になれって言ってくる。

ようやく自分の気持ちを素直に受け入れたと思いきや、今度は結婚なんて所まで話が飛んでる。

「急すぎるよ。オレに結婚なんて…、考えられない」

「今から考えりゃあいいだろうがよ」

「あんたな……」

「それとも力ずくで束縛されたいか」

「おい……」

どうして相模を受け入れるだけじゃダメなんだろう。

何で、その先に進みたがるんだろう。

アイツには好きってまだ言わないけど。でも、気付いてそうだけど。

お互い同じ気持ちならそれでいいと思う。オレはそう思うのに……。

「これから一生無理やり監禁されて生きていくのと、俺と結婚して一生愛されて生きるのと、お前の好きな方を選ばしてやるよ」

「ふ、ふざけんなよ！　それ、選択肢はどっちも変わんねえじゃねえかよ！」

「ああ！？　全然違うだろうが！　いいから選べ！」

「選べるか！！」

そして結局言い争ってるのは何でだろう。

「ウウ……ッ」

「……」

そして後ろから聞こえる少年の泣き声。

「ああクソ！」

オレを抱きしめる相模の隣からニョキっと腕が生えてきた。

タツのバカタツのバカって連呼しながらすすり泣く少年の声がすぐ後ろから聞こえてくる。

どうやら言い争ってるうちに眠れる天使を起こしちまったみてえだ。

「ダメ。藤堂を取っちゃダメ。　タツのバカ……。藤堂は俺の赤ちゃん産むんだから……」

「ふざけたこと抜かしてんじゃねえ」

その上片腕を握って引っ張り始めた。

シクシクと鼻を啜りながらも凄え勢いでグイグイ抱え込んで来る。

「クソ、離せよ！」

「オイ…、い、痛い。矢田痛い」

「藤堂のバカ。何で裸なの。俺の隣でタツと何してたの」

「それはオレが怪我してるから……」

「ウウ……ッ。タツとそんな事しないで」

相模に抱きしめられてる隙間から矢田がにじり寄って来て、狭苦しそうに近付いて唇の端にキスをした。

「……」

こんな時になんだけど、それはふにゅってしたマシュマロみてえな感触で、とても気持ち良かった。

とても気持ち良くて、黙ってそのキスを受け止めた。

「何してんだよ！」

相模は矢田の顔を片手で引き剥がした。

矢田が大声あげて泣いてる。

いや、駄々こねてる。子供みてえにワンワン声をだして怒ってる。

「ルイは俺の物だ！　勝手に触んな！」

「嫌！　藤堂は俺のお嫁さんになるんだから！」

「お前なあ……！」

「タツも藤堂も俺の物なんだから！！」

「ふざけんな！！」

そしてまた兄弟喧嘩が始まってる。

おかしい。

さっきまで結婚だの何だのと話をしてたはずなのに。

なんかおかしい。

いつの間にかどうしてこういう事になってんだ。

服まで剥がれて、何してんだよ、オレ。

大事な話　3

「ルイ！！」

「ビクッッッ！！？」

そして相模の怒りの矛先は、何故かオレにまで向けられた。

アイツが怒ると怖い。めちゃくちゃ怖い。

元々相模龍って男は迫力があるだけに、その恐ろしさに拍車をかけて来られて、思わず逃げ出したい衝動に駆られた。

「お前もお前だ！　されるがままになってんじゃねえよ！！」

「……」

「何とか言え！！」

「……」

何度でも言おう。

オレが黙ってるのは、わざとじゃない。

気まずくなって黙秘している訳でもない。

そこは勘違いしないで欲しい。

お、オレは

オレはただ、怖い。

怖い！！

こんな間近で相模に詰め寄られて怖い！！！

何度でも言おう。これは、防御本能だ！！

「ウウ……っ。タツは藤堂を脅してるだけじゃんか！」

そうだそうだ。

「何だと」

相模に無理やり引き離された顔を小刻みに揺らして矢田が攻勢に出た。

「グググ……、藤堂に一方的に詰め寄ってるだけだよ！」

そうだそうだ。

「何言ってやがる……！」

相模は更に矢田の頭を持って押さえつけた。布団の中から矢田の「うああ～～！！」て泣き声が聞こえた。

だけど矢田はしぶとくて、グスグスと鼻を鳴らしながらも布団で籠った声で反撃に出る。

「と、藤堂は俺の事が好きなんだから！」

そう……

「バカな事言ってんじゃねえ！！」

「バカな事じゃないもん！　藤堂は俺の体が好きなんだもん！」

そ……

「リョウお前、いい加減にしろよ」

「グス……ッ、藤堂言ったもん！　可愛い声いっぱい上げて、俺のが気持ちいいって、もっと突いてって……」

……。

「言うな！！」

最悪だ。

恥ずかしい。

オレそんな事を言ってたなんて……、全然　覚えてない。

や、矢田にそんな事を。

オレって奴は――――。

「ルイ！！」

「……」

真上には相模。そしてオレらの間ににじり寄って来る矢田は相模にねじ伏せられて、布団に頭を押し付けられた状態でさっきから相模と口喧嘩してる。

顔は見えないけど、布団の内側からすすり泣く声がオレの隣から振動で伝わって来る。

その上オレは服を脱がされて、どういう訳か二人の争いに巻き込まれ、とどめと言わんばかりに恥ずかしい言動まで暴露され……。

絶対絶命の窮地を脱したはずなのに、組に居る時の方がどんどん追いつめられて行ってるように感じるのは何故だろう。

「お前、マジで何考えてんだよ」

「……」

そして、どうしてそこまで相模が怒るのかが分からない。

「グス…ッ。　本当の事だもん！」

「お前は黙ってろ！」

悪魔は怖ーい目で一度オレを見て震え上がらせたあと、大きくため息を吐いた。

「お前……、自覚してるか。浮気だぜ、それはよ」

「し、しらない」

「知らねえんじゃねえんだよ！！」

「ビクッッ！！」

「ああクソ――――！」

鎖骨付近に額を付けて独り言のように唸る。

アイツの髪が肌をくすぐる。　やっぱ相模の髪質って意外と柔らかい。　滑らかで触ると気持ちいい。

あ、ちょっとシャンプーの匂い……。

甘くない男物の匂い。相模らしい爽やかな香り。でもあんまり強くは匂わない。近くに寄った時にだけほのかに香る香水みたいだ。

――ふーん。アイツ　こういうの使ってるんだ……

「ふざけんなよ」

「うん？」

あ、いけね。　一生懸命に髪の匂い嗅いでた。クンクンしてるうちに別の世界にトリップしかけてたよ。

慌てて意識を現実に戻す。それとほぼ同時に顔が上がる。相模と目が合った。

何も言わないでも分かる。相模は怒ってる。確実に怒ってる。

凄みの聞かせた目線が恐ろしい。

「浮気は許さねえ」

「何の事？」

そういうとまた怒鳴られた。

もうオレには相模が何の事を言ってんのか、何に対して怒ってんのか、さっぱり分からない。

おそらく矢田との行為が問題なんだろう。矢田があの時の事を暴露したりするから相模を怒らせたんだ。

あの時は仕方無かった。嫉妬と孤独で泣いてる矢田を鎮める方法なんて他に無かったんだから。それに『オレは大丈夫だから』ってちゃんと言ったのに。

「上等じゃねえか。きっちりと筋を通してやるよ」

「だから何の事だよ?」

「選べ」

「――は?」

とにかく相模は自分目線で物事を考えすぎるんだ。

「俺とリョウ、どちらか選べ。　お前にすべての選択肢をくれてやる。お前がパートナーを選ぶんだ。もしリョウを選ぶんなら、その時は……、キッパリお前から手を引いてやるよ。一生叶わねえ恋でもしてやるさ」

「な、何の事だよ」

ホラ、今もそうだ。相模の言う事はイチイチ分かりずらい。

「お前は本当に……！」

次に相模は矢田の首根っこを掴んで起き上がらせた。

久々に顔を上げた少年はちょっと目を赤くさせてはいるものの、特に変わりはない様子で、相模の方を思い切り睨んでた。

「お前が結婚相手を決めるんだ」

「――――は」

「グスッ」

「お前が一生居たいと思う方を選べ。俺かリョウか。選ばれなかった奴はキッパリお前を諦める」

「な、何でそんな事すんだよ」

「いいな」

大事な話　4

狼狽えるこっちを無視して少年の方に向き直る。
ソイツはしばらく黙ったまんまだったけど

「そんなの嫌……」

そういうや否や悪魔の鉄拳が飛んできて、矢田は再び泣き出した。

「嫌なら組から追い出してやる！　京王も辞めろ！　筋が通せねえなら男じゃねえ!!　金輪際、二度と俺とお前は無関係だ!!」

「うあああああ――――!!　タツのバカ！　タツのバカ!!　そんなの嫌だあああああ!!」

「テメエは俺の唯一の連れだろうが!!　情けねえ事抜かしてんじゃねえぞゴラァ!!」

「ウッ、ウッ……、い、嫌……」

その後の出来事はご想像にお任せしよう。

とにかく凄まじい時間だった。それはもう、悪魔降臨なんて生ぬるい事を言ってる場合じゃない位に。

結論から言うと、矢田は最終的に「分かった」と言った。

相模の無理強いにオレはもちろん矢田の方も、とうとう首を縦に振ったんだ。

ただ、それまでの過程を一部始終目の当たりにしたオレにとっては、それが矢田が本心から頷いてるんじゃないって事だけはよーく分かった。

でも矢田は首を縦に振った。

そして、よくわからないうちに、オレは何故か結婚相手を選ばされる事になってしまった。

あんなに相模に「そんな事考えられない」って言ってたのに。

結局こうなってしまった。

目の前には二人の男。
美少年と男前。

どうすんだ、オレ。

ひと時の波乱が訪れてから数分。

体を起こした相模は無言でオレの着衣の乱れを直してる。
相変わらず悪魔は降臨したままで雰囲気が全体的に恐ろしい。

そして矢田はというと、懲りずにオレの首元に腕を絡ませて抱きついて来てて、それを即座に相模に剥がされていた。

「……それで、お前の答えはどっちだ」

「――え」

矢田を羽交い絞めにしつつも「え、じゃねえよ」って片手で小突かれる。

相模がじゃれついてるように見える。　多分違うんだろうけど。

何とかこっちに手を伸ばそうとする少年をズルズルと引き摺り、まるでプロレスみてえな技をかけ始める悪魔。

矢田の体を組み伏せて縛り上げる。

ソイツの腕は美少年の首に食い込み、矢田は天使らしからぬ「ぐえ」て声を上げて体をバタつかせてた。

「俺とリョウ、どっちを選ぶんだって聞いてんだよ」

「相模……。　矢田が可哀相」

「話を逸らすんじゃねえ」

「ウウ……、タヅのバガ」

コイツらって仲が良いのか悪いのか、よく分からん。

一緒に居る時って、必ず何かいがみ合ってるよな。最初なんか痴話げんかっぽい事してたし。

まあ、矢田は多分何をされても相模が好きなんだろうけど。矢田の方は。

「決めろ。今すぐだ」

「今すぐって……ちょ、ちょっと待てよ」

考え事をしてる頭にすぐさまアイツの声が降ってくる。

またトリップしかけてた思考はあっという間に現実に引き戻された。

仮にも結婚相手を無理やり決めさせられてるんだよな。

もしマジなら、それって凄え大事ってどころか、一生に関わる大問題なのに。

オレの人生にもかかわる大変な事じゃねえか。

それを今すぐになんて、そんな簡単に決められる訳ないぜ、相模！

「アンタ急すぎるだろ、いくらなんでも。　せめて半年……」

「ああ！？　バカかお前！！」

「う、うるせえよ」

「お前、真剣に考えてねえだろ！？」

う。　ず、図星。

そりゃだれでもそう思うだろ。

なんせケッコンなんだから、ケッコン！！

付き合うだの何だのとはまるで訳が違う。

これはオレにとって大問題だ。

今の自分は、ただ相模に好意を持ってるってだけで、この先どうとか一生コイツと一緒にとか、そんな事全く考えてないんだから。

それよりとりあえず卒業しねえと。

一応高校生なんだし、親父の進学詐欺とはいえ、やっぱソコは譲れねえ。

だからちょっとでも引き伸ばしにしておきたい。

しばらく黙ってたらそのうち忘れてくれるとか思ったりして。

「お前、俺がそのうち忘れるんじゃねえかなんて思ってねえだろうな、オイ」

「……」

「殺すぞテメエ！」

何でオレの考えてる事ってすぐ相模にバレるんだろう。

「決めろ！　今すぐだ！」

「い、一か月！！　一か月時間をくれ」

「バカか！　お前、俺を殺すつもりか！」

「何でそうなるんだよ」

「そんなに待てるか……」

「うう……、やっぱタツはご、強引なんだよ」

苦しそうに呻きながら矢田が声を漏らした。

「そんなんじゃ、藤堂に選択権なんて委ねてないよ……！」

「何だと」

「ググ…ッ、だ、だから藤堂に嫌われちゃうんだよ！」

「嫌い、だと」

矢田をねじ伏せる動きが止まった。

相模は電池切れの機械みてえに突然ピタっと動きを止めた。

大事な話　5

そして悪魔はオレを見る。

「な、なんだよ」

「バカな事……、言ってんじゃ、ねえよ」

「ううっ、藤堂は強引なタツなんか　き、嫌いだよ！」

「うるせえ！」

明らかに動揺してる相模。　悪魔が珍しく焦ってる。

そんなに『嫌い』って言葉が聞きたくないらしい。だって捕まえてた矢田の体をズルっと手放しちまってる。

だから解放された矢田がすぐさまオレの方に抱きついて来た。

いい匂いもしたけど、それより傷跡に体が乗っかって痛い。

それでも「痛い」って言うのを我慢してると、矢田が一所懸命に顔を近づけてスリスリし始めた。

「グスッ、藤堂は女の子なんだから。　優しくしてあげないと、嫌

われるんだから！」

「黙れ……」

「だから、藤堂は俺と一緒の方が幸せなんだから！」

「ざけんな……」

矢田に『嫌われる』って言われたのが余程堪えたのか、相模はオレに抱きつく矢田を引き剥がしたりしなかった。

「ルイ――」

「な、なんだよ」

どうでもいいけど、さっきから同じ事の繰り返しの様な気がする。

さっきから取っただの取らないだの、好きだの嫌いだの、結婚やらなんやかんやと。

「嫌いか、俺が」

「え、いや……」

「嫌いだもん！」

「テメエは黙ってろ！」

さっきからそんな事ばっか言い合ってて、どうも壊れたレコードみてえに同じ事を繰り返してる気がする。

そして、何か大切な事を忘れてる気がする。

「答えろ。　お前を求める俺が、嫌いかよ？」

矢田のイタズラな挑発なのに　そんなに真剣な顔をして聞いてくる相模はちょっと可愛い。

「そう、なんかよ？」

「い、いや……」

だけど、素直に『アンタに好意を抱いてるよ』なんて言える勇気もなくて、そこから黙り込んじまった。

無言のまんま、変に長く感じる時間が流れて、この場がどんどん気

まずくなる。

オレを見つめる相模の顔がどんどん曇ってく。

「す、すんません、若。　ちょっとお話が……」

どうすんだって位に気まずい空間に割って入って来たのは、予想通りというか何というか。

申し訳無さそうに頭を垂れてゲンじいが部屋の中に入って来た。

この状況の中で部屋の中に姿を現せられるオッサンがマジで凄いと思った。

「クソが！！」

「あの、なんか、すんません。本当に……、タイミング悪くて」

そう言いながらもズカズカと中へ押し入って来る。

ゲンじいは相模と、更にオレの方を向いた。

「お嬢も病み上がりで悪いが、出て来れるかい？」

「オレ？」

まあな、って呟いて、深々と頭を下げる。

「まあ……、客人ですわ」

頭を垂れたゲンじいは意味深に一言呟いた。

すれ違い　1

ゲンじいが呼びに来てから数分経った。

サラシを巻き直して、乱れた服を直し、なんとなく気まずいまま相模と向かったのは、組員がズラリと立ち並ぶ奥の部屋だった。

相模が姿を現すとおっちゃん達は一様に頭を下げる。

そしてオレはその横を無言で通り過ぎた。

「お嬢、エライ目ェに遭ったのう」

突然話し掛けられてビックリして振り返ると、強面のおっちゃん達が頭を下げたまま、ニイっと笑顔を見せてオレの方を見てた。

「ウス……」

そう返すのが精一杯だった。

近くで見るとやっぱ厳つい。

「お嬢、もう動いて大丈夫なんかい？」

「ウス…」

「後はオッちゃんらに任しときな」

その後も目の前を通り過ぎる度に「お嬢、ご無事で」「そりゃあ、顔の傷はどうにかせんといかねえな」「まあ、ゆっくりと休みよきいな」とか、それはまあ色々と話し掛けて来る。

「おいで」

それは結局相模が部屋の中に入るように促すまで続いた。

オレの腰に軽く手を充てた相模と一緒に中に入る。

?入ってすぐ、ゲンじいの姿が目に入る。

そして、奥には組長さんと面して黒革の長ソファにゆったりと身体を預けてる人物が見える。

その人はオレらの存在に気づくとおもむろに立ち上がり、着ていたトレンチコートを脇に置いた。

「藤堂君、また会うたなあ」

「あ……」

嶋本の呼びかけに、思わず軽く会釈で返した。

「まあまあそう構えんとお座りな」と、まるで自分の家の様に促され、とりあえず「はあ」と答えて組長さんの横に座った。

「藤堂君、ホンマ今回の事は、エライすんませんでした」

「い、いえ……」

座った途端に組長さんに深々と頭を下げられ、逆にこっちが恐縮してしまう。

相模は無言で別のソファにドカッと腰を下ろした後、いつもみてえにテーブルの上に両足を乗せる。

「やっぱ若さんは迫がありますわな」

「何の用だ」

「まあまあ、そう短気にならんと」

そんな相模の反応も手馴れた物と、笑って嶋本も席に着いた。

「言わずもがな、昨日の件でちょっと話が聞きたいんですわ」

「うちは関係ねえっつってんだろ」

「そういう訳にもいかんでしょうよ」

口調と反してにこやかな笑顔を讃え、嶋本はオレを見る。

「藤堂君、君やわな？　昨日電話くれたんは」

「あ、はい」

「あの不気味なガキら、君を誘拐して、そこの若さんを呼び出せて言うたらしいな」

「あ……」

「……なん、だと」

「報復やったんやろ？　相模の若さんへの」

嶋本の言葉に反応して、相模が身を起こす。

その様子を横目で見やり、嶋本は続ける。

「何で、奴らの言う通りに若さんに電話掛けんかったん？」

「それは……」

まるで胸の内が全部見透かされてそうな鋭い視線が突き刺さる。

「どういう事だよ……」

詰め寄る相模を前にして、更に言葉につっかえて押し黙った。

「君、本当はここに居たくて居るんと違うんやないかね？」

オレと相模、その両方を見比べて前のめりに顔を近付ける。

嶋本は少し顔をしかめた。

「もしかして彼に脅されてないかね、藤堂君？」

「いや、そんなこと……」

「ふざけんなテメエ！！」

相模はテーブルごと脚でなぎ倒した。

そのままの勢いで嶋本に掴みかかろうとする相模をゲンじいら、外野連中が数人がかりで取り押さえた。

「若！　堪えて下せえ！！」

本当にあと一押しで、暴走しかねない位に殺気立ってる。
相模、マジで怒ってる。

「離せやゴルァ！！」

「無理です！」

腕や腰に何重にも腕が絡みついてる。相模の怒号が飛び交う。振り払った腕は男達の顔や腹に入り、何人かがその場に蹲った。

それでも奴らは壁際に体を寄せてその動きを食い止めた。

「エライご立腹みたいやのう。　何ですかなあ。　ヤクザさんでも堅気者と友情が芽生える事もあるんですかね」

騒然とし始めた部屋の空気を技と掻き乱すような、挑発的な言葉を投げかける。

こんな事なんでもないとでも物語ってるみてえなケロッとした表情で男は更に追及を続ける。

「でも、藤堂君の方はそれが迷惑なんと違いますか。　その顔の傷も、おたくらが暴力で脅して付けたんやないんですの？」

「なんやと……」

嶋本は顎の前で指を絡ませ、フウ、とあからさまにため息を吐いてからオレを見る。

「やないと、こんな時にワシらを頼って来たりせんでしょ。なあ、藤堂君」

「え……」

嶋本の呼びかけに、肩で息を繰り返す相模がオレを見た。

失意されてると思った。

相模の顔から悲しみに暮れる色が滲み出てたから。

今更、咄嗟に嶋本に電話を掛けた事を後悔した。

「何で言わなかった……」

「――ゴメン」

「お前が襲われたのは、俺のせいかよ……？」

「違う――」

「違わねえだろうが！！」

「この際や、嫌なら嫌てはっきり言ったらどうや、君？」

両指を絡ませた手に顎を乗せ、鋭い視線を向けてくる。

その言葉に思わず反応して男の方を見ると「ホラな」と顎上の口が開いた。

「藤堂君。さっきから泣きそうな顔しとるやろ」

「違う……」

「怖がる事無い。はっきり言うてみ。君が望むんならウチは一時的に保護しても構わんのやからな」

「違うんだ……」

相模はオレを『護ってやる』って言って組に置いたんだ。

もしかしたら口封じに襲われるかもしれないからって。

得体の知れない相手が襲撃してきた時も身を挺して護ってくれた。

アイツらに誘拐された時も、助けに来てくれた。

ついさっきまで傷ついた体を癒してくれてたんだ。

オレは、アイツが自分の理想の男だって、唯一認めた男なんだって

思った。

何があっても相模龍は負けちゃダメなんだって。

自分が痛めつけられる事よりも、相模がオレらの為に犠牲になるってことの方がよっぽど辛かった。

アイツは、オレの大事な男なんだ。

大事な、大事な存在になってんだ。

アイツが嫌なんて思う訳ない。

「相模さんもなあ、こんな純朴な少年を巻き込んだらアカンわ。お宅らが手ぇ出して良い相手と違うでしょ。彼とは住む世界が違うんやから」

「やめてくれ……！」

オレがアンタの事、嫌だなんて思うわけない。

なのに、住む世界が違うなんて、あの日の矢田みてえな事を言われて胸にその言葉が深く突き刺さった。

相模を見上げた。相模はもう暴れてもいなくて。

取り押さえてるゲンじいらの腕を振りほどこうともせずに、ただ壁際に体を預けて立ち尽くしてる。

その時のアイツの表情を見て、何でこうなるまでに相模にアイツらの事を言えなかったんだろうって本気で後悔した。

嶋本の言葉はオレと相模の間に急激に大きな溝を作っていった。

「悪いけどなあ、そういう話なら引き取ってくれや嶋本」

アイツと目線が交わらない。

目の前にいる男が遠くに感じる。

どうしようもない喪失感に襲われて、それが凄く怖く感じた。

「ウチのを庇う訳やないけどなあ、事情を何も知らん人間に土足であれこれ首を突っ込まれるんは、見よってワシらもいい気分せんわ」

「ほうかい。やけどこれも職務やからな。帰れ言われても、ハイそうですかっちゅう訳にもいかんで」

嶋本はオレを呼んだ。
それがとても腹立たしく思った。

「君が一言嫌やって意思表示してくれればウチはいつでも動けるんやで」

「オレは……、ここを離れたいなんて思ってない！」

「はあ？」

眉根を寄せてまじまじとオレを見つめる嶋本。絡めた両手の上の顔がズルッと滑り落ちた。

組長さんはホラな、と呟いた。
相模は目を伏せたままだった。

「オレの意思で、コイツの傍に居たいって思ってます」

「……」

「見てみい。アンタ重度の職業病やで、嶋本よう。分かったら早う帰り」

「ウム……」

不思議そうにオレらを見比べ、顎をシャクると、つまらなさそうに一つ大きなため息を吐いた。

「何やろ、何か、府に落ちんのう……。　ウム……、何か引っかかるんよなあ」

男は暫くブツブツ独り言を呟いてた。きっちり両指を絡ませた手でゴツゴツ頭を叩く。
だけど突然吹っ切れたように顔を上げた。

「まあ、ええ。そういう事なら。ちょっと気になっただけなもんで」

言葉とは裏腹に納得し切れてない表情を浮かべながらも「ヨッシャ」とか一人で声を張り上げてる。

「ほんなら、本題入らせてもらいますわ」

「もうええから帰りい」

「そういう訳にはいかんやろ」

嶋本はトレンチコートの胸ポケットをゴソゴソと弄ると、中から透明の白い粉袋を取り出す。それを抓んでオレらに翳した。

「コレ、一体何ですの？」

「あ……」

「知るかい、そんなん」

小さな透明の小袋に入ってる白い粉。それは長岡が血相を変えて掻き集めてたあの薬だ。

思わず小さな声が出た時、その声に被さって組長さんが声を上げた。

それで咄嗟に口を噤んだ。

「まあそう警戒せんと。ワシはこの情報が欲しいだけやし」

「知るかいな」

「コイツのせいでなあ、今ウチはてんてこ舞いなんですわ」

「アンタもしつこいのう」

目を細めて男が笑う。困りましたなあ、なんて呟いて、ソファに深く座り直した。

「常識じゃあ考えられん様な劇薬反応は出るわ、あの包帯のガキらは次々狂ったみたいに死んでいくわ……。それも異常な苦しみ方で、悍(おぞ)ましいったらないですわ」

「そらお気の毒に」

あたかも他人事といった感じで組長さんが返事する。

「冷たいなあ」

もう２０年越しの付き合いやないのと続ける嶋本。

「奇妙なモンで、アイツら全員大事そうにこのブツを隠し持っとってな。取り上げた途端に薬を返せて大騒ぎよ」

「ご苦労さんです」

「ワシらも最初は麻薬やろうと思ったんやけどな、どうも検査薬が異常反応するんやわ。こうな、見たこともないどす黒い色に変わっ

てな……」

「ああ、そうですか」

話を右から左に聞き流す組長さんに、負けじと嶋本は喰らいつく。

「もう、頼んますわ。こっちやって寝耳に水なんやから。彼の電話を逆探知したまではええけども、着いたらどうや。

電話をくれた藤堂君はおらんし、訳の分からん包帯のガキらが倒れてるだけやがな」

嶋本は頭を抱えた。

「しかも拳銃片手に片足がめちゃくちゃに潰されとる死体まで上がっとる。それも死因が不明でな。

脚を潰すまでに至った凶器も見つからんし、唯一の証拠人のガキらが次々と死んでいきよるんやで。あの“薬”の正体も不明やし。もう、こっちは何が何やら、めちゃくちゃでかなわんわ」

「お気の毒やけど、知らんもんは答えようが無いですわな」

いくら投げかけても跳ね返されるばかりで、どうやら嶋本の方も少し諦め腰になってる。

自分が何を言っても組長さんは口を割らないと勘ずいてきたみてえだった。

「頼むわ。友達やろう、な」

「そら、ワシとアンタがお互い犬猿の仲になる前の話ですわ」

「友達……」

二人のやり取りに目を向けてると、イキナリ片腕を掴まれる。

いつの間にか隣には相模が立っててオレの腕を引っ張ってた。

それから強引に持ち上げられ、アイツは「来い」とだけ一言放って出口の方へ歩き出した。

「おい……？」

「話がある」

「若さん、ちいと待ってくれんか」

嶋本の声が背中に掛けられる。

「先月、榊ナツロウが出所しましたわ」

「……」

「榊、って……」

「それと今回の事件と、何や接点があるんと違いますかね？」

相模は何も答えなかった。

そして何も聞いてないという感じで歩き出す。

後ろからあからさまなため息が聞こえたのを最後に、強引に手を引かれて部屋を後にした。

すれ違い　2

「おたくら、ワシらが着く前にあの現場に居合わせとったんと違いますか？」

「証拠も根拠も無いモンを無下に疑うもんやないで嶋本や」

「やけど、おかしいで。助けを求めとった彼が、どうしてお宅の組に……」

扉が閉まると同時に二人の話し声も部屋の中へと消えて行った。

打って変わって静まり返った廊下を相模に手を引かれ歩いた。

向かうのはいつものあの場所。ガラス張りの窓の囲む長い廊下。いくつもの障子に仕切られた黒畳の部屋が横一列に並んでる。

最近気付いた。ここは相模と矢田以外　出入りしてないって事。

ゲンじいでも用のある時以外は遠慮してんのか全く寄り付かない。最初組に入った時、相模に通されたのもここの部屋だった。

この場所は、相模と矢田。つまり組のトップだけが入ることを許された場所なんだ。

相模は最初から、躊躇せずにその場所にオレを入れてくれた。

オレを守る為だけに。

「入れ」

そして、今。

手を引かれ通された所は、アイツの母ちゃんの隠し部屋があるあの部屋だ。

相模は半ば強引に部屋に連れ込むと黒畳の上に即座に押し倒した。

ズシンと身の沈む音がして、同時に男の体が覆いかぶさって来た。

「答えろ」

「相模……！」

抑揚のない低音を響かせて、両手を頭の上にねじ上げる。

体重をかけてオレの体の自由を奪われる。ピシャリと冷たい声が降ってきた。

「何で俺に連絡しなかった!?」

「アンタの連絡先なんて……、知らない」

束ねられた両腕に熱さを伴う痛みが広がる。それはだんだんとジンジン痺れた感覚に変わって行った。

相模の怒りが体に痛みとなって与えられる。

アイツは吐き捨てる様に鼻で笑った後、オレの顔を掴んで持ち上げた。

「そうかよ。なら、質問を変えてやる。俺の番号を知らねえお前が、何であの男の番号は知ってんだよ!?」

「……服に名刺が入ってた」

「テメエは教えられりゃ誰にでも連絡すんのか!?」

「違う!」

「現にそうだろうがよ!!」

腕を束ねる力が強くなる。それはギリギリと音を立てて手首を締め上げていった。

多分指先に血液が溜まってる。手首から上が異様に熱い。
痛みに思わず顔を歪める。アイツは「クソが！！」と一言吐き捨ててオレから離れた。

締め上げられてた両腕を解放されて、体に乗っかってた体重の重みも消える。
ほんの数十秒の出来事なのに、体が小刻みに震えてた。
アイツはその様子を避けるみてえに顔を逸らす。
そのまま暫く、重く長い時間が続いた。

「何で、俺に黙ってた」

「ごめん……」

そう言ってから後悔した。今、この時に出た『ごめん』って言葉は最悪の意味に聞こえちまうって事を。

「謝んのかよ……」

「ごめん……！」

どうしてこの他の言葉を思いつかないんだろう。他に言いたい事がたくさんあるはずなのに、それらは喉に詰まって一向に出てこない。

言って後悔したはずの言葉を繰り返し使ってしまう自分を呪った。

相模は両手で顔を覆った。

その背中は、微かに震えてたんだ。

「相模……」

「そんなに、俺は頼りないか……？」

振り絞った掠れ声が室内に寂しく響いた。

「違うよ、違う……」

「結局俺は、誰も守れねえ……」

「違う！」

オレは、自分の為に相模に傷ついて欲しく無かった。誰よりも強い、最高の男で居て欲しかった。

アイツが報復される姿を思い浮かべるだけで辛くて、いたたまれなくて、胸が痛んで……。

男の中の男の相模龍を、守り通したかった。

なのに、相模を守ったって思ってたのに。
何で相模を傷つけてしまってるんだろう。

どうして今、一番見たくなかった男の姿が、目の前にあるんだろう。

「ごめんな」

たった一言そう呟いて、手で覆った顔を背ける。

相模が泣いてる……。

オレを守れなかった事を、悔やんで。

「ごめんな……」

相模が、泣いてるんだ……。

どうして、こんな事になっちまうんだろう……。

「相模……」

オレも、アンタも、大事な物を守りたいだけなのに、どうしてお互い傷つけあってしまうんだろう。

同じ気持ちなのに……。

「相模……！」

こんな風になりたく無かったのに。

アンタのそんな姿、一番見たくなかったのに。

「泣かないで」

「――バカか、泣くかよ」

顔を背けてる男の背中に抱きついた。
両手を伸ばして体を包み込んで、未だに少し震えてる背中に顔を預けた。

「アンタのせいじゃない。違うよ。オレは――」

「ルイ」

そうやって腰に回した腕を掴んで、男は懐に引き寄せる。

今度はギュッと相模に抱きしめられた。

押し付けられたシャツから、ふんわりと煙草の残り香がする。
ほろ苦い香りは、まるで相模を連想させる。

腕の中で動いて、オレも相模の体に腕を回した。
それからもう一度胸の中に顔を埋めて煙草の香りを嗅いでるうちに、目頭が熱くなってきた。

胸がモヤモヤ痛くて、込み上げる物を抑えられなくて、顔が歪んで涙が溢れた。

「お前が泣いてんじゃねえかよ」

少し上からちょっと掠れたハスキーボイスが聞こえる。
あったかい手が何度も頭を撫でてくれた。
そうしたらもっと悲しくなって、余計に涙が出てきた。
時々しゃくりながら声を押し殺して泣いた。
何でオレが泣いてんだろうって、自分でもそう思った。

「ルイ……」

暫く抱き合って、体がポカポカになって、全身が相模のほろ苦い香りで包まれてく。
そうして悲しいモヤモヤも涙も落ち着いてきた頃、ゆっくりとした口調の男の声が耳元に響く。

「暫く、離れるか」

「何で……？」

思ってもみなかった言葉に咄嗟に顔を上げた。視線が絡まると相模は目を細めてオレを見つめ直した。

「その方が良いだろ」

「嫌だ――」

アイツの目は穏やかで、迷いも戸惑いもそこには映って無かった。

相模と離れる――。

「そんなの嫌だ！」

それがとても怖く感じた。迷いのない目を向けられて、もしかしてこのまま相模はオレを突き放すんじゃないかって。

不安が一気に恐怖となって押し寄せた。

「俺が狙われてんなら、一緒に居ない方が良いだろ」

「嫌だ！」

「バカか」

「離れたくない……」

相模にしがみついた。嫌だ、嫌だって駄々を捏ねて。

小っちゃな子供みてえに声を上げた。

「俺だって、ずっとお前とこうして居たいさ」

「だったら――」

「なら、いっその事このまま一生俺とここで暮らすか？　お前となら、俺は死ぬまでここに閉じ込められても構わねえ」

「……」

何で、わざと返答できねえような事を吹っかけるんだよ。

オレが返答出来ない事を分かってて。諦めろと遠まわしに言われてる気がした。

押し黙ったオレを見て、自嘲気味に笑った。

「分かってても直接フラれると辛いぜ？」

「バカ野郎！」

涙混じりに叫ぶオレの口が塞がれる。

暴れる両手を捕まえて、指を絡めて。熱い体を押し付けて、息継ぎする時間も与えられない位に何度も唇を重ねられた。

「お前が好きだ」

「バカ野郎……！」

「何されても、好きで仕方ねえよ」

次第に指が腕から肩へ上がってくる。
何度か首筋を撫でて、最後は顔を両手で包み込まれた。

「じゃあ、何で突き放すんだよ？」

また涙が溢れた。

幾筋も頬を伝って、それがキスの合間に入り込んで、アイツの口付けがしょっぱくなる。

腕を伸ばしてオレもアイツの頬に手を充てた。

間近に見える切れ長の目も涙で霞んでしまう。

「アンタの傍に居たい……」

黒畳の上に押し倒される。
今度は相模の首に腕を絡ませて抱きついた。

オレも相模も、夢中でお互いを貪った。

「小悪魔め」

霞んだ向こうに見える瞳は、オレを捉えると優しく緩んだ。
頬を撫でて呟いて、相模はまたオレにキスをした。

アイツの体を離したくない。

手放すと、すぐにでも遠くへ行っちまいそうで……。

相模がどこへも行かないように強く抱きしめた。

アイツは重ねてた唇を離して、オレを無言で抱き上げる。

「体、痛くねえかよ？」

「……うん」

「そうか」と一言呟いて、掛け軸に隠された重い扉を開けた。

その間も、抱き上げられてる腕から相模の体温を感じる。

ほろ苦い男の香りも。

顔を傾けた耳の傍で聞こえる鼓動も、そのすべてから相模を感じた。

「相模」

薄暗い部屋に明かりが点けられる。

オレは純白のベットの上に寝かされた。

相模の、母ちゃんのベットだ。

「さっきの、嘘だよな？」

「……」

オレの問いには何にも答えてくれない。

アイツは無言でスーツの上着を脱ぎながらベットに近付く。

静かに腰を下ろすと、スプリングが小さく軋んだ。

服を脱ぎ捨て、今度は黒いシャツのボタンに手を掛ける。

「答えてよ……」

見上げてる顔が近付いてきて、首筋を優しく舐めた。

こそばゆい感覚と体が火照る様な快感が混ざって一つになる。

そこからどんどん熱が溜まっていく。

相模は反応を確かめるようにそれを繰り返した。

いつの間にかシャツも脱ぎ捨てられてて、男の逞しい体が露わになってた。

オレの理想を全部持ってる体だ。

背中に腕を回して抱きついた。

服の上から触るよりももっと暖かくて、ゴツゴツした骨格も全部が掌から伝わって来る。

そのまま背中を這わせると、ざらついた“タツ”の感触が残るんだ。

「答えて、相模」

「……」

アイツはゆっくりとした手つきでオレの服を捲りあげる。

サラシの上から手を這わせて、何度か胸を撫でた後。今度は手の甲で腹を擽られた。

「相模……！」

「黙ってな」

唇を塞いで、声が閉じ込められる。

それからもアイツは体の至る所を撫でて、触って。まるで思い出にでも刻むみたいに体中に手を這わせていくんだ。

少しずつ服も脱がされる。

そうして相模はオレから衣服を剥ぎ取っていった。

アンタにされるこういう事、もう嫌じゃないよ。

キスだって、相模が与える物すべてがちゃんと心に残ってるんだ。

「……っ」

今もそうだよ。

アンタのもたらす全部が、少しずつオレに教えてくれたんだ。
これが人を好きになる事だって。

何にも知らなかった事をアンタが全部教えてくれた。
その事にやっと気付いたのに。
相模を好きだって自覚した途端に離れていかないでよ……。

「何処に行くのもずっと一緒なんじゃねえのかよ、相模……っ」

開いた口は、また相模に塞がれた。
声がアイツの口の中に消えて行って、部屋の中には服の擦れる音だけが響いてる。

ズボンのホックを外して、腰から一気に引き下ろされる。
最後に体に巻き付いたサラシも解かれる。
口の中に舌が入ってくる。歯型を辿って、その中にあるオレの舌と絡まる。アイツの舌はオレの蜜を吸い上げる。

体温の高めの熱い攻めに体中が火照って反応する。

オレはもう何も身に着けてなくて、体にあるのはダイヤのネックレスだけ。

一糸纏わぬ姿にさせられた。口内を攻め続けてたキスが離されて、両手を頭の上で束ねられる。

裸になった姿を、アイツはジッと見つめた。

「いつからだろうな」

そしてポツリと呟いた。

目が合うと、やっぱり目を細めてオレを見た。とても寂しげな目で。

「いつから俺は、この体に骨抜きになっちまったんだか」

「相模……」

「こんな事しちまうと、離れられそうに無くて怖えよ」

「離さないでよ」

バカ、って鼻を抓まれた。
顔を振って解こうとしてる様子を見て微笑んでる。

「俺と離れてる間、真剣に考えてろよ」

「何がだよ」

「俺にするか、リョウを選ぶか」

「まだ、言ってんのかよ」

「ルイ……」

急に真剣な顔をして見下ろされた。

背中に照明を受けて覆いかぶさる。そうして頭上に影を落とす男が、今とても綺麗に見える。

間近に見える、薄く開けた唇がゆっくり動いた。

すれ違い　3　（性描写有り）

「マジで、これで暫くサヨナラだ」

「嫌だ……」

「お前をこれ以上危険に晒せねえ」

「嫌だよ……」

「可愛い事、言ってんじゃねえよ」

相模が口にしたサヨナラって言葉は凄く寂しい響きだった。

お別れみたいだと思った。

本当に相模はオレを突き放すんだって　ようやく自覚した。

「多分どっかでいつも見てるぜ」

「ストーカーかよ……」

「今頃気付いたか」

そう言って笑いかけた。

その笑顔までもう見れないって思うと悲しくて仕方なくて。

今オレに触れてる相模の全部がこの瞬間から思い出に変わって行ってしまうのが耐えられない。

「ごめんな……。こうするしか、お前を守る方法が思いつかねえんだ」

「そんな事しなくていい！」

「分かれ」

「分かるかよ！」

相模が首元にキスを始めた。

こんな時に、甘い余韻を与える行為がとても残酷だと思う。

いつもはあったかくて愛情を感じる物が全部悲しみに消えていく。

「もう、やめて……」

「泣かないでくれ」

「いやだ……。もう嫌――！」

「……やめねえよ。またいつお前を抱けるか分かんねえんだ」

「辛いよ、相模――」

優しいキスが首筋を攻めてる。アイツのキスが優しい程、心にはどんどん傷跡が残される。

刃物に切り付けられた様な深い傷は、癒えるどころか新しい痛みを刻んで行ってる。

それはもう、簡単には消えそうにない。

「ルイ――」

泣き叫ぶオレに、相模がキスを止める。

「愛してる」

「何で、今……、そんな事言うんだよ……」

「お前みてえな女、他に居ねえよ」

潤んだ瞳を細めて、ジッと見つめられる。

こんな時に、アイツはまたオレに初めてを与えた。

初めて、愛してるって言われた。

「どうしようもなく惚れちまってる女を、今抱きたくて仕方ねえ」

束ねてる手を取り、指を絡める。

「抱かれてくれ」

「バカ……、バカ……！」

「もう、止めねえからな」

相模は再び体に顔を埋めた。

「嫌だよ相模……」

サヨナラなんて言った後に、こんな事してほしく無かった。

肌に落とされたキスは、これまでの　どの口付けよりも優しかった。

アイツは体の細部まで記憶するように、それを何度も繰り返した。

オレの手を握って、そこに指を絡める。

温かくて大きな手に包まれて、その体温に暖められる程、悲しくなって涙が溢れた。

「やめて……」

アイツはオレの手にも唇を寄せた。

指先から甘い音がして、それは掌全体に広がって、最後に愛おしそうに頬を寄せた。

体の全てを相模のキスが這い回った。

脚を持ち上げて、爪先から舌を使って舐められた。

音を立てて吸い上げて、また舌を這わせて。忘れられない余韻をどこまでも与えられた。

アイツの指が、胸に充てられた。

小ぶりな膨らみを両手で揉みしだかれると、徐々に体が反応し始める。

先端の突起を親指で弧を描くように擦られた。

「……っ」

「その顔、好きだぜ」

片方の突起が咥えられる。口の中で転がされて、男の思い通りに体中がそれに反応した。

キュッと痛みと快感の混じったものが押し寄せた。

「ああん……っ」

それをまた離されて、舌先の柔い愛撫が始まる。

もう片方の胸も爪を立てて弄られた。

また吸い上げて、ソコを甘噛みされる。

涙混じりの荒い吐息が幾つも出て行っては消えた。

一つ一つ、反応を確かめる様に愛撫される。

赤く染まった乳首がまた相模の口の中に消えて行く。

アイツの舌遣いに体は痙攣を繰り返して悦んだ。

「いい子だ」

こんな時でも、身体は恨めしい位に素直で。

悲しかっただけの心の中に、ほんの一瞬のふくよかな愛情が注ぎ込まれてしまうんだ。

そうして相模の優しさを感じれば感じる程、行為が終わった後には深い傷が残ってしまうだけなのに。

なのに、涙はいつの間にか溜息に変わって行って、嗚咽の代わりに相模に感じる喘ぎ声が出てしまう。

「そうだ。それでいい……」

胸から下腹部へ、手の甲が滑り降りて来た。

一度脇腹を擽られ、背中が弓なりに反った。

唇は音を上げて真っ赤な乳首を甘噛みして、また別の快感が与えられる。

その手が太腿の内側を撫で始めた。

くすぐったいのがだんだんウズウズした気持ちに変わって行く。

それから5本の指の腹が膝の裏から脚の付け根の方に少しずつ移動し始めた。相模は反応を見ながら、反対側の乳首を口に含んだ。

「あっ、あぁ…っ！？」

指がゆっくり這い上がって、それに合わせて胸の先端を強く吸い上げられた。

焦らす指使いと強く攻める舌の愛撫。その両方が一度に与えられて、自分の何処が感じてるのか分かんなくなる。

頭が麻痺して、どうしようもなくゾクゾクした。

太腿を這い回る手は、だんだんと中心部に隠れる秘部へと近づいて行った。

「待って……」

解放されて自由になった手で相模の腕を引き留めた。

こんなに乱された今でも、心に引っ掛かりを持ったままでこれ以上の行為に及ぶ事はどうしても抵抗があった。

ううん、それよりも、相模を感じるのが怖い。

本当に心のバランスがおかしくなっちまいそうで……。

もっともっと近くに男の愛情を味わってしまったら、オレはもう、相模の余韻から抜け出せそうにない気がして。

「相模、これ以上は、やっぱりダメ……」

それでも胸の突起に甘い刺激を与え続ける男に、今度は両手でアイツの腕を抑え込んで懇願した。

相模は何にも言わなかった。

ただ、動きを止めようとする両腕を掴んで、片手で束ね上げた。
名前を呼ぼうとすると唇を塞がれた。

「んん……っ」

それからすぐにもう一本の腕が降りてきて、抵抗してた秘部に手が充てられる。
アイツの手は器用に動いて、そこに隠された蕾を探り、指の先端で刺激し始めた。
最初は前後にゆっくり動いて、それから少し力を込めてこねくり回された。
思わず男の口内にため息が漏れる。
相模の唇は貪る様に動く。

次第にクチュクチュと蕩ける音が上がって、指の感触がヌルヌルし始める。
そうするともっと気持ち良くなって、体が熱く火照りだす。

愛撫する指が二本に増やされ、よりいっそう強く擦られる。

いつも相模を受け入れるソコからたくさんの愛液が溢れだして来てるのが分かった。

「変態だな……」

「ハアッ…ハア…ッ」

突然合わさってた唇を離された。

目を細めて、相模の指に喘ぎ乱れてる顔を覗き込まれる。

アイツに弄くられてるその場所はもうグショグショで、もっともっと蕩ける感覚になってた。

「この顔を見るとゾクゾクしちまう」

「相模……ッ」

「気持ちイイのに苦しそうな顔が溜まんねえ……」

そう言われて、オレを見てる目線を感じるだけで、愛撫されてる部

分が熱くなった。

どうしてか、いつもよりも数倍感じた。いつまでも何かが漏れ出してる感じで、快感はどんどん大きくなっていって、もう我慢ができない。

両手を束ねられて身動きができない中、相模の指使いはもっと早く動いていって、感度も急速に追い上げられていった。

「待って、待って、相模！　ダメ……ッ、ああっ！」

気持ちイイのが大きくなる。

これ以上無理って思っても、もっともっと強い快感になって襲って来る。

「もっと、良くしてやるよ」

一度手を離すと、今度は爪を立てて抓まれた。

それから指の腹と爪とで交互に刺激しながら左右に捻り始めた。

「嫌、嫌！　相模！　待って…！それ、嫌だ、ああぁぁ！！」

「マジで変態だな、俺は……」

この瞬間だけは、全てが飛んでた。

何もかも忘れて、迫り狂って来る快感に悶えて叫び続けた。

頭が真っ白のまま、相模の腕を掴んで泣いた。

何度もイっちゃうよぉ！！て叫んで、動物みたいな声を上げて、最高の絶頂を味わった。

アイツの手がどんな風に動いてたのかも分からない。

弄られ続けた場所からは絶え間なくトロトロの蜜が溢れ出してて、絶頂を迎える度に、体がムラムラとアイツを求めだしてるのが分かった。

気付いたら相模も服を脱ぎ払ってて、オレの脚を大きく割り開いてた。

いつもそれ以上の快感を与える相模の部分は、早くもビクビクって

小刻みに震えてて、それを見て、相模も凄く興奮してるんだって思った。

それだけじゃなくて、先端から透明の液体が溢れてる。

オレみたいに、男も興奮したらこんなになるんだ……。

「こんなの初めてだ」

珍しそうに、アイツは自分のモノを見た。

そして溢れ出る体液をそのままに、それを充てがってゆっくり侵入を始めた。

とても大きく張りつめてて、少し入っただけで周りが痛くなった。

相模は先端まで入れて、それを抜き出し、またググっと押し入れて来た。

今度は中くらいまで射れられ、また抜き出す。

それを何度か繰り返していくうちに、とうとうオレの中に根元まで全てが射れられた。

相模の体が震えて、切なげに溜息が出される。

最奥を突かれると一気に気持ち良くなって声が出た。

もう、相模が欲しくて欲しくて、思い切り突き上げて欲しかった。

先端ギリギリまで引き抜いて、また突き上げられる。

相模が唸り声を上げた。

両腿を開いてベットに押さえつけ、体重を掛けて抜き挿しを繰り返した。

「あっ、あっ、ああん…っ、ハア、気持ちイイよぉ！」

オレの中を突き上げる度、頭がおかしくなる位の快感が押し寄せる。

攻め立てる男の腕に必死でしがみついた。

撃ち込まれると中から水を掻き回す様な音が聴こえた。

最初はゆっくりだったのがだんだん激しくなって、肌と肌が音を立

てる位強く突き上げられる。

気持ちイイのもそれに合わせて強くなって行って、とうとう身体が痙攣し始めた。

「ああん…ッ、ぁああっ、アン、ン、ダメ、ダメ…！」

「……ッは、スゲえ……、イイぜ」

突き上げられて暫くして、あっという間に絶頂が来た。

その快感はあまりにも強くて、激しくて、気持ち良すぎる。

絶頂が来ると、身体は更に燃え上がって、更に強い快感を求めようと相模を強く咥え込んだ。

「ク、ソ……ッ」

オレを激しく攻める相模の身体も震えてた。

強く中まで繋がった時、男の掠れた喘ぎ声が漏れる。

どこか切なそうな表情を浮かべて、アイツも快感に酔いしれてる。

咥え込んでる男のモノが中でグンと大きくなった。

オレのソコは、自分でも抑えの効かない位　愛液が溢れ出してて、全部がもう我慢の限界だった。

相模は泣きそうな顔をしてて、荒々しく息継ぎしながら中を思い切り突き上げた。

最奥がジンジン波打って、撃ち込まれた瞬間強烈な快感の波が襲ってきた。

直ぐに引き抜かれて再び強く挿しれられる。体と一緒に小さな胸も振動で震えた。

アイツのが深い所を突くと、もっと気持ち良くなって悶えた。

太腿を押さえてた手を離して今度は腰を掴んで、一気にガンガンと攻め立てられた。

波のような快感が幾つも来て、どんどん気持ち良くなる。

出し入れがもっと強く、早くなった。

絶頂が終わらなくなって、それからはもう、ずっとずっとイキ続けた。

部屋中にオレらの喘ぎ声が響いてて、いくつもの卑猥な音が更に興

奮させた。

この行為独特の匂いが充満してる。あられもない姿を晒して相模に抱きついて、何度も気持ちイイよ!!って叫んでた。

そのうち中のモノが一段と張りつめる。そうすると抜き挿しが今以上に感じて、本気で泣きそうになった。

繋がってる部分から腰の方まで、自分の中から流れ出た体液でグショグショだった。

アイツはギリギリまで引き抜いて目いっぱい撃ちつけ始めた。

それは更に強く、早くなっていく。今度こそ気持ちよすぎて涙がでる。

頭が真っ白になったと同時に目の前で振り絞った男の声が聞こえて、オレの中に埋まってたモノを引き抜いた。

そこの先端から、今度は真っ白い液体が溢れて来て、勢いよく腹の上に出された。

それはとてもトロトロしてて、凄く温かかった。

「悪い……」

「ハア…、ハア…ッ」

アイツは腹に滴るそれを見て、「我慢できなかった」と呟いた。

すれ違い　３　（性描写有り）（後書き）

今回のアップは大量投稿になってしまいスミマセン（・―・；）
これで更新分全部ＵＰです。
また、ただいまＨＰの方ではキリ番（パスワード付き小説）の激甘！！！！！（ルイ×龍）を執筆中です。
コチラはほぼ全部が性描写になってしまいますが（―｜―；）アンケートにお答え頂きますとパスワードが取得できるようになっています。気が向いた時にどうぞお越し下さいませ（＃＾・＾＃）※アンケートは４月で終了しましたｍ（＿＿）ｍ訪問者様１０００人ごとに書き込みできるキリ番にのみ、これからパスワードを公開させて頂きます。１０００人ごとに、自動的にキリ番画面が出るようになっています。

相模が好き　1

暫く荒い息を繰り返した。

これまでで一番激しくて、一番感じた。

そして、相模のあんな顔を見たのも初めてだ。

腹にかかってた白濁の液体をティッシュで拭き取ってから、男の腕の中に抱き寄せられた。

アイツの額には汗が滲んでて、そこに前髪が掛かってる。

その目はまだ潤んでて、少しトロンとしてた。

顔を覗き込んでるとキスされる。オレを腕の中に閉じ込めて、痛い位に抱きしめられた。

アイツの心臓がドクドクと早いスピードで波打ってるのが聞こえる。

今、凄く複雑な気持ちだった。

悲しいはずなのに、死ぬほど絡み合って蕩けて出た愛液に代わって、心が色んな感情で一杯に満たされてる。

今のこの感情を幸せと現すのか。それとも、二人揃って貪り尽くし

た余韻の果ての物なのか。

オレの中は未だに熱く疼いていて、男を受け入れた余韻がまだはっきりと中に残ってるんだ。

気怠くなった体を動かし、オレも相模の体に腕を回した。

手を這わせるとザラついた背中の刺青にあたる。胸板に顔を埋める。汗の混じった男の香りもした。

つい数分前までの情事を思い出す。オレらは互いに愛を確かめ合ってるみたいだった。抱き合って繋がった部分から、言葉では語り尽くせない思いが溢れてた。

体を重ねるって事がこんなにもお互いの気持ちを引き寄せる力があるなんて。

「大人しいな」

腕の中で身を埋める。その顔を覗き込まれた。

「相模……」

きっと相模も同じだと思う。

相模もオレの中で、溢れ出してるオレの思いを感じてたんだ。

体を重ねるっていうのはそういう事。

お互い好きじゃないと、この感情は生まれない。

そしてオレもまた、その事を強く自覚した。

やっぱり相模が好きだ。

大好きだ。

頬を寄せた胸元からは、少しずつ規則正しいリズムに戻りつつある心拍音が聴こえてくる。

アイツは暫く頭を撫でた後、体を動かして腕枕をしてくれた。ちょっと硬い、筋肉質な腕の上に顔を寄せた。

「キスしていいか？」

「うん……」

返事を待たずして、唇が重ねられた。瞬時に熱を帯びた柔らかな感触が伝わってくる。舌を差し入れて吸い上げられると、それはチュっと音を立てて唇を濡らした。

やがてお互いの舌と絡み合うに連れて口付けは濃厚になって行く。舌を出して、懸命に受け入れた。

舌先で相模のそれと絡み合う度に無性にゾクゾクして感じて来てしまった。腕枕をしたまま体制を変えた男が覆いかぶさる。

熱い体に閉じ込められて、オレもまた腕を絡ませお互いを貪り始める。

太腿に熱い塊を感じた。下を見るとアイツの男の部分がまた激しくビクンビクンと波打って肌に密着してた。無性にソレに触りたくなった。

そっと腕を伸ばして波打つ男の証に触れた。相模の体がビクンと震える。

矢田に教えられた時みたいに下の辺りをキュっと握って、上下に扱いてみた。下から上に手を動かす度にソレは生き物みてえにドクドク動く。そのうち相模の溜息が口の中に漏れ始めた。

アイツはオレの頬を何度も撫でて、更に深く唇を重ね始める。

目がトロンとしてて気持ち良さそうだった。

暫くすると手先がヌルヌルしてくる。先端から、また透明の体液が漏れ出していた。それは上下に手を動かす度溢れ出てきた。

その様子を見てるだけでオレの中はもうウズウズしてて、下半身から変な興奮感が襲ってきた。

おもむろに動かす手を掴んで止められる。相模は腕枕をはずして起き上がる。

それからオレの両腿を持ち上げて引き寄せた。

目と目が合う。疼き始めた部分に熱い塊が充てがわれる。それはほんの時間も待たずして、すぐさま中を貫いて来た。

今度は入って来ると同時に内壁を強く突き上げられる。

突然男を受け入れた事で、痛みと最奥からはジワリと快感が蝕む。

その感触が消える間もなく、それをギリギリまで引き抜かれる。体

が次の快感を求めて無性に熱くなる。

オレの期待通りに、相模は引き抜いた物をまた強く撃ち込んできた。

「はあん…ッ」

今度は痛みは無く、ヌルヌル滑るオレの中を一突きにされる。体の奥が待ち構えてた快感に酔いしれて蜜を溢れ出す。

火花が飛ぶように一瞬目の前が真っ白になった。

持ち上げてた脚を顔の付近まで押し上げ、開かれる。オムツを代える赤ちゃんみてえに全部を晒されて、自分からも繋がってる部分が見えた。

オレの中から相模の熱い棒が抜き出される。愛液で光ってる。また下半身が変に反応する。

ギラギラに濡れて張りつめたソレは再び入り口を刺激して一気に押し入って来る。

アイツの太く膨らんだ欲望がクチュクチュ音を立てて根元まで入った。その全部を受け入れた途端、また最高に甘い余韻に狂わされた。

「どうしちまったんだか、俺は……」

相模が声を震わせる。額からは汗が滲んでポタリと垂れる。クラクラする位に色気を持った目で見つめられる。

潤んだ瞳は今にも泣きそうだった。

体を上下させてオレの中に自身を埋めると、切なげに溜息が出される。そのあと息を呑んでから、更に強く腰を動かす。

オレの中は相模で一杯になってて、回りはもう愛液がグッショリ濡らしてる。そこから男のモノが抜いては強く撃ちつけられる。

肌と肌のぶつかる音と、水を掻き混ぜる卑猥な音が響く。快感は一気に追い上げられ行って、あっという間に絶頂になる。溜まらない。気持ちいい…。早くもイキそうになった。

「ハア……、はあん…！　ああん、い、イク！　あぁぁん！　相模……、気持ちイイよお……！」

「クソ――！　どうしちまったんだよ……ッ」

相模も余程気持ちがいいのか、攻める音に混じって男の掠れ声も聞こえ始める。

オレも相模も狂った様に声を上げてお互いを味わった。

どんなに声を上げようが、もう構わない。今、溢れ出してる感情をぶつけたい。もっともっと相模と気持ちを共有したい。

もっと繋がっていたい。愛されたい。激しい行為は、男の持つ独占欲の現れだとも思った。

何もかも解き放って、ただ相模の体を貪った。

体に合わせて揺れるシーツを掴んで喘いだ。

「さっきから……、もうイキそうだ――――」

そう言いながら勢いよく腰を撃ちつけた。

男の体は最早オレにとっては麻薬みてえだと思った。甘い毒が次々と入れられる。下半身はトロトロに蕩けてる。ロレツさえ上手く回らない。

だけど求めてしまう。絶頂を味わうと幸せで、その快感をずっと味わっていたくなった。

もっと欲しい。もっともっと。アンタの欲望を、オレに頂戴――。

「悪い……、もう無理だ…ッ」

ああ……。オレはなんて、淫乱なんだろう。

悪い奴だ。相模とこんな事して。恥ずかしがるどころか、体はとめどなく涎を垂らして相模を咥え込んでるんだから。

１６歳になった途端、こんな事を体験するなんて思ってもみなかった。こんなに男の体を求める程、エロい事が大好きになっちまうなんて……。

親父にも母ちゃんにも絶対言えない。

東京に単身で進学して武道を極めるどころか、そこで世話人を任された頭取の男に身も心も女にさせられちまってるなんて。

この男の体が欲しくて、好きで好きで仕方ないなんて。

まだ若干１６歳で。胸もまだ小さいのに。相模と比べたら、オレの体なんてまだまだ子供みてえだ。

「ルイ――――！」

なのに、相模とこんな事しちゃってるんだ。恥ずかしい声まで出して。こんなに体をグショグショにして。

完全に開発されてしまった。身も心も完全に――。

「あ…っ、あぁぁん！　相模、もっと、もっと欲しいよぉぉ！！」

「悪い……ッ」

片足を持って引き寄せる。体の向きが斜めになった。そのまま思い切り突かれた。

違う角度から攻められると、感じ方も変わった。とても気持ち良かった。体が新しい快感を覚えた。

それは何度かオレの頭を真っ白にさせてから引き抜かれる。
引き抜いた途端、勢いよく白濁色の液体が飛び出てきた。

今度はその体液をベット脇の床に飛ばしながら、男は掠れた喘ぎ声を上げた。

それはさっきよりも早い相模の絶頂だった。

「――情けねえ。　マジでどうしちまったんだか……」

二回目で最初よりも早く絶頂を迎えた事は、どうやら相模の男のプライドを傷つけたようだ。

相模は一言「悪い」と呟いて、オレの首元に腕を絡ませた。

アイツのが出て行った後の余韻を感じながら、もう一回、してくれないかなと心の中で思った。

世間一般では、こういう事を“中毒”と呼ぶんだろうか。

だけど、そんなオレの淡い期待に反して相模はフウ、と溜息を吐くとゴロンと横になる。

そして身体を後ろから引き寄せられた。両腕を絡ませ、筋肉質な男の体の中に閉じ込められる。

「お前にイカされた気分だ」

「……」

そう言って頬を寄せて、耳元に溜息を吹きかけた。

そうすると、体がまた勝手に熱くなり始める。

喘ぎ途中で事が終わったせいで、オレの中はまだモヤモヤと疼く物があったんだ。

「相模、もう一回したい」

心の声を言葉に表してみた。

「無理だ……」

珍しく男の弱音が返って来た。

「したい相模。　オレ、まだムラムラするよ……」

言ってるうちに下腹部あたりがモジモジしてきて、腰をくねらせた。

「お前、おねだりなんて何処で覚えたんだよ」

そう呟く相模の声はどこか嬉しさが入り混じってる。

でもやっぱり「今度な」って頭を撫でられるだけに終わった。

残念な気持ちと同時に、また今度があるんだって思うと、何だか凄くホッとした。

クルンと反対を向き直って相模と対面する。アイツはまだ色気付いた顔をしてる。予想に反して満たされた男の顔が覗く。

オレを見ると「悪いな」ってまた呟いて、優しく頬を緩ませた。

言い知れない愛しさが込み上げる。

「また今度、抱いてくれんのかよ？」

確認するように言葉を返した。

「当たり前だろうが」

それは即答で返って来た。

「そう……」

そうか。良かった。

これで終わりじゃないんだ。

また、相模とこういう事できるんだ……。

「今日はやられちまった。完全に、腰砕けだな俺は…」

「相模。オレやっぱりムラムラする」

「頑張れ」

「頑張って……」

「俺を骨抜きにしたお前が悪い」

「何だよそれ……」

アイツは少し考えて、額に唇を寄せた。汗ばんで湿気を持った前髪を掻き上げて、そっとキスが落とされる。

「お前は……、マジで最高に小悪魔なオンナだぜ」

「相模……」

良く分かんねえけど、今のオレには額のキスがもどかしい。

顔を動かして、アイツの唇を追った。自分から口付けようと動く。

相模は何故か逃げた。

「今は駄目だ……」

「何で」

これ以上動けない様に顔を抑えられる。

色っぽい顔した悪魔は頬を紅潮させてたじろいでた。

「また、お前の罠にハマっちまうだろ」

「何の事だよ」

「いいから。今は駄目だぜ、ルイ」

「……」

腑に落ちない。何で駄目なのか。オレはこんなにも興奮してるのに。体が無理ならせめてキスだけでもしたいのに。

悶々とするオレに服を着せてから相模に抱き寄せられた。アイツの方は裸なのに。何でオレだけ……。

それを察してか、「拗ねんなよ」と声が掛かる。頭をふんわり撫でられた。

アイツはやっぱりキスはして来なくて、代わりにオレに頬ずりしてから背中を摩り始める。

そうして体を無理やり鎮められた。

それが最初は腹が立ってたけど、次第に背中を摩る手の動きが心地よくて。ポンポンと振動を与えられると、子供の頃母ちゃんに寝かしつけられてた時の事を思い出して懐かしくなった。

落ち着き始めると体に倦怠感を覚える。ふああ…、と欠伸も出てきた。

「相模……。不思議だ」

「どうした？」

オレの頭を起こして、また腕枕をされる。

熱い胸板に顔を寄せる。汗でしっとりと濡れた体から男の熱気が滲み出てた。

「さっきまであんなに悲しかったのに――」

「そうか」

「うん……」

腕を回して抱きついた。オレの腕は、自分の思ってた以上に重く感じた。

背中を撫で続ける手が余りにも心地よくて。気が付いたら何度か瞼が下がってる。一所懸命に瞬きを繰り返して目を開いた。

「アンタと離れたくなかった……」

「そうか」

「そうだよ……」

相模の顔はまだほんのり赤い。オレの言葉を聞いて嬉しそうに笑う。素直な男。

「アンタが本当に離れちまうと思ったよ、オレ」

「……さあな」

男の腕の中で、オレはどんどん安心感を与えられる。

相模に抱かれてから、オレの中の悲しみはまるで何処かに吸い取られたみてえに軽くなってた。

それまでちりばめられてた不安と喪失感が空気の様にどこかに消えた。

「本当に、サヨナラされると思ったんだ……」

「……」

背中を摩る手の動きがだんだんとゆっくりになる。それにつられて眠気が一気に押し寄せた。

今度こそ瞼が重くなる。胸元に頬を寄せて、行かないよね?と尋ねた。アイツは一言「そうだな」とだけ呟いて、同じリズムで背中を摩り続ける。

「少し眠りな」

「ん……」

最後の方は、声を出したかも、何を話してたかも覚えてない。

一定になってきた呼吸音に誘われて声が小さく消えていく。凄く心地よくて、体が重くなる。

アイツに抱きしめられて眠った。

相模の腕枕も何だか久しぶりだ。

真っ暗になって行く思考の中でもアイツの背中を摩る感触が続いてて、それからは本当に安心して眠った。

頭の中はユラユラ揺れてた。さっきまであった出来事が走馬灯のように流れてく。

まるで映画のスクリーン画面を見てるみたい。頭の中にアイツの映像が浮かぶ。

縋り付いて泣き腫らした顔のオレがいて、相模に抱かれて悶えてる。

それから次第に手足が絡み合って、最後は相模を感じてオンナの泣き声を上げてた。

アイツもとても気持ち良さそうで。抱き合って、キスして。そしてまた体を重ねた。

ふと、それまであった相模の姿が消える。

脳裏に映像で映し出されていた相模の姿が突然消えた。

「相模……」

瞬時に意識が戻る。不安に駆られて腕を伸ばす。

重たい瞼を懸命に開けて、その姿を探した。

「相模……！」

空を切る手を、誰かの暖かい手が包んだ。

「どうしたよ？」

「あ……」

薄目を開けた先に、ジッとこっちを見つめる男の顔が見えた。

オレはアイツの腕枕の中で。変な夢に魘されて伸ばした手を握って笑いかけてた。

相模は居た。オレの隣に。

「怖い夢でも見たか？」

「うん」

伸ばされた手を布団の中に戻して、腹の上をポンポンと摩られる。

子供の頃の母ちゃんみてえに。緩く伝わる振動はとても安心感があった。

「もう少し寝てな」

「うん……」

胸元に手を置いた。あったかい熱が伝わる。鼓動にも似た揺れとアイツの体温に包まれてるうちにまた睡魔がやってきた。

汗混じりの相模の匂いもする。うつらうつらしてきて、また夢の中に呑み込まれた。

オレの回りには色んなあったかいものがいっぱいあって、それらはフワフワの毛布みてえに体を優しく包んでくれる。

それは相模の優しさだったり、すぐそこに感じる腕枕の安心感だったり。

親父でも母ちゃんでもなく、また違った安らぎを与えてくれる。

眠ってる間も、意識のどこかで感じてるんだ。

このぬくもりが頭や背中を優しく撫でてくれてる。

すぐそこに、男の気配がある。

モゾモゾ動くと布団が直される。額に浮かんだ汗を拭って、また抱きしめられる。乱れて腰までめくれた服が元に戻される。

「相模……」

「涎垂れてるぜ」

そう言って頬をそっと拭われた。

その手は頬をサワサワと撫でた後、また頭を撫で始める。

こういうのを、猫可愛がりって言うんだろうか。ううん。それよりも甘やかされすぎだ。甘すぎだよ相模は。

オレはそのうち相模の前では我がままの聞かん坊になっちまいそうだ。

「相模……」

手を伸ばすと男の肌に触れる。浅い眠りと深い眠りとが何度も交互にやってきて、こうして何度か意識を戻しかけては相模の温もりを探した。

その度にアイツの腕はオレに注がれて、それでまた安心するんだ。

それからもウトウトを何度か繰り返した。体の倦怠感も収まってき

た頃。ようやく頭がスッキリして来て目が覚める。

「よう、寝坊スケ」

相模が好き　2

開口一番にアイツの決まり文句が聞こえてきた。

相変わらずオレを腕枕の中に抱きとめて、片肘をついた相模がこっちを見ていた。

アイツの顔はいつもの切れ長の男前だ。ボーっとしてると頬を擽られる。鼻も抓まれた。

「お前、涎垂らしてイビキかいてたぜ」

「う、うるへえ」

鼻に付いた指を振り払おうと顔をしかめるオレを見て、目を細めて笑ってる。

「……風呂入って出かけるか」

「何処に？」

「さあな」

布団の中でウンショと伸びをした。
伸びしてる最中に抱き上げられる。腹を擽られて笑いが噴き出た。

「やめろよ」って言いつつも顔は笑ってて、抱き上げる男の首元にしがみ付いた。
寝乱れた格好で抱えられて部屋を後にする。相模の母ちゃんの部屋はオレらの情事の痕跡が端々に残ってる。
それを見て、「部屋、汚しちゃったね」と呟く。アイツは　ああ、と簡単に返事を返した。

「お前ならいいさ」
「でも、アンタの思い出の部屋だろ」
「以前まではな」
「うん？」
「まあ、いいだろ」
言葉を濁す相模の表情は何を考えてるか窺(うかが)い知れない。

そのまま風呂場へ連れて行かれると、アイツは凄く丁寧に体を洗ってくれた。

ボディソープを手に取り、それを指先から揉みこむように洗われた。

掌を滑らせて体中を撫で摩る。足先まで、そうして全部を綺麗に洗われる。

「何で、今日はそんなに優しいんだよ？」

「そうか？」

泡を集めて胸に付けられる。胸元が白い泡でブクブクだ。

「いつもと変わんねえよ」

シャワーも今日は上からぶっかけられない。時間をかけて泡が体から落ちていく。

それからバスタオルで体を包まれても、いつもみてえにガシガシ拭かれない。アイツの手つきは、全然痛く無かった。

風呂を出ると髪を乾かされた。「そんな事しなくていいよ」って言っても「いいから」って返されて、結局なすが儘になった。

ドライヤーで髪がサラサラ揺れる。頭を撫でられてる感じで、気持ち良くて瞬きを繰り返した。

それらが終わると、何故だか抱きしめられる。

それも暫くの間に渡って。オレの体を強く抱き寄せた。

不思議に静かで長い時間は、心の奥に一抹の不安を過ぎらせる。

「相模。どうしたんだよ」

「――行くか」

「相模……？」

腰に手を回して促される。組の入り口には一台の車が待機してた。

オレらがそこに近付く。それに合わせて後部座席が開いた。

「藤堂」

聞き慣れた声がして、中から矢田が出て来る。久々の制服姿だった。

矢田はオレと相模を見て最高の笑顔でニッコリと微笑んだ。

オレの方に歩み寄ってきた少年はすぐさま抱きついて来た。
クンクンと首元に頬を近づけて笑う。
「いい匂い。お風呂入ったの？」
「うん……」
矢田に抱きしめられてるオレを見ても相模は何にも言わない。
少年は満面の笑みを浮かべて「おいで？」と車の後部座席に誘う。
戸惑う背中を相模に後押しされた。
「ルイ、乗りな」
「うん……」
乗り込むと同時に矢田が後ろから抱きしめてくる。嬉しそうに鼻を鳴らして首元に唇を押し付けた。
その姿を相模が見つめてる。アイツは矢田をギラリと睨み付けた。

「じゃあね、タツ」

「――え…？」

イタズラに挑発する声が耳元で響いた。その声に一瞬固まった。アイツは唇を噛んで、無言で車から離れた。

「待って……、相模……？」

相模はドアに手を掛けてる。車に乗り込む気配がない。

消えて行ったはずの不安と喪失感が再び胸を支配し始める。

相模は目を細めてオレを見た。さっきまでの二人の時間を思い出して泣きたくなった。

「ルイに手ェ出すなよ」

「無理だよ」

「出すんじゃねえ……！」

最後の言葉は「嫌だ」とドアを無理やり引っ張ってバタンと閉めた動作によってかき消される。

「嫌だよ、相模！！」

ドアの向こう側に見える男の名前を呼んだ。

手を伸ばして窓を開ける。顔を歪めて見つめるアイツと目が合った。

「ごめんな」

「嫌だ……、相模、離れたくない――――」

さっきまで抱きしめてくれてたのに。オレに『また今度な』って言ってたのに。

アンタに抱かれて、胸一杯に愛情を感じてたんだ。魘された時も、ずっと傍に居てくれた。相模はずっと隣に居てくれたんだ。

目を覚ました時アイツの顔が目の前にあって。もう相模は何処にも行かないんだって、そう思った。

「離れたくないよ……」

汗混じりのアンタの匂い、まだ覚えてるよ。

オレの中で感じる相模の顔も。ざらついた刺青の感触もまだこの手に残ってんのに。

「嫌だよ……」

酷いよ相模。これじゃあ体を重ねた意味が無いよ。アンタと抱き合って想いを確かめ合った事が、マジで悲しいだけの思い出になっちまうじゃんか。

鼻の奥がツンと痛くなる。『サヨナラだ』って言った言葉が胸に突き刺さった。

溢れてきた涙で男の顔が滲んだ。

「藤堂」

「――…んっ」

泣きじゃくるオレを抱き寄せる少年は、こんな時でも強引に唇を塞いできた。

「ルイ――」

呟いた声を最後に車が発進する。その直後、即座に矢田によってシ

ートへ押し倒される。

相模の姿は、もうオレの視界から消えていた。

代わりに目の前を占領する少年は極上の微笑みを称えて何度も唇を奪う。その手は髪の中で何度か揺れて、首筋を伝い胸元に移動される。

「矢田……、お願いやめて……！」

シートの上に横倒しにされ、その上を美少年が支配する。相模を想って流した涙が頬を辿り落ちる。

少年は繰り返し重ねたキスを止め、口元に伝った涙を舌を使って舐め上げた。

「嫌だよ」

「矢田……！」

「藤堂はもう、俺のもの――」

しっとり柔らかい舌が頬を舐る。生暖かいそれはゆっくりと肌を這い回り、再び口を塞ぐ。泣き声がまた矢田の口の中に消えて行った。

しなやかな手が服のボタンに掛けられる。プチプチと音を立てて、外されていく。

「やめて、矢田！　お願いだから……」

キスの合間に懇願する。一旦口付けが止まる。怪しい笑みを浮かべる少年は、目尻に溜まった涙を指で拭った。そうして濡れた指先を口に含む。

「しょっぱいね」

糸を引きながら抜き出された指は、そのまま首元に充てられ、肌を擽り出す。そしてゆっくり動きながら服がはだけて露わになった鎖骨から胸元へ動いていく。

それは時折カリッと爪をたてて皮膚を刺激する。ピりっと痛い感覚が奔った。

「タツは藤堂の味をしょっぱくしちゃったね？」

爪跡をうっとりとした目線で追っていく。その指がサラシで止まる。

「藤堂はとっても甘くて美味しいのにね……」

少年は脱ぎかけた服を大きく開け、胸を隠すサラシを解き始めた。

しなやかな指によって、サラシがスルスルとはだけていく。

「嫌だ……」

顔を振って懇願する。少年はそんなオレの様子を見て、ペロリと舌舐めずりをした。

それは、何度となく見てきた、矢田の欲情のサイン。

ソイツは解かれたサラシを顔に近付けて、「いい匂い」と呟く。

「今日の藤堂、凄く美味しそう……」

「矢田やめて！」

手首を握って持ち上げて、腕の内側を舐められた。

即座に身体が反応して、「ああ…」と情けない声が出る。

「ココの皮膚、とっても柔らかいね」

美少年の舌先は、チロチロと脇を舐める。こそばゆい感覚がずっと続いて、だんだんとゾクゾクしてきた。

舌先で焦らされた部分に今度はカプリと噛み付かれる。

「あぁぁ……！？」

甘い愛撫の中に痛みが加わる。なのに、肌に残る感覚は、不思議と快感だけだった。

相模に抱かれ、矢田に攻められて。

自分の感度がますますおかしくなって行く。

男がオレの身体に植え付けたものが、今度は少年によって開発されてしまう。

嫌だ、嫌だと泣いて見せても、別の男からの甘い洗礼に、身体はいとも素直に燃え上がってしまうんだ。

「凄く感度イイ。　さっきまでタツに抱かれてたの？」

脇を離れた唇が、今度は胸の横の肋骨ラインを味わい始める。

くすぐったくて堪らなくて、また変な快感に犯される。

泣きそうな声で絞り出した喘ぎ声を聞いて、少年は「そうなんだ」と呟いて微笑した。

「タツさ、藤堂を守る為に離れるんだって」

「……」

柔らかいね、って猫撫で声で胸元に頬ずりする矢田は、綺麗な指先を胸の小さな膨らみにそっと置いた。

少し冷たい指先が小ぶりの胸を包んでギュッと握る。

そうして持ち上げた手の間からピンクの乳首が覗いてる。

それをほっぺたで擦られると、先端から甘い余韻が溢れた。

息が掠れて出る。きっと今自分の顔を見れば、矢田の刺激に感じてるのがまる分かりだ。

「タツの顔、凄く名残惜しそうだったね」

「……」

「きっと俺の代わりに、いっぱい藤堂とこういう事したかっただろうね」

「やめろ……」

手の中で揺れる胸元を見つめてた矢田がオレを見上げて微笑んだ。

屈託のない笑顔だと思った。

幼い子供が大好きな玩具を手に入れた時みたいに、満足げにニッコリと笑う。

「タツはどんな気持ちで藤堂を抱いてたんだろうね？」

「やめて……！」

矢田の言葉で、数時間前までの相模の姿が思い出される。

体を痛い位に両手いっぱいに抱きしめて、オレの中で感じてるアイツの顔が、今鮮明に蘇る。

これまでに無い位に興奮して、喘ぎ乱れて過ごした。アイツの汗混じりの匂いが戻ってくる。

押し倒されて見上げる少年が、ついさっきまで自分の中で感じてた男の影を連れてくる。

相模もこうして、オレの上で切ない位に感じてたんだ……。

「俺が目の前でキスして。タツはどんな気持ちだったのかな」

「お願いだからやめて……」

眠りながら相模を呼ぶオレの手を握り締めて。アイツは別れが来るその瞬間を感じてたんだ。

アイツの方が、オレの何倍も苦しかったかも知れない。

そう思うと　もう堪らなくて、止まりかけてたはずの涙が溢れ出してしまう。

「泣いちゃう程、タツが好き?」

矢田は揉み上げた胸の突起にかぶりついた。自分が嫌になる位、甘い喘ぎ声が出た。

オレの声を聞くと少年は嬉しそうに笑い、今度は先端を赤い舌で舐めて、キャンディみたいにねぶって、強く吸い上げた。

背中を仰け反らせて声をあげる。

もう、自分が中からグチャグチャになりそうだ。

「ねえ藤堂。そんなにタツの事が好き?」

薄目を開けて、少年は甘い拷問を与え続ける。

「……そうだよ」

オレの声に、これまで攻めてた動きを止める。

驚いたように顔を上げた。

「そうだよ……。相模が好きだよ……」

「――――え？」

震える声を抑えて、悲しくて歪む泣き顔を両手で覆った。

「アイツが大好きなのに……」

こんなに弱っちくなってしまった自分が嫌で仕方ない。

それでも溢れ出る涙を堪えられずに、しゃくり声を出して泣いた。

めちゃくちゃだ。

何もかも。

好きなのに突き放されて、最後に二人して燃え上がった身体を、今度は矢田に開発されてる。

どうしてオレは　こんなに泣きじゃくってんだろう。

何で、相模の前で出て来なかったセリフが　今言えるんだろう。

好きなら好きってちゃんと言えば良いのに。

オレにはそれすらも上手に言えない。
相模は想いを全部、オレに伝えてくれたのに――――――。
武道家の娘だなんて、ちゃんちゃら可笑しい。
大事な人に気持ちを素直に伝えられない今の自分は、誰よりも臆病で弱い人間だ。

「――――ふうん。……そうなんだ」

そうして自分を追い詰めてた矢先に、矢田は詰まらなさそうに呟くとゴソゴソと動き始める。
胸から手を離して起き上がると、マジマジと顔を覗き込まれた。

「本当にタツが好きなんだ……」

さっきみたいに涙を拭われて、その手でほっぺを撫でる。
塩分混じりの水が流れた後の頬は少しピリピリしてて、少年の手つきを、より鮮明にさせた。

「それなのに離されちゃったんだ。悲しいね、藤堂」

矢田はふんわり優しく笑って口付けた。

「矢田……」

柔らかい唇が押し付けられると同時に抱きしめられる。

矢田のいい匂いが遅めの空気に乗ってやってきた。

「タツが大好きで、寂しくて、素直に泣いてるんだ。藤堂ってやっぱ可愛いね」

それから音を立てて唇を付けたり離したりして、じっと腕の中で居るオレを、矢田は「可愛い、可愛い」と笑って頭をナデナデしてきた。

矢田が何をしたいのかも、何を考えてるのかも分からない。

傷口を突いて来たり、そうかと思えば悲しい気持ちを癒されたり。

更には相模が好きっていうオレの気持ちを、ソイツは何故だか共感して理解してくれてる様だった。

少年のもたらす言葉とキスに大いに戸惑った。

矢田は相も変わらず天使の様な笑顔で微笑んでは、オレを腕の中に閉じ込める。

そうして不思議な顔をするオレを見て、美少年は最高に魅惑的な笑顔を見せた。

「じゃ、今からエッチしよっか」

「何で……」

そう尋ねると、矢田はまたニコッと笑って「癒されるからだよ」と答えた。

半裸になってるオレを抱きしめて、肩ごしにカーテンを閉める。そうして運転席からの視界を遮った所で、抱きしめられてた体がシートに戻される。

今度は矢田が制服を脱ぎ始めた。

人を誘う流し目でオレを見る。口元に微笑みを称えたまんま、少年が制服を脱ぎ取っていく。

肩から滑らせるようにブレザーを脱ぎ、黒のネクタイをスルリと外す。

それからプチプチと音を上げてシャツのボタンを外し始めた。

やがてはだけたシャツからしなやかな少年の肉体が露わになると、

その手をズラして今度はベルトに手を掛けた。
C．Kと模(かたど)ったシルバーのバックルが外される。
服の擦れる音と一緒にそれも取り払われると、ズボンのボタンに手を掛けた。
それまでの動作に、思わず魅了されてる事に気付く。
「そんな、気分じゃないんだ。矢田……」
「うん。だからするんだよ、エッチ」
愛らしい目を凛と潤ませて、綺麗な吐息を吹きかけた。
小悪魔な顔した少年天使は、ふんわりと言葉を遮った。
「今度はお返し。俺が藤堂を癒してあげるよ」
「いいよ……」
「フフ……」
柔らかい笑い声。矢田のものだ。
ほんの少し顔を傾けて、オレの反応を楽しんでる。

まるでストリップでもしてるみてえに、少しずつズボンを下ろしていく。

少年の小っちゃなおへソ。その上に腹筋の筋が現れてる。

それでも見た目は柔らかそうだった。

そこから水色とピンクのチェック柄のトランクスが見えてきた。真ん中が膨らんでるのが見える。

ソコを見て無意識に喉がゴクリと鳴った。

そのまま膝まで下ろすと、今度は腰に手を充ててトランクスを下ろしていく。

それは途中、膨らみに引っかかって、ピン！っと反動を起こしてから下ろされた。

薄い肌色をして大きくなったソレが目の前に出される。

形は一緒なのに、その色つきや見た目はアイツと違う。

相模のはソコに毛が生えてるけど、矢田はそれが無い。

誰かが天使にイタズラをして、剥き出しになった様な感じ。

体色とほぼ変わらない薄い象牙色をしてピクンピクンと小動物みて

えに跳ねる物は、少年のあどけなさをそのまま出してる。
その体つきも、何処となく自分と似てると思った。
矢田は、まだ成長途中の少年の体だ。

最後に殆どはだけたシャツをパサリと脱ぎ捨てると、矢田は一糸纏わぬ姿になった。
しなやかなラインに、それでも異性を思わせる興奮して勃起した男の部分。
艶めかしい香りとクリームみてえな色の素肌。金色の髪を揺らして、恍惚とその姿を晒す。
悪い事をしている子供のようにイタズラな視線を向けて、ペロリと自分の唇を舐める。その姿や仕草の全てが中性的で美しいと思った。

「ホラ、ね。泣き止んだよ？」

思わず見惚れてしまっていたオレを見て、ソイツはやっぱりふんわりと笑った。
少年はオレの手を取ると、それを興奮してピクピク震える自身の方へあてがった。

顔が一気に熱くなる。

初めて矢田に触れたあの時と同じく、それはとても暖かくて、キュっと握ると即座に大きく震えて反応した。

それと同時に先端がさらにムクムクと大きくなって、益々固くなる。

その様子を見つめる矢田の顔は、ほんのりピンクがかって見える。

矢田の物を握ってるオレの手先を見て、下唇を甘噛みしてた。

「藤堂の好きにしていいよ……」

「何言ってんだよ……」

ハッと我に返って手を離そうとする。少年はその手を掴んで制した。

「前みたいにイカされてもいいし、欲しいなら中に入れてあげるよ。俺の体、藤堂の自由に使ってね？」

掴んだ腕を矢田によって上下に動かされる。掌の中で包まれてる少年の部分が擦れて、ビクビクと波打って跳ねた。

少年は気持ちよさそうに溜息を吐くと、小さく口を開ける。

淡い欲望を見せる瞳を潤ませて、おいでおいでと体を引き寄せて来

た。

オレの上に馬乗りになって、膝に掛かってた衣服も全て脱ぎ取る。

惜しげもなく裸体を晒す美少年に見下ろされると、まるで自分が悪い事をしてるみたいに思う。

「冗談、やめろよ」

「フフ……」

矢田の表情に、怪しい色気が滲み出てる。真上から挑発してくる小悪魔は、イタズラに笑いながらオレのズボンのホックにも手を掛けた。

依然として、手の中では少年の欲望がピクピクと動いている。

戸惑う手の上に、少年のひんやりした指先があたる。矢田はオレの手を再び動かし始めた。

服を脱がせる手を止めて、指先からの刺激に没頭してる。オレの指に、矢田の体がビクンと反応する。

まるで美少年が一人でエッチな事をしてるみたい。手の中の物は、どんどん固くなっていく。

矢田はとても気持ち良さそうで。それを見てると自分の下腹部辺りがギュッと締め付けられる。

少年の卑猥な光景を目にして、自分の体に異変が起き始めた。

相模に追い上げられていた体が、思い出したように疼き始めたんだ。

体を熱くさせる昂り。

つい数時間前まで興奮して男に腕を絡めてた、オレの体。

絶頂を迎えないまま放り出されたまんまの物が、矢田に刺激されて再び眠りから覚めた。

一旦静まりかけた感情は、一緒に相模と過ごしたさっきまでの記憶も連れてきた。

ールイー

「……ッ」

「――藤堂？」

もうそこにはいない、男の影が思い出される。

オレの中で感じる相模の声が、その時脳裏に響いた。

体が弾かれたように反応して、思わず手を離した。

「――ごめん」

イキナリ手の離された少年は不思議そうにオレを見て、それから「ふうん……」とイタズラっぽく笑みを作った。

「ごめん、やっぱり出来ない」

「……でも、藤堂自身は俺に欲情してるよ？」

何言ってんだよ、と返す。少年は笑みを称えたまま、脱がしかけてたズボンの中に手を入れてきた。

「矢田――！？」

「ホラ。濡れてるよ」

「やめて……」

しなやかな指先がソコを弄ると、体は素直に快感を覚える。

自分の言ってる事と体の反応がまるで違う。

嫌だって言いながら、まるで体は悦んでる。それがどうしても恥ずかしくて、オレを見る少年から目線を逸らした。

「藤堂。前も言ったよね？　俺らがしてることって悪い事じゃないんだよ」

矢田の指が蕾に触れた。クリクリとソコを捏ねられ、優しいのに耐えられない快感を与えられる。

次第に指先が濡れてヌルヌルし始める。

そうすると、今度は指を小刻みに左右に動かされ、ピチャピチャと厭らしい音が聞こえ始める。

「あぁぁん……」

一気にゾクゾクと感度が昂って喘ぎ声が出る。

それを見て少年は満足げに笑った。

「ね……。エッチって癒しなんだよ」

「嫌だ……」

そんな事を言っても説得力が無い。こんなに矢田の指先に感じてしまってんだから。

「そう思うのも今だけ」

流れるような手つきで腰から一気に服が脱がされる。

両足を持って広げて、その奥でヒクつく蕾を見た少年は赤い舌先を出して自分の唇を舐めた。

「俺の体で癒してあげる」

這い回る矢田の視線。うっとりと秘部を眺めたあと、少年は股の間に顔を埋めて来た。

少年の柔らかい髪の毛が太ももの内側をくすぐる。

こそばゆい感覚はどんどんと奥の方へ移動して行った。

矢田の指先がソコをグイと割り開いた。その直後、濡れた舌が付け

られ、蕾を舐め始めた。

「あ……っ、ああっ、やめて、矢田……！」

犬みたいにペロペロと舐められる。

アイスクリームを食べてるみたいに、矢田はピチャピチャと音を上げて舐め続けた。

舌先が触れる度に身体がビクンビクンと痙攣して、秘部に顔を埋める少年の髪を必死に掴んだ。

「ココ、大きく膨らんで来たね……。　気持ちイイ？」

脚を更に開かれ、秘部をもっと露わにされる。

「指でも摘めそう」

矢田の形の良い唇が蕾に吸い付いた。

そして今度はおっぱいを飲むみたいに勢い良く吸い上げ始めた。

ソコからチュルチュルと卑猥な音が漏れる。

途端に急所全体が快感に侵されて喚き声を上げた。

脚を閉じようとした。

それは少年の腕に簡単に制され、「逃げようとした罰」とでも言わんばかりに、吸い上げてる物を歯で甘噛みし始めた。

気持ち良くて叫び声を上げた。

運転手がカーテン越しにこの声を聞いてるなんて事もお構いなしに。

少年の指がその奥を刺激し始める。指先を捻じり、ちょっとずつ中へ押し込んで来る。

それは激しく出し入れを繰り返す。

その間も蕾を甘噛みされる。

何度も絶頂感が襲って来た。でもその度に唇を離され、イカせて貰えなかった。

そしてまた少年の拷問のような攻めが始まる――――。

掻き回された秘部から愛液が流れ出す。

それはお尻の割れ目を伝って滴り落ちていく。このままじゃあ、シートが汚れてしまいそう。

身体が熱くて、変な汗が滲む。

小刻みの呼吸を繰り返した。

もうやめてと声を出す程、その行為は激しくなって行った。

「欲しかったら欲しいって言って？　俺、藤堂の為なら何でもしてあげるよ」

虐められて敏感になってる急所をわざと音を立てて吸い上げられた。

更に少年の綺麗な指はオレの中に根元まで入れられて、不思議な動きをさせ始める。

中と外の動きが同時に感度を昂らせて、余りの快感に悲鳴が漏れる。

自分の弱い所を一度に攻められた。

逃げ場の無い快感にもう悶えるしかない。

また追い上げられてしまう。耐えられない絶頂感が襲い始める。

振り絞って声を出す。それと同時に身体を攻める指がピタリと止まり、少年の手はオレの身体から離れて行った。

欲しい絶頂感が貰えずに、身体にムラムラとした物足りなさだけが残る。

苦しい気持ちになるほど、そこからは愛液が溢れ出して来た。

「嫌だ……」

「何が嫌？　言ってくれないと分からないよ」

意地悪っぽく呟いた少年の舌先が、またオレの身体を蝕み始める。

「ああぁ…！い、嫌だ――――」

「どうして嫌なの、藤堂？」

絶頂を迎えないまま追い上げられて、高められて。

頭が変になってしまいそう。

「俺、言われた通りにしてあげるよ？」

喘ぎ声が出ると離された。

酷いと思った。ソイツの口に思い切り感じてんのを知ってるクセに。

少年から絶頂感を与えて貰えない。

泣きそうだ。

矢田は絶対　意地悪だ――――。

ハアハアと荒く息を吐いて終われない快感に耐えた。

途中、もうどうにもならなくて、もう一度逃げ出そうとする。

狭い空間の中で、必死にずり上がった。

だけど呆気なく脚を掴まれて引き戻される。「藤堂、悪い子だね」

と矢田が言う。

「そんなにお仕置きされたいの？」

少年はヒクついてる部分にジュルジュルと音を立てて、唇を上下左右に擦り付けて来た。

悲鳴の混じった喘ぎ声が出される。

強く擦られる度にとんでもない快感が身体を襲った。

脚がガクガクと痙攣する。

唇が離された。

気が付けば、オレは矢田に「お願いだから続けて！」と懇願してて、
それを聞いた矢田が「いいよ」と笑って股の間に顔を埋めた。

それからは少年の唇が止められる事は無かった。

最初は蕩けてヌルヌルになった蕾を吸い上げて、
それから指を押し付けて捏ねられた。

愛液を指に付けて、二本の指が中へ入れられる。
中を掻き回され、唇が蕾を貪る。

「これ、クンニって言うんだよ」

唇を押し付けて、卑猥な音を出す。左右に、また上下に唇が動かされる。

今度こそ動きは止まらなかった。

矢田の与える全てに泣いて悶えて、何度も何度も絶頂を味わった。

車の外に声が漏れてるんじゃないかとさえも思った。

脚が大きく痙攣してて、オレは必死に矢田の髪を掴んでた。

意識が飛んで行く。頭が真っ白になる。

「あぁぁ！！　イッちゃう、イッちゃうよぉぉ！！」

何度も絶頂を繰り返した。オレの身体はどんどん昂って行った。

女としての快感を与えられた身体は、当然それだけで熱が冷める筈も無く。

それら一連の前戯が終わると、矢田を身体を精一杯抱き寄せた。

「――――欲しいの？」

「うん……、うん……」

耳元で囁く少年の声に何度も頷いた。

「分かったよ」と返した後、両脚を大きく割開き、その中に身体を押し入れる。

熱い塊を入り口に感じた。

それは何度か反動を付けて、一気に奥まで入ってきた。

それからゆっくりと抜き出し、腰を使って強く打ち付ける。

「ひぁぁ…！？　あぁん！」

思わず声が漏れ出す。

今度はゆるりと出し入れを始める。

緩い快感が押し寄せて来た。

絶頂まで追い上げられないのにずっと気持ちイイ。

少しずつ感度が昂って行く。

中で愛液が溜まって音を立ててる。

灘らかな興奮状態のまま息を吐いた。

少年はグッと腰を強く引き寄せる。

と、今度は強く強く奥まで打ち付け始めた。

最奥から得も言われぬ快感が止めど無く溢れ出す。

「あ……っ、ああっ、ああぁん！！」

パンパンと勢い良く打ち付けられる。

少年の熱い楔（クサビ）が中を突き上げる度に、男に抱かれる歓びが身体を占

領していくんだ。

破裂するような強烈な快感。
早くも絶頂が近くなる。

掴んでる腰を持ち上げられた。

そのまま、更に勢いを付けて根元まで入れられる。
抜き挿しのスピードが速くなった。

無我夢中で叫んで、シートを掻き毟った。

矢田がもたらす余りの快感に顔が歪む。

両脚を広げてシートに押し付けられ、体重を掛けて打ち込まれた。

また悲鳴が出る。涙も。汗を滲ませて少年の身体に絡める。

頭が真っ白になっても止めて貰えない。

そのうち意識が飛ぶ。
鳴き声を上げた。

正面を見ると、うっとりと顔を覗き込む美少年が居て。

ソイツの視線を感じながら、絶頂を繰り返してイキ続けた。

相模が好き　5

少年を受け入れる入り口は、もうトロトロに蕩けてて、出入りする度にグチュグチュと愛液をかき混ぜる音が響いてた。

そこは、只々　気持ちイイだけ。

痛みも痺れも無く。ただ快楽を身体中で味わうだけだ。

快感なのか、拷問なのか分からない。

そんなギリギリの行為を助長させるのは、終わらない矢田の攻め。

「藤堂可愛い……」

美少年は息を上げてそう呟く。

腰を使ってオレの中を膨らんだ欲望で攻め続けながら。

涙をポロポロ流して泣き声を出す姿をうっとりと見つめ、更に強く追い上げて来る。

気持ち良くて堪らない。

思わず身体を起こして自分の結合部を見た。

矢田の物が出されては、根元まで一気に埋まって行く。

その度に卑猥な音が聞こえる。

抜き出される肉棒は、愛液でグッショリ濡れてて、ギラギラに光ってた。

こんなのが……。

何度もオレの中を出たり入ったりしてる。

大きく割開かれた股間が丸見えだった。

愛液がどんどん出てくる。

根元まで深く埋まる度、凄く気持ちイイ。

美少年を加え込んでる自分の入り口を見て、更に興奮する。

「ね……。凄く気持ち良さそうだね……っ？」

その様子を見てた少年の顔が苦渋に歪む。

矢田……、泣きそうな顔でオレを見下ろしてる。

「藤堂…っ、俺、も……、イっちゃって……いい？」

「うん……、うん……！」

中に埋まってる物が、もっと太くなった。ズンズンと最奥に突き刺さる。

何度も何度も、強く。

「あぁぁ！！　イイ！！　気持ちイイよおぉ！！」

脚を痙攣させて悶える。
矢田の身体を必死に掴んだ。

それは最後、最高に強く中を突き上げてから「ああ……っ」と少年の喘ぎ声が聞こえる。

ズン！！と最奥を突いたと同時にソレがドクドクと波打ち始めて、内部に愛液でない何かが溢れ出したのを感じた。

気が付けば、車の振動が止まってる。

荒い息のまま、二人して繋がったままシートに倒れ込んだ。

それから簡単に服を着せられる。

久々に見る京王高校がそこにあった。
グッタリしたオレを抱き上げて、少年は何日か振りの頭取の寮へオレを運んだ。

マンションみてえな外観の一番奥の部屋。

相模と過ごしたその部屋に入れられて、ベットに身体を寝かされる。

久し振りの揺れるスプリングの感覚に懐かしさを覚える。

数ヶ月間見てきた天井を、美少年の顔が遮った。

再び服を脱がされる。

矢田は舌舐めずりをする。激しい行為の後でも、少年はまだ発情してるんだ。

シャツを脱がした所で、首筋にキスが降って来る。

熱を持った身体はすぐにビクンとクネらせ反応した。

かすれ声も一緒に出る。

ズボンを引き下ろされる。

矢田の指が秘部に付けられる。

ソコはまだヌルヌルしていた。

指先で蕾を弄りキスをする。

オレが声を出す間もなく、美少年に唇を塞がれる。

やがて乱れて悶え始める。

少年の身体に、オレはまた燃え上がる。

矢田はさっきよりも激しくオレの中を貫いて来た。

蕾を虐められながら中を突き上げられる。

暫く記憶が失くなる。快感攻めに気絶してたのかもしれない。

気付いたら、矢田の身体に縋り付いて動物の様に声を上げてた。

麻薬みてえに矢田の身体に溺れて行くのを感じた。

いつしか自分も腰を振り、少年を必死に咥え込んでる。

矢田はずっとオレを抱き続けた。

頭が中毒の様に麻痺していて、オレも美少年の齎す快感に呑まれて行ったんだ。

相模が好き　6※性描写有り

気が付くと朝だった。

「おはよう」と言って矢田にキスをされる。

いつもと違う、甘い美少年の匂いがした。

目を覚ましたオレを抱き上げて風呂に向かう。

激しい行為の余韻なのか、少年を受け入れたソコはヒリヒリしてた。

風呂場でも身体を撫でられて、至る所にキスされる。

少年の攻めに呼吸を乱し、壁に手をついた。

そのまま後ろから矢田に抱かれた。

水を滴らせ、喘ぎ声が何重にも響いてる。

シャワーの音なのか、愛液の漏れる音なのか。

水じゃないヌルヌルした体液が結合部から流れる。

そうして、また絶頂がやってくる。

身体をクネらせて声を上げるオレを見て、矢田は嬉しそうに笑う。

ベットの上で、窓際で、至る所で抱かれた。

オレは、もしかしたら相模が怒って部屋に入って来るんじゃないかって思った。

「俺の女に手を出すんじゃねえ！」って。

だけど相模は現れ無かった。

来る日も来る日も矢田に抱かれた。

そのうち少年の顔を見ると無意識に濡れて来て、快感を味わい続ける秘部が疼くようになっていた。

これが本当に現実かどうか分からない。

身体は完全に少年によって麻痺してる。

それでも夜になれば相模の事を考えた。

隣で眠る矢田を見ながら、またアイツがオレを迎えに来るかも知れないって、甘い期待があった。

毎晩遅くまでベットの中で相模が来るのを待った。

でも結局、相模が現れる事は無かった。

待っても待っても、アイツが迎えに来る事は無かったんだ。

「藤堂、最近よく考え事してるね？」

矢田と過ごした何度目かの夜。
ボーっと窓の外を眺めるオレを見て、ベットに横たわる少年が呟いた。

「――――うん」

最近、上の空になってる時間が増えたと自分でも思う。
いつからか　時間があると外の景色を見下ろすようになってたんだ。

もう何日も目にして無い男の影を追い求めて、それでも覗いてると、いつか遠くからアイツが歩いて来そうな気がして。

捨てられた忠犬みてえに、いつまでも　いつまでも相模の影を探してた。

この部屋や校庭には未だにアイツの残像があって、それは実体化しないまま頭の中に消えて行った。

そうして毎日悲しい気持ちになるんだ。

相模は今　どうしてるだろう。

オレが矢田に嫌という程抱かれてるって事、知ってんのかな。

オレがアンタに会いたくて、寂しくて溜まんねえ事も。

あんなにオレに付きまとってたクセに。
どうして会いたいって願う時に、相模は居ないんだろう。

「藤堂。　俺を見てよ」

「……あっ」

そうして思いを馳せる時、決まって矢田はオレを抱いた。

ほんの少し指が触れるだけで　体が発情し始める。

服の上から胸を揉まれた。
しなやかな指先が突起を擽ると、背中がブルブル震えて溜息が出てくる。

後ろから抱きしめ、胸を揉み、首筋を舌で上下する。

「タツが恋しいの？」と声がする。「うん……」と力無く返事した。

少年の手はシャツの中に入れられ、中から胸を弄り始める。
ひんやりした柔い手指に熱くなる。

矢田に抱かれながら相模の事を想って、嫌じゃないかと尋ねた。

少年はクスクス笑って、いいんだよ　と答える。

「だって、藤堂は俺のでしょ？」

矢田は言った。　オレさえ手に入ればそれでいいんだって。

「あ……、あぁぁん……」

片手がズボンから下着の中に入れられる。
最初からクチュクチュと卑猥な音が出る。

腰をクネらせて悶える。
自分の意思とは裏腹に、脚を少年の身体に絡ませ声を上げた。

ズボンと下着を膝まで下ろされ、シャツをたくし上げて胸が露わになる。

裸よりも恥ずかしいと思った。

「このまま事件が解決しなかったらどうなるんだろうね」

「はあん……、あぁん！」

後ろ手に腕を絡める。
肩越しに見える少年の唇が吸い付いて来た。

舌と舌を絡めて懸命に味わう。

ハアハアと息吐いて、甘い蜜を交わし合った。

秘部を伝う指先が、蕾を弄くり始めた。一気にソコが燃えるように熱くなる。

太ももから愛液が垂れ流れる。

喘ぎ声を出す口元からは耐えず涎が伝って落ちる。

「そうしたら、タツは一生藤堂に会えないね？　ずっとずっと俺だけの物だね」

？指を左右に振って蕾を刺激された。声と一緒に、すぐに絶頂が来る。

ピチャピチャ音が上がってて、下を見ると矢田の手が水浸しになってる。

「あ……っ、あっ、ああぁ、ハア、気持ちイイ……！」

？窓枠に両手を付いた。顔も預けて腰を突き出した格好になる。

後ろから服の擦れる音が聞こえて、腰を掴まれた。

すぐに後ろから少年の欲望が突き上げて来た。

窓ガラスに手を付いて必死に快感を貪る。吐き出される喘ぎ声でガラスが曇る。

外は真っ暗闇で、ガラスには室内の様子がありありと映し出されて

る。

オレに自身を打ち込みながら　快感に浸る美少年の顔がそこに映える。

こんなに満たされた矢田の顔は初めてだった。

何でか涙が出て来た。

それからは目を瞑って、少年の体を味わい続けた。

パンパンと打ち込まれて身体と視界が小刻みに揺れる。

窓の外に　不思議な気配を感じた。

……けど、視界はすぐに自分の息で白くなる。

涙が溜まると景色もボヤけてくる。

夜が耽る。また一日が終わる。

少年に乱され続けて愛液の匂いが充満する部屋で、オレはまた見えない男を探して長い時間を過ごすんだ。

気持ちイイね、と声がする。

今日、何度目の絶頂か分からない。
飛ぶような快感も、何度味わっただろう。

膣(なか)に埋まった少年の物がズンズンと突き刺さり始める。更に濃密な余韻に悲鳴を上げた。

「赤ちゃん、出来ないかなぁ……っ」

中で矢田が弾ける。生暖かい何かを感じる。
オレの中で溢れては体の中に消えて行った。

脚から崩れ落ちてその場にグッタリと倒れ込む。そのまま抱き上げられベットに横になる。

胸を上下させて激しい息継ぎを繰り返す少年の胸。
その中に抱き留められて気絶するように眠りに付いた。

矢田は夜になると何度か魘された。見えない誰かに怯えるみてえに。

「もうやめて」と夜の闇に泣き声が聞こえるんだ。

その度に背中を撫でてあげた。そうすると矢田の息が落ち着いてきて静かになるから。

あれからどれだけ眠ってたかも分からない。ふと目を覚ますと少年が泣いていたんだ。重たい腕を動かして背中をポンポンと撫でてあげた。

オレに縋ってすすり泣いて力を出し切ると、涙の筋を作った顔が幾分か穏やかになっていた。

固く閉じた瞼はちょっとだけ涙ぐんで睫毛が濡れてる。

呼吸がゆるりと静かに吐き出され始める。

矢田は背中を撫でると安心すんのか、泣き声はすぐに規則正しい呼吸音に変わって行った。

矢田はオレに、オレは矢田の体に依存してる。

お互いに欠けた物を補い合ってるみてえだ。

求めてる物は違うのに、それを体で満たし合ってる。

抜け出せない暗闇にオレは居るんだ。

魘されてた矢田が寝付いて来た頃、自分もウトウトとし始める。

扉の外で誰かの足音が聴こえた。廊下を行き来する不信な音だと思った。

だけどそれが空耳かどうかを確認する余裕も無くて。

足音の正体も分かんねえまま、オレも夜の闇に意識を呑まれて行ったんだ。

相模が好き　7

瞼の奥に橙色の陽が滲み始めた頃、少しずつ意識がはっきりしてきた頭の中に、足早に廊下を掛ける人の気配を感じた。

そして、「待てええい！！」と怒鳴る男の声も一緒に。

「――――――ん」

オレと矢田だけだった空間の中に、突然別の誰かが入り込んで来た。

その日は朝から騒がしかった。

ドアの向こうから、ドスンバタンと人の走り回る騒音が聴こえてたんだ。

「おのれえぇ！！　ここは何処だ！？」

「ひいいぃぃ！！？」

「さては貴様も相模龍の差し金か！？　俺をこのような所に閉じ込めおって！！」

「し、知りませんって～！！」

「知らぬ訳無いだろうが！　貴様、先程からこの場に潜伏してただろうが！」

「ち、違います、違います！！　自分は任務に当たっていただけで……」

「一体出口は何処だ！？　」

「ひいいい！！」

ドシャバタ　ゴンッ！！
ズリズリ……

「……ん？」

暫く夢だと思って寝てたけど、それはどうやら現実の音だったらしくて。

「おのれ！！」だの「いい加減にしろ！！」だの「これで俺の目論みを封じたつもりか！？」だのと　どうも聞き覚えのある罵声が聴こえて来るんだ。

「――――何の音？」

矢田もその音に気付いて起き出した。やっぱこの声はオレの頭の中だけで聴こえてたんじゃ無かったらしい。

バン！！と壁にぶつかる音がする。
そのあと「ぐえ」と呻く声も上がる。

その場に散乱していた服を引っ掴んで急いで身に付けた。

「これも相模龍の罠なのか、ああ！？」

「お、おたくが勝手に迷って来たんじゃないですか！」

「え……」

男が口にした相模の名前に思わず反応してしまう。
動きかけた体を矢田に制止された。

簡単に服を着た少年が足早にドアを開けると、そこにはボロボロの姿になった梅さんが見知らぬ男を羽交い締めにして立ってた。

「……あ”」

オレと矢田を見た途端、男は真っ青になって小さく呟いた。

「――――ふぬ！？」

梅さんは獣みてえな臭いがしてる。イキナリ開いた扉の向こうのオレらを見て暫く固まる。

「てめえら何だよ」

そして朝からご機嫌斜めの矢田が二人の不振人物に睨みを効かせて唸った。

オレは――――

頭がボサボサの梅さんを見やり、それから羽交い締めにされてる男を見た。

「……？」

そいつは「ひっ…」と呟いてオレと目を逸らす。

中肉中背の普通の男だった。

多分何処にでも居そうな、普通すぎて逆にこのメンツの中で浮いてる位の……

「――――ん？」

中背の普通の男――――。

ジッと見ると、そいつはバツが悪そうに目を逸らしてバタバタと逃げ惑う。
梅さんにひっ掴まれて、虚しい後ろ姿を見せた。
その後ろ姿……
「……あ」
逃げる後ろ姿は……
「あああ――――――――――！！！」
「うわっ！？　藤堂、どうしたの」
間違い無い！　あの男だ！！
矢田に襲われた時にこのドアにぶつかった奴だ！！
あの時の走り去る中肉中背の不振な男の残像が重なって頭の中でピッタリと一致した！
矢田はまだ気付いて無いみてえで、急に大声を上げたオレを凝視する。
「矢田！　コイツ、コイツ！　ホラ、あの時にドアにぶつかって逃げてた奴！！」

「――――え？」

興奮気味に捲し立てるオレを他所に　難しそうな顔をして少年が男を見る。

男は更に「ひいい…」と呟いて暴れ出す。

そして漸く矢田も気づいたみてえだ。「ああ……」と相槌を打って得体の知れないソイツを睨んだ。

「俺と藤堂の初夜を邪魔しやがったのってテメエか」

男は無言で青くなる。

梅さんは「何たる破廉恥な……！」と唸っていた。

どうでもいいけど梅さんが臭い。

奴は暫く下を向いてモゾモゾしていると思いきや、急に「く、雲隠れの術！！」と訳の分からねえ事を叫んだ。

その途端、ブワッと真っ白い粉が辺りにばら撒かれてゴホゴホと蒸せる。

豪快な足音が聴こえて、中背の男が前みたく走り去っていくのが見えた。

「矢田！！　アイツを追い掛けて！！」

半ば興奮気味に叫んだ。

「何で」

矢田はいたく冷静にそれを返した。

「な、何でって……、もしかしたらアイツが事件の犯人かもしんねえよ！！」

「ふーん」

素っ気ない態度。
全く興味が無いらしい。

「矢田！！」

「嫌だよ」

もし事件が解決しちゃったら、藤堂がまた遠くに行っちゃうじゃんと続ける。

「もう。　石灰なんて撒かないでよね。部屋が汚れるじゃんか」

「うっ……、ううっ……」

服に着いた白い跡をパンパンと祓う。
何事も無かった様にドアノブに手を掛ける矢田。

それが凄く腹立たしくて、悲しくて。

「矢田のバカ！！」

そう叫ぶと少年を突き飛ばし、部屋を飛び出した。

「藤堂！！　怒るよ！」

「矢田のバカ！！」

もう一度叫んだ。その足で逃げた男の行方を追った。

「待てええい！！」

その後ろを、何故か梅さんが追って来た。
オレの背後から漂うケモノ臭が凄い。

廊下には所々石灰の白い跡が残ってて、それを頼りに外へ出た。

寮を飛び出し、分厚い塀に囲まれた校門を出る。

だけど学校を出た所で白い足跡が失くなっていた。男の影はもう何処にも無かったんだ。

ハアハアと息を吐いてその場に立ち尽くした。

通行人が時々オレを見た。
目が合うと青ざめた様子で足早に立ち去って行く。

その様子を茫然と見つめた。

もしかしたら何かの手掛かりが掴めたかも知れないのに。

目の前まで迫った情報を取り逃がしたんだ。

「う……っ」

もしかしたら、また相模の元に戻る事が出来たかも知れないのに。

悔しくて涙が滲み出る。
腕に顔を押し付けて泣いた。

「うう……っ、グス……」

矢田みてえにグスグスと鼻を鳴らして。

「ルイくん――――――？」

「……」

急に後ろから声が掛かって、ビックリして振り向いた。

振り向いた先のツンツン頭の少年もオレを見て驚いてる。

ソイツは何処かに出掛けてたのか、正門前から校内に入る所だったみてえだ。

「二宮……」

「ど、どうしたん？　泣いてるん？」

「いや……」

二宮……、こんな朝早くから、何処に行ってたんだろう。

オレは不思議そうにソイツを見る。だけどその倍　二宮に不振な目

で見られた。

驚いて立ち尽くしてる感じ。

「……？　何だよ？」

オレが尋ねると、いや……、とバツが悪そうに目を逸らした。

そして遠慮がちにもう一度オレを見る。

「ルイくん？　胸、どしたん――――」

「え……」

「うぬれえええ！！！」

二宮の声を遮って聴こえて来たのは梅さんの叫び声だ。

「ひっ！？」と思わず飛び上がりそうになる。

「な、何やの！？」

二宮も発狂してた。風に乗ってケモノクサい臭いが漂う。

どうやら途中でオレを見失ったみてえで、ゼイハアと荒々しい呼吸

を繰り返している。

梅さんはその場に落ちていた石灰の残りカスを指に取り、突然「フ、フハハハハハ…！！」と声高らかに笑い出した。

ボロボロのボサボサの姿で高らかに笑う梅さんに少しの恐怖心を抱く。

とても不気味な光景だった。

「見える……。見えるぞ……！！目的地までの道のりがはっきりと！！」

「何だって！？」

そしてブツブツと呟いた後、突然走り出したんだ。

もしかして、と思った。

相模を探して寮内に入り込んだり、拉致事件の時は「京王高校は何処だ」と言って姿を現したり。

もしかして梅さんには、無意識に目的地を探し当てる能力があるんじゃないかって。

そう思って、オレも梅さんの後を必死で追い掛けた。

「あ、ちょ…っ、ルイくん!?」

「悪い！　また今度な！」

梅さんはまるで精密な地図でも目にしてるみてえに小道を渡り、屋根を登り、ビルの隙間を掻い潜って走り抜ける。

埃まみれになりながらもその背中を必死で追った。

そのうち歓楽街を抜け、何度か小道を抜けると大きな要塞が見えて来る。

重厚な黒い鉄製の塀に囲まれて、その奥に構える黒い豪邸だ。

「お、おい、梅さん!?　此処って、もしかして……!?」

入り口には数台の監視カメラが取り付けられてあって、外敵の侵入を見逃すかと言わんばかりに動いてる。

遠くに見える繁華街の賑やかな音が僅かに聴こえてる。

豪邸とも要塞とも言える、その圧倒的に他と違う存在感を魅せる佇まい。

ここは、忘れる訳がねえ。
だって、ここは――――――

『お前を、オンナにしてやりたくなった。　俺の顔を見ると、悶えてたまんねー位にな』

アイツと、相模と世話人の契約を交わした場所だ。

あの頃はまだオレも相模に牙を剥いていて、「やめろ！！」って叫び声を上げて抵抗してた。

そんなオレの身体を露わにして、初めて男に肌を触られた。

オレの世話人としての日々はここから始まったんだ。

この場所だけは忘れる訳が無い。

立ち尽くしてるオレを他所に、梅さんはヒラリと塀に飛び移る。
２ｍはあるかという巨体が軽々と宙を舞った。
ハッとしてオレも続いた。

「梅さん！　本当に此処にあの男が居んのかよ！？」

「――――ん？」

ダンダンとコンクリートに勢いよく足を付け、反動で跳ね上がった。
弧を描いて宙を舞うと、両脚は吸い込まれるように高台に着地する。
隣に現れたオレを見て、目を見開いて驚いた顔をする。

「き、貴様ここで何してるんだ！？」

そう言うとすぐさま立ち上がり、隣の電柱に飛び移って行った。

「何って、梅さんが目的地が分かったって言ってたから付いて来た！」

オレもそれに続く。
ズバンと電柱に飛び移る。
ここからだと中の様子がよく見える。

敷地内は幾つかの木々に囲まれていて、中心には趣のある庭園も見える。

そこには数人の監視が付いていた。

「な、なな何だと。　貴様、よもやストーカーか！？」

梅さんは慌ただしく動き出した。

木から木へと飛び移り、着地したと思いきや今度はマンホール内を走り抜け、ダクトを通って要塞の内部に入り込んで行く。

「だって、あの男の行方を知ってるんだろ！？」

梅さんの動きは見事に監視の目をすり抜ける。

誰にもバレねえまま、要塞の中に侵入しちまったんだ。

オレの声に、「はあ！？」と声を上げる。

暗唱キーの付いた扉の前に着いた。

「俺は、自宅への道のりが分かったと言ったんだ！」

その扉の横の壁を一押しすると、隠し扉が出て来た。

「う、嘘つけよ！」

「誰が嘘など言うか！」

ズイっと入り、階下を走り抜けて行く。
そして非常階段から小窓に侵入する。それはものの数分で天井裏までやって来ていた。

「あの日……、貴様らの罠にハマり、不覚にも悪に手を貸してしまった……」

今度は薄暗い天井裏をほふく前進して行く。
勿論オレも後に続く。

たまに見える通気口の薄明かりだけを頼りにして進む。

「うん。梅さんがオレらを助けてくれた」

前方から「クソウ」と声がする。

「更に羞恥すべきは、知らぬ間に気を失っていた事だ」

「サナが飛びついたんだよ」

そこまで言うと、一旦ジロリとオレを睨む。

「気が付いた時、俺は見知らぬ山中にいた」

「――――は」

「何処かも分からぬ山中で、俺は横たわって落ち葉にまみれていたんだ」

「……」

相模だ。
オレも気を失ってたから知らねえけど。

多分相模が梅さんを捨てさせたんだ。
オレが嶋本を呼んだから。

おそらく証拠隠滅に、気絶してた梅さんを葬ろうとしてたに違いない。

「あれから　来る日も来る日も世間を彷徨った。俺の自宅は一体どこにあるんだろうと」

「……」

もしかして、それからずっと彷徨い続けてたって事か。マジで。
だから梅さん、こんなに臭いんだ。

「昨夜迷い込んだ先で、俺は何故か同じ所を彷徨い続けた。歩いても歩いても同じ場所に戻って来てしまう」

悔しそうに拳を作る。
そうしてまた動き始めた。

そして思った。
昨夜の何度も部屋の前を行き来してる足音は、梅さんのものだったんだって。

「諦めかけていた矢先、俺と同じくその場所を彷徨う男を見つけた」

あの男だ。

「それから、貴様らに出くわした直後だった。
突然自宅までの道のりが頭に浮かんだ。
これまで見えて来なかった道筋がハッキリとな」

梅さんはまた「フフフ…」と不気味に笑った。

「だからこうして足を運んでいるだけの事。
何を勘違いしてるのかは知らぬが、俺は人探しなどしておらん」

「いや……。　間違いなく、ここにアンタの家は無えと思うぜ」

「何を馬鹿な事を――――」

「クソ！！　ルイは何処へ行った！？」

「え……」

梅さんが後ろを振り返って言葉を返した時だった。

オレらが這いずる真下から、突然男の罵声が聞こえて来たんだ。

「何で寮に居ねえんだよ！？　何やってんだテメエら！！」

次いで、がシャン！！と何かが強い衝撃で破壊される音も聴こえる。

「若、お、落ち着いて下さいって……」

「落ち着いてられるか！！」

「な、何だ？」

思わず通気口の小さな隙間を覗き込んだ。

「探せ！！　今すぐだ！！」

そこには、今まさにゲンじいを殴り飛ばす寸前の相模の姿が見えていたんだ。

ゲンじいが壁際に勢いよく吹っ飛んだ。

その時傍にあった椅子にぶつかり、音を立てて床に転がった。

「落ち着いて下さいよ……、っつう。そんな時の為に探知機を忍ばせてんでしょうが」

赤く腫れ上がった頬を拭い、何やらポケットをゴソゴソと探る。

小さなモニターを取り出すと、それを覗き込んで「んん？」と首を捻ってた。

「早く答えろや！！　ルイは今何処だ！？」

「何でお嬢の反応がウチの事務所にあるんで……」

「ああ！？」

「ぐあっ！！　ちょ、若！！　落ち着いて下さいって！！」

相模はズカズカと歩み寄り、またゲンじいを殴り飛ばす。

その場に転がったモニターを見やり、「どういう事だよ」と呟いた。

「お、お嬢はどうも　この部屋の中に居るみてえです……」

「ふざけんなよ。　そんな事があるか……」

呆然とアイツが呟いた。

「どういう事だよ……」

そしてオレも思わず言葉が漏れる。

探知機って何だ。

それに、あのモニターは何なんだよ？

何でゲンじいに、オレの居場所が分かってんだ……？

暫く固まってた相模が、不意に上を仰ぎ見た。

「うぬ……」

隣では梅さんが小さく唸り、ゴソゴソと動き出す。

前に見える巨体が体を起こした。

「どうやら、道を間違えたようだ」

「――――えっ？」

そう言って踵を返して動き出した。

「待って梅さん！！　今、相模が――――」

「ふぬっ！！」

さっきと全く違う方向へセカセカと移動した瞬間、地面がガクンと傾く。

「うわっ！？　わわっ、うわわわ！！」

突然天井が抜けて、梅さんと一緒に真っ逆さまに落ちて行った！

ドスン！！て腰に強い衝撃を受けた後、軽い脳震盪みてえに頭が揺れる。

暫くクラクラして動けなかった。

正気に戻ると、唖然とした顔でオレらを覗き込む男の顔がある。

相模だ。

相模が目の前に立ってる。

「お前、何してんだよ」

「……」

「ルイ！！！」

「う……っ」

怖ーい顔した相模に、久しぶりに怒られた。

夢じゃない。

現実に、あれ程待ってた相模が目の前に立ってるんだ。
なのにアイツはギロリとオレを睨む。

「ココで何してる……」

「……」

「何でその男と一緒に居るんだよ」

「……」

「ルイ！！！」

「お、オレだって分かんねえよ」

「ああ！？　分からずにこんな所に来る奴があるか！！」

相模は強引にオレを持ち上げる。
両脇を持って軽々と引き上げられた。

オレの下敷きになって鼻血を出す梅さんの姿が横目に見える。

「　お前なあ！！」

「さが……むぎゅ」

それから強く抱きしめて、オレの唇や頬に何度もキスをする。
相模はとても煙草臭い。

「何考えてんだよ！！」

「ご、ごめん……」

首元に顔を埋めて抱きしめる。

「マジで怒るぞテメエ」

「その割には嬉しそうっすね、若」

「黙れ」

「……」

茶々を入れて一喝されたゲンじいは、オレを見て「やるじゃねえのお嬢」と笑って言った。

「クソ……」

相模は一人ごちた後、もう一度オレをギュウっと抱き締めて何度もキスして来た。

「何だってお前は、こうも俺を心配させるんだか」

「あれから毎日5分置きに“ルイはどうしてる”って確認してましたもんねえ、若は」

「死にてえか　お前」

「……」

そうだったんだ。

それからお決まりの女アレルギーで鼻血を流す梅さんをそのままに、オレをソファに座らせた相模が「どういう事だか話せ」と詰め寄って来た。

「……」

ここは素直に話すしかない。

「ほう。　するってえと、この兄ちゃんがお嬢をココまで連れて来たって事かい」

うん、と相槌を打つ。

一通りの話が終わった後、ゲンじいは物珍しそうに梅さんを見る。

そしてブツブツと「コイツは使えそうだな」とか何とか言ってた。

オレが話せば話すほど　相模は不機嫌になっていて、最後は貧乏ゆすりまで始める。

険しい表情からアイツの現在の感情が手に取るように分かって怖い。

「俺の部屋の前に不審者が居ただと……。それも大分前に」

頭を抱えてアイツが唸る。

そう。梅さんを追いかけるキッカケは、あの不審な男の行方が分かるかも、って思ったから。

あれは相模の部屋で矢田に襲われた時に偶然出くわしたんだ。

その事を打ち明けるって事は、矢田の部屋に連れ込まれそうになってたって事も言わなくちゃいけない訳で。

そうすると、オレ達はあそこでキス以上の事をしかけてたって事が明るみになるって事で……。

「こ、怖くて言えなかったんだよ」

オレはどうも自動的に墓穴を掘ってる気がする。

「言えなかったって、おい……。そんなに隠したいか、リョウとの事をよ」

「ば、バカな事言うんじゃねえよ」

「クソが……」

そうして吐き捨てると、ソファから立ち上がる。

そして溜息を吐き、コメカミを抑えた。

「また隠し事かよ……」

「違うよ」

違うと言うと、また盛大に溜息を吐いて睨まれる。

チッと舌打ちが聞こえた。

「――――　とにかく寮へ戻れ」

「え……」

「車を手配してやるから」

「い、嫌だ！」

オレの声に、アイツは無言でドアを開けた。

その顔は前を向いたままだ。

オレの方を一切見ないまま相模は言った。

「帰れ」

アイツはその声でゲンじいを呼び、オレを送り返せと言ったんだ。

「帰りたくない！」としがみついた。

相模はオレの手を「やめろ」と言って剥がした。

「俺にはお前が何を考えてんのか、まるで分かんねえ」

「何がだよ……」

「どうしてお前の回りには、いつも俺以外の男の影がチラついてんだよ」

「相模……。オレは――――」

「大事な事を何故隠してた」

「それは――――」

「結局お前と俺は、いつまで経っても頭取と世話人のままか」

相模に言いかけた言葉を、すぐに制される。

――――もうこれ以上、俺を失望させないでくれ――――

その言葉は胸の中に棘が刺さるような痛みを与えた。

「帰れ」

ゲンじいが「悪いな」って言ってオレの腕を掴んだ。

「相模のバカ！！」って何度も叫んだ。

相模はオレの声を無視する様に遮った。

「この男を始末させろ」

「……若、その兄ちゃんは何かと使えそうですが」

「いるか」

「――――ウス」

軽く会釈してオレを引っ張って行く。

とうとうドアが閉まり、相模の姿が見えなくなった。

腕を掴んでるゲンじいに「嫌だ！！」「離せ！！」「オレ、帰りたくない！」って叫び声を上げる。

ゲンじいは「あーあー、なんで俺ぁこんな事ばっかしてんだか…」と嘆いて、暴れる身体を引き摺り始めた。

そのうち、数人の組員のおっちゃんらとすれ違った。

おっちゃんらに「お嬢が何で事務所に居るんで？」とマジマジと見られる。

ゲンじいはとうとう暴れるオレを肩に担いで歩き出した。

よっこいせ、とか言いながら、悠々と進む。

一体何処にそんな力があんのか。

「まあ、分かってくれや。　本当は若も　リョウさんの元に返したくねえんだよ？」

バンバンと尻を叩かれた。
ゲンじいはやっぱエロオヤジだ。

「若の事だから、今頃あの日リョウさんに何されたんだって悶々と嫉妬してるだろうよ」

「うるせいやい！　相模なんて、相模なんて……」

「俺ぁずっと隣で見てるから言うけどよお、若の嫉妬と独占欲はハンパじゃないぜ、お嬢」

その分、一途さも最高だけどよ、と続ける。

「毎日毎晩、店や事務所に女が取っ替え引っ換えやって来ちゃあ、若にアプローチしてんの知ってるかい？」

「な、何だよそれ……」

思わず固まった。
それを見てオッサンはニヤリと笑う。

「そりゃあ天下の相模組の次期トップで、あれだけイイ男なら　モテねえ方が可笑しいぜ」

「う……っ」

「そろそろ嫁の1人や2人位持っても良い年頃だしな」

「な、何だよ1人や2人って……」

「ま、それがこの世界じゃあ普通だって事よ」

そう言うとまた尻を叩く。
それから「お嬢はもっと太った方がいい」とブツブツ言ってた。

「ま、そんだけの男の愛を独り占めしてるって事が言いたかったのよ。
お嬢に会えねえ今でも、その女達に手出しもしねえでな」

「……」

「俺ぁ、言ったんだぜ？　惚れた女と身体は別モンなんだからってよお」

「な、何言ってんだよアンタ」

「男は女と身体の作りが違うって事よ。　こう何日も溜まったまん

まだと若も苦しいだろうにねえ……」

「何が言いてえんだよ」

ゲンじいは思わせぶりにオレを見る。
そして不適に笑った。

「お嬢は、どうもリョウさんに可愛いがられてるみてえじゃねえの？」

「な、なな何でそんな事がアンタに分かるんだよ？」

「へっ」って吐き捨てて笑う。

「キスマーク」

「……へ」

「身体中に付いてんぜ。　リョウさんに可愛いがられた跡が。首にも腕にも」

「何だよ、それ……」

キスマーク、そんな物が、お、オレの身体中に……？

「イキナリ天井から行方不明の愛する女が落ちて来たと思いやあ

そんな跡を見せられて、しかも若の部屋でエロい事をしてたなんて言われて。
どっちが酷い奴なんだかねえ～」
と嫌味タップリにそう言って笑い、オレをチラリと見る。
とうとう何も言えなくなっちまった。

「ヤレヤレ、大人しくなった」

ようやく担がれてたのを降ろされる。
要塞を出る頃には、シュンと元気が無くなってた。
黒い鉄門を出た所で、「ちょっと待ってな」とガシガシ頭を撫でられた。

「お嬢、拗ねんなよ」

「拗ねてねえ……」

そうかい、ってチョイチョイと頬を擽られる。
そうやってオレをからかうと、少し笑って塀の向こう側に消えて行った。

程なくして、黒い車が近寄って来る。
車体の中心にシルバーラインの入った車だった。

車のヘッド部分にいつも付いてるVマークが無い。
窓にスモークも掛かって無い。

車、換えたんだ。あれ……、でも運転手が違う。

ゲンじいじゃない。それも、全然見た事も無い。

後部座席を見る。何処か見覚えのある男が乗ってた。

黒い和柄の七分の上下服。

まるきりその道の人間ぽい格好だけど、前髪を上げた灰色の髪だけが今時っぽい印象だ。

七分から伸びた腕から、赤い炎みてえな刺青が覗いてる。

「ネコ男――――」

ソイツは、鋭く釣り上がった一重瞼でオレを睨み付けながら車から降りて来た。

その唯ならない雰囲気に思わず後ずさる。

だけど直ぐに胸ぐらを掴まれ引き寄せられる。

「娘は何処だ」

「――――え」

今にも獲物を引き裂かんばかりの剣幕で詰め寄られる。

「娘を何処に監禁してんのかって聞いてんだよ！！」

「何の事だよ……！？」

その時下腹辺りに冷たい圧迫感を感じた。

ネコ男がオレに銃口を押し付けてたんだ。

「アンタらいつからクズみてえな仕事する様になったよ」

「何だって……」

黒い鉛を押し付けたまま、背中から強引に鷲掴みにされる。

引き摺って車の中に押し込まれた。

「居場所を言わねえならテメエに報復してやる」

首に赤い刺青の腕がめり込む。

ドアが閉まると同時に車は猛スピードで走り出した。

ギリギリと締め付ける赤い腕。

それは剥き出しの足首までも真っ赤な紋様が刻まれてる。
まるで何処からが服か分からない。

喉元に腕が絡みついて苦しい。
だけど腹部に感じる冷たい重圧感が、オレの抵抗をうばった。

車内はタクシーみてえな匂いがしてた。
タイヤが石ころを踏みつける振動が伝わって来る。

途中、救急車のサイレンや大型バイクがエンジンを蒸かしてる轟音が幾つか通り過ぎた。

辺りが徐々に賑やかになって来る。

パチンコ店の玉の行き交う騒音。
けたたましい位のクラクションがそこかしこで聞こえていた。

車はそれから何度かカーブを繰り返して、突然停められる。

「降りろ」

それと同時に車の外に引き摺り出された。
路地裏の薄暗い道だった。
囲む様に、幾つものビルが建ってる。

その中を挟まれる様にして、茶色い建物が佇んでる。
看板も無く、まるで廃墟みてえだと思った。

一つある大きな窓は、スチールカーテンで遮られて中が見えない。

そこから数人の男らが出て来て、ネコ男に加勢してオレの身体を取り押さえる。

引き摺られるようにその建物の中に連れ込まれた。

引き戸を開け、狭苦しい階段を登る。

突き当たりのエレベーターに乗せられた。
それは最上階の手前の5の所で止まる。扉が開くと同時に　連れ出された。

狭く長い廊下の先には鉄製の扉が一つだけある。

その中に入った途端背中を押され、その場に倒れこんだ。

「……っにすんだよ！！」

「覚悟せいよおどれ」

ネコ男は鋭い一重を更に細めて上から睨み付けた。

目の前に構えられた銃口が光る。

「どうした彪牙。珍しく騒がしいな」

窓側の奥に、一つの黒椅子が見える。

それは反対方向を向いてて、オレからは背もたれしか見えない。

黒い影に隠された奥から、ネコ男とは全く違って穏やかな声が聴こえて来たんだ。

「聞き慣れん声がするが客人か？」

ネコ男はオレから視線を反らさないまま声を返した。

「娘を誘拐されました……」

「――――――」

「居所は相模の付き人に聞けと、写真と投書が」

「何だって……」と思わず声が出る。

「白々しい事言うんじゃねえ！」

床に写真が打ち付けられる。

そこには、あの　ちーちゃんて女の子の眠ってる姿が映っていた。

薄暗くて背景がよく見えない。

黒椅子の向こうから、「それは本当か？」と声が掛かる。

「相模の奴が。これ以上、ウチに何の恨みがある」

「その数日前には、相模を名乗る人間らに組を襲撃されました」

「なんだと……」

そこまで言うと、拳銃からカチリと音がする。

「言え。　俺の娘を何処にやった。　悪質なイタズラじゃあ済まされねえぜ」

「オレが知るかよ！」

「言えや！！」

そこにあったテーブルを蹴り倒す。
１５畳半ばの小さめの部屋の中を、木製のそれが宙を舞った。
それはドアにぶつかり酷い音を立てた。

「オレらじゃない。そんな事やってねえよ」

「ああそう。　痛い目に合わねえと分かんねェの」

奴は構えていた銃を下ろし懐から短刀を持ち出す。

「これで泣き叫んで懇願するまでテメエを切り裂いてやる」

「や、めろよ……」

立ち上がりかけた時、数人の男らに身体を拘束された。
ソイツは有無を言わさず短刀を振り翳し、斬りつけて来た。

脚を蹴り上げ、男の顔面に喰らわせる。
鋭い刃がすんでの所で服に引っかかってボタンが弾ける。
服が半分ハラリとはだける。今頃サラシを付けてない事に気付いた。

「お前……、女か」

頬を拭い、チッと舌打ちして凶器を構え直した男が驚いた様子でオレを見た。

「それで相模のお気に入りか。　……成る程ね。　そういう事」

「彪牙よ。お前、ソイツをどうしたい？　“ちい”の代わりに報復したいか」

ギラギラ光る目線がオレを見る。
奴は持っていた短刀を投げ捨て、残りの服を引きちぎった。

「――――凄え跡。　お前、めちゃくちゃ抱かれてんだ」

露わになった上半身を舐めまわす様に見られる。
奴の顔つきが変わったと思った。

「復讐は止めておけ。　俺の様に、我が子を失う事になるぞ」

「大丈夫です功さん」

ネコ男が顎で指図すると、男達はオレをその場に押し倒した。
やめろ！！と大声で叫んだ。
数人掛かりで取り押さえられる腕や脚はもう奴らの言いなりだった。

「可愛いがってやりますから」

その男の言葉に背中がゾクリと寒くなる。
両手両足を広げて張り付けられてる気分だった。
奴はオレに馬乗りになって見下ろす。
そして覚悟しろよ、と笑って言ったんだ。

数人掛かりで腕を抑えられて、頭の上で束ねられる。
奴はズボンのボタンを半ば引き裂く様にして外した。
布が裂ける音がする。

「相模！！」と見えない男の名前を呼んだ。
脚を抑える男の一人が「馬鹿じゃねえのか」と笑った。

「相模のトップが、お前ごときの為に来るとでも思っとんのか」

一度や二度抱かれた位でいい気になんなや、と続ける。

これから何をされるのか。

自分の脳裏には、さっきからずっと最悪のシナリオが浮かんでるんだ。

「丁度いいじゃん。これで相模のオンナを寝取れるネ。　見せつけに、お前の汚される姿を若に送り付けてやろうか」

ネコ男がそう言って不敵に笑うと、突然フラッシュが光る。

何度かシャッター音がして、写真を撮られたんだと思った。

それから奴も服を脱ぎ捨てる。

鎖骨から下に、びっしりと真っ赤な刺青が入っていた。

それはもう人間の肌じゃあない。猛獣だ。

異様な光景を見て、それが更に恐ろしさを増幅させた。

ネコ男はオレの胸をグッと掴み、「小せえ胸……」とつまらなげに呟いた。

そして血の気色の真っ赤な身体が覆いかぶさって来る。

イキナリ奴の八重歯が首元に噛みついて来た。チクリと痛みが上がって、それから無意識にゾクゾクし始める。

「フン……。めちゃめちゃ感度イイね。凄え」

それは胸元にも降りてきて「ここはどうよ?」と、突起からまるごと　かぶりつかれた。

「は……、ああん!」

口の中で奴の舌が揺れてる。尖った八重歯が乳輪を甘噛みして、声が出てきた。

「お前、鳴き声イイね……。ヤバいねこれは」

そのまま勢いよく吸い上げられると、背中をのけ反らせて呻いた。

その手が段々と下へ降りて行く。

腹を擽られるだけで自然と甘い声が出てしまう。

ネコ男は唇を重ねて来た。顎を持ち上げられると口が開いた。
その中に舌を挿し入れられた。ツンとしたシガレットの味がする。

奴の手がズボンの中に入れられた。ゴツゴツした手がスルリと下着の中に入って来ると、その指はすぐに秘部を弄り始める。

体はすぐに燃え上がった。強く弱く波のように指に追いたてられて、ソコからは早くも卑猥な水音が聞こえる。

奴は一度指を引き抜く。

「エロいね。お前、ココはもうグショグショだよ？」

そう言って見せつける様に濡れた指を目の前に翳す。

ギラギラに濡れた二本のそれを、舌を出して舐め始めた。

その男は中指を咥えて八重歯を見せ、「いい味じゃん」と笑った。

それからズボンを一気に引き下ろされる。数人の男達がバタつかせる脚を掴んで持ち上げた。

オレの抵抗も虚しく、恥ずかしい部分を男の目の前に晒した。

奴の目の色が変わった。

「スゲエ……。ベビーピンクじゃん。美味そう……」

男は不気味に呟いて、自分の腰のズボンに手を掛けた。
絶望と恐怖が胸に一気に押し寄せてきた。

「相模!!」と、アイツの名前を何度も呼んだ。

「黙りな」と、その口を手で覆われる。奴の手に歯を立てて噛み付いた。

男は呻き声を上げて手を下げる。そして「クソ女が!!」と拳を振り上げて来た。

片手で頭をグッと地面に押さえつけらる。真上に見える奴の拳が顔面に迫った。

「ルイ!!」

一瞬、アイツの声が聞こえた気がしたんだ。

目前にはネコ男の拳を受け止める手があって、その手はその場に居る男たちを次々と殴り飛ばしていった。

ネコ男が壁際にぶち当たる。
オレを押さえつけていた男達も呻き声を上げてその場にうずくまってんのが見えた。
そうしてる間にオレは浅黒い腕に抱き寄せられる。

「このガキャア！悪質な真似してくれんじゃねえの」

その声と一緒にツンとした香りが後ろから漂って、「お嬢。　すまなかった」と掠れた男の声が聞こえた。
後ろを向くとゲンじいがすまなそうにこっちを見ていた。
そして直ぐに服の乱れを直してくれた。

突然こんな事になって、間一髪で助けられて。
ゲンじいの顔を見るとホッとして、思わず泣きそうになってしまった。

「頑張ったな、お嬢」

無言で浅黒い男の首元に抱きついた。

「ルイ、だと――――――？」

少しずつ平静と取り戻してきた頃、思い出したように黒椅子の向こう側からオレの名前を復唱する声が聞こえる。

背もたれに隠れて姿の見えない男が、ポツリとオレの名前を口にしていた。

「ゲンじい。相模は、相模は居ないの？」

オレと同じく後ろ向きの黒椅子の方を訝しげに見ていたゲンじいは、思い出したように「ああ……」と呟いた。

「若なら……」

「グアァ……ッ！！？」

突然後ろからネコ男の呻き声が上がって、ゴスッと壁にぶつかる音が聴こえてきた。

そして男達から小さな悲鳴が漏れる。

鈍い音がもう一度聴こえて、それと共に「ウグッ…」といった苦渋の声も聞こえる。

ゲンじいじゃない誰かが、オレを襲った男達を殴ってる。

抱きしめられてる腕の中から斜め上を見た。

「俺のオンナに手ェ出したんは、お前か」

地を這うドスの効いたその声は、頭の上から聞こえた。

黒い影が現れて、今度はネコ男を思い切り蹴り飛ばした。

腹からえぐられるように壁に激突していく。

その男はいつもの黒いスーツを身に纏い、迫力ある切れ長の目を凄ませてネコ男をにじり上げる。

「相模……」

唯ならない男のオーラは、助けられた筈の自分でさえも恐怖を覚える。

ネコ男がぶちのめされる様子を見て、男達は「ほ、本物の相模龍や…」と声を震わせながら壁際に後ずさった。

アイツはネコ男を更に蹴り上げる。

ソイツは苦しそうにしゃがれ声を出して血譚を吐き出した。
何発目かでアイツの蹴りを辛うじて抑えた男は、血液を垂れ流して起き上がる。

「――――その女が、そんなに大事なワケ……」

真っ赤な血痕がベッタリ付いた顔でニヤリと笑う。

相模は腕を振りかぶった。

「写真……！　ばら撒いちゃおうかナ……」

「何だと――――」

その男の声に、オレは一瞬頭が真っ白になった。

奴はゼイゼイと荒い息を何度か吐き、相模を見たままその場に転がってたカメラを手に取った。

「コレ……、オタクの大事な女のハダカが映ってんのよ……」

不気味に笑うネコ男とは対象的に、相模の顔が険しくなる。

「これを街中にバラ撒いて……、アンタの大事な女を世間の晒し者にしてもイイのよ？」

奴は挑発的にカメラを振ってみせる。

ついさっきまでの男達からされた仕打ちを思い出して胸に沸々と怒りがこみ上がってきた。

オレを数人掛かりで押さえつけて、その上コイツらは辱めを受ける姿を写真に収めたんだ。

「ふ、ざけんじゃねえ！！」

思わずカッとなる。

気が付くとオレは声を荒げてて、その勢いのままネコ男に掴み掛かっていた。

「ルイ！！」

「アハハ……、馬鹿じゃないのお前」

その拳はスンナリとかわされ、振りかぶった腕を掴まれる。

そのまま強引に引き寄せられると、オレは再び奴の腕に捕らえられちまった。

奴はオレを捕まえたままスチールカーテンで遮られた窓側に向かって下がって行く。

すぐ側で血液の生臭い匂いがしてる。

強引に引っ張られ、もつれた足が黒椅子にぶつかった。

「ルイ……」

またポツリと名前を復唱した声の主が、ふいに椅子を回転させてこっちへ体を向けた。

そしてネコ男に捕まって引き摺られてるオレを見上げる。

椅子に座る人物の姿が見える。

ふいに目が合った。

そこに美形の男性が座っていた。髪はボサボサで伸ばしっぱなしだ。

艶のある黒髪を手グシで一つに纏めてて、ところどころ垂れた後れ毛が男を疲れた印象にさせてる。

相模の組長さんみてえにダークの着物を着てるけど、華奢な体格で雰囲気は何処か妖艶だった。

それでも矢田の次に美形だと思う。

この場所に似つかわしくない、犬の様に穏やかで綺麗な目をしてた。
鼻筋は綺麗に通ってて、薄くて形のいい唇に僅かに上がった口角は、どことなく優しさを見せる。

落ち着いた優しさを纏った美形の男だった。

一体いくつなのかは分かんねえけど、それなりにちゃんとしたら、顔の整いに更に拍車が掛かるだろうと思う。

ネコ男に捕えられてる最中なのに、いつの間にかそんな事を考えながらその男に見惚れていたんだ。

そして相手もオレをジッと見つめてる。
食い入るようにずっと。

だけど自分とは違って、驚いたような表情でオレの顔を覗き込んで来るんだ。

「お前……」

「なあ、若さん。大事な物を奪われる気分はどうよ」

その人が何か言いかけたと同時にネコ男から声が上がる。

ソイツは打ちのめされた体を引き摺り、窓際まで迫っていた。

奴はその手で窓ガラスを叩き割る。その破片を取って首に付きたてて来た。

目の前を、寸断された断面がギラギラと反射して顔に当たる。

「アンタらが俺の大事な子供を誘拐したりするからさ。この女に一生モノの傷を付けさせたく無かったら、今すぐ娘の居場所を教えな！」

ネコ男はマジだぜ？と言って首元にグッと刃先を突き立てる。

肌にズンと重力が加えられて、ジワリと痛みが広がった。

「ドスと違って、一旦傷が付くとエグれるぜ」

嘘じゃない、と言わんばかりに、そのまま破片をゆっくり真横に擦

らしていく。
ギギギ…と肌が引きつって、擦りむいた時みてえな痛みが襲った。

それと共に肌に熱さも感じる。
かつて味わった事の無い焦れる痛みに、思わず顔が歪んだ。

「やめろ……！」

「よせ、豹牙！」

「――――は」

相模が叫ぶと同時に、隣の黒椅子に座る男も声を荒げた。
その人は、やめろ、と腕を掴んで奴の動きを制したんだ。

ネコ男は自分の身内の筈の男に動きを止められて、かなり困惑気味だった。

「何、言ってんすか。コイツは――――」

「その子に手を出すんじゃない！」

その人は、奴が手にしてたガラスの破片を奪い取ると、半ば強引にオレを懐に引き寄せた。

腕に触れてる手はひんやり冷たかった。

突然の言動に、助けられたはずの自分も大いに戸惑う。
どうして、突然この男がやめろと言いだしたのか、その意図が全く分からないんだ。

だけどネコ男と違って、その人からは自分に対しての敵意は感じられない。
そして間近で見るその人は更に美しく見える。

言葉づかいや身なりから、結構歳いってるんだろうけど。それを全然感じない。
こんな時になんだけど、正に人類の神秘だと思ってしまった。

その人は、ただ無言で食い入るようにオレの顔を覗き込んで来るんだ。

そして戸惑うオレを前に、ふわりと優しく話しかけてきた。

「君、名前は？」

「え……」

「何て名前だい？」

「……藤堂、ルイ」

戸惑いながら名前を言うと、男は目を見開いて更に驚いた顔をした。

そして、これでもかという位に優しく目を細めて「そうか……」と一言呟いた。

不思議な男性がそう言った同時に「このクソガキが!!」とゲンじいの怒鳴り声が聞こえた。

「落とし前付けさせたるわ!!」

そう言って懐から出した拳銃を天井目がけてぶっ放す。

それを合図とでもする様に、鉄の扉が勢いよく開いて、赤に黒に、厳つい服を着た男達がわらわらと怒鳴り込んで来た。

そのメンツから、組のおっちゃん達だと思った。

「ウチのお嬢に何晒すんじゃワレェ!!」と口々に叫んでは奴らを殴りつける。

突然怒鳴り込んで来たおっちゃん達は、その場にいる男達を片っ端から殴りつける。

「ええ度胸やないの、お兄さん」

ネコ男は口の端を上げて血だらけの顔を歪めて笑うと、「行けやぁ！！」と自らも加勢に入った。

「ダメだ……。抗争なんか起こしたら。これまで何のために相模が食い止めてきたんだよ……！」

オレの声に、美形の男は「うん？」と顔を傾ける。

だけど心配をよそに、男達は一斉に掴み合いを始める。現場は一気に戦場と化していったんだ。

ネコ男は真っ赤な刺青を剥き出しのままに、二イッと笑って戦場へと走って行く。

その体はゲンじい目がけて突進すると、拳を勢いよく振り上げた。

ゲンじいは寸での所でそれをかわすと床に手を付き男を脚で払いのけた。そのままバク宙して地面に着地する。

慣れた手つきでスーツの裾からナイフを取り出した。

ネコ男は先ほど床に放り投げた短刀を拾い上げる。

その刃先を正面に向けて、「アンタとは最初会った時からやり合いたかったんだよねぇ！！」と笑みをこぼし、ゲンじいに向かって行ったんだ。

刃を刃が鋭く光る。二人は共に不敵に睨み合いながら互いの凶器を交わせた。

「どうしよう。止めねえと……！」

未だに謎の男の懐に身を置いてるオレは、一気に騒然となった現場を見て一人オロオロしてるばかりだ。

くいとめたくても、こう人間が多くちゃあ一体どこからどうやって事態を鎮めればいいのか分からない。

「どうして止める必要があるんだい？」

隣から穏やかな声が聞こえる。
見ると正体不明な美形の男が、不思議そうにオレの顔を覗き込んでいた。

「抗争なんかやっちゃあダメなんだ。きっと誘拐事件も全部、オレらを陥れるための罠なんだから」

「ほう……」

ガキン！！と金属の欠ける嫌な音が聴こえて来た。
ネコ男が短刀を握り、ゲンじいに振りかざしてたんだ。

仕立ての良いスーツを翻す男は、浅黒い手に持つナイフを右に左に動かして、その動きを止める。

二人はほぼ互角だった。「ウラア！！」とネコ男が光る凶器を突きつける。

それはもう一度不快な金属を立てて両人の間で止まった。

「なあ、アンタ、あのネコ男の知り合いだろ。何とかアイツらを止めてくれよ！」

「ハハ、ネコ男ねえ。確かにな。フム……出来ない事もないが」

「だったら……」

「条件がある」

出来ないことも無い。そう聞いて無我夢中で男にしがみ付いた。

だけどその人はふわりと優しく笑って焦れるオレを制した。

条件がある、と言うと、今度はおいでおいでともっと近くに来るよう要求された。

今でさえ懐に入ってるというのに。これ以上近付いたら、この人の腰かける上に座っちまいそうだと思った。

戸惑っていると男の方から近付いてくる。
そっと手をかざし、耳元に唇を近付けて来た。

ー君が欲しいー

「……は」

ビックリして顔を離した。その人は口角を上げて無言で笑う。

妖艶な魅力にクラクラしかけた。

「俺は、君が欲しいよ。それが交換条件」

その男は繰り返し言うと、オレを見てもう一度優しく笑った。

「な、何でオレなんかを……」

「さあねえ。なんでだろうねえ」

意味深に呟いて、離れかけた体を抱き寄せる。
ふうわりと、甘い香りが漂った。

足元が揺れて、男の膝の上に倒れるように腰かけた。
それを離すまいと、すぐに腕の中に抱きとめられる。

「ちょ……、ちょっと……」

「駄目かなあ。こんなオジサンが、君を欲しいと言っちゃあ」

とんでもなく優しく目を細めて、その人はオレを見つめた。
この人は気付いているかどうか分かんねえけど、オレはまるで口説かれてる気分だ。

「ルイ――――」

そして、愛おしそうにオレの名前を呼んだ。

突然オレらの元に背後から黒い影が忍び寄る。

ソイツはオレを抱きしめる男のこめかみに黒い鉄口を当てた。

「よう……、人殺し」

「相模――――」

「……」

そこには、オレを抱きしめるその人を蔑視の目で見下ろす相模が立っていたんだ。

「今すぐその女から離れろ」

それは、唯の怒りの顔じゃあない。凄く、恨みの籠った眼だと思った。

まるでその男の息の根を止める機会を、今か今かと神経を尖らせて

心待ちにしているような、いつもの相模には見せない悪意に満ちたものだ。

その顔は、更に憎悪に満ちた表情にに歪んでいった。

「聞こえんかったかよ、人殺し」

「――久しぶりだな、龍」

相模に反して、男は変わらず穏やかな雰囲気で話し掛ける。

アイツはそれをピシャリと跳ねのけた。

「気安く呼ぶんじゃねえ！！」

怒りに任せて拳を振り下ろす姿が見えた。

感情を剥きだしに影を落とすその顔も、無抵抗の人間に暴力を振るわんとする姿も、全てがこれまでの相模じゃあなくて。

まるで別の人格が現れたみてえで、怖かった。

「相模！！」

その人は酷い罵声を浴びたにも関わらず、表情一つ崩さずにその拳を受け止める。

アイツの鉄拳が男の手中に吸い込まれるように入って行った。

突如、ズバァァン！！と空気が音を上げて揺れる。

凄い衝撃だった。

オレを懐に抱き寄せる男は、顔色一つ変えず、あの相模の拳を受け止めたんだ。

「――――いいパンチだ」

「黙れや、カスが！！」

アイツは強引に男の腕からオレを引き剥がした。

相模の腕の中に閉じ込められる時、耳元で僅かに囁き声が聞こえた。

オレにだけ分かる声で。

ー約束だからね？ー

そう、聞こえたんだ。

「……」

戸惑うオレを見て、その人はもう一度ふわりと笑った。

ーｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅー

相模が好き　8（第二部完結）（後書き）

ここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。
メイン更新のｉらんどさんのページ数の都合により、中途半端な所ですが一応第二部が終わりになっています。
暫くお休み期間の後、第三部更新を始めさせて頂きます。

第三部は、ムーンライトノベルス様の方で更新させて頂こうと思います。よろしくお願いいたします。

今後ともよろしくお願いいたします。

ありがとうございました＞ｍ（＿＿）ｍ＜

おまけ（続：波乱の始まり）（前書き）

小説を読もう！からお越しの皆様へ
いつも読んでくださってありがとうございます！
ゴク怖３は、さらに性描写が強くなると思われるため、ムーンライトノベルズの方で更新させていただきます。
サイトの方にもリンクを貼っております。よろしくお願いいたします。

おまけ（続：波乱の始まり）

「待って……！　今はダメ――！」

「ふざけんじゃねえ」

露わになったばかりの肌の上を、直ぐに熱い手が這い回る。

言葉とは反対に
体がゾクゾクと震える。

相模の手に感じてるんだ。

「……ダメ、矢田が――」

「ああ！？」

相模の熱い手……

「矢田が…、寝てるんだ」

「お前…」

「オレが居なきゃ、矢田がまた魘される…。側に居てあげなきゃ……」

「ルイ…、お前――」

アイツの手が乱暴に体を真探り出す……！

ズボンも下着も
身包み全てが覇がされる。

「リョウに惚れたかよ！」

「違う……」

「クソが！！」

「相模――！」

乱暴に脚を押し広げられ、間にアイツの身体が押し入って来た。

強引に唇を奪われる。

息継ぎも儘ならない位の激しいキスだった。

「違うよ」

「今更気付かねえとでも思うか」

暗闇の奥で

ベルトを外す金属音が響く。

「お前が否定する時は図星なんだよ！」

「相模、待って！」

「思い出させてやる」

「……っああ！？」

薄闇のせいではっきり見えない。

突然アイツの指が秘部に這わされて、見えない手の動きに無意識に身体が大きく跳ねた。

「お前の中からリョウが消えるまで、俺の身体を味わせてやるよ！」

「相模、待って……！」

これじゃあまるで質の悪い悪夢だ――。

「うあ…、ぁあ…あん…！」

「お前…！　何でこんなに濡れやすくなってんだ　、アア！？」

それはオレの急所をすぐに探り当てて、怒り混じりの強引な指が前

後に強く擦り始める。

オレの体は男から与えられる昂りを心待ちにしてたみてえで、最初はジンジンと、やがてキン！！と脳天を貫くような鮮烈な快感を連れてきた。

クチュクチュ音を立てて身体が悦んでる。

ハアハアと強く息を吐くたびに感度がもっともっと強くなっていくのを感じた。

怒りを持った相模の指は、オレのヒクついた蕾を強く押し付けて捏ねくり回した。

溢れて来た愛液と絡まってヌルヌルし始める。感度が溜まらなく強くなった。

「相模、待って！」と懸命に腕を掴む。その間も強い快感はオレの秘部から絶えず与えられてて、相模を掴んでるその手もフルフルと震えていた。

アイツは苛める動きを止めるどころか更に指の動きを小刻みに動かせ始める。

ソコからピチャピチャと愛液が音を立てて飛び散りだした。

その振動に溜まらなくなって、体からは力が抜けだしていた。

追い上げられるオレを見て、「イッてみろよ……」と冷たく言い放つ。

「リョウにどんな顔して抱かれてたんだよ、ああ!?」

「ひっ、ああぁん!!　やめて、相模!　もう、もうダメだよ――!」

「見せてみろよ……!リョウに感じてたテメエの顔をよ!」

嫉妬で狂った指によって強く激しく追い立てられた。

我慢できない部分を、相模は攻める指を更に二本に増やして挟む様にして擦り始める。

ジンジンと熱い、溜まらなく気持ちいい快感がその時倍になって襲ってきた。

声が上がる。涙も滲んでる。掴んでもどうにもならないのに、オレ

の手は虚しく相模に添えられたままで。

急激に襲い来る快感にどうにも出来なくて、掴んでも離れない男の指に、ただただ声を上げて感じまくった。

相模が喘ぎ乱れるオレの顔を見てる……。

嫉妬に狂った雄の目で。

きっと、オレが最後の昂りを感じて最高に悶えるまで、この指を離してもらえないんだ――。

最後に何度か痙攣を起こすと、狂った様に泣き声を上げてひたすら絶頂を味わった。

それでもアイツは許さねえ、と言わんばかりに絶頂を迎えたばかりの秘部を指で摘まんで弄り始めた。

今この時に、この刺激はあまりにも強すぎる。

あまりにも、気持ち良すぎる――！

「ああぁ！　イクゥゥゥ！！　あぁぁん！！　き、気持ちいいよおお！！」

「クソが――――！」

こんなにも激しい快感があるなんて……。

イクって絶頂を知ったオレの体は、男の激しい指の動きにさえ体をクネらせ、声を荒げ、いくつもの愛液を滴らせてる。

快感の最高に達する絶頂は何度も襲って来て、どれだけ味わっても満ち足りる事が無かったんだ。

きっとこれも、矢田と相模にめいっぱい開発された所為。

敏感な蕾を弄られて、我慢できない所まで追い上げられて、恥ずかしい部分を惜しげもなく晒して男に抱かれるって事が、こんなにも気持ちのいいものだっていう事を体が覚えてしまったんだ。

相模に抱かれた時は、とてもドキドキした。いつもの強面のアイツが、ベットの中ではオレに欲情してる。
何度も肌を触って抱きしめて。オレの中に入って来た時は目いっぱい気持ち良さそうな顔をして感じてる。

いつもはあんまり見せない感情を表に出した表情を、今、オレが引き出してるんだって思うと、どうしようもなく嬉しく恥ずかしい気持ちになった。

相模の腕の中は大きかった。ベットの上でギュっと抱きしめられると、この上ない安心感を覚えた。
この男に好かれてると体で感じた。オレが気持ち良いように時間をかけて愛されて。世の中にこんな快感があるものかという驚きと喜びをひたすらに与えてくれた。

大事に想われてると、体を重ねるごとに強く伝わって来た。

恥ずかしかった行為が、いつの間にか愛情に満ちた余りにも裕福な時間に変わって行ったんだ。

矢田はそれとは正反対で、オレに愛情を求めて来た。見返りのない、母親の愛情を。

成長途中の子供みてえに、愛情を技と確かめるように激しい嫉妬を繰り返して、顔を背けてみたり、突き放してみたり。

そうかと思えば無理やり自分の物にしようと襲って来たり。

そうして豹変した矢田を前に怯えるオレを、「捨てないで」と縋って泣きついて来たんだ。

矢田の涙は、オレの境遇と被って見えた。自分も捨て子だから。少年の発した言葉の重みが、ひしひしと伝わってきたんだ。

人と違って血のつながった両親が居るって当たり前の事が、どうして自分は叶わないんだろうって。

オレだって、そう思った事がある。

別にオレを捨てた肉親を恨んでるわけじゃない。

ただ、その人達にとって自分は必要ない子だったんかなって思った。

オレなんて産まれない方が良かったのにって。そう思われながら、母親は自分を産み落としたんかなって。

そう思うととても悲しかった。

母ちゃんに怒られてる友達を見て、すごく羨ましかった。道場で優しくしてくれるおっちゃんがいると、『もしかしてこの人はオレの本当の父ちゃんなんじゃないのかな』って、そんな事ある訳ねえのに。

親父に自分が捨て子だって教えられてからは、暫くそんな事も考えた。

それでも両親の愛情を感じて育ったオレと違って、産まれた時から孤独だった矢田は、どんな想いで「捨てないで」って言葉を振り絞ってるんだろうって。

こんなにも矢田の心の痛みが分かってしまう自分に、少年の差し出された手を突き放せる訳がなかったんだ。

オレに、矢田を突き放せるわけがない。

矢田は泣きながら口づけて来た。しょっぱい味と、柔らかなキスの味とが混ざり合ってた。

少年はまるでオレに甘えて来るように色んな所にキスをする。オレはその全てを包み込んでやりたいと思った。

お互い息が上がって来ると、今度は指と口で攻められた。

矢田との行為は気持ち良かった。とても。

燃え上がるギリギリになるまで何度でも焦らしてくるんだ。しなやかな指と舌を使って。

オレが、もっともっと淫らになる様に、イタズラに体を昂らせてくるんだ。

綺麗な声でオレを呼んで、綿菓子みてえに甘い体でオレを中から何度も熱くさせた。
矢田は少しイジワルで、自分から欲しいって言わないと本当に欲しい快感をくれないんだ。

あの時の自分は、とても淫乱だと思った。

オレの方から「矢田が欲しい」って言って、いっぱいいっぱい少年の物を撃ち込まれて。
下半身をビチョビチョに濡らしながら快感に酔いしれて行ったんだ。

底なしの河みてえに何処までも深い相模の愛情と、本能むき出しに喘ぎまくる矢田の快感攻めと。
たった一晩でその二つを一度に体験しちまったんだ。

……

「泣く程気持ちいいか」

抵抗する両手を束ね、狂った様に声を上げ続けてる自分の顔を見下ろされる。
アイツの指の動きがまた早くなって、次第に下腹部から何かが漏れ出すような快感が溢れ出し始める。

もう何度「やめて！！」と叫んだんだろう。それでも相模のお仕置きは終わらない。
暴れる両手は男の片腕に収まっていて抗いようがない。オレにはもう、襲い来る絶頂に悶えることしか選択肢が無いんだ。

余りにも濃厚な一日が、頭の中で走馬灯の様に流れていく。

口から唾液を垂れ流してる。息が荒くなって、ヒイヒイと掠れた泣き声を上げた。

相模はオレの蕾と掴んで、弄って、爪を使って刺激して。
それから中に指を入れられ掻き回されると水流がソコから溢れ出して来た。

それが終わると「もう嫌だ」と泣き続けるオレの脚を大きく割り開き、今度は舌を使って攻められた。
急所を舌で押し付ける。歯を使って甘噛みされた。それからビチャビチャと卑猥な音を上げて口で攻めながら、また指が入れられる。

何度か頭が真っ白になった。意識が飛んだ。アイツの指が中のある部分を刺激する度、お漏らししそうな気持ちになった。

やがて小刻みに指を動かし始めると、体液が掻き混ぜられる音が強くなって、蕾を同時に攻められて悲鳴が出た。

イッてもイッても離して貰えなくて、それから更に絶頂感を味わい続けていた。

頭の中では二人の男がオレを交互に抱いていて、体を熱く燃え上がらせながら相模の怒りを貪り続けてたんだ。

目の前が真っ暗になる。遠い意識の中でも自分の喘ぎ声が聞こえる。

まただ……。オレから漏れ出した官能的な匂いが部屋中に漂う。このまま喘ぎ疲れて死ぬんじゃないかと思った。

おまけ2

相模はすぐさまオレを貫いた。怒りで更に熱を持った塊が押し当てられ、そのまま一気に中に入って来たんだ。

オレの中に入ると、アイツの顔に恍惚とした快感に浸る表情が現れる。それから「クソ……！」と呟いて、強く、激しく中を突き上げ始めた。

「ハア…、ハア…ッ！アッアッ…あんん！」

つい数日前、
この男に嫌という程抱かれた。

その指も

舌で齎(もたら)す快感も

身体が全部憶えてる……。

これが入るとどれだけ気持ちがいいか。オレがどんな風に乱れちゃうのか。
理性よりも体が、そしてそれを貪る本能がそれを記憶してる。

「相模……！」

「クソ…！！　そんなにイイかよ!?」

オレの身体が悦んでるよ……。

「相模……！」

どうしよう…。

相模が怒ってるのに

矢田の元に戻りたいのに――、

オレの身体が

アンタに抱かれて悦んでるよ。

「クソ…！　ルイ…、お前は俺だけの物なんだよ！　この可愛い顔を見せて良いのも俺にだけだ…！」

怒りと愛情の入り混じった相模の声がする。

アイツのが何度も出入りを繰りかえす度、オレの身体が卑猥な音を立てて受け入れる。

余りの気持ちよさに気付かなかった。

誰かが部屋の戸をそっと開けて侵入して来た事に――。

「アッ…アッ、ひあっ…、んんっ」

――それは突然の事だった。

喘ぎ乱れるオレの顔を相模じゃない誰かが両手で包みこんだんだ。

突き上げられて小刻みに上下する身体が、誰かによって抱き締められた。

「ああ…、ウソ――！？」

相模で一杯になってめちゃくちゃに感じてるオレの顔を覗き込まれる。

暗闇の中でも、うっすら浮かび上がる美貌。

白に近い金色の髪は、夜の闇に照らされ灰白く輝いてるんだ。

ソイツ独特の良い匂いがする……。

「ウソ――…！？」

「……」

ソイツは無言で

相模に乱され続けるオレに口付けた。

「何…、やってんだよテメエ！？」

途端に相模の攻めが激しくなった。

「……あぁぁっ！？　ハ…ッ…アッ…」

「藤堂…、こんな顔してタツに抱かれるんだ……」

「クソ…！　ルイから離れろ！！　俺の女だ――！」

コレ以上無いって位奥深く突かれて、溜まらなく感じた。

気持ち良すぎて苦しい…。

お腹の下辺りから何かが溢れ出してくる――！

「ダメ――、ダメ……ッ、相模…！」

「クソが！！」

オレの唇を塞ぐソイツが、突然中心部の蕾を触って来た。

「待って！？　ああっ！　……ああん！　ダメだって…！」

始めは上下に撫でる様に――、そして次第に指で摘んで擦られる……。

その下では相模の物で一杯になってるソコが否応無しに奥まで攻められ、ズンズンと突き上げられ、鮮烈な快感を与えられ続ける。

「藤堂凄く気持ち良さそう…」

ソイツはうっとりとした目でオレを見下ろした。

さっきまで一緒に眠りに就いてたはずの少年は、月明かりに怪しく

美貌を浮かばせて相模に抱かれるオレの姿を見つめてるんだ。
「お前は俺の物だ！」と体で分からせようと強く強く撃ち込み続けられ、素直すぎる程に感じてるオレの姿を。

下半身は卑猥に相模を咥え込み、愛液を滴らせて官能に悶える。
そして、むき出しになった弱点の蕾を、少年のしなやかな指が抓んで、爪を立てて。指と指をこすりあわせて強くひねる。

耐えがたい快感を、二人の男が一度に与え始める。
執拗に、互いに火花を散らしながら。その矛先がオレの体に向けられたんだ！

おまけ3

「ルイに触るんじゃねえ！！」
相模は激しくオレを抱いた。突然乱入してきた矢田に対しての強い嫉妬も加えられる。
だけど、オレの体は知ってるんだ。
アイツの苦しい位に攻め立てる行為が、すぐに男に抱かれる悦びに変わるんだって事を。

「藤堂、こんなに激しいのが好きなんだ？」
「クソ、見るんじゃねえよ！」
矢田は何を思ったか、太腿を抱えて激しく出し入れを繰り返す部分を曝け出すようにさせた。

下半身からは相模。頭上には矢田がオレを見る。
卑猥に愛液を溢れさせる、相模を咥え込むその部分を、二人の男に見られた。
悶え苦しみながら、顔が一気にカアッと熱くなるのを感じた。男に抱かれてる姿を別の誰かに見られるって事が、とんでもなく恥ずかしい。

「凄いね……。ヌルヌルだね、藤堂。気持いいんだね。こんなに淫らな顔して」
あろうことか、その顔を覗き込まれる。
オレが今、相模に抱かれてどんな顔をしてるのか。相模の動きに合わせて上下する顔に手をあてて、中を突き上げられる瞬間の、性欲にまみれた顔を全部見られる。
「あぁぁん！　み、見ないで、矢田……！　お願いだから……」
「どうして？　いいよ、凄く。今の藤堂、とてもエッチで綺麗」

「駄目……、ダメだよ、ハア、あんッ」
「タツのが中に入った時、凄く良さそうな顔してる。こんなに小さな体で、タツを全部呑み込んじゃって。クリトリスも真っ赤……」
矢田はそのまま太腿を滑るように両手を中心部に這わせた。そして、両指を使って、蕾を揉み始めた。

クネクネと、時に指同士を擦り合わせ。どうにも溜まらない刺激を与えられた。
「待って、待って……はあん、何か出る！」
急に奥からおしっこが出そうになって、矢田の指から逃れようと動いた。
「ふざけんじゃ、ねえ！！」
それを制したのは相模だ。強引に美少年の手を振り払い、オレの両足をグイと引き寄せる。
その途端に勢いを増した男根が更に強い出入りを始める。パンパンと肌のぶつかる音が響いてる。
「あああぁぁ！！？」
少年に与えられた余韻のせいでアソコがとても敏感になってる。激しく突かれるほどに、オレの体はめくるめく悦びを味わうんだ。

気持ち良くて涙が滲む。ぼやけた視界の向こうで、月明かりに照らされる美少年が目を細めてオレを見てる。
その頬が上気してる。感じてるんだ、矢田も。相模に抱かれるオレを見て……。

そう思うと、すごく興奮する。体の内部から熱く溜まった愛液が幾つも溢れ出してきた。
絶頂が来る。我慢できない程の激しい快感が体中を駆け巡る！
「タツの、とっても気持ち良さそう……」
意味深な少年の言葉をかき消すように自分から悲鳴が漏れる。ガ

ンガンと激しく突かれる。声が裏返って汗が噴き出す。鉄の様に固くて熱を持った物が、最後の最後、これでもかと内壁を突き上げた。

舌なめずりする矢田の顔が見える。

少年は、溜まらない絶頂を味わうオレの顔を最後まで見届けた。

恥ずかしくて背ける顔を無理やりに制されて。オレはもう、それでも我慢できない所まで来ていた。

まだ数度しか経験の無い限界感に襲われ、依然ズンズンと中を犯す相模に感じて最後を迎えた。全身を痙攣させると同時に相模の物が抜き出され、勢いよく白い体液を飛ばした。

「藤堂、俺も、欲しい……」

すぐさま抱きついて来た矢田は、また意味深な事を呟いた。

おまけ4

グッタリと横たわるオレの腕を持ち、矢田が引き寄せる。

「イヤ、嫌だ……」

全身を倦怠感が襲い、すぐには動かない。

それ程までに、相模は強く激しくオレを抱いたんだ。

それに加えて矢田にまでこんな事をされたら……。

オレはきっと快感攻めで意識を失いそうだ。

「おい、リョウ！　何してんだよ」

「……俺だって藤堂が欲しい」

それなのに、クタクタの体を強引に引き摺り上げられる。

矢田の行動に対して、イヤイヤと力なく顔を振った。

「俺ならもっと藤堂を感じさせてあげれるよ」

「ふざけんじゃねえ！　ルイは俺の女だ、横取りするんじゃねえ！」

矢田は強引にオレを抱き寄せた。

少年のしなやかな手が胸に回され、乳首を抓んでギュッと捩りはじめた。

「ああ……っ、嫌、嫌だ……、矢田やめて」

「藤堂は少し苛めてあげた方が感じるでしょ？」

そう言って時々爪を立てて痛い位の刺激が与えられる。

矢田にいたぶられた先端が気持ちとは正反対に熱を持ち始める。

そうしてジワジワとキツイ位の余韻を与えたかと思いきや、突然矢田は手の動きを止めた。

戸惑う時間さえも無いまま、少年はオレを押し倒し、未だにジンジンと熱を上げるその部分をペロペロと舌でねぶり始めたんだ。

「ああ…っ、ぁあっ――、ダメ、ダメだよ！」

さっきまで強く捻られていた部分が、今度は柔くて温かいものに優しく愛撫される。

それは何の前戯もなく攻められたときよりも、よりいっそうの快感を連れてきたんだ。

「……ね、気持ちイイね、藤堂……。可愛いね」

カプリと唇に咥えられる。オレの体は少年の狙い通りにビクビクと激しく跳ね上がった。

「お前、何て顔してんだよ！？」

相模の怒りを露わにした声が浴びせられる。それでもさっきまでの情事で力尽き果てたオレは、矢田の愛撫攻撃にもどうすることもできない。

イヤイヤと被りをふりながらも、美少年のもたらす甘い唇に体の芯から翻弄されてしまう。

「タツに見せてあげる。藤堂が俺とエッチするときの顔」

矢田は更に、乳首を口の中に頬張って、赤ちゃんがおっぱいを吸うみてえにしてチュウ…っと吸い上げだした。

それがどうにも溜まらなくて気持ちイイ。思わず喉を突いて声がでてしまう。

自分から出てんのかって戸惑うくらいの、女の喘ぎ声が。自分からいくつも出されるんだ。

「あぁぁん、や、やめて、矢田、おかしくなる」

それでも矢田は止めてもくれない。美味しそうにチュウチュウと舌を使って吸い付いてくる。

下半身がモヤモヤと感じて来る。まるで胸から下半身まで、感度が繋がってるみたいだ。

「……ねえ、藤堂はタツと俺と、どっちに感じちゃうのかな。俺の時にも、さっきの可愛い顔を見せてイってくれるの？」

まるでこれからの出来事を暗示するような意味深な事を呟き、相模の静止も押し切って服を脱ぎはじめる。

月明かりに、まるで彫刻のように美しい少年の裸体が浮かびあがった。

おまけ5

しなやかな少年の体とは正反対に、欲情した男の昂りが月明かりに姿を晒した。
シャツをはだけて、ゆっくりとした手つきでズボンをゆっくりと脱いでいく。
中心部は早くも興奮した膨らみが見える。
布ごしに、ピンと張りつめたソレの形が見えてしまう。直にみるより、よっぽど恥ずかしいと思った。

「タツ。藤堂はね、うんと焦らされるエッチが好きなんだよ。イジワルすればするほど、淫乱になっちゃうんだよ？」
ペロリと舌なめずりしながら、美少年が言う。
オレの視界の全てを支配し、逃げられないように足首を掴まれる。
その手は突然、大きく開かれる。

「矢田、やめて！」
恥ずかしさで顔が真っ赤になる。
ついさっきまで相模に貫かれ、嫌というほど卑猥な涎を垂れ流していた秘部を、無理やり足を開かされて露わにされた。
矢田とも相模とも違う、自分が女である唯一の証を、美少年にくまなく見られている。

「藤堂、めちゃくちゃエロい。ココ、まだヒクヒクって動いてるよ。タツのが気持ちいいって、いっぱい涎を垂らしたまんまさ……」
早くも欲情した甘い声で美少年が呟いた。
耳を塞ぎたくなる恥ずかしい様を、細部までくまなく見られてしまう。
思わず足を閉じようと、太腿に力を込めた。

「閉じんなよ」
それを静止させたのは、後ろからその様子を見ていた相模だった。
あろうことかアイツは、閉じかけた太腿の後ろから腕を回し、これでもかという位、大きく割り開かせた。
「相模!?　何、なにしてるんだよ!?」
腹に付く位に、脚が大きく開かれた。
愛液まみれの自分のソコは、もう隠しようがなくて。その何もかもを、相模によって晒されてしまったんだ。
別の男に、「見せてやれよ」と、酷く卑猥な行為を強いられている。
それが余りにも恥ずかしくて、目の前で自分を見つめる矢田の顔が直視できない。

「見せてみろよ。お前の女の顔……。俺以外の男に、どんな顔して抱かれてんのか」
耳元で、掠れたハスキーボイスが怪しく声を出す。
相模の唇は、そのままオレの耳たぶを甘噛みした。
ただそれだけで、背中からゾクリとした得体の知れない快感が体中を駆け巡って行った。
「ハア……ッ」
思わず溜息がもれてしまう。
相模が……、矢田に苛められるオレを見て、欲情してる……。

「そう。タツの目の前で俺に藤堂を抱かせた事、後悔させてあげるよ」
嫉妬を持った低音で、矢田が小さく唸った。
少年の昂りを最後まで隠していた最後の布を脱ぎ捨てると、腹に付きそうな位に反り返った男の物が姿を現した。
それを、すぐさま入り口にあてがったんだ。

矢田の、アレが……、あんなに興奮した男のものが。
自分の中に入れられる……。

隠しようのないアソコに、それをあてがうと、すぐさま両手が腰に回される。
「あっ、ああん……」
二度目の快感を呼ぶ侵入に、思わず喘ぎ声が漏れた。
前後に弾みをつけて、何度か出し入れを繰り返しながら、美少年の欲望が、自分の中に入って行った。
手で触れなくても分かる。それはもう、極限まで興奮しきってるって。
とても固くて、すごく張りつめてる。
「すごい、藤堂の中、トロトロだね……」
気持ち良さそうに溜息を吐きながら、矢田が声を漏らした。
その顔がどこか空を見て、瞳が早くもトロンと蕩けそうな好色を映し出していた。
「ホラ、中まで入れちゃうよ？」
そう言うと、先端ギリギリまで引き抜いたソレを、勢いよく撃ち込まれた。
張りつめた欲望が、イキナリ自分の奥深くまで貫かれ、言いようの無い快感が突然体中を襲った。
「あ、あああん！！」
肌のぶつかる音が聴こえる。
その直後、卑猥な愛液の漏れる音がした。
オレの体はどうしようもなくゾクゾクして、お漏らししたみたいにアソコが水浸しになって行く。
そして、その快感がもっと欲しいと、声を上げておねだりしてしまうんだ。

「うあ……。締まってるのにトロトロで、めちゃくちゃ気持ちいい

よ」

矢田が背中をのけ反らせて溜息を出した。

そして更に腰を掴み、勢いよく抜き差しを繰り返し始めた。

パンパンと、強く中に入っては、すぐに引き抜かれる。

それは更に強い快感を連れてくるために、すぐさま自分の中へと入ってくる。

「ホラ。ハア……、中からヒクヒクって吸い付いてくる。藤堂、それ、エッチすぎるよ……？」

泣きそうな程、気持ちいい。

奥深くまで貫かれ、引き抜かれたと思えば、すぐにまた撃ち込まれる。

入れられれば入れられる程、気持ちいいのが増していく。

矢田のモノが自身の最奥を貫くたび、言いようの無い快感が押し寄せてきた。

「ダメ、そこダメ、ダメだよお、ああん、気持ちいいよお……！」

突かれれば突かれる程、脳内を甘い苦しみにも似た感情が支配するんだ。

矢田のが撃ち込まれる。途端に死ぬほど気持ち良くなる。また、入ってくる。それが、もっと強い快感になって襲って来る。

ガンガン突かれる。声が上がり、快感が、更に高みまで押し上げられる。逃げたくなって脚に力を入れる。「させるかよ」と、相模が強引にそれを阻止した。

頭の中が真っ白になる。もう、無理だと思う。それでも突かれる。

喘ぎ声が嬌声に変わり、堪え切れない快感が一気に押し寄せる。

もう駄目だ、と懇願した。少年は嬉しそうに笑い、尚も突き上げて来た。

声にならない声をあげ、昂りは一気に絶頂となって押し寄せる。
矢田の体に縋り付く。もう駄目だと懇願する。
それでも、止めて貰えない。
トロンとした瞳でオレを見て、甘い溜息を吐きながら、もっともっと強く突かれまくった。

抱かれてるんだ。
目の前の、美少年に。
エロいことをたくさん囁かれながら、矢田リョウの男のモノが、激しく出入りする！
こうして言葉攻めにされるだけで、こんなにも感じてしまうなんて……。

耐えきれない位の快感が全身を襲うなか、それでも相模はオレを一向に解放してくれなくて。
まるで自分から誘うような恥ずかしい体制のまま、我を忘れてしまうまで、少年に攻められ続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7821o/

GOKUKOWA？

2011年10月7日12時29分発行